

新史料奥平壱岐「適薩俗記」と薩州商社(3)

— 福沢諭吉と奥平壱岐、コンペニー〈商社の時代〉の実相 —

長谷川 洋 史

目 次

1. 序言
2. 福沢諭吉の会社制度紹介、コンペニー〈商社の時代〉の先駆
3. 福沢諭吉と奥平壱岐(1) — 安政元年(1854)長崎蘭学修業から文久2年(1862)商社紹介まで —
(以上第40巻第2号)
4. 福沢諭吉と奥平壱岐(2) — 文久3年(1863)Ⅰ「亥年の建白事件」 —
(以上第41巻第1号)
5. 福沢諭吉と奥平壱岐(3) — 文久3年(1863)Ⅱ〈恐怖の時代〉 —
(以上本号)
6. 福沢諭吉と奥平壱岐(4) — 元治2年・慶応2年(1865)から慶応2年(1866)、「適薩俗記」起稿まで —
7. 慶応3年(1867)、「適薩俗記」の中の薩州商社、奥平壱岐と石河確太郎
8. 終りに

5. 福沢諭吉と奥平壱岐(3)

— 文久3年(1863)Ⅱ 〈恐怖の時代〉 —

文久3年(1863)の「亥年の建白事件」は、福沢諭吉と奥平壱岐(以下壱岐と略記)の複雑な関係が凝縮して投影されたものであり、またその関係の終結を示すものであった。壱岐にとって、亥年建白事件は、自己の初の挫折と絶望であり、壱岐の生涯が「亥年建白事件以前・以後」というように、亥

年建白事件によって大きく暗転・区分される程、重すぎる事象であった。そうして、壹岐は、亥年建白事件による挫折と絶望がなければ、おそらくは、慶応3年（1867）夏、大坂で薩州商社取建構想と邂逅することはなかったであろうし、「適薩俗記」も起草されることもなかった。本稿(2)で前述したごとく、黒屋直房『中津藩史』は、「(亥年建白事件の結果) 壹岐（壹岐）、禄を削られ、職を免ぜられ、快々として後に立退くや、薩藩、人をして本藩（中津藩）へ伝へせしめて曰く、壹岐を抱へて千石を給せんと。薩庁（中津藩庁）、胥議して生田又右衛門を鹿児島に派し、是議を謝絶せしめたりと云ふ」と記している。

亥年の建白事件によって職を剥奪され、事実上藩から追放された壹岐（しかし藩からは禄を支給されて藩籍はある）には、結果的に中津藩からの干涉で中絶したものの、薩摩藩から千石クラスで召し抱える申入れがあったというのである。この『中津藩史』での注目すべき記述は、概ね事実であったことは、本稿次号以降で詳述するように、壹岐の手記「適薩俗記」の内容が証明している。「適薩俗記」〈薩摩へ適く^ゆ日々の記〉は、まさしく文字通り、薩摩藩の召抱えに応じて、慶応3年3月、壹岐が、江戸を出立し鹿児島・薩摩藩へ向い、途中大坂で召抱えが中止となり、急遽松山藩へと赴くことになるまでの記録なのである。「適薩俗記」は、亥年建白事件の産物のひとつともいえるのである。

福沢にとっても亥年建白事件は極めて重要かつ複雑な意味を持つものであり、壹岐の存在が重く申し掛かるものであり、その複雑性ゆえに、福沢は亥年建白事件及びそこにおける壹岐について多くを沈黙せざるを得なかった（本稿(2)参照）。『福翁自伝』での文久3年の事象についての記述では、亥年建白事件及びそこにおける壹岐についてまったく言及されていない。

文久3年について、壹岐が書き記した史料は現在確認されていないが、福沢は『福翁自伝』において、述べ記している。しかも、『福翁自伝』において、文久3年での事象についての記述は、本当は福沢にとって大きな意味を持つ筈の亥年建白事件についてのことを除けば、異様に思える程、比重が大

さく占められている。『福翁自伝』の「攘夷論」の項は、ほとんど〈文久三年論〉といってもよい内容である。それだけにそこでの亥年建白事件についての空白・沈黙が持つ意味・意義が、逆に色濃く浮かび上がってくるのである。文久3年は、福沢にとって、大小様々な〈恐怖〉によって織り成された年であり、〈恐怖の時代〉の幕開けを意味した。そうして、この〈恐怖の時代〉の幕開けは、^{コンベン}〈商社の時代〉のプレリュードともなった。『福翁自伝』では、文久3年について次のように端的に述べている。

文久三年癸亥の歳は一番喧しい歳で、日本では攘夷をすると云ひ、又、英の軍艦は生麦一件（生麦事件）に就て大造な賞金（賠償金）を申出して幕府に迫ると云ふ、外交の難局と云たれば、恐ろしい怖い事であつた。……夫れから世の中はもう引き続いて攘夷論ばかり……国内の攘夷論はなかなか収まりが付かないで、到頭仕舞には鎖国攘夷と云ふことを云はずに新に鎖港と云ふ名を案じ出して、ソレで幕府から^{わざわざ}態々池田播磨守（池田筑後守長発）と云ふ外国奉行を^{ながおき}使節として、^{フランス}仏蘭西まで鎖港の談判を遣はすと云ふやうな騒ぎで、一切目茶苦茶。暗殺は殆んど毎日の如く、実に恐ろしい世の中になつて仕舞つた。^そ爾う云ふ時勢であるから、（攘夷論の憎悪の対象である洋学者の）私（福沢）は唯一身を謹んで、ドウでも災を^の追れさへすれば宜いと云ふことに心掛けて居りました。……唯用心に用心して、夜分は決して外に出ず、凡そ文久年間（文久元年～2年は福沢は渡欧しているから、ほとんど文久3年・4年が占める）から明治五、六年までの十三、四年の間と云ふものは、夜分外出したことがない。其間の仕事は何だと云ふと、唯著書翻訳にのみ屈託して歳月を送つて居りました⁽¹⁾。

ここでは文久3年を特徴づけるものとして、まず「攘夷」熱が沸騰することを中心とした慢性的恐怖の現出が示されている。本稿は、福沢のこの感性を重視する。もっともこの慢性的恐怖の萌芽は、この前年、欧州から帰国直後の福沢が、洋学導入に基づく中津藩政改革建白を、おそらくは島津祐太郎経由で壱岐に提出し、その関連で、商社（会社制度）の先駆的紹介を含む、西洋世界見聞記である『西航記』（本稿(2)参照）を著した文久2年にすでに

内包されていた（本稿巻末掲載年表参照）。文久2年7月に京都で佐幕派公卿九条家家士島田左近が、尊攘派によって誅殺・梟首される事件が起り天誅騒動の先触れとなり、8月には、翌年7月の薩英戦争の端緒となった生麦事件^②が起り、11月には、翌年の挙国攘夷戦争決行問題や8月18日政変の発端となる幕府の攘夷督促勅旨遵奉が決定された（長州藩尊攘派を中心とする勢力からの教唆の結果）。文久3年の慢性的恐怖について、『福翁自伝』では、攘夷熱に憑れ始めた時代の異常・狂気として描かれている。その端的なものとしては、福沢に恐怖に近い強い衝撃を与えた、蘭学者村田蔵六（大村益次郎／1824文政7～1869明治2）の変貌である。文久3年6月に江戸で急逝した恩師緒方洪庵（当時幕府医学所頭取）の通夜（親とも慕い敬愛する恩人緒方の逝去自体が福沢にとって文久3年の異変と恐怖を象徴していた）に参じた村田と邂逅した福沢や福沢の親密な洋学友箕作秋坪（1825文政8～1886明治19／養父は蘭学者・幕臣箕作阮甫。維新後、福沢らと共に啓蒙思想団体明六社〈松木弘安・五代才助引率の元薩摩藩留学生森有礼が主唱〉を結成）ら緒方適塾門下の洋学者たちは、村田のまったくの攘夷振りの変貌に驚くのである（箕作秋坪の養父箕作阮甫も緒方洪庵急死のわずか1週間後に病死する。畳み掛けるように今度は、恩師緒方よりも10年前の世代の大蘭学者である親友の養父の死、これは福沢の異変・恐怖感をさらに増幅させたに違いない）。

其時（緒方洪庵の通夜の時）に村田蔵六が私（福沢）の隣に来て居たら、「オイ村田君、君は何時長州から帰て来たか」「此間帰た」「ドウダエ馬関では大変な事（長州藩の単独攘夷決行である文久3年5月10日の下関外国船砲撃事件）をやっ^{やつ}たぢやないか。何をするのか氣狂共が、呆返^{あきれ}つた話ぢやないか」と云ふと、村田が眼に角を立て、「何だと、遣^{どう}つたら如何だ」「如何だって、此世の中に攘夷なんて丸で氣狂ひの沙汰ぢやないか」「氣狂ひとは何だ、怪^けしからん事を云ふな。長州ではチャント国是が極まつてある。あんな奴原（西洋人ども）に我儘をされて堪るものか。殊にオランダの奴が何だ、小さい癖^{やつばら}に（小国の癖に）横風^{つら}な面をして居る。之を打^{うち}はら^{はら}ふのは当然だ。モウ防長の士民は悉く死尽しても許しはせぬ。何処^{どこ}まで

も遣るのだ」と云ふ其剣幕は以前の村田ではない。……実に思掛けない事で、是れは変なことだ、妙なことだ、と思ふから……と云ふのは其前から、村田が長州に行たと云ふことを聞て、朋友（適塾学友）は皆心配して、あの攘夷の真盛りに村田が其中に呼込まれては身が危い、どうか怪我のないやうにしたいものだと、寄ると触ると噂をして居る其処に、本人の村田の話の聞て見れば今の次第、実に訳けが分らぬ。……当時村田は、自身防御の為に攘夷の仮面を冠^{かぶ}つて居たのか、又は長州に行て、どうせ毒を舐めれば皿までと云ふやうな訳けで、本当に攘夷主義になつたのか分りませぬが、何しろ私を始め箕作秋坪其外の者は、一時彼に驚かされて其儘ソーッと棄置たことがあります⁽³⁾。

村田は、福沢より10年も前に適塾塾長（塾頭）になったことのある年季の入った合理的理知的な蘭学者で、福沢が蘭学から英学に転じた際、福沢に対して、「無益な事（蘭学から英学への転換）をするな、僕はそんな物（英書）は読まぬ。要らざる事だ。何もそんな困難な英書を辛苦して読むがものはないぢやないか。必要な書は皆和蘭人^{オランダ}が翻訳するから、其訳書を読めばソレで沢山ぢやないか」⁽⁴⁾と平然としていた。その真っ先に攘夷の刃にかけられて当然であつたはずの、蘭学一辺倒の村田が、攘夷主義の総本山長州藩に帰ってからは、「殊に和蘭の奴が何だ、小さい癖に横風な面をして居る。之を打攘ふのは当然だ」と「眼に角を立て」た「剣幕」、まったく「以前の村田ではない」程、変貌していた。この村田の変貌の本質は、「自身防御の為に攘夷の仮面を冠^{かぶ}つて居た」のか「本当に攘夷主義になつたのか」ということではない。福沢が村田から受けた「是れは変なことだ、妙なこと」だとする、狂気の匂いの漂う不気味な異常感とは、村田だけについてだけではなく、時代の異常・狂気からくるものでもあつたはずである。時代に憑いた熱病は、自由主義や社会主義も、あっという間に、攘夷主義に転向させることもできたし、異常・狂気の仮面を個人に被らせることもできた（しかし、時代の異常の錯綜性は福沢が感受した以上の深奥さを持つものであつた。実は、緒方洪庵通夜の1ヶ月前、5月10日の長州藩単独攘夷決行とほぼ同時に攘夷

病の「気狂共」と思われた長州藩士の井上聞多・伊藤俊助ら5名は攘夷対象の総本山として憎悪したはずのイギリスへ留学のため密航し、以前の面影がない程、攘夷主義に変貌したと思われた村田はその密航・留学のための資金調達に奔走・尽力していたのである。このことの詳細は、本稿次号で述べる）。

さらに、文久3年に露出した時代の異常・狂気について、『福翁自伝』で、福沢は、世相の異常・狂気としても鋭く描いている。

兎に角に癸亥（文久3年）の前後と云ふものは、世の中は唯無闇に武張るばかり。其武張ると云ふのも自ら由来がある。徳川幕府は行政外交の局に当つて居るから^{よんどころ}扨なく開港説—開国論を云はなければならぬ、又行はなければならぬ、けれども其幕臣全体の有様はドウだと云ふと、ソリヤ鎖国家の巢窟と云つても宜い有様で、四面八方ドッチを見ても洋学者などの頭を擡げる時代ではない。当時少しく世間に向くやうな人間は悉く長大小（大刀・小刀）を横へる。夫れから江戸市中の剣術家は幕府に召出されて巾を利かせて、剣術大流行の世の中になると、其風は八方に伝染して、坊主（城内に出仕する茶坊主）まで体度を改めて来た……平生は短い脇差を挟して、大名に貰つた縮緬の羽織を着てチョコチョコ歩くと云ふのが……世間が武張ると此茶道坊主までが妙な風になつて、長い脇差を挟し坊主頭を振り立て、居る奴がある。又、当時流行の羽織はどうだと云ふと、御家人旗本の間には^{き びら}黄平の羽織に漆紋、それは昔し昔し家康公が関ヶ原戦の時に着て、夫れから水戸の老公が始終ソレを召して居たとか云ふやうな^{いいつた}云伝へで、ソレが武家社会一面の大流行。ソレカラ江戸市中七夕の飾りには、笹に短冊を付けて西瓜の切とか瓜の張子とか団扇とか云ふものを吊すのが江戸の風である。所が太刀とか兜とか云ふやうなものを吊すやうになつて、全体の人氣がすつかり昔の武士風になつて仕舞つた。逆も是れでは寄り付きやうもない⁽⁹⁾。

この武張った世相を更に強めているのが、当然ながら、村田が帰った文久3年の長州藩の世相である。末松謙澄『防長回天史』（1920年完成）では、次のように記している。

当時（文久3年）、長藩、自ら攘夷戦争中（文久3年5月10日の攘夷決行）と称し、戦時を以て居る故を以て、士気甚だ振ひ、女子の如き、亦眉尖刀^{なぎがた}を学ぶ者多し。……男女修練混淆の禁令を布く。……（長州藩は）令して曰く、「歳首の祝式一般に鎧直垂^{ついで}を服すべし。胴服・小袴・割羽織を用ふるも可なり」と。尋で、歳末の参賀、亦之に準ぜしむ⁽⁶⁾。

村田が福沢らに「之を打攘ふのは当然だ。モウ防長の士民は悉く死尽しても許しはせぬ」と言い放ったごとく、長州藩は「攘夷戦争中」の世相にあった。

幕府のような一時的方便の表面的開国論（本当は「鎖国家の巢窟」）を含めて攘夷熱に浮かされ、「四面八方ドッチを見ても洋学者などの頭を擡げる時代ではない」ということの、福沢の周辺で実際に起きた具体例も、『福翁自伝』では、次のようにいくつかあげている。

既に私共と同様、幕府に雇はれて居る翻訳方の中に手塚律蔵と云ふ人があつて、其男が長州の屋敷に行て何か外国の話をしたら、屋敷の若者等が斬て仕舞ふと云ふので、手塚はドンドン駆出す、若者等は刀を抜て追^{おい}かけ、手塚は一生懸命に逃げたけれども逃切れずに、寒い時だが日比谷外⁽³⁾の濠の中へ飛込んで漸く助かつた事もある。夫れから同じ長州の藩士で東条礼蔵（英庵）と云ふ人も、矢張り私と同じ同僚翻訳方で……所がその家（東条の住居家）に所謂浮浪の徒（尊攘派浪人）が暴込んで、東条は裏口から逃出して漸^{やっ}と助かつたと云ふやうな訳^{あやう}けで、いよいよ洋学者の身が甚だ危くなつて来て油断がならぬ⁽⁷⁾。

幕府翻訳方の福沢の同僚、手塚律蔵と東条礼蔵（英庵）は、村田蔵六同様、いずれも「攘夷戦争中」の世相にある長州藩出身である。しかし、沸騰する攘夷熱、「四面八方ドッチを見ても洋学者などの頭を擡げる時代ではない」武張った〈恐怖の時代〉のことを福沢に強く印象づけ、福沢を深く戦慄させたであろう事件のひとつは、文久3年翌年、元治元年（1864）、京都街中で白昼堂々起った、尊攘派による洋学者佐久間象山の天誅暗殺事件であろう（その予兆は文久2年12月の横井小楠襲撃事件にすでにあった／本稿注(1)参

照)。その斬奸状には、「此者（佐久間）、元来、西洋学を唱え、交易、開港の説を主張し、枢機方へ立入り御国是を誤り候大罪、捨置き難く候所……大逆無道、容るべからず。天地国賊にて……天誅を畢ぬ。但し、斬首、梟木に懸くべく^マの所、白昼能わ^マず、その儀もの也。皇国忠義士^{おかん}」⁽⁸⁾とある。象山暗殺の「皇国忠義士」の主犯、熊本（肥後）藩士・尊攘派河上彦斎^{げんさい}は、まさしく、国家老付の元「坊主頭」「茶道坊主」であった（しかしまた河上は横井小楠・吉田松陰・村田蔵六らも師事した和漢洋の碩学、国学者林桜園に学んだ英知も備えていた）。「元来、西洋学を唱え、交易、開港の説を主張」というのであれば、福沢も立派に「大逆無道」の「天地国賊」として、「皇国忠義士」から天誅を加えられる資格は十分過ぎる程にある。福沢生涯のライバル、蘭学者勝安芳（海舟）も文久3年に尊攘派の襲撃を受け間一髪助かっているのである（本稿注(8)参照）。文久3年に、露出し膨張した、西洋列強に対する攘夷熱は、直前回避された対イギリス戦争、途中で終わった攘夷戦争である薩英戦争と長州藩単独攘夷決行による下関外国船砲撃事件という形で沸騰臨界点を表した。開国派は、攘夷派を常套の説得〈開国し武備整えた後に攘夷決行〉でもって抑え（福沢の観点からすると幕府はじめ大概の開国派も実は「開国主義なんて大嘘の皮」「真実、自分も攘夷を為たくて堪らない」という、方便のため表面を繕っている似非開国主義ということになる）、そのエネルギーを倒幕へと解消させ、さらに維新の恩恵は、攘夷派をすっかり文明開化派へと改倭させることに成功したと思っていたが、そうではなかったことは歴史が証明するところである（文久3年に露出した〈未遂で終わった攘夷熱〉の記憶はその後変遷する時代の深奥に沈潜・蓄積して在り続け、昭和に再び露出する。開国によって近代西洋から導入した諸システムと諸技術は昭和初期には高度に確立した。導入した近代西洋的諸システムは、憲法・国会を備えた国家組織と会社制度を備えた社会組織に基づく、アジア唯一の資本主義国家社会の確立をもたらし、導入した近代西洋的諸技術は、最新鋭の戦闘機・超弩級戦艦に結実される高度諸兵器を生産できる程に成熟し、武備はすっかり整えられ、遂に宿願の挙国一致の大攘夷戦争・聖戦を決

行した。ただし、攘夷の対象規模が〈神州国土〉から〈アジア・大東亜〉に拡大された。それと同時に文久3年に福沢が感受した〈恐怖の時代〉も、開国派の末裔である穏健な自由主義者に至るまで「唯一身を慎んで、ドウでも災を追れさへすれば宜いと云ふことに心掛け」るしかない慢性的恐怖として再現された。結局、アメリカ・ペリー艦隊来航から太平洋戦争敗北までの93年間、営々と構築してきた近代日本は、敗北によっていったん解体・終焉するのである。『西航記』で先駆的に商社（会社制度）紹介がおこなわれた時代とは、こうした、個人が萎縮していく〈恐怖の時代〉でもあった。さらに、文久3年当時、幕府御雇翻訳方として、生麦事件関係などの英仏外交文書を翻訳したものを、興味本位から写し取り、他者にも渡し閲覧させていた福沢は、その直後に、神奈川奉行組頭脇屋卯三郎が、第一次長州征討直前の状況にある長州の親類に出した手紙の瑣末な一文に謀反の疑いをかけられ、切腹させられた事件に非常な衝撃を受け、自分もいずれ外交機密漏洩罪でもって、幕府に処刑されるのではないかという、強迫神経症にも似た慢性的恐怖に襲われる⁹⁹。「文久三年亥歳から明治元年までの五、六年の間と云ふものは、時の政府（幕府）に対しても恰も首（打首）の自債を背負ながら、他人には言はれず家内（文久元年に結婚）にも語らず、自分で自分の身を窘めて居たのは、随分悪い心持でした」¹⁰⁰という次第である。しかし、幕府が維新によって消滅しても福沢の慢性的恐怖はまだ消滅しない。「凡そ文久年間から明治五、六までの十三、四年の間と云ふものは……著書翻訳にのみ屈託して歳月を送つて居りました」というように（本稿(2)参照）、明治5・6年（1872・1873）までく。特に、肥後実学党の領袖であり、幕末期、商社取建（会社制度導入）の必要性を認識していた開明派儒学者横井小楠（1809文政8～1869明治2）¹⁰¹の明治2年（1869）の尊攘派による暗殺と、明治3年（1870）の、かつて福沢らを攘夷主義への変貌（？）で驚愕させた村田蔵六（新政府軍務官副知事大村益次郎）が今度は尊攘派に襲撃され負傷し死亡したことは、福沢を一層戦慄させたはずであり、明治3年（1870）には既述したように、辛くもすべて間一髪のところまで未遂に終わったものの、福沢生涯最大の危機と

もいうべく、類縁者の尊攘派から暗殺を幾度も仕掛けられているのである（本稿②参照）。

さらにまた、幕府とイギリスの間で、前年文久2年に起きた生麦事件の賠償金支払問題（幕府の管理責任に対する賠償金10万ポンド支払要求）が難航していることから、戦争となってイギリス軍が江戸を攻撃するかもしれないという恐怖。福沢は次のように回顧している。

いよいよ賞金（賠償金10万ポンド）を払ふか払はないかと云ふ幕府の評議がなかなか決しない。其時の騒動と云ふのは、江戸市中そりやモウ今にも戦争が始まるに違ひない、何日に戦争がある杯と云ふ評判……私は其時に新銭座に住て居たから、逆もこりや戦争になりそうだ、なればどうも逃げるより外に仕様がないと、ソロソロ逃支度をすると云ふやうな事で、ソコで愈期日いよいよも差迫つて、今度はもう掛値ない、一日も負からないと云ふ日になつた、と云ふのを私は政府（幕府）の翻訳局に居て詳に知つて居るから尚ほ堪らない⁽¹²⁾。

戯けて陽気な口振りで述べられているが、刻々と迫る江戸を戦場にする戦争勃発の現実（結局文久3年5月に幕府老中格小笠原長行ながみちが独断的に賠償金を支払い戦争は回避されたが）は、外交文書翻訳に従事して状況をリアル・タイムで知っている福沢にとって、「尚ほ堪らない」恐怖でないはずがない。こうした大小の恐怖の間に、先述した、福沢にとって親同然の恩師緒方洪庵の急逝が挟まる。

所で、其歳（文久3年）の六月十日に緒方洪庵先生の不幸。その前から江戸に出て来て下谷に居た緒方先生が、急病で大層吐血したと云ふ急使に、私は実に肝を潰した。……新銭座から下谷まで駆詰で、緒方の内に飛込んだ所が、もう緯切れて仕舞た跡。是れはマア如何したら宜からうかと、丸で夢を見たやうな訳け⁽¹³⁾。

悪夢のような緒方洪庵の急逝は、二重三重もの福沢の恐怖に、更に何倍もの異常感・不安感を賦与したに違いない（この緒方の通夜で福沢は、すっかり攘夷主義に変貌した（？）村田から不安・恐怖を惹起する異常感を与えら

れるのである)。

また、『福翁自伝』は高級落語のような軽快な話言葉で記されているため、明瞭な印象を与えないが、少なくとも、文久年間以降、「明治五、六までの十三、四年の間」は、福沢は、慢性的恐怖の他に一切の政治に対する深い絶望感の内にあった。

ソコデ其私の考から割出して、此徳川政府を見ると、殆ど取所のない有様で、当時日本国中の輿論は都て攘夷で、諸藩残らず攘夷藩で、徳川幕府ばかりが開国論のやうに見へもすれば聞えもするやうでありますけれども、正味の精神を吟味すれば、天下随一の攘夷藩、西洋嫌ひは、徳川であると云て間違ひはあるまい。或は後年に至て、大老井伊掃部頭は開国論を唱へた人であるとか開国主義であつたとか云ふやうな事を、世間で吹聴する人もあれば、書に著^{ほん}した者もあるが、開国主義なんで大嘘の皮、何が開国論なのか、存じ掛けもない話だ。井伊掃部頭と云ふ人は、純粹無雑、申分のない参河(三河)武士だ。……又この人が、京都辺の攘夷論者を捕縛して刑に処したことはあれども、是れは攘夷論を悪む為めではない、浮浪の処士が横議して、徳川幕府の政権を犯すが故に、其罪人を殺したのである。是等の事実を見ても、井伊大老は真実間違ひもない徳川家の譜代、豪勇無二の忠臣ではあるが、開鎖の議論に至ては、真闇な攘夷家と云ふより外は評論はない。唯徳川が開国であると云ふのは、外国交際の衝に当つて居たから、余儀なく渋々開国論に従て居た丈けの話で、一幕捲つて正味の楽屋を見たらば大変な攘夷藩だ。こんな政府に私が同情(同感)を表することが出来ないと云ふのも無理はなからう。……表面は開国を装ふて居るも、逆もモウ手の着けやうのない政府だと、実に愛想が尽きて同情(同感)を表する気がない⁽¹⁴⁾。

ここで福沢は、事実上の鎖国崩壊と開国を意味する修好通商条約締結の推進者である大老井伊直弼は実は「真闇な攘夷家と云ふより外は評論はない」との、幕閣の例をあげて、先の「徳川幕府は行政外交の局に当つて居るから拠なく開港説－開国論を云はなければならぬ、又行はなければならぬ、けれ

ども其幕臣全体の有様はドウだと云ふと、ソリヤ鎖国家の巢窟と云つても宜い有様で」の謂を、「当時日本国中の輿論は都て攘夷で、諸藩残らず攘夷藩で、徳川幕府ばかりが開国論のやうに見へもすれば聞えもするやうでありますけれども、正味の精神を吟味すれば、天下随一の攘夷藩、西洋嫌ひは、徳川であると云て間違ひはあるまい」と一層強調して、〈反幕府・勤王派＝攘夷派に対する幕府及び幕閣＝開国派〉という対立構造があるがごとく宣伝されていることは大嘘であることを喝破し、両者とも攘夷論であるとしている。しかしまた、福沢は同時に、反幕府・勤王派に対しては、もちろん、「左ればとて、彼の勤王家と云ふ一類を見れば、幕府より尚ほ一層甚だしい攘夷論で、こんな乱暴者を助ける気は固よりない」⁽¹⁵⁾と、幕府より始末に負えない攘夷論の「乱暴者」として、絶望している。したがって、当初、福沢は、こんな攘夷家の「乱暴者」たちが造った「明治政府」に対しても、引き続き絶望こそすれ、まったく期待などしていなかった。

マア斯う云ふやうな調子で（福沢は明治政府の度重なる招聘を拒否続けた）、私は酷く政府を嫌ふやうにあるけれども、其真実の^{だいほん}大本を云へば、前に申した通り、どうしても今度の明治政府は古風一天（点）張りの攘夷政府と思込んで仕舞たからである。攘夷は私の何よりも嫌ひな事で、コンナ始末では、^{たと}仮令ひ政府は替つても、^そ拙も国は持てない、大切な日本国を目茶苦茶にして仕舞ふだらうと、本当に爾う思^そった所が、後に至て其政府が、段々文明開化の道に進んで今日に及んだと云ふのは、実に有難い目出たい次第であるが、其目出たからうと云ふことが、私には始めから測量が出来ずに、唯其時に現れた実の有様に値を付けて、コンナ古臭い攘夷政府を造て、馬鹿な事を働いて居る諸藩（特に薩長土肥）の分らず屋は、国を亡ぼし兼ねぬ奴等ぢやと思て、身は政府に近づかず、唯日本に居て何か勉めて見やうと^{あんじんけつじょう}安心決定（固い信念でもって心を定めること）したことである⁽¹⁶⁾。

福沢が明治政府からの招聘をかたくなに拒否したのは、「官途」（官立）に対する「私立」の主張⁽¹⁷⁾ということだけではなく、「こんな乱暴者（攘夷家）

を助ける気は^{もと}固よりない」ということの延長である「コンナ古臭い攘夷政府を造て、馬鹿な事を働いて居る諸藩の分らず屋は、国を亡ぼし兼ねぬ奴等ぢやと思て、身は政府に近づかずに」という明治政府に対する深い絶望もあったわけである。さらに福沢の考えでは、政府の有り様は、その人民の有り様に対応している。明治5年（1872）刊行の『学問のすゝめ』で、福沢は次のように述べている。

西洋の諺に愚民の上に^{から}苛き政府ありとはこの事なり。こは政府の苛きに
あらず、愚民の自ら招く災なり。愚民の上に苛き政府あれば、良民の上
には良き政府あるの理なり。故に今我日本国においても、此人民ありて此政
治なるなり⁽¹⁸⁾。

是即ち世に暴政府のある所以なり。^{ひとり}独我旧幕府のみならず、^{ア ジ ア}亜細亜諸国、
古来皆然り。されば一国の暴政は必ずしも暴君^{せい}暴吏^いの所為^{せい}のみに非ず、其
実は人民の無智を以て自ら招く禍なり⁽¹⁹⁾。

これは、「唯用心に用心して、夜分は決して外に出ず、凡そ文久年間から明治五、六年までの十三、四年の間と云ふものは、夜分外出したことがない。其間の仕事は何だと云ふと、唯著書翻訳のみ屈託して歳月を送つて居りました」という福沢の慢性的恐怖の時代（外交機密漏洩の露見、幕府による処刑の恐怖だけは維新による幕府滅亡によって終わったが）の末期、明治5年頃であることを注意すべきである。当時の驚異的ベストセラー（国民的ベストセラー）『学問のすゝめ』は、「唯著書翻訳にのみ屈託して歳月を送つて居りました」という慢性的恐怖時代の著書翻訳活動の産物のひとつであったわけである。であるから、筆禍を恐れてか、「故に今我日本国においても、此人民ありて此政治あるなり」とか「是即ち世に暴政府のある所以なり。独我旧幕府のみならず」と曖昧に表現しているが、「愚民の上の苛き政府」「一国の暴政」とは、「コンナ古臭い攘夷政府」「古風一天（点）張りの攘夷政府」つまり明治政府のことを示していることは明らかである。そうして福沢の本質的な絶望の深さは、そうした「苛き政府」「一国の暴政」「コンナ古臭い攘夷政府」「古風一天（点）張りの攘夷政府」の有り様を〈自ら招いている〉日

本人民の「無智」ゆえの「一身独立」の「気力」⁽²⁰⁾の欠如、さらにこれによる「一国独立」⁽²¹⁾の成りがたさへの絶望の深さ意味した。

明治維新前後、無茶苦茶な形勢を見て、迥も此有様では国の独立は六かしい、他年一日、外国人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ、左ればとて今日、全国中の東西南北、何れを見ても共に語る可き人はない、自分一人では勿論何事も出来ず、亦その勇氣もない、実に情けない事であるが、いよいよ外人が手を出して跋扈乱暴と云ふときには、自分は何とかして其禍を避けるとするも、行く先きの永い（福沢の）子供は可愛さうだ、一命に掛けても外国人の奴隷にはしたくない、或は耶蘇教^{キソウ}の坊主にして、政事人事の外に独立させては如何、自力自食して他人の厄介にならず、其身は宗教の坊主と云へば、自から辱しめを免かるゝこともあらんかと、自分の宗教の信心はなくして、子を思ふの心より坊主にしやうなどゝ、種々無量に考へたことがあるが、三十年の今日より回想すれば、恍として夢の如し。唯今日の世運の文明開化を有難く拝するばかりです（『福翁自伝』）⁽²²⁾。

これは、福沢の父百助が封建身分制度に深く絶望し、思い余って、幼い福沢を寺の「坊主」にしようとしたこと⁽²³⁾と相似形を成している。寺の「坊主」から「耶蘇教の坊主」に変わっていることに時代状況の変化（日本の外国植民地化の危機感深刻化）がある。これは決して冗談ではなく、余りに深い絶望ゆえ、外側から見ると滑稽に見えるのである。福沢は、維新前後、少なくとも文久3年から明治5・6年頃までの13・4年間、いずれ日本は欧米列強の植民地になるものと真剣に思い絶望し切っていたのである。「全国中の東西南北、何れを見ても共に語る可き人はない、自分一人では勿論何事も出来ず、亦その勇氣もない、実に情けない事であるが……」とは、その当時の深刻な掛値ない福沢の〈深い絶望と孤独〉であったのである。この〈深い絶望と孤独〉を源泉にした知識層を中心に、あたう限りの近代的諸技術・諸制度導入の試みがおこなわれたのである。会社制度導入の試みもそのひとつであった。

『福翁自伝』では文久3年の項は、これまでみてきたように、格別に紙幅

を割かれていて、そのほとんどは、軽妙洒脱な口語体とは裏腹に慢性的恐怖と深い絶望に彩られている。その中で、多少陽気でかつ重要な意義を持つ事柄が、洋学仲間で交流があり、鹿児島湾（錦江湾）での薩英戦争（文久3年7月2日～4日／生麦事件倍諸金2万5千ポンド支払と殺傷犯引渡しに応じない薩摩藩に対しイギリス艦隊が鹿児島湾に向かい交戦）が原因で、五代才助（1835天保6～1885明治18／友厚）とともにイギリス軍艦に捕捉、横浜に連行され（実際は松木・五代の意思でイギリス艦隊を降りず横浜まできたのだが〈本稿注29参照〉）、その結果、松木・五代は薩摩藩からはイギリス側スパイの嫌疑を受け、幕府からは勝手にイギリス艦隊と交戦した薩摩藩の責任追及を受ける）、清水卯三郎（箕作秋坪の養父蘭学者箕作阮甫門下で文書訳解のため幕府の許可を得てイギリス艦隊に乗船）の助けでイギリス艦隊を出て清水の郷里の関東埼玉で五代とに逃亡・潜伏生活を送っていた薩摩藩士・洋学者・蘭方医松木弘安（1832天保3～1893明治26／寺島陶蔵、宗則）との、翌年元治元年7月の江戸での再会についての顛末である。本稿で述べていくように、松木・五代はともに〈^{コンペニー}商社の時代〉の非常に重要な役割を担うことになる存在である。

扨、松木に五代と云ふものは、捕虜でもなければ御客でもない、何しろ英の軍艦に乗り込んで横浜に来たに違ひない。其事は、横浜の新聞紙にも出て居たのであるが、ソレ切り少しも消息が分らない。私（福沢）は其前年（文久1・2年）、松木と欧羅巴と一緒にいたのみならず、以前から私と箕作（秋坪）と松木と云ふものは甚だ親しい朋友の間柄で、ソコで松木が英船に乗つたと云ふが如何したらうかと、只その噂をするばかりで尋ねる所もない。英人が若し此兩人を薩摩の方に還せば、ソリヤもう若武者共が直ぐに殺すに極つ居る。然ればと云つて幕府の方に渡せば、殺さぬまでもマア嫌疑の筋があるとか取調べる廉があるとか云て、取敢へず牢に入れるだろう、所が今日まで薩摩に還したと云ふ沙汰もなければ、幕府に引渡したと云ふ様子もない。如何したらうか、如何にも不審な事ぢやと、唯箕作と私と始終その話をして居た。所が凡そ此事が済んで一年ばかり経つて

から、不意と其松木を見付け出したこそ不思議の因縁である⁽²⁴⁾。

『福翁自伝』で、福沢は、イギリス艦隊側に捕捉され横浜まで来て、清水らの先導でイギリス艦隊を出て逃亡・潜伏し帰藩に至る経緯を、後に再会した松木から直接聞いた体験談を基に、次のように異様に思える程まことに事細かに述べている。

扱て夫れから私の気になる松木、即ち寺島の話は斯う云ふ次第である。松木、五代が薩摩の船から英の軍艦に乗移つた所が、清水（卯三郎）が居たので松木も五代も驚いた。清水と云ふ男は以前江戸にて英書の不審（解読困難な箇所）を松木に聞いて居たこともある至極懇意な間柄で、其清水が英の軍艦に居るから松木の驚くのも無理はない。「イヤ如何して此処に居るか」「お前さんは如何して又此処へ来た」と云ふやうな訳けで、大変好都合であつた。ソコで横浜に来たけれども、此儘に何時までも此船の中に居られるものでない。アア如何かして上陸したい、と云ふ其事に付ては清水卯三郎が一切受ける。それは松木と五代は極々日陰者で、青天白日の身と云ふのは清水一人、そこで清水が先づ横浜に上つて、夫れから亜米利加人のヴェンリートと云ふ人に其話をした所が、如何でも周旋しやう、兎に角に舢艀はしけぶねに乗て神奈川の方に上る趣向しに為やう、其船も何も世話をして遣らうと云ふことになつた。所でアドミラル（イギリス東洋艦隊司令長官キューパー提督）が如何云ふか、ソレに聞て見なければならぬとので、アドミラルに其事を話すと、至極寛大で、上陸差支なしと云ふ。ソレカラ一切万事、清水とヴェンリートと謀しめし合せて、落人おちうど兩人の者は夜分窃に其舢艀に乗り移り、神奈川以東の海岸から上る積りに用意した所が、其時には横浜から江戸に来る街道一町か二町毎に、今の巡查交番所見たやうなものがずつと建つて居て、一人でも怪しいものは通行を咎めると云ふことになつて居るから、なかなか大小などを挟して行かれるものでない。ソコで大小も陣笠も一切の物はヴェンリートの家に預けて、丸で船頭か百姓のやうな風をして、小舟に乗込み、舟は段々東に下てとうとう、羽根田の浜から上陸して、ソレカラ道中は忍び忍んで江戸に這入るとした所で、マダ幕府

の探偵が甚だ恐ろしい。只の宿屋には泊られないから、江戸に這入つたら堀留の鈴木と云ふ船宿に、清水が先きへ行て待つて居るから其処へ来いと云ふ約束がしてある。ソコで兩人は夜中勝手も知れぬ海浜に上陸して、探り探りに江戸の方に向て足を進める中に夜が明けて仕舞ひ、コリヤ大変と、夫れから駕籠に乗て、面を隠して堀留の船宿に来たのが其翌日の昼であつた。清水は昨夜から待つて居るので万事の都合宜しく、其船宿に二晩窃に泊つて、夫れから清水の故郷武州埼玉郡羽生村まで二人を連れて来て、其処も何だか気味が悪いと云ふので、又その清水の親類で奈良村に吉田一右衛門（市右衛門）と云ふ人がある、其別荘に移して、此処は極淋しい処で、見付かるやうな気遣ひはないと安心して、二人とも収め込んで仕舞ひ、**五代は其後五、六ヶ月して窃に長崎の方に行き**、松本は凡そ一年ばかりも其処に居る中に、本藩の方でも松木の事を心頭に掛けて其所在を探索し、大久保（一蔵・利通）、岩下（左次右衛門・方平）、重野（安繹）を始めとして、江戸の薩州屋敷には肥後七左衛門、南部弥八（弥八郎）など云ふ人が様々周旋の末、これは清水卯三郎が知て居はしないかと思ひ付て、清水の処に尋ねに来た。所が清水はドウモ怖くて云はれない、不意と捕まへられて首を斬られるのではなからうかと思て真実が吐かれぬ。一応は唯知らぬと答へたれども、薩摩の方では中々疑て居る様子。爾うかと思ふと、時としては幕府の方からも清水の家に尋ねに来る。ソコで清水も当惑して、如何しやうとも考へが付かない。殺さないなら早く出して遣りたいが、殺すやうな事なら今まで助けて置たものだから出したくないと、自分の思案に余つて、夫れから江戸の洋学の大家川本幸民先生は松木の恩師であるから、此大先生の意見に任せやうと思て相談に行た所が、先生の説に、「ソリヤ出すが宜からう、薩藩人が爾う云ふなら有のまゝに明かして渡して遣るが宜からう、マサカ殺しもしなからう」と云ふので、ソコで始めて決断して清水の方から薩人に通知して、実は初めから何も斯も自分が世話をした事で一切知て居る、早速御引渡し申すが、只約束は決して本人を殺さぬやうにと念を押して、ソコで松木が始めて薩人に面会して、此時から松木

弘安を改めて寺島陶蔵と化けたのです（これは福沢の錯誤で松木が「寺島陶蔵」と改名したのは、イギリスから帰国後の慶応2年〈1866〉）。右の一条は薩州の方でも甚だ秘密にして、事実を知て居る者は藩中に唯七人しかないと清水が聞いたさうだが、其七人とは多分大久保、岩下なぞでせう⁽²⁵⁾。

この松木・五代の逃亡・潜伏の経緯についての詳細な福沢の回想は、松木の回顧録「寺島宗則自叙年譜」での記述⁽²⁶⁾とほぼ照応している。むしろ『福翁自伝』の記述の方が、叙事的な「寺島宗則自叙年譜」よりも松木・五代の逃亡・潜伏の恐怖感・緊迫感がよく表現されている。文久3年から35年も経過しても福沢は、『福翁自伝』で松木の経験談を恐怖感・緊迫感をもって鮮明に再現している。福沢は、松木・五代の逃亡・潜伏についてほぼ完璧に追体験しているといえるのである。『福翁自伝』の「攘夷論」の章は、〈文久3年論〉でもあり、その文久3年についての主要な記述は松木・五代の体験を中心にした薩英戦争のことが占めている。このことは、文久3年の亥年建白事件に関する『福翁自伝』での完全沈黙と対をなしている。捕捉・連行と薩英戦争勃発、囚われたイギリス艦隊側にいながら見える鹿児島島の炎上⁽²⁷⁾、薩摩藩と幕府両権力からの追跡、恐怖と絶望と孤独の行き先の見えない逃避行といういつ殺されてもおかしくはないと覚悟する経緯の松木と五代の苛酷な命運は福沢にとって、〈恐怖の時代〉そのものとして類似の境遇にいる福沢が追体験となるまで何度も咀嚼した対象であり、亥年建白事件は福沢にとって、壱岐と自らの関係の複雑さゆえに沈黙せざるをえない対象であった。この文久3年のふたつの事象は、いずれも福沢にとって深い意味を持つ事象であった。しかし、福沢証言にもあるように、松木・五代が戦慄しながら逃亡・潜伏し始めたとはほぼ同時期、イギリス艦隊が鹿児島湾から退去した直後に薩摩藩はイギリスとの講和談判役として、封建的体裁から支藩佐土原藩の家老樺山とねり舎人・儒官能勢ただのぶ直陳、本藩から史学者重野安繹・藩士高崎猪太郎を江戸に派遣していた。薩英戦争が近代西洋の実力を、薩摩藩要路に即時攘夷の不可能性を現実体験的に徹底して覚醒させ、むしろ薩英講和・和親を前提にした近代西洋からの技術・知識の早急なる導入の必要性を痛感せしめたの

である⁽²⁸⁾。つまり、清水卯三郎がすっかり音をあげた、江戸薩摩藩邸の重野安繹（講和談判担当）・岩下左次右衛門（講和談判交渉補佐）・肥後七左衛門・大久保一蔵らの執拗な松木・五代探索とは、松木・五代の恐怖の思惑とはまったく反対に、松木・五代が薩摩藩にとって今まさに薩英講和・和親段階で必要不可欠な存在となったゆえのものであった⁽²⁹⁾。同年9月末に横浜で、佐土原藩仲介（樺山舎人・能勢直陳担当）の形式で始まった薩英講和談判は、同年10月初旬に薩摩藩がイギリス側に生麦事件賠償金2万5千ポンド支払と殺傷犯捜索（「逃亡中」ということでうやむやに解消した）を承諾する代りにイギリスに軍艦を注文する形で終結した。以後、薩英の〈恐怖の関係〉は一転して和親を前提に相互急接近し、松木・五代は薩摩藩への近代西洋の最先端の諸技術と諸制度導入の最前線に置かれることになるのである（ここに石河確太郎の経済・技術改革構想、鹿児島紡績所・堺紡績所と薩州商社の取建構想が全藩をあげて取り組まれる端緒も開かれたのである）。

福沢の証言も示すように、松木・五代は、松木の知人、清水卯三郎とアメリカ人ヴェンリートを仲介にしたキューパー提督の寛大な承認を得てイギリス艦隊から抜け出たのであるが、その逃亡・潜伏は、清水卯三郎・川本幸民（1810文化7～1871明治4）・松本良順・中原猶介など複雑に入り組んだ洋学系譜のネットワークによって導かれていることがわかる⁽³⁰⁾。松本良順（1832天保3～1907明治40／長崎養生所でオランダ医師ボンペから西洋医学を学ぶ）・中原猶介（1832天保3～1868明治1）のことは福沢の証言では触れられていないがその関与は明らかである（本稿注24/26/27参照）。しかし福沢は、恩師緒方洪庵急逝直後に、緒方が就いていた幕府西洋医学所頭取を継いだのが文久3年6月に長崎から江戸に帰った松本良順であったこともあり、松本に対して深い印象を持っていたはずである。

そうして、薩英戦争に端を発したこの逃亡・潜伏は、松木・五代を、彼らが会社制度と遭遇する渡欧体験（薩摩藩留学生イギリス派遣引率）に導くことになるのである。逃亡・潜伏中の五代は、海外留学生派遣案を含む薩摩藩近代化のための改革建白書である「五代才助上申書」の草案を練っていて、

面談した薩摩藩士たちにその一端をすでに熱心に披露していた（本稿注26参照）。五代が帰藩直後にまず真っ先におこなったのは、この上申書を正式に藩に承認させることであったと思われる⁽³¹⁾。「五代才助上申書」は〈恐怖の時代〉薩英戦争の産物のひとつであったのである（本稿注26参照）。また薩英戦争に際しては、石河碓太郎も、特に鹿児島湾の水雷敷設や神瀬砲台・桜島砲台修築造など洋式軍事技術に関して活躍し⁽³²⁾、洋学者としての石河の面目躍如たるものがあった。さらにまた、石河は、薩英戦争（石河にも当然彼我のレベルの差を痛烈な実体験をもって再認識させた）直後、後述するように、文久3年9月に交易シミュレーションを用いて薩州産物会所交易実施を強く訴える文書を藩に提出して、特に本間郡兵衛と協力して薩州産物会所実施準備を積極的に進め、同年12月には日本初の機械紡績所取建の建白書と国内綿花海外輸出実施の建白書を藩に提出する。石河にとっても、薩英戦争は、世界水準に耐えうる経済・技術改革構想を強く促進する契機を導いたものといえる。

以上のことから、『福翁自伝』では、福沢は、松木との感激的な再会の状況についても次のように、昨日の出来事のように詳細に再現している。

其時は既に文久四年（2月20日から元治元年）になり、四年の何月かドウモ覚ええない、寒い時ではなかった、夏か秋だと思ひますが（「寺島宗則自叙年譜」によれば夏7月）、或日、肥後七左衛門が不意と私方に来て、「松木が居るが、お前の処に来て差支はないか」と云ふ。私は実に驚いた。「去年（文久3年）からモウ気になつて居て、箕作（秋坪）と遭ひさへすれば其噂をして居たが、生きて居たか」「確かに生きて居る」「何処に居るか」「江戸に居る、兎に角に此家に来て宜いか」「宜いとも、大宜しだ。何も憚ることはない、少しも構はない、直ぐに逢ひたい」と云ふと、其翌日松木が出て来た。誠に冥土の人に遭つたやうな気がして、ソレカラいろいろな話を聞て、清水（卯三郎）と一緒になつたと云ふことも分れば、何も^かも分つて仕舞つた。其時私は新銭座に居ましたが（正確には文久3年秋頃に新銭座から鉄砲洲中津藩邸内に転居している）、マア久振りで飲食

を共にして、何処に居るかと聞けば、白銀（白金）台町に曹某と云ふ医者がある、其家は寺島の内君（阿茂登）の里なので其縁で曹の家に潜んで居ると云ふ（この時期松木は事実上帰藩が許されていた）。其日は先づ其儘分れて、夫れから私は直ぐ箕作の処に事の次第を云て遣つて、箕作も直ぐ其翌日出て来て、兩人同道して白銀の曹の家に行き、三友団座、ひるから晩までいろいろな事を話す其中に、例の鹿児島戦争（薩英戦争）の話などもあつて、其戦争の事に就ては、マダマダいろいろ面白い事があるけれども、長くなるから此処で之を略し、扱、寺島の身の上は如何だと云ふに、薩摩の方は大抵是れで宜しい（事実上の帰藩許可）が、マダ幕府の意向が分らない、けれども是れとても別段に幕府の罪人でもないから、爾う恐れる事もない訳け。ソコで寺島は何をして喰つて居るかと聞けば、今は本藩の翻訳などして居ると云ふ。それこれの話の中に寺島が云ふには、「もうもう鉄砲は嫌だ嫌だ、今でも乃公は鉄砲の音がドーンと鳴ると頭の中がズーンとして来る、モウ嫌だぜ嫌だぜ、乃公は思ひ出しても身がブルブルとする、夫れから又、其船の火薬庫に導火を点けるときは随分気味の悪い話だつた（実際は松木・五代指揮下の青鷹丸・天祐丸・白鳳丸はイギリス艦隊に放火され焼失）、だが命拾ひをした其時、懷中に金が二十五両あつたから其金を持つて上陸した」と云ふ。いろいろの話の中に、英人が薩摩湾に碇泊中、果物が欲しいと云ふと、薩摩人が之を進上する風をして、其機に乗じて斬込まうとして出来なかつたと云ふやうな、種々様々な話があります……⁽³³⁾。

この「三友団座」旧友再会の遊びを、松木も「福沢諭吉、箕作秋坪に訪はる。二年前に欧行し、帰朝後未だ一面せざるの旧友に逢ふ、其飲、想ふべし」と記している（本稿注26参照）。話す方の松木も、聞く方の福沢・箕作の方も、異様な昂ぶりでとめどもなく「ひるから晩まで」「団座」を続けている。自身慢性的恐怖の中にあつた福沢は、「誠に冥土の人」であるべき松木の薩英戦争を巡る体験をまるで追体験するかのように聞いている。松木の体験した薩英戦争は、少し前まで福沢を苦しめた、未遂の「堪らない」恐怖

(賠償金支払交渉の拗れによる江戸へのイギリス軍の攻撃)がまさしく実現化したものであったからである。「もうもう鉄砲は嫌だ嫌だ、今でも乃公は鉄砲の音がドーンと鳴ると頭の中がズーンとして来る、モウ嫌だぜ嫌だぜ、乃公は思ひ出しても身がブルブルッとする」という松木の恐怖の呻きは、福沢の内面に深く大きく共鳴したはずである。また、『福翁自伝』では、「其戦争の事に就ては、マダマダいろいろ面白い事があるけれども……種々様々な話がありますが」と多くを記載省略した松木の薩英戦争に関する話しの中から、「英人が薩摩湾に碇泊中、果物が欲しいと云ふと、薩摩人が之を進上する風をして、其機に乗じて斬込まうとして出来なかつたと云ふ」とのことを格別に触れているのは注目に値する。数ある松木の薩英戦争の話しの内で、福沢が特に薩摩藩の未遂に終わった〈西瓜売り決死隊〉³⁴⁾のことを印象深く覚えているのはなぜであろうか。実行すればほとんど殉死(玉碎)を意味する〈西瓜売り決死隊〉は、福沢が一番嫌悪する攘夷思想と福沢が重視する「瘠我慢の説」が屈折して入り組んだものであって、福沢に非常に複雑な思いを喚起させたからであろう(これより80年後の対米英拳国攘夷戦争末期の生還を期さぬ特別攻撃、米英側からすると自殺攻撃、は福沢たちが心血注いで取り組んだ日本近代化の悲劇的総決算となった)。

松木・五代にとって、文久3年は、ある意味で福沢以上に、文字通り〈慢性的恐怖と深い絶望と孤独〉の年であった。薩英戦争は、福沢は外部からやってくる恐怖であったが、松木・五代にとって、逃れようのないまさにその渦中にある恐怖であった。

福沢及び箕作秋坪と松木とは、ほんの1・2年前の幕府文久遣欧使節団に共に随行してさらに親交を深めていた。文久遣欧使節団随行の状況を福沢は、『福翁自伝』で次のように回顧している。

箕作(秋坪)と松木弘安と私(福沢)と、此三人は年来の学友で互に往来して居たので、彼方(ヨーロッパ)に居ても、此三人だけは自然別なものにならぬ。何でも有らん限りの物を見やうと斗りして居ると、ソレが役人連の目に面白くないと見え、殊に三人とも陪臣で、然かも洋書を読むと

云ふから中々油断をしない。何か見物に出掛けやうとすると、必ず御目附方の下役が附て廻る。……ソレは甚だ不自由でした。私は其時に、「是れはマア何の事はない、日本の鎖国を其まゝ担いで来て、欧羅巴各国を巡回するやうなものだ」と云て、三人で笑たことがあります⁽³⁵⁾。

薩英戦争後の福沢・箕作・松木の再会、「三友団座」は格別なものがあつたわけである。薩英戦争がその後、薩摩藩のイギリスへの急接近という方策転換で終結し、藩内切つての親英派の松木と五代は、スパイ疑惑が晴れ一転、薩摩藩の対イギリス親和方策に必須な存在として、帰藩を許される。また、石河碓太郎らの経済・技術改革構想実施の拠点となる大坂百間町下屋敷（蔵屋敷、百間町屋敷）が文久3年に本格的に活動開始するが、これより5年後の慶応3年（1867）に「薩州商社名籍」に名を連ねる鹿児島商人（下町年寄格）・百間町屋敷御用聞魚住源蔵⁽³⁶⁾が薩英講和談判役一行に随行しており⁽³⁷⁾、薩州産物会所交易・機械紡績導入・薩州商社取建構想に関係深い浜崎太平次家⁽³⁸⁾も薩英講和談判役派遣に関係している⁽³⁹⁾。もっとも薩英戦争勃発前、同年6月に8代浜崎太平次が大坂で病気でまだ50歳で急逝し、その長男政太郎19歳が9代浜崎太平次を継承している。この関係については、後述したい。

しかし、文久3年の恐怖と絶望の薩英戦争体験・潜伏逃亡生活は、松木と五代に、福沢の「唯一身を慎んで……唯用心に用心して、夜分は決して外に出ず……唯著書翻訳にのみ屈託して歳月を送つて居りました」という引き籠もりの姿勢とは逆に（松木も五代も恐怖と孤独の逃亡生活中に「唯一身を慎んで……唯用心に用心して」との息の詰まる秘匿行動はすでに十分過ぎる程経験していた）、薩英戦争から3年後、後述するように元治2年・慶応元年（1865）、引き籠もる福沢（これも後述するように、〈恐怖〉の時代、福沢もただ引き籠もっていたのでは決してないが）とは対照的に、近代西洋の技術・制度の摂取（主に五代担当）と薩英独自外交確立（松木担当）を目指したイギリス・ヨーロッパへの密航という極端な行動に向かわせた。そうして、五代も松木も共通して、イギリス・ヨーロッパにおいて、衝撃を受けたものの大きなひとつが会社制度であつた。松木は、5年前、すでに文久元～2年

に福沢とともに渡欧体験をしている。帰国後福沢が『西航記』を著し、会社制度を「商社」として紹介しているのに対して、松木は会社制度に対して格別の表明はしていない。恐らくは、その時、松木は、福沢程の興味を会社制度に対して持ち得ていなかったのである。しかし、今度の渡英・滞英において、松木は、会社制度に刮目し、そうして瞠目した。その結果、松木は、く薩摩藩と日本の現在の危機的状況を救えるのは、「コムパニー」の導入しかない」とまでの認識（これは五代の場合も同様である）に至る。松木は、特に朋友福沢の『西航記』を通して、文久年間以降、すでに「商社」についての啓蒙的知識は漠然と持っていたはずである。しかし、松木の場合（五代の場合も同様に）が福沢『西航記』での商社紹介と比して、大きく違うのは、もはや松木（五代も）にとって、会社制度は、単なる紙上の啓蒙的存在ではなく、現実^{じじつ}に肉体を持ったきわめて切実な存在であるということなのである。逆に福沢は自分が紹介したはずの会社制度について、この時期、まるで忘却したかのように、ほとんど関心を持っていない。元来福沢は、近代日本実学の開拓者と目されていながらも、思想的には経済分野について半身程しか入り込んでいなく、特に商業的実践は、「復た経済を語りませう。私（福沢）は金銭の事を至極大切にすが、商売は甚だ不得手である。其不得手とは、敢て商売の趣意を知らぬではない。其道理は一通り心得て居る積りだが、自分に手を着けて売買貸借は、何分ウルサクて面倒臭くて遣る気がない。且つむかしの士族書生の気風として、利を貪るは君子の事に非ずなんと云ふことが脳^{あたま}に染込んで、商売は愧かしいやうな心持がして、是れも自から身に着き纏^はふて居るでせう」^{はす}^{おのず}^{（40）}と自ら述べているように、根本的な違和感を引き出す対象なのである。これは、福沢の「瘠我慢の説」が、マックス・ヴェーバーの提唱した「資本主義の精神」とはまるで異なる概念、経済的には、ヴェーバーのいう「伝統主義」（「資本主義の精神」の対極概念）^{（41）}に照応するものであることに大きく係わっている（このことをはじめ、福沢の内なる経済的「伝統主義」については重要なので本稿次号以降で詳述する）。

逃亡潜伏から3年後、松木は、逃亡潜伏生活を支援してくれた洋学友薩摩

藩士中原猶介⁽⁴²⁾宛に、今度はロンドンから、慶応元年12月7日付書翰でその熱烈な思いを長く綴っている。その書翰での白眉ともなるのが、松木が遭遇し衝撃を受けた次の会社制度に関する箇所である。

抑、西洋の盛なるは、人の知る通り、コムパニーなり。或十人、或五十人、或百人相合して、元額を出し、大業を起し、永年の間其利を平分す。汽船・汽車・伝信・気灯・製鉄・造炮、其他無数の工商の公会あり。此公会を結ばざる間は、決して我国を東方に崛起せしむる事、不能。即、パラガンダ（プロパガンダ *propaganda*）の説を以て諸侯（諸藩主）及紳家（公家）に伝へて、同時に最上の君主（天子）を理解し奉り、其命、摂中（摂津国中）の大商に令し、大商諸侯相合して所謂コムパニーとなり、全国中一致せば、此時こそ大雪辱の時を得たりと謂ふべし。……賢兄（中原猶介）、若し要路の人（薩摩藩要路）に逢ふ事ある毎に、此説を解き玉ふべきを希ふ。……万一、力及ばずして（日本が）分裂割拠せば、即、印度なり。早晚、其説（コムパニーについてのプロパガンダ）、実効あつて、天子、海外の遣使を見、勅書を外国の主に贈り、我遣使を海外に出し置き、將軍・諸侯・国人相合し合興業せば則大日本は亜細亜大英国となるべし⁽⁴³⁾。

松木は、あえて「商社」と表現せず、「コムパニー」「公会」と称しているが、福沢『西航記』での「商社と名くる者は、二、三の富商相謀て一商事を起し、其事を巨大にせんと欲するときは、世上に布告して、何人を論ぜず金を出して其社中に加はることを許し……」（本稿注(1)参照）を前提としながらも、ここでの「抑、西洋の盛なるは、人の知る通り、コムパニーなり。或十人、或五十人、或百人相合して、元額を出し、大業を起し、永年の間其利を平分す」との謂（「抑、西洋の盛なるは、人の知る通り、コムパニーなり」には文久2年の福沢『西航記』での商社紹介以来4年間に、近代西洋の経済発展の要因としての会社制度についての啓蒙が一定程度進んでいたことが表されている）は、翌年慶応2年（松木・五代はこの年に帰国）刊行の福沢『西洋事情』での「西洋の風俗にて、大商売を為すに、一商人の力に及ばざれば、五人或は十人、仲間を結びて其事を共にす。之を商人会社と名づく」（本稿

注(1)参照)と通底する内容となっている。松木が「コムパニー company」⁽⁴⁴⁾を「公会」とも訳したことは、会社制度概念を経済的範疇だけではなく政治的範疇を含むものとする松木の「コムパニー」概念の特質を示すと同時に、松木が「コムパニー」本来の特質である合本 joint・stock (各分散資金・各社会的遊休資金をひとつに集中化する)をく各分権を統合する中央集権化するにまで拡大し、維新後の版籍奉還実施、さらに廃藩置県実施という封建的分権制(「分裂割拠」の状態)廃止から「全国中一致」する近代的国家(中央集権国家)確立へという展望まで持ち得た、松木の先見性を示している⁽⁴⁵⁾。「公会」は政治的範疇の色彩の濃さを表わして、近代的国家組織の中枢となる〈国会〉の原基となっている。会社制度そのものは、経済的範疇に属するものであり、「何人も論ぜず(貴賤上下身分に関係なく)」事業参加(出資)できる特長があり、五代もロンドンから薩摩藩に送った建白「18箇条建言」で「鹿児島中貴賤を論ぜず商社に(を)開くべき事」^{ママ}⁽⁴⁶⁾と記したが、政治的範疇の〈国会〉の「何人も論ぜず」「貴賤を論ぜず」(身分を一切論ぜず平等に)政治参加(参政権)できる特長⁽⁴⁷⁾がそれに対応している。〈会社〉と〈国会〉は、前者が社会組織に属するもの、後者が国家組織に属するものとの相違はあるが、ともに共通して封建身分制度から解放された制度・組織である。〈会社〉と〈国会〉(会社創設運動と国会開設・自由民権運動)は、母胎を同じくする双子のような関係にあることは、日本における会社制度の起源と近代日本の大きな特徴になっている。この特徴を先駆的に表わしたのが、松木の「コムパニー」概念であった。松木の「此公会(コムパニー)を結ばざる間は、決して我国を東方に崛起せしむる事、^{あたわず}不能」「大商諸侯相合して所謂コムパニーとなり、全国中一致せば、此時こそ大雪辱の時を得たりと謂ふべし」「將軍・諸侯・国人相合し合興業せば則大日本は^{アジア}亜細亜大英国となるべし」との宣言のような強い断定には、福沢の啓蒙的な場合とはまるで異なった、ただならぬ切実さがある。〈薩摩藩及び日本は、コムパニーを導入できねば即インド帝国のように滅亡する他ないが、導入できれば^{アジア}アジアの^{イギリス}イギリスになれる〉という乾坤一擲の冒険主義ともいえるような極度な行

動主義、日本において、これ程、会社制度が本来の経済的範疇の意味を超えて過剰なまでの意義を持たされた時代はないし、そこに日本における会社制度導入の特質を如実に見ることができるのである。維新後、国内に急激な勢いで諸会社が創設され、戦前アジアで唯一、会社制度が確立できた基盤の大きなひとつには、政治的情念・自由民権運動と見紛うような壮烈な志向性が強力に作動したことがあったのである⁽⁴⁸⁾。

松木が「此時こそ大雪辱の時を得たりと謂ふべし」という場合の「大雪辱」に対応する〈大恥辱〉とは、3年前の主に薩英戦争による屈辱的な、鹿児島炎上と松木自身の逃亡生活があったあの文久3年の一連の出来事であったに違いない（本稿注27参照）。松木の「コムパニー」概念の原点は、文久3年の〈大恥辱〉＝〈恐怖と絶望〉をもたらした非常な危機感にあった。しかし、松木の「コムパニー」概念の背景の危機感には、文久年間（外国貿易開始から5年程経過している）はまだ日本の貿易規模も小さく貿易赤字問題が顕在化していないこともあって（この時期日本側は貿易黒字）、まだ貿易赤字問題が具体的に出ていないのである（本稿巻末掲載図表参照）⁽⁴⁹⁾。

このことは、日本の貿易赤字が危機的に重大化する時期（〈このままでは日本も、インド・中国のように、貿易を通して西洋列強の植民地と化してしまうのではないか〉という恐怖も相当大きなものがある）に対応して、慶応3年（外国貿易開始から10年経過している）、薩州商社が外国貿易を前提にして、その取建構想が打ち出されたことに対する、大きな相違点のひとつになっている。

またここで注目すべきことは、松木は、さかんに「パラガンダ（プロパガンダ）」の必要性・重要性を説き強調していることである。これは、プロパガンダ propaganda（宣伝）は政治的範疇の色彩が濃い概念であるから、松木の「コムパニー」概念の特質の反映でもある。本稿次回以降で詳述するように、実は、この松木の「コムパニー」概念や会社制度導入に関する「パラガンダ（プロパガンダ）の説」について、奥平壱岐は、上のロンドンからの中原宛松木書翰の筆写を所持していた幕臣勝安芳（海舟／1823文政6～1899明

治32)を通して(これも本稿次回以降で詳述するが、『勝安芳日記』が記しているように失脚後の壱岐は元治・慶応年間〈1864~1867〉、江戸で勝との交流を頻繁におこなっている)、認知していたと考えられるのである。

こうして、福沢にとって、文久3年は、明治初期に至るまでの慢性的恐怖と深い絶望の時代の開始の年となった。そうして、また、これは当時の知識層にとっても普遍的なことであった。奥平壱岐にとっても文久3年は、文字通り〈深い恐怖と絶望〉を意味した。亥年(文久3年)建白事件は、まさに壱岐暗殺まで射程に入れたもので、それは〈壱岐弾劾・暗殺計画事件〉といい換えてもよい側面を持つのである。この事件によって壱岐は、地位も名誉も、それまでの封建的特権のほとんどを喪失して、極悪人・佞臣に説話化されて、家族ともども中津を事実上追われ、江戸に引き籠もるのである。既成の先天的な封建的特権のほとんどを喪失した壱岐が生まれて初めて、自分一人の力だけで、妻子・老父母を養い生きていかざるをえなくなった局面において、この時代、壱岐が発揮できる後天的技量というのは蘭学、特に蘭学に基づく兵学だけであった。また壱岐にとって蘭学は、見過ぎ世過ぎの方策としてだけではなく、封建的身分を剥き取られた裸の自分が、しかも死に損ない、怯懦の笑われるべき大悪人・佞臣のレッテルを貼られた自分が、大激動の時代にあって、決してまだ短くはない残りの生涯を全うしなければならないことの意味や価値にも繋がることでもあった。幕末期、洋式兵学の需要が高く、各藩は優れた蘭学者・洋学者を競って招聘している。特に奥平家と繋がりが深い薩摩藩などは他藩からも蘭学者を多く招聘している(藩主島津斉彬からの強い囑望をもって招聘し、薩摩藩の軍事・経済・産業の技術部門を幅広く担当した和州出身の蘭学者石河確太郎が典型である)。蘭学によって身を立てる術こそが失脚以後の壱岐の大きな課題となっていた。蘭学・洋学の偉才と研鑽のみで、低い身分から身を立て出世して活躍している者が壱岐の実に身近に存在していた。あの微禄下士の次男中村諭吉、福沢諭吉であった。失脚後の壱岐が自分の今後の規範として意識し注目したのはかつては下人のように従えていたあの福沢諭吉であった。福沢の洋学者としての力

量の高さはすでに沓岐も長崎蘭学修業時代以来、十分周知のことでもあった。ほとんどすべてを失って浪人同様（中津藩とは緩くつながっていて禄も支給され束縛されていたが）となった沓岐に対して福沢は、洋学の技量によって、元治元年（1864）には陪臣ながら、幕臣に登用されて（それまで雇われていた外国奉行翻訳方に幕臣として出仕することになる）、禄高百俵（50石に相当、勤務中50俵増高）の身分となっている。沓岐は必死になって福沢の背中を追いかけることになる。当時江戸で執筆された福沢の著作ほとんど全部を沓岐は常ならぬ関心で貪り読んでいたことは確実である。ここに沓岐と福沢の関係における下剋上は完結する。沓岐は、自分が追放される亥年建白事件直前に目を通したであろう福沢の建白書に添付された『西航記』で紹介されていた「商社」の印象や『西洋事情』初編（慶応2年刊）でさらに詳しく説明された「商社」についての知識の下地があってこそ、やがて大坂で遭遇する薩州商社取建構想に思い入れ深く関わっていくことになるのである。しかし、沓岐は、模範とする順風満帆に見えたその福沢が、同じ江戸で慢性的恐怖に戦慄して引き籠もり「唯著書翻訳にのみ屈託して歳月を送つて居りました」という状況にあったということをどれ程知っていたであろうか。

こうした文久3年以降の慢性的恐怖と深い絶望の時代がもたらす重大な危機感は、一方では、くどの道日本が滅亡するのであるならば、新しい試みは全部やってみよう」というどん底に追い込まれたゆえの、のるか反るかの、極度の行動主義を導き出した。極度のペシミズムが極度のオプチミズムに転化してくのである⁽⁵⁰⁾。石河確太郎が薩摩藩に建白した機械紡績業導入（機械紡績所取建）の試みも、福沢が紹介した紙上の会社制度「商社」を、松木・五代らが肉体を持つ現実の会社制度「商社」へと転化させる試みもそうした新しき試みの大きなひとつであったのであった。極度のペシミズムの反転としての極度のオプチミズムとはある意味病的で異常でさえあり（躁鬱病的ともいえる）、時代の熱狂となる。それは〈政治的熱狂〉とは違った、きわめて〈覚めた熱狂〉といえる。この〈覚めた熱狂〉から膨大な覚めたエネルギーが生み出される。こうした膨大な覚めたエネルギーに基づいて、それま

ではなかった経済・技術の新しいものを導入する或いは生み出す試み、新しい試みは実施されていく。機械紡績所取建の試みは、明治維新を1年後に控えた慶応3年(1867)5月に実際に鹿児島紡績所が竣工し、日本初の機械紡績所として実現し、松木・五代らの会社制度導入の試みは、薩摩藩内にある種の〈商社ブーム〉をもたらし、この〈商社ブーム〉を背景に、石河を中心に薩州商社取建の試みがおこなわれ、慶応3年6月、「薩州商社発端」「薩州商社条書」が表明されるのである。薩州商社こそは、鹿児島紡績所に次いで畿内で建造する機械紡績所(堺紡績所)を堺戎嶋の薩州商社本館(本社)敷地内に置き薩州商社が運営するという、石河らが文久年間以降取り組んできた経済・技術改革構想の流通と生産を統合する最高の結実となるべきものであった。

時間を隔てた現在の地点からは、討幕・維新の流血の〈政治的熱狂〉に浮かれながらも同時に無血の〈覚めた熱狂〉によって、着実に機械紡績所や洋式造船所や洋式高炉を建造したり、会社制度の導入をおこなっているのは、まことに奇異にさえ見えるが、個人においても社会においても人間史はそのような多次元的なものが同時進行しひとつにまとまりながら展開してきた。個人的には福沢も、文久3年以降、慢性的恐怖の戦慄にありながら同時に酒を飲んだり友人と宴会を開いてふざけたり結構生活を楽しみ(失脚後の壱岐の江戸での生活や松木・五代の逃亡生活や戦争下の国民や戦場の兵隊の生活についても同様であろう)、仙台藩主養子縁組の世話(本稿(2)参照)や渡米をしたり、維新後は旧幕軍の大鳥圭介・榎本武揚の助命や大童信太夫らの救済(本稿(2)参照)に奔走したり、何ととっても宿願の中津藩藩政改革である洋学校開設について、あの恐怖の頂点〈明治3年福沢諭吉暗殺未遂事件〉の最中においても精力的に取り組んでいる(本稿(2)参照)などきちんと活動的である。決して「屈託して歲月」を送る引籠もりだけではなく、同時にきわめて活動的なのである。文久3年以降の〈恐怖の時代〉についてもそのように多次元的に理解しなくてはならない。

以上の〈恐怖の時代〉の幕開けとなった文久3年は、薩州商社関連の観点

からすると、後に詳述するように、石河確太郎が薩州商社の前段階となる薩州産物会所の開設に基づく交易シミュレーションをおこない、同時に機械紡績所取建の建白（日本初の機械紡績所取建建白）、さらには国内綿のイギリス輸出建白をおこなう年である。5年後の慶応3年（1867）に取り組まれる薩州商社取建構想とは、先にも少し触れたように、泉州堺戎嶋^{えびす}に本社（本館）を置き全国各地に支社（枝館）を配する、外国貿易を前提とする会社（商社）を取建てて同時に戎嶋本社内に取建てた機械紡績所（堺紡績所）をその会社によって運営する（生産された機械綿糸の海外輸出さらには資本輸出も射程に入れている）という流通と生産を有機的に関連づけた総合構想である⁽⁵¹⁾。文久3年に石河は、薩州産物会所取建（流通）と機械紡績所取建（生産）をほぼ同時に建白しながら、薩州産物会所による機械紡績所の運営もそこに盛り込んでいる⁽⁵²⁾。薩州商社取建構想の原型は、〈恐怖の時代〉の幕開けとともに形成されているのである。そうして、文久3年の暮れには、取り組み始めたばかりの薩州産物会所と機械紡績所の取建構想にも〈恐怖の時代〉の影が、たちまちの内に落ちるのである。石河が文久3年11月に機械紡績所取建と国内綿イギリス輸出建白をおこなった（詳細は後述）直後、文久3年12月24日に馬関（下関）海峡で発生した、長崎丸砲撃事件である。長崎丸は幕府（長崎製鉄所〈造船所〉所属）のイギリス製蒸気輸送船であるが、この時、薩摩藩が幕府から借用して長崎に向かう途上、馬関海峡渡航中に長州藩の下関砲台から砲撃を受け、炎上沈没、68名の乗組員の内、松木弘安・石河確太郎のいわば同僚ともいべき宇宿彦右衛門（1820文政3～1863文久3）⁽⁵³⁾ら薩摩藩士と水夫の計28名が死亡した。嘉永5年（1852）生れで長州出身の修史家中原邦平は、この事件について次のように述べている。

文久三年十二月二十四日には、薩州の蒸気船を焼討した事件が持上がり
ました、其れは幕府から借りた長崎丸と云ふ船で綿を積込んで居たそう
ですが、其船が二十四日の夜馬関海峡を通りかけた所を台場から撃つて了
ふた、だが是は西洋船と間違へて撃つたと云ふ事です。……跡で薩州の船と
云ふ事が明白に分つたから、政府（長州藩政府）では其の処置に困りまし

て……とう々々（薩摩藩へ謝罪の）使者をやることになつて、桂譲介と云ふ者が薩摩へ参りました、誠に申訳がないと云ふて断りましたが、薩州の方ではなか々々承知しない、薩州の若手の連中は長州へ押込むと云ふ勢であつたさうですが、今内乱を起してはならぬと云ふて島津久光公が御止められたさうです⁽⁵⁴⁾。

長崎丸砲撃事件は、この年の「八月十八日の政変」⁽⁵⁵⁾以降の激しい薩長対立の最中に現場の長州藩尊攘派が「薩賊」（長州藩尊攘派は8月18日政変を仕掛けた薩摩藩会津藩公武合体派連合を「薩賊会奸」と痛罵し憎悪した）に対して意図的に下した天誅としての意味合い（必然の意味合い）と、「薩賊」の憎悪を組織化していきながら同時に政治的外交方策も施行していかなるを得ない長州藩中央要路（長州藩政府）からすると、様々な条件が重なった、結果的には時期をわきまえない現場の尊攘派（これはまたこれで指導権を巡る分派対立や策謀に満ちた〈憂鬱なる党派〉の複雑な内部要因があった）の暴走としての意味合い（偶然的意味合い）が複雑に絡み合った事象、必然と偶然が複雑に絡み合った事象である。したがって、長崎丸砲撃事件は、決して単純に偶然「薩州の船」を「西洋船」と誤って起こった不慮の事故などではない。事象の焦点となるのは、後述するように長崎丸が「綿を積込んで居た」ことであつた。当時、長崎丸砲撃事件に間接的にかかわることになった、芸州（広島）藩士船越洋之助（後に男爵）は事件について、維新後、次のように回顧・談話している。

先達て文久三年十二月下旬、薩州の商船が綿其他の物品を積んで、薩州へ帰らうとして馬関を通過する際、長州兵が其船を撃沈めたことに付て、芸州に余程関係がございますので、其御話を致すといふ御約束を申して置きましたが……覚えておりますだけを御話し致します。薩州の商船（長崎丸）が芸州の御手洗島（現広島県呉市豊町御手洗）から、広島^{など}の産物綿其他の物品を積載して行つたには、余程訳がございます……而して其当時広島^{など}の商人と鹿児島^{など}の商人とが産物の交易取引をして居りました。広島^{など}の綿^{など}杯も鹿児島へ送つて居りましたので、（薩英戦争による戦災の見舞として

芸州藩から薩摩藩へ派遣した) 使者の行つた序^{ついで}に薩州は当時外国と貿易もして居るので、銃器及軍艦等の買入も余程便を得て居るから、其買入の世話を^{して}貰ひたい、此方からは綿^綿其他の物産を送つて交易したら、双方の都合が宜からうといふので、使者の随員として勘定役なる私(船越)と国枝とを付けてやつたのでありました。そこで段々あちらで談合を致しました、所が大に薩州の同情を得て金も多少借ることが出来追々交易しやうといふ談合が付きまして。之を取扱ふた薩州の役人と(使者の)市来正右衛門(市来四郎)、商人では柿本彦左衛門といふ人であつたと聞いて居りました。そこで其交易をする場所は何処で取換せをしやうかと、いうことになりました所が、広島県の内に御手洗といふ島がありまして……船を著けるには余程便利が宜く、且つ離島だから人の知り手も少ない。其頃攘夷論は盛んであり、且つ薩州は外国と貿易するといふ様な評がありますから成るべく目立たぬ様にしやう、御手洗島なら人の知ることも稀だからといふので、同所で物産の取替せをすることになつたのであります。そこで交易して居りました所が、其事を長州の藩士が聞知つて長州の浪士が沢山御手洗島へ、やつて来まして、現状を視察して薩州と交易するのは、全く外夷と交易するのだ、薩州は現に外夷と交易しつゝある、それと交易する芸州は取も直さず外夷と交易すると同じ訳である、実に怪しからぬことである、依て此地(御手洗島)は焼払ふて仕舞ふといふことを揚言して帰りました。……(この御手洗島焼討の揚言に芸州藩側は驚いて、長崎丸砲撃事件の直前、文久3年12月中頃、船越らは、芸州藩使者として、「薩州と交易するのは外慮と交易するのだと云ふのは、是は容易ならぬ誤解である」から御手洗島焼討はあつてはならない旨を長州藩に「弁解」すべく三田尻まで出向くのであるが、長州藩政府から、く御手洗島焼討などありえなく、このことは「決して疑念はない安心せよ」くとの長州藩主の丁寧な命を貰ひ帰藩する。しかしこの命は長州藩要路の表明であつて、現場の尊攘派の意志とは一致するものではない) 言はゞ使命を全うしたので我政府(芸州藩政府)も喜びました。すると十二月二十四日のことであります。薩藩の商船

（蒸気船長崎丸）が綿杯を御手洗島で積んで馬関を通過しやうとする時に、馬関に居つた長州の兵隊（奇兵隊）が、大砲を打込んで其商船を撃沈せしめまして、遂に二十八名の乗組人が死んだことがありました⁽⁵⁶⁾。

「当時広島の人と鹿児島の人とが産物の取引取引をして居りました。広島綿杯も鹿児島へ送つて居りましたので」という商人レベルの従来の薩芸交易が薩英戦争を契機として藩レベルのものに拡大した経緯から、長崎丸は、芸州藩が特別に用意した離島の御手洗島で、芸州産綿を中心に積荷したのである。問題は、薩芸交易と外国貿易の関係である。長州藩尊攘派は、この薩芸交易を薩摩藩は外国貿易に利用していることを鋭く掌握していた。「其頃攘夷論は盛んであり」という〈恐怖の時代〉にあつては、修好通商条約にのっとりたまったくの合法行為（尊攘派からすると天子の勅許のないこの条約は無勅許・違勅の無法・非合法なものということになるのであるが）であるべき外国貿易は、実際は大いなる憚りであり、「薩州は外国と貿易するといふ様な評がありますから成るべく目立たぬ様にしやう」ということから、当時、すでに外国貿易に対して肯定的な薩摩藩に対するバッシング、反対に、長州藩の外様盟友と思えた薩摩藩の老練なる画策8月18日政変で寝首を掻かれるように京都・朝廷周辺から撤退を余儀なくされながらも外国貿易に対して断固たる攘夷の立場を表明する長州藩に対する支持（「長州最良」）の社会風潮ができていたことがわかる。薩摩藩自身も表立って外国貿易ができにくい時代なのである。芸州藩も本当は、薩摩藩が薩芸交易で集荷した産物の相当数量を輸出用としていることを認識していて、薩摩藩を通して「銃器及軍艦等の買入」（輸入）の「世話」をして貰っているのだから、間接的に外国貿易に参画していることになるのであるが、「薩州は現に外夷と交易しつゝある、それと交易する芸州は取も直さず外夷と交易すると同じ訳である、実に怪しからぬことである」と尊攘派から糾弾されると、慌てふためき恐怖して、「薩州と交易するのは外慮と交易するのだと云ふのは、是は容易ならぬ誤解である」（薩州が芸州産物を「外慮」「外夷」に輸出しているかどうかは芸州藩は知るところではない）と「弁解」するしかないの

ある（43万石の大藩芸州藩も表立って外国貿易をすることは憚りとなっているのである）。いつの〈恐怖の時代〉にあっても、恐怖を送る側は、破壊ばかりで創造的なことは一切しない代わりに、己の敵・標的に関する、執拗な探索・情報網作りに暗い負の情念を傾注する（本稿注⁽⁷³⁾参照）。尊攘派の探索・情報網は、「人の知り手も少ない」離島の御手洗島を突き止め、そこで何がおこなわれているのかも緻密に「現状を視察」した。「薩州と交易するのは、全く外夷と交易するのだ、薩州は現に外夷と交易しつつある、それと交易する芸州は取も直さず外夷と交易すると同じ訳である」という尊攘派の「視察」分析はかなり精確であった。あえて表向き「揚言」した御手洗島焼討を実行しない代わりに、輸出用「綿其他の物品」を積載した長崎丸をきちんと撃沈せしめて、船越洋之助らを唾然とさせ恐怖させた（攘夷派の探索・情報網は長崎丸の御手洗島出航時間や馬関海峡通過予定時刻を掌握していたはずである／本稿注⁽⁷³⁾参照）。

しかし、長州藩内のこうした現場の尊攘派の必然と偶然が入り乱れた暴走について、長州藩中央要路（長州藩政府）は、組織的駆け引きの点で困惑し、（本当は憎悪する）薩摩藩に対して桂譲介らを派遣して、長崎丸砲撃事件は、外国船と誤認したことによる誤射事故であったことを「弁解」し「誠に申訳がない」と陳謝している。長州藩政府の最大の大義名分は、8月18日政変以前に朝廷からの強い要請（長州藩尊攘派及び長州派公卿からの教唆が大きい）で幕府が決定した文久3年5月10日尊攘決行（奉勅攘夷）であり、そういった時局に西洋（洋夷）船と明確に区別しないで馬関海峡通過しようとした薩摩藩側にも過失があるとの含みもある⁽⁵⁷⁾。また、長崎丸砲撃事件発生の1週間前の12月18日に長州藩内では来年正月にオランダ艦隊来襲の可能性があると防戦予備令⁽⁵⁸⁾が布告され、最前線の下関砲台では緊張した臨戦体勢をとっていたことは長州藩政府の誤射の言い訳に幸いした（しかし同時に結果的に防戦予備令が長崎丸砲撃事件を誘発したともいえる）。

藩をあげての尊攘（そのためには討幕も辞さず）と討「薩賊」の体制は、現場の尊攘派の〈「薩賊」討つべし〉との非政治的ともいうべき、組織的駆

け引き拔きの献身的直情によって成り立っている（だが実際は現場の尊攘派内部でも閉じられた小組織に特有な駆引きを含めた献身的とはとてもいえない陰鬱な政治的策謀に満ちていて個人の理念や情念がそのまま発露されるものではない。これは組織の大小やその表向き掲げるイデオロギーや大義名分を問わずいかなる組織も免れぬことのできない原理ともいえる）。しかし藩政を担当し藩体制維持を義務とする長州藩中央要路は、常に組織的駆け引きのバランス・シートを描いて行動すること、つまり常に政治的であらねばならなかった（藩政府は、藩論を臨戦体制確立に収斂させるためには、醜汚敵打倒のスローガンの下、藩内全体の情念を醜汚敵に対する強力な憎悪に昂じていかねばならない。しかし、これは同時に、藩政府が藩内全体の激化していく憎悪をコントロールできなくなり、逆に藩政府が藩内全体の過激化な憎悪に引き摺られ、歯止めのない戦争へと向わされてしまうという矛盾となる。これは、鬼畜米英戦・太平洋戦争の過程が悲劇的に再現した通りである）。特に、8月18日政変問題で、長州藩政府は、「当時（現在）、京都の御首尾、御壅塞の形に相成り、幕府の御都合も宜しからざる御時分に付」⁽⁵⁹⁾というように、朝廷・幕府との交渉で苦慮して（本稿注59参照）、長州藩政府にとって、現場の奇兵隊が引き起こした長崎丸砲撃事件は、薩摩藩を挑発し、この交渉の大きな妨害となるものであった。船越洋之助も、「長州から外国船と間違つて撃つたといふ言分は、立ぬことになりましたか」という質問に対して、「其通りで私が考へますに長州は余程国情が六ヶ敷あつて、諸浪人の趣意と長州政府の趣意とは余程違つて居たそうです……今の馬関で長兵が薩州の商船を撃ちましたのも、全く長州政府の意思ではなく、無論其所に屯してゐる兵隊中には浪人も大分居り、其他有志と称する者が種々這込つてたそうですから、前後の考慮もなく唯々一時激してやつたのでありませう」⁽⁶⁰⁾と証言している（ただし単なる「唯々一時激して」ではなく綿密な探索が準備されている／本稿注73参照）。こうした長州藩政府の在り方は、福沢諭吉が「幕府は本当は一番攘夷をやりたいのだが、国政を担当しているので嫌々ながら表面的に開国を装っている」としていることと同質である。

この長崎丸砲撃事件には、すでに後の薩州商社関係のことが色濃く投影されている。それは、何といても石河確太郎が大きく関与する綿のことである（これについては後に詳述）。長崎丸積載の綿買付集積は、薩摩指宿の巨大廻船問屋「浜崎太平次」（文久3年6月に浜崎家中興の祖8代太平次が大坂で50歳で没した後、長男政太郎が9代太平次として家業を継いだ）が担当していたことは間違いない。長崎丸には9代浜崎太平次（1846弘化2～1865慶応1／本稿巻末に写真掲載）⁽⁶¹⁾が「役人」として上乗りしていて、長崎丸砲撃事件に際しての長崎丸生存者40名の内の一人であったのである⁽⁶²⁾。この時、9代浜崎太平次は、文久3年6月、薩英戦争勃発直前に、大坂支店にて急死した父8代浜崎太平次（1814文化11～1863文久3／浜崎家家業中興の祖、浜崎太平次正房）⁽⁶³⁾を弱冠19歳で継いだばかりであったが、8代太平次の海外貿易を射程に入れた積極果敢な廻船事業の姿勢を正統に受け継ぎ遂行できるものとしての評価は上々であった（本稿注61参照）。この9代太平次の積極果敢な姿勢を示すものとして、宮里源之丞・沢田延音編述『海上王浜崎太平次伝』（昭和12年刊）の次の記述は非常に注目できる。

これは確実なる史料がないので実否如何の断定は下されないが、同年（元治2年慶応元年〈1865〉）五月（実際は3月）に日置郡串木野村羽島より英国に密航した薩摩藩留学生十九名の旅費に窮してゐたことを聞いた太平次（9代太平次）は渡英費として巨金を薩藩に献納したので一時羽島に滞留して居た一行の船は悉く英国に渡航することを得たと伝えられてゐる⁽⁶⁴⁾。

9代太平次の薩摩藩留学生イギリス派遣への資金支援は大いにあり得るものと理解できる。薩摩藩留学生イギリス派遣案とその実施は、五代才助と石河確太郎の共同作業によって遂行された（本稿次号で詳述）。8代太平次と石河の関係、特に綿と紡績業を巡る関係の深さは島津斉彬を交えた、機械綿糸（8代太平次の密貿易によって得たものとされる）伝来伝承が暗示しているが、9代太平次も石河との、綿と紡績業を仲介とした関係を継承していることの一端を、長崎丸砲撃事件が端無くも示すことになった。文久3年初頭

に、石河が中心となって、百間町薩州屋敷が立売堀薩州下屋敷に隣接して新たに開設され本格的に活動開始している。「大阪立売堀薩摩屋敷（下屋敷）の隣に居然たる大店舗あり、薩摩屋と称する浜崎太平次の支店だ」⁽⁶⁵⁾という8代太平次が死の直前までいた大坂支店「薩摩屋」は百間町屋敷とも隣接している。石河は、文久3年、和州（大和国）の綿取引を中心とした大和薩州産物会所開設を強く志向し、また後述するようにイギリスへの綿輸出建白（結果的に長崎丸砲撃事件・加徳丸焼討事件を導くことにもなった）や機械紡績所取建建白をおこなっている。8代太平次、大坂支店支配人肥後孫左衛門、石河確太郎の三者が、薩州産物会所交易構想に関連づけながら綿取引・紡績業について協議している文久3年の大坂立売堀での光景を容易に想定することができる。この光景の延長上に5年後慶応3年に肥後孫左衛門の強力な後見の下に10代太平次が「薩州商社名籍」に「浜崎太平次」と筆頭署名をする光景⁽⁶⁶⁾があるのである。8代太平次亡き後は、ほぼそのまま9代太平次がその立場に置き換わったものと理解できる。9代太平次は、父8代太平次同様、石河の経済・技術改革構想に深く共鳴していることは確実であり、したがって、石河が主体的に関わっている留学生イギリス派遣について、9代太平次が資金援助するのは実に自然なことである。しかも、「氏（9代太平次）の一切を挙げて其念頭を常に支配してゐたのは唯一の家業、その中に於て最も重きを措ひて居た事業は海外貿易（実質的には密貿易）であつた」（本稿注61参照）という9代太平次は、留学生イギリス派遣についてついでのもう一方の主体、五代才助が「五代才助上申書」で力説した上海交易構想（浜崎家家業の得意とする密貿易の一種）にも深く共鳴したはずである。この深く共鳴できる両者が共同で立案・施行している留学生イギリス派遣に9代太平次が積極的に資金援助するのはまるで無理がないことなのである。

薩英戦争勃発直前の8代太平次没後、文久3年、9代太平次は、薩英戦争直後の薩英講和談判の段階から（本稿注39参照）海外輸出用国内綿の買付・集積とその長崎輸送に至るまで一貫して深く関与しているのであるが、大坂立売堀の薩州下屋敷及び石河確太郎らの百間町蔵屋敷と浜崎太平次大坂支店

薩摩屋がその支配人肥後孫左衛門の指揮と9代太平次の総監の下、大坂や堺（大和薩州産物会所交易構想の重要地でもあり慶応3年には薩州商社本館・堺紡績所の開設地となる）海外輸出用国内綿花の買付・集積をおこない、兵庫港から長崎に向けて輸送していたこと（詳細は後述）はあらかじめ確認しておきたい。また8代太平次没後の浜崎太平次家家業の中核は、9代太平次と肥後孫左衛門と8代太平次の次弟浜崎弥兵衛（10代浜崎太平次の父）⁽⁶⁷⁾によって構成されていたこともあらかじめ確認しておきたい。

次いで船越洋之助談に薩芸交易の薩摩側商人として記されている「柿本彦左衛門」である。柿本彦左衛門は、慶応3年の「薩州商社名籍」に、浜崎太平次（10代浜崎太平次）、鹿児島下町年寄格商人・百間町屋敷御用聞魚住源藏、同屋敷御用聞藤安吉次郎（相当の商人と想定できる）とともに名を連ね記すことになる鹿児島年寄格・商人である。柿本は、琉球交易で仕入れた砂糖・菜種を大坂市場で販売し、その販売代金を薩摩藩の輸入軍艦の支払用などに融資するなど、浜崎太平次に劣らぬ程、薩摩藩に大きな影響力を持つ有力商人である⁽⁶⁸⁾。後に薩州商社取建構想にも参加する柿本は、薩英戦争見舞に端を発した、芸州産米穀・繰綿（綿繰り〈綿花の種子を取り除くこと〉した綿）・銅・鉄などを取り扱う薩芸交易にも大きく関わっている（薩芸交易以前の薩長交易の試み〈比義商社取建構想の下地のひとつとなる〉の発端となった長州藩上方交易構想には後に薩州産物会所交易実施の中心的存在となる和州繰綿問屋村島家も関係している）⁽⁶⁹⁾。船越が「広島産物綿其他の物品」と回顧しているように、長崎丸が御手洗島で積載した主要な産物は芸州産繰綿であることは確実である。文久3年～元治元年頃、石河は、薩州産物会所交易構想実施に取り組んでおり、まずは和州産綿の取引を中心とした大和薩州産物会所開設に着手していたので、ほぼ同時期の綿取引もおこなう薩芸交易にも直接・間接関与していたことは、後述するように自然なことであった。なお薩摩藩使者の市来四郎（元治元年5月まだ潜伏中の五代才助へ家老小松帯刀からの上海渡航勧告を伝えたことがある／本稿注31参照）は維新後、この船越洋之助談を収録する『忠義公史料』を編纂することになる。

長崎丸砲撃事件が藩政府どうしの政治的交渉・妥協によって何とか決着へと進捗しつつある時期、事件発生から20日も経つか経たぬうちに、また薩摩藩に関係した廻船がこれまた現地の長州系尊攘派によって焼討されるという事件が、今度は長州藩領上関近辺^{べふ}の別府浦で続いて起こる。その廻船が積載していたのがまたもや綿であった。加徳丸焼討事件である。

この事件は、文久4年(1864)1月12日頃(他に2月初旬、2月2日、2月12日など諸説あり)、防州熊毛郡別府浦(現山口県熊毛郡田布施町別府)で起ったのだが、先の長崎丸砲撃事件に比して遥かに不明な点が多い。この事件については当時から風説を含めて諸説複数あったが、本稿では、一番正確な史料である、小倉在勤の薩摩藩士土持平八^{つちもち}が文久4年2月12日付(事件後約1ヶ月経過)で大久保一蔵(利通)に提出した加徳丸焼討事件について自ら実際に現地に赴き詳細に調査した探索報告書である「小倉在勤土持平八探索届書[綿積船焼討]」(市来四郎編『忠義公史料』に収録)を用いて述べていくことにする。土持平八は、長崎丸砲撃事件についても詳細な現地調査報告書を提出している(本稿注62参照)。土持探索届書が記す加徳丸焼討事件の概要は次の通りである([]内は編者市来四郎の注)。

防州別府浦におひて綿積船焼捨、才領人(宰領人/積荷運送の指揮・監督・護衛を担当)殺害致し候風説等之有り、先達て右開合^{ききあわせ}の為、別府最寄室積^{むろづみ}(現山口県光市室積)へ、罷り渡り、承合申し候処……突留証拠^{つきとめ}も之無く、事実分明致さず候に付、是非実地に踏み入り、存分探索致し……相伺候処、諸浦、殊に浪士共出張り、就中、士分の者、他所より上陸致し候^{そうらわ}ば、則見疑(嫌疑)を掛け、是迄、段々^{そぼ}龐暴^{ぼう}の挙動致し候儀共多々之有る。然るに折柄そ忽に手を付け候ば、故障付く廉^{かど}も之有るべき哉と猶予致し、一旦曳き取り、此表諸国船問屋或は商船共へ相計り、段々品を替へ手を尽し、承合候処、防州別府加徳丸船頭松右衛門御雇入れ相成り、綿千百本、兵庫におひて積み入れ、久見崎船頭大谷仲之進[久見崎船手付のものなり]^{うわのり}上乗にて長崎へ廻船致す賦^{つり}にて、去る十二月廿八日[癸亥(文久3年)十二月]、兵庫より出帆、先月(文久4年)正月十二日別府へ入碇致

し、刻限旁相分らず候得共、同夜、何方は相分らず共、浪人共、五、六人、列にて、鉄棒携へ本船（加徳丸）へ乗付け、直様船の看（甲）板へ揚り、最初、船頭松右衛門召し呼び、「才領人は罷り居り候哉」と名を相尋ね、寝入り候段相答へ、用事之有り、是等へ参るべき旨申し聞かせ、其通り、仲之進儀計らずも看（甲）板へ出張りたる処、其節の申分何様いたし候哉相分らず候得共、両三人にて鉄棒を以て、無体に散々打擲致し、苦痛の声相立て候。物音に驚き、船中共、俄に騒ぎ立て候場合、一兩人、看（甲）板へ下り、水主共は助け置き候に付、銘々自物等取り卸し候様、申し聞かせ候得共、仰天の余り取るものも取り得ず逃げ去り、海面へ飛び入り泳ぎ渡り候者も之有り、分散致す。然る間、仲之進首掻き落し、在り合せの箱へ相包み持ち卸し、死体海中へ突き流し、且又、船頭松右衛門召し搦め、一通りの折檻致し叱り放つ。左候て、碇綱等難ひ、釜屋の燃木取り出し積荷の綿へ差火烧払ふ。然る折、同所浦人共、其船出火と見受け、段々駆付け候者も之有りたる形に候得共、右浪人共の異暴の仕業に恐怖致し、夫なり見捨て置き候半。外に其場立ち障ぎ候者も之無し。然る処、間も無くも浪士共、早船へ乗移り、同夜出帆致す。其後、行方相分らず、右の形行、大庄屋より役筋へ披露遂げ候処、人相書を以て、段々評議之有る。右浪士共語音旁聞合相成る所の者共より申し出候ば、萩家中並び肥後、又は上方風の言葉も之有る。諸国よりの取り集まる者共にては之無き哉（諸国から集まってきた生国不詳の浪人者共の仕業ではないだろうか）と不審相掛け候との風説等之有る。併し、一体暴論に募り候国柄にて、前件人相書等を以て、所僉儀（僉議）之有りととは、諸国響合の為、申し触れ候敷も計り難し。右等の次第弼其筋、実正共、見請け難き様に御座候⁽⁷⁰⁾。

綿積載して兵庫から長崎へ航行しようとする加徳丸（後述する大谷仲之進梟首捨札がそうであるように直接堺から長崎へ航行しようとしたとする説〈本稿注(71)(73)(74)参照〉）もありまたその可能性もあるが今回本稿は土持探索届書での報告に即した）は途中、母港である別府浦に寄港したその夜に事件に遭遇したのであるが、加徳丸焼討事件が先の長崎丸砲撃事件と大きく違い、

薩摩藩が幕府から借用した蒸気船長崎丸について当然ながら薩摩藩全般がかなり明確に認識していたのに対して焼討された加徳丸と薩摩藩の関係については、下関・小倉方面の物産関係についても担当している土持平八にも、大久保一蔵ら薩摩藩要路でさえ多く不明であったこと（焼討事件そのものが不明であったこと）を土持探索届書がよく示している⁽⁷¹⁾。加徳丸の長崎への綿輸送については、薩摩藩でも一部関係者のみが知るところのものであったのである。土持探索届書に即していえば、加徳丸は浜崎太平次（9代浜崎太平次）の雇廻船であった可能性が非常に高い。土持探索届書では、次のように大変注目すべき現地調査報告がなされている。

繰綿六百七拾五本積入れ、防州大島郡小松の住吉丸船主船頭平治、^{うわのり}上乘岩元仁之助。右同（繰綿）千貳百八拾壺本、同所小松の神寶丸船主船頭久吉、上乘川添清六。同（繰綿）千貳本・割昆布四拾俵、同所小松の蛭子丸船主船頭市郎兵衛、上乘渡辺惣太郎。右三艘^{この}〔這三船、皆浜崎太平次が一時雇船なりと云ふ〕、銘々、上乘致し、兵庫より本行積入れ、長崎へ廻船掛け、先月（文久4年正月）何日頃歟共相分らず候得共、在所大島郡小松へ汐繋ぎ致す。前条別府加徳丸松右衛門船、異外の難に逢ひ候儀と承り得共、^{わざ}態と差し扣へ滞船致し候哉、又は船留にても相成り候哉、^{かたがた}隣の次第は相分らず候得共、小松宰番〔宰番は在番ならん〕より右形行、山口城下役筋へ伺越し相成り候処、藩中伊東正九郎・小田源五左衛門・林何某と歟申す者三人、右三艘へ銘々一人づ、警固の為、乗付け、下之関迄送り越し、出帆見届け、其形行、山口へ申し出る旨、役筋より申し渡し候由にて、小松より何日出帆共相分らず候得共、先月二十九日、下之関を同所福浦へ碇泊致し、去る三日、右三艘俱^{とも}異儀無く出帆いたし候段、承り得る。猶又、付役中村喜覚を下之関伊崎付船の、防州小松の間屋坂次郎方へ差し遣はし直に承合候処、右警固の為め乗越し候伊東正九郎外貳人事、右船々出帆慥に見届け置き、直様、陸路より山口の様通行致し候由。……〔此探訪説（土持探索届書）によれば、（加徳丸焼討は）長藩庁の令したるに非らず。全く浪士等の所為なるや明らかなり〕⁽⁷²⁾。

加徳丸焼討事件と同時期に別府浦に近い長州藩領大島郡小松（現山口県大島郡小松町／3年後慶応2年6月の第二次長州征討の戦は幕軍の大島郡砲撃から始まる）の廻船、住吉丸・神寶丸船・蛭子丸の3艘が加徳丸同様、繰綿を積載し兵庫から長崎に航行する途中（これらの廻船も直接堺から出航した可能性もあるがこれも今回本稿では土持探索届書の報告に即した）、母港小松に碇泊していたのである。この3艘について、市来四郎は、「這三船、皆浜崎太平次が一時雇船なりと云ふ」と非常に重要な意味を持つ注を記している。市来の注は、この時の綿搭載・長崎行の住吉丸・神寶丸船・蛭子丸と浜崎の深い関連、浜崎の采配下に住吉丸・神寶丸船・蛭子丸があったことを暗示している。加徳丸については、浜崎太平次所有船という風説さえもあった。

二月初（実際は1月中頃）、鹿児島下町商賈^{しょうこ}浜崎多（太）平次なる者所有の船、大坂より（あるいは兵庫あるいは堺から）帰国の途次、長崎に寄港せんと防州別府港に碇泊せしに、同時警衛兵数名刀槍を携へ乗入り、船頭大谷仲之進を捕縛し、木綿許多搭載せしを外国貿易の爲ならんと認め、大谷なるもの及び水主二名を斬殺し（実際は大谷だけが斬殺）、船は焼盡したり。此船凡千石積位にして、浜崎が自己商用の船なり。当時外国人、日本産の草綿を買うこと多く、従て高直〔大坂時価百斤価四、五両内外なるを、凡十七、八両内外に販売すと〕、茲^{これ}を以て商売争て売買せり。浜崎なるものも大坂（正確には堺・大坂）に於て数万斤を購求し、長崎に廻漕せんとす。然るに長州には、薩州が外人と綿商法なすと誤聞し（実際は誤聞ではない）、彼は諸浪士を馬関其他各港〔長防二国各港を云ふ〕に屯集し、攘夷或は本藩を敵視する際なるが故、斯の如く暴業をなしたる者なり（『忠義公史料』、〔 〕内は市来四郎の注）⁽⁷³⁾。

この風説は浜崎太平次と加徳丸の関連の強さを反映している。加徳丸は浜崎太平次所有船ではないにしても、住吉丸・神寶丸船・蛭子丸同様、この時期、兵庫（あるいは堺）―長崎の輸出綿輸送用に浜崎太平次が別府で雇った廻船であった可能性が高い。土持探索届書では斬殺された才領船頭大谷仲之進は、久見崎船頭ということであった。久見崎（現薩摩川内市久見崎）は、

浜崎太平次の本拠地指宿に近い港である。もし加徳丸が浜崎太平次の雇船だとすると、大谷は浜崎太平次配下で、浜崎太平次代理として上乘した可能性も高くなる。不幸・不運な大谷仲之進についての身分については、土持探索届書での才領人兼船頭（久見崎出身）説の他に、薩摩商人説、薩摩役人（官吏）説などあるが、これは大谷が単なる船頭ではなく浜崎太平次代理・商家番頭としての才領（宰領）権を担当しある種公的役割で上乘できる地位（9代浜崎太平次は「役人」として長崎丸に上乘していた）にあったことを反映したものとして理解できる。

土持探索届書によると、加徳丸が兵庫を出港したのは、文久3年12月28日（長崎丸兵庫出港の1週間後、馬関海峡での長崎丸沈没の5日後）であり、住吉丸・神寶丸船・蛭子丸もおそらくは加徳丸の出港前後に兵庫出港している。土持探索届書によると、加徳丸・住吉丸・神寶丸船・蛭子丸は同じ条件下にありながら、加徳丸だけが「異外（意外）の難に逢ひ候儀」となったものといえるのである（その原因は明確ではないが、事件後、長州藩政府は住吉丸・神寶丸船・蛭子丸に警固役人を付け下関まで護衛しさらにこれら廻船が下関を無事出航するところまで警固役人に見届けさせその旨報告させるという念の入った慎重さで対応している）。土持探索届書は、く加徳丸事件は現場の不明な長州系尊攘激派（全国から集まった尊攘派浪士が疑わしいが）が長州藩中央政府の抑制から外れて暴走したものであると結論付け、当時土持とともに長崎丸砲撃事件について詰問のため下関に赴き、長州藩事情にも精通していた市来四郎も注で「此探訪説によれば、長藩庁の令したるに非らず。全く浪士等の所為なるや明らかなり」としている。長崎丸砲撃事件の釈明・交渉で四苦八苦している最中の長州藩政府がまた加徳丸焼討を命ずるはずがない。しかしながら同時に、「（文久4年正月）十三日、（長州藩政府は）諸士に令して、養蚕の業を務めしむ。蓋し、薩州人多く、綿花を購入し、長崎に於て外国人と貿易するが為め、綿花の価高騰すべきを慮りてなり。其令に曰く、『当節、薩州に於て、綿買^{かいしめ}致し、長崎にて異人へ相渡し候由、相聞候に付、綿直段日々騰貴致し、上下往々、凌寒の道に差問候様、相成るべ

きは必然の事に候条、諸士中下々迄、養蚕の道相開き、予め其手当致し置き候様、仰せ付け候事』(『防長回天史』)⁽⁷⁴⁾というように、く現在、薩州(薩摩藩と限定していない)では繰綿を買い占め長崎にて外国人に売り渡しいるため、綿価格の高騰は必至、綿確保が難しくなり、藩領内全般に防寒に差障りが出てくるので、今から藩内では綿に代る絹を確保するための養蚕奨励手当を出す」と直接的憎悪は出さずに表面的にはさりと布告しているが、藩政府は薩摩藩の綿海外輸出・外国貿易実施に対する領内の反感・憎悪を隠然と促していた。この養蚕奨励令が出た文久4年1月13日は、まさに加徳丸焼討事件発生の翌日或いはほぼ同日であるといつてよい。養蚕奨励令で表明された隠然たる反薩州・反外国貿易への憎悪のガスは、文久4年1月13日以前、長州藩の深層ですでに充満していたといえる(1回目のガス爆発は長崎丸砲撃事件)。結果的に養蚕奨励令は加徳丸焼討事件の予告となった。その意味で加徳丸事件は長崎丸砲撃事件と同様、必然的であった。加徳丸焼討事件は、長崎丸砲撃事件に内包されていた尊攘・反薩摩・討幕へのエネルギーを促進しつつも統制・管理しなければならない長州藩政府と尊攘・反薩摩・討幕へのエネルギーを率直に発露する現地尊攘派の矛盾がより鮮明に現象化したものといえる。

加徳丸焼討事件は不明な点が多いが、本稿の主に焦点とするところは、薩摩藩が関連した綿にある。綿積載の加徳丸・住吉丸・神寶丸船・蛭子丸はいずれも浜崎太平次の指示下にあるものとする、文久3年暮の兵庫港(及び後述するように堺港・大坂港もこれに加わる)には、9代浜崎太平次自らが上乘した蒸気船長崎丸を主流(いわば公式、レギュラー)、瀬戸内航路の要地上関(下関と対をなす)周辺で現地調達した複数の雇廻船(加徳丸・住吉丸・神寶丸船・蛭子丸の他にも該当する廻船もあり得る)と後述するように堺で調達した複数の雇廻船を傍流(いわば非公式、イレギュラー)とする、長崎行の大量綿積載船団が組織され、尊攘派に対する秘匿のためか各船微妙に出港日をずらしながら瀬戸内航路を長崎に向けて運航したことになる(これらの動向について長州系尊攘派の探索網はかなりの精度で掌握している)。

加徳丸焼討事件に関する各風説において顕著に確認できるのは、後述する大谷仲之進梟首捨札でもそうであるように、〈加徳丸が泉州堺表で綿・油など国産物を大量に買入れた〉或いは〈加徳丸は綿・油など大量の国産物を積載して泉州堺からやってきた〉（本稿注(73)参照）ということである。このことについてはほぼ事実を忠実に反映したものである。堺での繰綿を中心とした国産物を集積し、それを川船で大和川（堺）・木津川（大坂）経由で木津川沿いの立売堀（いたちぼり現大阪市西区立売堀）の大坂薩州百間町屋敷・浜崎太平次大坂支店薩摩屋に輸送し⁽⁷⁵⁾兵庫で積載して海上輸送する国産物運送ルートがこの時期すでに確立していたことを示している（堺→兵庫の運送ルートは他にもあるであろうからこの立売堀経由の運送ルートはそのひとつと理解できる）。この場合海上輸送は、兵庫（或いは堺・大坂）から瀬戸内航路経由の長崎行であるので、浜崎太平次は、大島郡小松や熊毛郡別府浦（おそらく室積でも）など瀬戸内航路要地上関近辺の現地所属廻船を多数雇っていたのである（浜崎太平次所有船も含まれていることも十分想定できる）。長崎丸砲撃事件・加徳丸焼討事件を通して明らかになったのは、これより3、4年後に薩州蔵屋敷＝薩州商社本館（本社）開設・堺紡績所建造の地となる泉州堺は、この時期すでに浜崎太平次を加えた薩州産物会所交易構想（後に薩州商社取建構想へと展開していく）と薩摩藩流通の重要拠点となっていることであつた。

土持探索届書が大久保一蔵へ提出されてから2週間後、土持が予想もしていなかったであろう形、しかも凄惨な形で加徳丸焼討事件は、白日のもとに晒されることになる。元治元年（1864）2月26日、大坂の東本願寺難波南堂（現大阪市中央区の現浄土真宗大谷派難波別院）門前に、土持探索届書が「仲之進首搔き落し、在り合せの箱へ相包み持ち卸し」と報告したあの大谷仲之進の首級が石灰・塩漬けにされて捨札（斬奸状）とともに晒され、「中国浪人」と称する水井精一・山本誠一郎（実は脱藩した上関警備の長州藩義勇隊隊士）が屠腹して果てていた。捨札の両面には次の文が記され、両人の辞世も残されていた。これらは〈恐怖の時代〉の呪言をよく表したものに

なっている。

(表面に) 大谷仲之進 右の者事、去冬(文久3年冬)泉州堺より長崎輸送として莫太(大)綿・油其外諸品買込積下し候趣、相聞候に付、此度国防国別府浦(に於て)、嚴重糾明に及び候処、外夷へ交易のため積下し候段、逐一白状に及び、豈計哉、薩藩順聖公(順聖院・故島津斉彬公)以来尊王攘夷の大義を唱へられ、天下の人心奮起致し候程の処、只今に至り、先公の深旨を忘却し、外夷と交易せしめ候段、全諸役人の貪欲無恥の私の奸計にして、上(天子・孝明天皇)は十余年以来日夜、宸襟悩ませられ、断然、仰せ出され候攘夷の聖衷を蔑し、下は諸品払底物価高直(高値)に相成り、人民次第に困窮に相迫りしをも顧みず、内は神州の国力を疲弊せしめ、外は豺狼(貪欲残酷な獣)に等しき夷賊の術中に陥り、神州有限の品を以て、夷賊無厭(飽くことのない)の欲に充んとする。其罪惡天地容さず、神人共に怒り、之に依て其品々(綿など)焼払、船中に居合候奸吏(大谷仲之進)を誅し、世間交易するものを戒しめんが為、此如く梟首せしむ也。二月(元治元年)。(裏面に)我等兩人所存之有り、国許(あえて長州藩としていない)脱走致し居り候処、此度泉州堺莫太(大)の品物買込、交易せしめ候趣相聞に付、欲心(に)誅戮加へ候。全く是より交易するもの共心得改心いたし、恐れ乍ら攘夷の叡慮(天子の御考え)相貫き度、割腹致し候。我等の赤心、天地神明照覧を賜らん事、謹で祈る処なり。中国浪士 水井精一、山本誠一郎。(水井精一の辞世2首)数あらむ名をあくまでも思ふ身の、はかなく消る野辺の朝露。大君の皇座の山の櫻花(上関の皇座山は桜の名所)、八重九重に咲き初めける。(山本誠一郎の辞世1首)雨風に散る共よしや桜花、君の為なら何かいとわん⁽⁷⁶⁾。

水井精一(25歳)・山本誠一郎(32歳)が加徳丸焼討・大谷仲之進殺害実行犯かどうかの詳細は明確になっていないが(現地探索を緻密におこなった土持平八は水井・山本屠腹の経緯に強い疑念とある組織的の作為を感じたはずである)、加徳丸焼討・大谷仲之進殺害は、単なる漠然とした「諸国よりの取り集まる者共」ではなく、後世〈第二奇兵隊〉とも称される、れっきとし

た長州藩上関警備組織の義勇隊隊士らによるものであったことはほぼ確実といえる⁽⁷⁷⁾。彼らが長崎丸砲撃事件善後策・対薩摩藩交渉にも慮って義勇隊隊士ではなく「中国浪人」と称したのは、土持探索届書でも報告された「諸国よりの取り集まる者共にては之無き哉（加徳丸焼討・大谷殺害は諸国から集まってきた生国不詳の浪人者共の仕業ではないだろうか）と不審相掛け候との風説等之有る」という当時流布していた風説に乗じたものでもある。いずれにしても、現場尊攘派の〈憂鬱なる党派〉の組織と長州藩政府の戦略的な組織の狭間に在って押し潰されるように、個人の水井・山本が一切の責任を受け（受けさせられ）自決によって事件を一気に清算しようとしたことは⁽⁷⁸⁾、封建制度での典型的パターンではあるものの、同時に死をもつての薩摩藩の綿輸出を中心とした外国貿易に対する痛烈な批判とそのアピールにもなっている。長崎丸砲撃事件善後策・対薩摩藩交渉のこともあって、捨札（水井・山本自身が記したものであるかどうか定かではない）は表面的には薩摩藩を直接名指したものにはなっていないが、隠然と薩摩藩を批判したものであることは明らかであり、大坂市民はそのことを察している。8月18日政変による長州藩排除の経緯もあり、この捨札騒動は、「上は十余年以來日夜、宸襟悩ませられ、断然、仰せ出され候攘夷の聖衷を蔑し、下は諸品払底物価高直に相成り、人民次第に困窮に相迫りをも顧みず、内は神州の国力を疲弊せしめ、外は豺狼に等しき夷賊の術中に陥り、神州有限の品を以て、夷賊無厭の欲に充んとする。其罪惡天地容さず、神人共に怒り」（長州藩政府による養蚕奨励令での「当節、薩州に於て、綿買メ致し、長崎にて異人へ相渡し候由、相聞候に付、綿直段日々騰貴致し、上下往々、凌寒の道に差間候様、相成るべきは必然の事に候条」との官製的文言が酵母となっている）との怨嗟に満ちた外国貿易への呪言は、大坂市民の〈長州鼯鼠＝薩州バッシング〉の傾向を増幅させる効果は絶大で、残念無念を残して非業に自害した水井・山本の墓や梟首・捨札現場の難波南堂を民衆が、万病治癒のため詣でるとするある種の民間信仰にまで拡大した⁽⁷⁹⁾。

以上の長崎丸砲撃事件と加徳丸焼討事件をまとめる意味でも次に、「綿商

法に就き注意」と警告した、文久4年1月25日（難波南堂の梟首・捨札騒動の1ヶ月前）付大久保一藏宛木場伝内書翰についてみてみたい。

然ば、昨日綿積船堺の順通丸佐兵衛事、いままた兵庫へ罷り在り候処、中国海路（瀬戸内航路）評判承り、長崎行断り申出候由。右の船頭咄に、堺廻船寶徳丸、此方わた（綿）七百本積入居り候処、下の関辺に留船に相成り候噂承り候^{とて}迎、濱崎（太平次）手先の者へ申し遣り候由に御座候。尤綿五千本・茶式千表ほど当分兵庫へ置き候段も浜崎手先申し出、唯今にてはとふも手、相付け申さず候間、蒸気船にても御遣し相成るべきや、是迎も六返位は往来いたし申さず候ては、長崎へ積み居り候儀相叶ず、三嶋（奄美大島・喜界島・徳之島）分わたも千本余御座候処、誠に笑止の事に御座候。御勘考成し下されるべく候。且又此節の一件（長崎丸砲撃事件）当所に於て、色々悪評いたし、さつまには矢張長崎交易いたし、長州には右様の事之^{これ}無く、いつれ長州の御趣意宜い由の評判に御座候由。いつぞや御咄申し上げ候通り、春嶽（前越前藩主松平慶永）公御不評御成遊ばされども、長崎交易を第一疵（「事実」か？）に申し上げ候由に御座候処、又此御方様（島津侯）に引き掛かり候も誠に残念千万に御座候。兎角世上の口には手はかぶせられ申さず候間、もだし居り候外、御座無く候。長州浪士ども乞食体によつれ居り候由に御座候間、ヶ様な風聞（国賊的な長崎交易をおこなっているとする薩摩藩に対する悪評）をいたし、此御方様をけがし奉らむ為、わた積船焼方取り企て候儀ども之有るべく候。先日申し上げ候桂譲助、御国（鹿児島）へ罷り下り候儀も、虚実をうかゞはむ為の間者（長州藩側スパイ）にては之無き哉とも存じられ申し候。先日濱崎手代宗助と申すもの、わた荷卸いたし居り候所へ、帯刀指^{ざし}一人参り候間、若しや長士（長州藩士）にては之無く哉とぞんじ、あなたには何方の御士に御座候哉と尋ね申し候処、「拙者は長州江戸廻の御軍船上乗にて、当月二日、国元出帆いたし候」との返答に付、「貴国（長州藩）にはさつまの蒸気船（長崎丸）御打取成され候由、誠に御座候や」、答「成ほど其通りにて候。誠に気味能き事いたし候。当時（現在）日本国中の侍、長州ほどつよきは

之無く、他国（外国）へ踏み出し候ては不弁利に付、国元に引請け、^{いくさ}軍いたす筈にて候。長州の殿様は御一言仰せ出され候へば、とんと御かはり遊ばされざる御方様にて、下々も別て腰がつよく、何国の国でもまける事は之無く候。三拾万石有無のさかひゆへ、（外国船が）台場先へ向ひしはたちまち打つふす用意にて候。此内は異人と軍の^{いくさ}筈の処、今は日本の^{いくさ}軍（長崎丸砲撃事件）と相成り候」など、上乘位の人柄に御座候故、色々咄もいたし候由に御座候。御承達下されるべく候。右等の世評等表向き申し上げ候ては、嫌疑故障筋も有るべく御座候間、宜き様御取捨下されるべく候⁽⁸⁰⁾。

木場伝内は、大坂留守居役で石河確太郎らの拠点百間町屋敷を含めた大坂薩州蔵屋敷全般の最高責任者であり、石河の上司といえる。したがって、木場は石河ら百間町屋敷や肥後孫左衛門ら浜崎太平次大坂支店薩摩屋の綿を中心とした長崎交易用産物の集荷・運送について総監する立場でもあった。木場はこれより3年後の慶応2年（1866）9月に伊地知壮之丞（貞馨）・税所長蔵（篤）・魚住源蔵・藤安吉治郎（吉次郎）・葉師彦五郎とともに大和薩州産物会所開設（大和交易）再興のため和州を現地視察することになる⁽⁸¹⁾。まず注目すべきはこの木場書翰は、長崎丸砲撃事件発生から1ヶ月後、長州藩政府が桂讓助を薩摩藩へ派遣して謝罪するなど事件善後策のため対薩摩藩・幕府交渉に汲々としている時期のものであり（木場は謝罪・交渉役の桂讓助のことを「虚実をうかゞはむ為の間者にては之無き哉」と見透かしている）、加徳丸焼討事件発生から2週間経過しているのである。この段階で木場はじめ薩摩藩要路は、「長州浪士ども乞食体によつれ居り候由に御座候間、ヶ様な風聞をいたし、此御方様をけがし奉らむ為、わた積船焼方取り企て候儀ども之有るべく候」と木場が危惧した通りの加徳丸焼討・大谷仲之進殺害がすでに起っていたことをまだ知らないでいたことがわかる（木場書翰と同時期に情報収集力の高い勝安芳ですら長崎丸砲撃事件と加徳丸焼討事件が混合された風聞を得ていた位の程である／本稿注73参照）。これより18日後に、小倉詰の土持が本格的に現地調査したものを大久保に報告することになるので

ある。しかし「綿積船堺の順通丸佐兵衛」が、「堺廻船寶徳丸、此方わた七百本積入居り候処、下の関辺に留船に相成り候噂」があるなど長崎行綿積船に関して「中国海路（瀬戸内航路）」の運航安全についての「評判」が悪くなっている理由で長崎運行をキャンセルしていることは、廻船関係者の間ではすでに長州攘夷派による別府浦の加徳丸焼討のことが伝わり始めていたことを示している。堺廻船寶徳丸については、先述した土持探索届書では「堺の寶徳丸船頭源介・同所金榮丸船頭元蔵両船は、大坂より長崎へ直乗致し、去る（2月）三日下之関通船致し候形に相見得候」⁽⁸²⁾と無事であったことを報告している。木場がここで薩摩藩要路に注意を促しているのは、繰綿輸出を中心とした長崎交易実施に対する嫌悪・憎悪の世評が、長崎丸砲撃事件に端を発して「兎角世上の口に手はかぶせられ」ずに薩摩藩の綿輸出・長崎交易実施のことが知られ始め、「さつまには矢張長崎交易いたし、長州には右様の事之無く、いつれ長州の御趣意宜い由の評判」という薩摩藩悪評・長州藩好評に拡大し支配的になっている現状についてである。それでいて木場は、長崎行蒸気船の一層の活用など、綿輸出・長崎交易の積極的実施を抑える意向はまったくないのであるから、「もだし居り候外、御座無く候」ではあるが薩摩藩としては、長州攘夷派が扇動している世評を慮り、綿輸出・長崎交易実施のことは当面表沙汰にならぬよう密かにおこなうしかないとしているのである。この木場らの意図を見事に打ち砕き、薩摩藩悪評・長州藩好評を〈長州鼯鼠＝薩州バッシング〉にまで宗教的熱狂さで拡大させる契機となったのは、1ヶ月後の大坂での長州藩義勇隊隊士屠腹・大谷仲之進梟首捨札騒動であった（木場の困惑振りは想像するに難くない）。

また木場書翰は、この時期の浜崎太平次と薩摩藩の綿輸出・長崎交易及び石河ら百間町屋敷との関係の深さをよりいっそう鮮明に示しているので、次の3点にまとめてみた。

①綿積の堺廻船順通丸佐兵衛は長崎行のキャンセルを浜崎太平次（大坂支店薩摩屋）に届けている。またその旨を薩摩屋は大坂薩州蔵屋敷に報告している。このことと先の土持探索届書の内容から、立売堀の大坂薩州蔵屋敷

（特に百間町屋敷）と浜崎太平次が綿（その一部は薩摩藩領南方三島に送っている）を中心とする長崎交易用国産物関係を担当し、その長崎行廻船は主に堺と瀬戸内航路要地（上関近辺の大島郡小松や熊毛郡別府など）で浜崎太平次が雇っていることがわかる。おそらくは綿積堺廻船の寶徳丸と金榮丸も浜崎太平次の雇船であることは間違いない。また状況によっては、薩摩藩が直接蒸気船を調達する場合もある（薩摩藩所有の蒸気船を使う場合もあるし長崎丸のように他から借用したり雇用する場合もある）。②「尤綿五千本・茶式千表ほど当分兵庫へ囲置き候段も浜崎手先申し出」は、綿を中心とした長崎交易用国産物は主に堺で調達され大坂薩州蔵屋敷（特に百間町屋敷）を経由して兵庫に集積・保管するルートが形成されていることを示している。このことは、文久年間に石河ら百間町屋敷は、和州産綿取引を中心とする大和薩州産物会所開設に取り組んでおりその和州経営の重要地に堺があったことと深く関連している。③長崎交易用国産物の長崎行輸送の港は主要を兵庫港として他に堺港と大坂港がある。

一連の綿繋がりで起った長崎丸砲撃事件・加徳丸焼討事件は、端無くも薩摩藩の国産物売買取引の所在をも示すことになったのである。そうして、長崎丸砲撃事件・加徳丸焼討事件を惹起した薩摩藩の国産物売買取引の根本に在ったのが、後述するように石河確太郎の経済・技術改革構想であったのである。

また、この木場書翰で大変興味深いのは、浜崎太平次大坂支店薩摩屋手代宗助と尊攘派の長州藩士某、いわば焼討を仕掛ける側と仕掛けられる側の互いにしらばくれた会話である（宗助が「わた卸いたし候所」にわざわざきたのであるから、某は宗助が薩賊奸商浜崎太平次の者とおそらく知っていてとぼけている）。宗助が「貴国にはさつまの蒸気船御打取成され候由、誠に御座候や」とこの間の長崎丸砲撃事件について探りを入れて某に尋ねると、某は「成ほど其通りにて候。誠に気味能き事いたし候」とあけすけに意気揚々と答えている。「誠に気味能き事いたし候」とは、長州藩政府の不幸な誤射との外交的謝罪とは裏腹な現場の尊攘派（下関奇兵隊）の率直な声といえる。

さらに、某が「当時（現在）日本国中の侍、長州ほどつよきは之無く、他国（外国）へ踏み出し候ては不弁利に付、国元に引請け、軍いたす筈にて候。……此内は異人と軍の筈の処、今は日本の軍と相成り候」というように、〈現在、日本全体を挙げておこなうべき攘夷戦争を、日本最強の長州藩一藩が引き受けて遂行しているのであって、この度の長崎丸砲撃は、薩摩藩相手の内戦ではあるが、攘夷戦争の一環である〉とする姿勢もまた現場の尊攘派の率直な姿勢といえる。またさらにいえば、「誠に気味能き事いたし候……此内は異人と軍の筈の処、今は日本の軍と相成り候」というのは、この後の加徳丸焼討・大谷仲之進殺害についての、現場の攘夷派（上関義勇隊）の率直な声と姿勢にもなっているのである。

大谷仲之進梟首捨札では、薩摩藩では神格化されあらゆる階層・階級の最高崇拝対象になっている前藩主・故島津斉彬（前年文久3年〈1863〉5月、勅命を得て、鶴丸城南泉院郭内に斉彬を祭神・照國大明神とする照國神社が創建された）の「尊王攘夷の大義」「先公の深旨」を前面に出すことにより、薩摩藩の外国貿易実施を「全諸役人の貪欲無恥の私の奸計」による〈大不忠〉であるとして薩摩藩側を黙らせる筆法をとっている。しかし、薩摩藩の開国策・外国貿易実施こそは、「順聖公」「先公」の「深旨」に基づくものであったし（市来四郎編述『斉彬公御言行録』〈『島津斉彬言行録』、岩波文庫、1944年〉参照）、10年前の対米・英・仏・露・蘭との公式な修好通商条約締結以来、国際条約に則った外国貿易実施の方が実質的には合法なのである（尊攘派からすれば一天万乗の君たる天子の臣下に過ぎない将軍・幕府単独による無勅許〈天子の勅許がない〉形式の修好通商条約自体が無効・非合法となるのであるが）。この時期、確かに外国貿易の内容は、日本側出超であり、文久3年の全国規模の輸出額は輸入額の約2倍（横浜では約2.9倍）、翌年文久4年・元治元年では1.3倍（横浜では約1.6倍）になっていて（本稿巻末掲載図表参照）、国内産物の輸出は増加し、特に最大の輸出品生糸については、貿易居留地横浜への売込み商人たちが競って生糸産地で買い集める結果、生糸の国内価格は高騰する。この生糸騒動ともいえる狂乱現象は、安政

6年(1859)の外国貿易開始直後から起っていて、岡崎福藏(赤峰)『桐生地方史』では、「翌六年(修好通商条約締結の翌年安政6年)六月、以上五ヶ国(米・英・仏・露・蘭)と神奈川、長崎、函館にて貿易するを許し、一漁村横浜は、忽ち繁栄の貿易場と化し、武上信(武州・上州・信州)地方より産出せる生糸は、輸出品の重要位置を占み、糸価^{とみ}頓に暴騰しければ、其影響は、直ちに桐生其他の絹織産地に及ぼし、原料たる生糸暴騰の上に品不足を来し、機業停止の悲境に陥りければ、桐生領各村惣代を選び、次の愁訴をなすに至れり」⁽⁸³⁾とした上で、当時の「愁訴」の史料を多数用いてその状況を生々しく伝える。次にあげるのは、「愁訴」の内でも白眉ともなるもので、上州桐生(有数の生糸生産地にして絹織地帯)領村役人の組頭古木四郎兵衛・名主津久井儀右衛門が、売込商(開港場横浜・外国人居留地に輸出品を売り込む日本商人。修好通商条約による貿易は、役人の立会のない自由貿易であったが、開港場・外国人居留地内でのみ交易をおこなう居留地貿易であった)による海外輸出用生糸の買占め・生糸払拭で地元での絹織業が立ち行かなくなった苦境を遂に、安政6年末に大老井伊直弼・老中間部詮勝^{あきかつ}に禁制の駕籠訴(古木は桜田門外にて井伊に対し、津久井は西御丸下にて間部に対し、それぞれ駕籠訴)を実行した際の訴状の主要箇所である。

塚越大蔵少輔様へ、再応歎願奉り候処、其度々願書御受取りなし遊ばされ、御調中追て御沙汰なされるべき旨、仰せ渡せられ、有難く畏れ奉り差控罷り有り候。然る処、前文申し上げ奉り候通り、糸元品切相成り候に付、既に機^{おり}候世の者共、職業相休み候様成行き、右下職相稼^{はた}ぎ候者共は、日々の助成にて、妻子扶助罷り在り候処、右次第に候間、機屋^{はた}並下職共一同日々の営方差支、是迄は衣類雜具等、追々売払、其日々を漸相凌^{やや}ぎ居り候処、此節に至ては、必死難決^{こぞ}詰め致し、及飢渴候様相成り、悲歎の余り最寄々々へ相^{こぞ}挙り、集評いたし、不穩の趣、追々飛脚を以て、申し越し候に付、素より御由緒地の場所柄(幕府への絹織物上納を伝統的にこなってきた地域柄)に候得ば、何れにも行立^{いきたち}候様、程無く御仁恵の御沙汰なされるべく在る間、村々の者共、万一心得違致し、騒^{おっそ}ぎ立て多人数出府越訴等

致し候様にては、却て御咎仰せ付けられ、歎願の趣意にも相拘り申すべく
 間、村役人共何様^{なによ}にも、情状論方致し取り静め置き候様、数度申し遣し候
 得共、機職業へ携はらざる都て小商等致し候者共迄も、渡世向へ差し響き、
 取り続け兼候趣を以て、人氣立、村役人共、取り静め方、精根尽き果て候
 趣に御座候。元来糸の義は、国々の内にては、其土地柄に寄り、産出致し
 候儀に付、年々の出来方数限りも御座候処、就中桐生領の儀は、近来打ち
 続き養蚕相立て候頃、時候不順にて、不作仕り、**年増直段高直に相成り候**
上、商人共、一時の利潤に存じ迷ひ、上（上州／現群馬県）、武（武州／
現東京都・埼玉県・神奈川県）、野州（現栃木県）へ大勢せり込み、過半
買尽し、当時（現在）直段三増倍に相成り、其上、信（信州／現長野県）、
越（越州／現福井県・富山県・新潟県）、奥州（現福島県・宮城県・岩手
県・青森県）辺へ迄も罷り越し、前同様夥數く高直に買入れ、横浜表へ運
送致し、売渡し候様に付、纔半年も立つか立たざる中に、國中皆品切に相
成り、右体元方織り出し休憩み居り候間、諸織物風庭は勿論存外の高価に
 成り行き追々品切いたし、御用品御差支相成り候義と、恐れ乍ら存じ候。
 依ては外国人へ糸売買の義^{いよいよ}増し相募らせ候ては、二百有余年来、御簀絹
 永く、桑永く共に上納永続罷り在り候御由緒御吉例の地、忽潰れ退陣は、
 眼前の儀と、寝食も厭はず、一同騒ぎ立ち、悲歎罷り在り、此上何様の変
 事出来申すべきも計り難く、片時も安心仕らざる旨、猶国許より申し越し、
 左候（左候はでは）^{そうろうわ}迎、当時御取調中の御沙汰待ち奉らず、御愁願申し上
 げ奉り候ば、重々恐入候得共、^{じつに}実以て人氣不穩、何共歎々敷難渋至極に存
 じ奉り候間、是非無く止むを得ざる事と、恐多くも願みず、御駕籠に縋り、
 御愁願申し上げ奉り候。何卒格別の御慈悲を以て、前頭難渋の始末、聞し
 召し訳なされ、御開港御場所に於て、**商人共生糸並繭共、売買致さざる様、**
御差止成され置き候様、偏に願ひ上げ奉り候。右願の通、御聞済み成し下
 され置き候得ば、村々一同相助かり、難無く相続け相成り、広大の御仁恵
 と誠に以て此上も無く有難き仕合と存じ奉り候⁽⁸⁴⁾。

時の最大の権力者大老井伊・老中間部は、修好通商条約調印（天皇の承認

がないままの幕府単独の無勅許調印)に反対する(外国貿易に反対する)勢力を強力に抑えつける(弾圧する)いわゆる「安政の大獄」を執行している最中であり、この駕籠訴から1ヶ月前には吉田松陰(修好通商条約締結に反対し老中間部詮勝要撃を画策する)が処刑されている(井伊は〈赤鬼〉と恐れられた)。しかも駕籠訴は死罪相当の大罪である。この赤鬼らへの駕籠訴を執行すること憚らぬ程、「糸元品切相成り候に付、既に機候世の者共、職業相休み候様成行き、右下職相稼ぎ候者共は……機屋並下職共一同日々の営方差支、是迄は衣類雑具等、追々売払、其日々を漸相凌ぎ居り候処、此節に至ては、必死難渋詰め致し、及飢渴候様相成り」との、外国貿易に端を発した生糸払拭は桐生の村々に深刻な困窮を引き起こしたのである。桐生の惣代たちによる大老・老中への決死の駕籠訴事件は、売込商たちが上州・武州・野州はいうに及ばず信州・越州・奥州辺りまで生糸買占めに群がり、開港からわずか半年も立つか立たぬかの内に「国中皆品切に相成り」という凄まじい状況に至ったことを如実に反映しているわけである。大谷仲之進泉首捨札にある「外夷と交易せしめ候段……上は十余年以来日夜、宸襟悩ませられ……下は諸品払底物価高直に相成り、人民次第に困窮に相迫りをも顧みず、内は神州の国力を疲弊せしめ、外は豺狼に等しき夷賊の術中に陥り、神州有限の品を以て、夷賊無厭(飽くことのない)の欲に充んとする。其罪惡天地容さず、神人共に怒り」との怨嗟の文言は、「商人共、一時の利潤に存じ迷ひ、上、武、野州へ大勢せり込み、過半買尽し、当時直段三増倍に相成り、其上、信、越、奥州辺へ迄も罷り越し、前同様夥敷く高直に買入れ、横浜表へ運送致し、売渡し候様に付、纔半年も立つか立たざる中に、国中皆品切に相成り」という実情を背景にしているのである。「御開港御場所に於て、商人共生糸並繭共、売買致さざる様、御差止成され置き候様、偏に願ひ上げ奉り候」との外国貿易に対する怨嗟・憎惡を込めた歎願は取りあげられることはなかったが、吉田松陰を強引に処刑した井伊・間部は、惣代古木・津久井に対しては、「願の儀は聞き届けた。国へ帰れよ」⁽⁸⁵⁾と処罰せずに放免した。吉田松陰らの場合のような政治性(討幕論)がない惣代古木・津久井らの外国

貿易に反対する行動に対して、権力者井伊・間部は、献身的「至誠」として取り扱わざるをえなかったともいえるし⁽⁸⁶⁾、またこのことは、福沢諭吉が「徳川幕府ばかりが開国論のやうに見へもすれば聞へもするやうでありますけれども、正味の精神を吟味すれば、天下随一の攘夷藩、西洋嫌ひは、徳川であると云て間違ひはあるますまい。……大老井伊掃部頭は開国論を唱へた人であるとか開国主義であつたとか云ふやうな事を……開国主義なんて大嘘の皮、何が開国論なものか、存じ掛けもない話だ……又この人（井伊掃部頭）が……攘夷論者を捕縛して刑に処したることはあれども、是れは攘夷論を悪む為めではない、浮浪の処士が横議して（吉田松陰は、「草莽」による「処士横議」による「崛起」を最後に提唱した⁽⁸⁷⁾）、徳川幕府の政権を犯すが故に、其罪人を殺したのである。是等の事実を見ても、井伊大老は……開鎖の議論に至ては、真闇な攘夷家と云ふより外は評論はない。唯徳川が開国であると云ふのは、外国交際の衝に当つて居るから、余儀なく渋々開国論に従て居る丈けの話で、一幕捲つて正味の楽屋を見たら大変な攘夷藩だ」と喝破したことの正当性を証しているし、外国貿易（開国）に対する怨嗟・憎悪が社会全般の深層に蓄積していたことを示している。〈長州鼯鼠＝薩州バッシング〉となる広汎な社会的反応は至極当然であった。

しかし、外国貿易開始は「諸品払底物価高騰に相成り、人民次第に困窮に相迫り」という窮状を引き起こしたとする尊攘派の外国貿易中止・廃絶を目的とした政治的プロパガンダに対して、当時江戸に生活していた福沢諭吉は、慶応元年（1865）に『唐人往来』を執筆して（しかし〈恐怖の時代〉にあって刊行せず）、その中で次の通り、痛烈に批判する。

（外国貿易開始によって）扱又諸色高直^{しよしきこうじき}にて諸人難渋と云ふもの多けれども、此も評判許^{ばか}りにて根も葉もなきこと。実は品物の直上りにあらず、金の位の下りたるにて、小判直上の割合にすれば、昔一両は此節三両か四両にて丁度相当、諸色の高直に付ては、日雇賃も高くなり、武家の払米（扶持米）も同様の割合にて、何れも困る訳はなき筈なり。実は交易（外国貿易）始りてより以来、日本国中金銀の融通よく、難渋するもの却て少

なくなりたる其証拠は色々あれども……（奥州では）われもわれもと蚕を仕立、中々奉公などするものはなく、何れも勝手向よくなり、普請をしたり着物を買たり、先年中麦を塩にて食したる者も、当時（現在）は米の飯に肴を喰ふ様になり、就ては米も魚類も高直となり、米を作る百姓も、魚をとる漁者も、大工も、左官も、金廻りよく、一国中世柄直りたる由。右は奥州許りに限らず、日本国中同様の事にて、**絹の出来ぬ国なれば綿を作り、綿の出来ぬ土地なれば油種子を作り**、仮令ひ外国交易に持出さぬ米でも麦でも、日本国中廻り持の融通にて諸色売捌よく、百姓も職人も仕事に迫はるゝ程忙しくなりたり。日本に交易始りて世間一般の潤となりたるを譬へんには、江戸に火事ありて鳶の者の喜ぶと同様の訳なり。平生、鳶の者は屈強の体なれども、火事がなければ仕方もなく、^{どぶさら}溷凌へか道普請などして兎角仕事なき困る処へ、一つ大火事があると、地ならしの、普請のとて、俄に忙しく、金廻りもよくなる故に、不人情の事ながら、朝夕火事のあるを祈るものなり。……外国と交易始りて、世界中に産物を売出すと云ふ場合になりしより、俄に仕事多くなり、^{かせ}弄げば金の取れることにて、我れも我れもと思立ち、火事後に鳶の忙しき様なり。^ま況して交易には、火事もなくて仕事多くなりたるなれば、目出度き事ならずや。**此様子なれば、年々産物も増し、何程外国へ積出すとも、更に差支なかる可し。故に交易は、我国一般繁昌の基と思ひ喜ぶべき事にて少し物心ある人は皆合点せる所なり。**然るに世上一般、諸色高直にて難渋々々と唱るは何故なるやと考ふるに、基本は皆人情の自分勝手より起りたる話に相違なし。**大抵世の中の人は、自分に都合よき事なれば先づ隠すものにて、金があるとて自慢する金持もなく、大儲けをしたと吹聴する町人もなし。何か自分の身に付き不足あれば、少しの事にて頻りに唱触らし仰山に言ひなすは人情の常、**当時（現在）諸色高直と云ふも、矢張り交易の御陰を以て好き事した所はだんまりにして置き、取ても付かぬ（何の関連もない）^{ほか}外の事へ交易を引合に出し、自儘勝手の愚痴を述ぶることゝ思はる。又一つには、諸色高直とはよき言ひ種にもなることあり。物を売るにも、金を借るにも、借金の

催促をするにも、催促の断^{ことわり}を言ふにも、諸色高直に付き^{かよう}個様々と云ひ又奉公人など多く召使ふ家にて、儉約をする言ひ種にもなり、幸も不幸も都合好き言ひ種にて、此節になりては訳けもなく、朝夕の話に諸色高直といふ様に成りたるなり。能々事の本^{もと}を詮議して、根もなきことにて世間の人を迷はさぬやうにするがよし⁽⁸⁸⁾。

福沢は、尊攘派の政治的プロパガンダが立脚している「諸色高直にて諸人難渋」「世上一般、諸色高直にて難渋々と唱る」という世評などは「根も葉もなきこと」として一蹴する。福沢は、二百数十年に及んだ鎖国から外国貿易開始への急激な転換はむしろある種の特別需要のような現象（あくまでも比喩である）を日本国内に引き起こして好景気をもたらしたとする。つまり、賃金や諸物価の上昇によるインフレーションは、好景気の証しとなるものであるとするのである。確かに『唐人往来』が描く状況は、戦後日本復興期における朝鮮戦争が日本国内に引き起こした特需景気の状況（何でも高く売れた）を彷彿させるものがある。それでいて、「諸色高直にて諸人難渋」との暗い悲痛な世相が全面に出ているのは、「大抵世の中の人、自分に都合よき事なれば先づ隠すものにて、金があるとして自慢する金持もなく、大儲けをしたと吹聴する町人もなし。何か自分の身に付き不足あれば、少しの事にて頻りに唱触らし仰山に言ひなすは人情の常」であるからであると福沢は喝破する。まさに炯眼といえる。「諸色高直とはよき言ひ種にもなることあり……諸色高直に付き個様々と云ひ……幸も不幸も都合好き言ひ種にて」の謂に現代人は誰もが思い当たり失笑するはずである。2世紀半続いた鎖国から外国貿易開始への急転換は、国内に経済的な不均衡と大混乱を惹起したことは確かであるが、それはネガティブ（陰）とポジティブ（陽）の両面の意味においてである（これはあらゆる歴史現象についていえることである）。

「諸品払底物価高直」「諸色高直」という現象も、一方では上州桐生の惣代たちによる死をも顧みない捨身の駕籠訴—こうした「マルチドム」殉死・献身 martyrdom による「人民の権義を主張し正理を唱へ」る表明方法こそ福

沢は思想的に高く評価するものである⁽⁸⁹⁾—に表われたような機織業における「必死難決詰め致し、及飢餓候相成り」というネガティブな状況を内包しながら（維新後に『学問のすゝめ』で伝承的義民佐倉宗五郎〈惣五郎〉の將軍直訴を「文明の大義」の観点から高く評価することになる、当時築地鉄砲洲の中津藩邸で蘭学塾を主宰していた福沢は、江戸内の近隣で起った古木四郎兵衛らの大老・老中への駕籠訴事件を大いに注目したことは確実である。

「俗間に伝はる草紙の類」の遙か過去の伝承的な佐倉宗五郎將軍直訴とは違い、安政6年にリアルタイムで実際に起った古木ら村惣代の駕籠訴事件を福沢は『学問のすゝめ』での「マルチドム」に関する既述の際に想起したものと推測できる。それでいて、福沢があえて古木らの駕籠訴事件について言及しなかったのは、開港場での貿易制限・撤廃を訴えるこの駕籠訴の内容が福沢が嫌悪する尊攘派・鎖国主義のプロパガンダの基盤となっているからではなかろうか）、同時にまた一方では「米を作る百姓も、魚を捕る漁者も、大工も、左官も、金廻りよく、一国中世柄直りたる由」という好景気の状態をも内包しているのである。したがって、「諸色高直にて諸人難決」というのもまったく「根も葉もなきこと」では決してない。それでいて、ネガティブな側面だけが増幅・宣伝される（古木らの駕籠訴の場合も権力者に対する愁訴なのであるからそういった側面は当然一層強く持つ）というのは、福沢の見解に従えば、く人はおしなべて、自分にとってポジティブなこと（利益となったこと）については声を大きくせず逆に隠そうとするが、ネガティブなこと（不利益となったこと）については悲痛な顔をしてやたら声を大きくするものである—からであるということになる。幕末開港期に実際に生活していた福沢の柔軟な感性は信じてよい。幕末、外国貿易の開始は、民衆の生活のある部分に大いなる暗さとある部分に大いなる明るさを同時にもたらしたのである。

しかし、注目すべきはことは、福沢は『唐人往来』の執筆を、次の一文にあるように、「文久年間のことゝ」と思い込んでいることである。この一文は、明治30年（1897）頃に、『唐人往来』執筆の契機について、福沢自らが

記したもので、上述の「諸色高直にて諸人難渋」の実態や日本における初期啓蒙主義の有り様についても一層興味深く知ることができるのでその全文を引用してみる。

文久年間のこと、覚ふ。唐人往来とて、余（福沢）が記したる一冊子あり。出版はせざりしなれども、今その草稿の遺るものを取出し見れば、誠に小児の話（幼稚な話）にて、唯可笑しけれども、亦以て三十何年前の事情を想ひ見る可く、又当時余が之を記したる由来に付き一奇談こそあれば、併せて之を語らん、其頃は所謂攘夷論の最中にして、浮浪の徒と称する輩が諸方に乱暴を逞うし、外国人を暗殺する者あり、洋学者を脅迫要撃する者あり、御殿山の公使館（文久2年〈1862〉に長州藩士の高杉晋作・志道聞多・伊藤俊輔・山尾庸三らが焼討した品川のイギリス公使館）を焼き、市中の唐物店（外国貿易商）に乱入する等、実に物凄き世の中なりし。折しも、余が学友神田孝平氏は、江戸に住居して独身の書生なれば、年とりたる婆（ばば）を雇ふて賄（まか）をさせ居たりしに、此婆が律義一遍、堅気の正直者たるに拘はらず、生来の唐人嫌にて「当時外国人のことを通俗一般に唐人と云ふ」、朝夕何事に付けても外国人を憎むこと甚だしく、「小買物して、魚類の価が高し、野菜が高し、米が高し、酒が高し、豆腐の代が同じこと、思へば形を小さくしたり、蕎麦の蒸籠も小形になれば、鰻の井も正味甚だ軽少なり、其くせ紙屑を売れば屑（くず）や（屑屋）は見倒し（捨値に見積もり）、灰を売れば灰買はたゞ（無料で）之（これ）を持って行かんとす、諸色高直諸人難渋、是れも唐人のお蔭なり、其れも唐人の所為なり」とて、喋々しゃべり続けに喧（かまひ）しけれども、主人公の神田は少しも叱らずして却て面白きことに思ひ、よしよし乃公（おれ）の弁舌方便を以て此婆を説諭し呉れん、是式（これしき）の老婆（おいばれ）を説き伏せる位の伎倆なくて、逆も天下に開国論を唱ふことは叶はず、婆の頑固なるこそ幸なれ、先づ之を試みんとて、夫れより主人は殊更らに婆を手なづけ、閑暇の時には種々様々の話を始め、直接に、遠廻はしに、開鎖の利害を説き、或は笑ひ、或は洒落、或は立腹の真似し、或は心配の体を装ふなど、丁寧反復、気長にすること三箇月も半年試みたけれども、婆の剛情

は鉄石の如く、何としても解く可らず、神田も近來は根氣に負けて、聊か閉口の様子なりと、或日のことなり、箕作秋坪氏に面会し、共に時運の非なるを歎息して相分れたる其後にて、余も亦一策を按じ、神田の能弁^{ふるつ}を振て婆を口説くと云へば、自分は筆を以て之を試みん、一本の筆を振り廻はして、江戸中の爺婆^{じいばあ}を開国に口説き落さんには愉快なりと、夫れより匆々^{そうそう}執筆、書き綴りたるは即ち唐人往来なり。之を写して色々の人に与へたる数も随分多かりしなれども、果して巧能ありしやなかりしや固より分らず、往時恍として夢の如し（老子の謂「恍として夢の如し」は晩年の福沢が半世紀以上前の封建時代を遙かに回顧する場合の常套句である）。今旧懷の爲めに其（『唐人往来』）全文を左に記す⁽⁹⁰⁾。

福沢が『唐人往来』執筆時を「文久年間のことゝ」と思い込んでいることは、文久年間、特に、『福翁自伝』で「文久三年癸亥の歳は一番喧しい歳で、日本では攘夷をすると云ひ……」「兎に角に癸亥（文久3年）の前後と云ふものは、世の中は唯無闇に武張るばかり」と述べているように、亥年建白事件のことも重なり文久3年が福沢の内部に異常な印象で深く強く在り続けたことの左証ともなっている。上の一文でも福沢得意な軽快なテンポの諧謔的文体で述べられているから、その印象が薄れがちになりそうだが、『唐人往来』は、「唯用心して、夜分は決して外に出ず、凡そ文久年間から明治五、六年まで十三、四年の間と云ふものは、夜分外出したことがない。其間の仕事は何だと云ふと、唯著書翻訳にのみ屈託して歳月を送つて居りました」という鬱屈・屈託した〈恐怖の時代〉に記された「著書」のひとつなのであり、それは慶応元年に執筆されたが、「攘夷論の最中」文久3年を頂点とする文久年間の〈恐怖〉のイメージを基に執筆されたものなのである。また、この一文から、『唐人往来』は、民衆を対象にした、尊攘派・鎖国派のプロパガンダに対抗する開国派の啓蒙的なある種プロパガンダとして執筆されたものであることがわかるが、当代の俊英の洋学者神田孝平（1830文政13～1898明治31／幕府蕃書調所・洋書調所・開成所で数学担当、維新後は福沢・箕作秋坪らと啓蒙思想団体明六社を結成、新政府官僚として兵庫県令・元老院議

官・高等法院陪席裁判官など歴任、貴族院議員・男爵)でさえ、「律義一遍、堅気の正直者」であり「生来の唐人嫌」の賄い老婆一人の「諸色高直諸人難渋、是れも唐人のお蔭なり、其れも唐人の所為なりとて」とする妄説・俗説を折伏できないくらい、当時の攘夷・鎖国主義は深く民衆の生活に根差した堅固なものであったことがわかる。福沢・神田・箕作ら青年達の「小児の話」のような皮相的な啓蒙主義は「時運の非なるを歎息」する他なかったのである。「律義一遍、堅気の正直者」である「江戸中の爺婆」とは民衆一般を象徴している。賄い老婆に対して若い洋学者が「弁舌方便」や「一筆」を振り回すことだけで何とか「説論」しようと試みるというのは明治期啓蒙主義の姿勢を象徴的によく表している。『唐人往来』の啓蒙的文体は、後の『学問のすゝめ』の基となるものであり、「薩州商社発端」で、個人事業としての伝統的商業方法に拘泥している日本の町民・農民層に対して、会社制度の本質である合本 joint・stock について、「資財多かざれば、他を制することを得ざるは、必然の勢にして、其資財の多きは、力を合せざれば得ざるなり。古き譬に絲一縷ずつ牽けば、力を用ひずして断れ、これを幾十縷も合せて牽けば、強力も断ること能はずとは、誠に此事なり」⁽⁹¹⁾と説く、啓蒙的文体と通底するものがある⁽⁹²⁾。維新後、福沢の跡を追うように、奥平壱岐も「中金正衡」の名で、『世界風俗往来』(明治5年/東京経済大学図書館所蔵三橋文庫)、『通俗西洋政治談』(明治6年/同)など啓蒙書を刊行しているがこのことについては後に詳述したい。

同時期に、「(天子の)攘夷の聖衷を蔑し……諸品払底物価高直に相成り、人民次第に困窮に相迫り……神州の国力を疲弊せしめ」た外国貿易を呪詛し「世間交易(外国貿易)するものを戒しめんが為」と屠腹した水井精一・山本誠一郎の死にざまは、「切腹の人は古今未曾有の大忠臣」とばかりに「残念さん」信仰の契機となる程、「律義一遍、堅気の正直者」や「爺婆」などその「剛情は鉄石の如く、何としても解く可らず」と福沢ら新知識の青年達をすっかり「閉口」させ「開国に口説き落」すことができなかった民衆の生活内面のある琴線にひと度触れて、その熱烈な信仰を惹き起させているのであ

る（本稿注⁷⁹参照）。「一本の筆を振り廻はして、江戸中の爺婆を開国に口説き落さんには愉快なり」と諧謔的に述べているものの、輸入知識のみの啓蒙主義より遥かに深く民衆の生活に根を下ろした攘夷・鎖国主義の堅固さ・手強さと手酷く直面し、「唯一身を慎んで、ドウでも^{のが}追れさえすれば宜いと云ふことに心掛けて居ました」「自分一人では勿論何事も出来ず、亦その勇氣もない、実に情けない事であるが……」と自身の無力・非力を露呈せざるをえなかったのは福沢たち新知識の青年達の方であったことは明らかであった（この新知識・啓蒙主義は「残念さん」信仰のような民衆の生活に根差したものの意味・根拠について、無知蒙昧以外に深く掘り下げることは終になかった）。

いずれにしても、「諸色高直とはよき言ひ種にもなることあり」というように、当時「諸色高直」は、絶大な説得力を持つことにより、様々な方便に使われたことは確かであり、大谷仲之進臬首・捨札の「其罪天地容さず、神人共に怒り」などとの尊攘派の政治的プロパガンダも、「諸色高直にて諸人難済」を討幕・鎖国復帰（外国貿易廃止）運動や、外国貿易を実施している薩摩藩批判の方便にしたのである。しかし、尊攘派の薩摩藩批判・攻撃の的はかなり精確に絞りに込んでいる。まさしくこの時期、薩摩藩は積極的に計画的組織的に国内綿海外輸出をおこなっていた。しかし、この国内綿海外輸出は、同じくこの時期、薩摩藩が取り組んでいた綿を中心にした総合的体系的な経済・技術改革構想の一環に過ぎなかった。このことは、尊攘派の想像を遥かに超えるものであった。国内綿海外輸出も綿を中心にした総合的体系的な経済・技術改革構想も薩摩藩諸色方見聞役（交易方掛）・蔵方目附・銃兼水車掛・集成館掛・織屋掛石河確太郎が立案・担当したものであった。

石河が文久3年11月に機械紡績所取建を建白した主動機のひとつは、輸出がもたらす国内市況の変化に対応した、国内での他に先駆けた機械紡績導入によるある種の超過利潤的なもの（もちろん現代資本主義社会の超過利潤そのものではなく、あくまでも超過利潤の喩であるので「超過利潤的」とした）の獲得があった⁹³。次にその全文をあげる文久3年11月1日付（長崎丸

砲撃事件の3週間前である)の機械紡績所取建建白書(見本の綿・綿糸と蒸汽機関・紡績諸機械による紡績工程の仕組及び取扱の説明書籍を添えた)は、日本初の機械紡績導入の建白であり、後世、石河を「本邦紡績業の開祖」⁽⁹⁴⁾と称する由来となるものである(この石河建白書から日本初機械紡績所・鹿児島紡績所や堺紡績所の建造・開業への展開が始まるのである)。

木綿布は貴賤共日用欠くべからざる者に御座候処、当時(現在)絹布高料に相成り、且諸国共綿布の用度、前に倍々仕り、従て、価益沸騰、付ては、産出も亦倍々相殖候得共、未だ出す所用ふる所に足らざる趣に御座候。但し、一人紡ぐ所の糸、一日四十匁に過ぎず、織る所の布、一日二端(反)余に相及び、大約八人の紡ぐ所、僅に一人の織る所に給し候算にて、紡績平均仕らず候。此故に候哉、当時(現在)総弥高料に相成り、上方辺百姓も耕作を止め、男女共糸稼仕り候様相成り候。就ては、総を沢山御産出之有り候事、当時(現在)の要務、御経済の第一と存じ奉り候。西洋にては紡織縫共器械を以て仕り候儀に之有り。今、縫は扱置き、紡織の器械相開け候てより大小人工を省き候こと、十五座の機、僅に一人の嬰童監して足れりと申す説を以て察せられ、又産出の莫大なることは亜米利加にて英吉利の紡織局へ綿仕送を以て渡世仕り候者、二百万戸之有り候一事を以て察せられ候哉。凡地球の出す所の産物にては綿最大なる者(物)と申し候も右の器械相開け候てよりの事に候。人智相開け候世に在て織々たる一縷絲の為に五尺の幹体を勞すること実に物理に相適候儀にも御座有る間敷哉(一条の為に五尺の体を勞することは実に物理にかなうものであつてはならない)。就ては、願ひ上げ奉り候儀は、右紡織の器械、御交易の御利潤を以て追々御交易方へ御取入れに相成り候様、仰せ付けられ、差当の処は別段御金御下し成し下され、先づ御試として一日に総百斤づ、紡ぎ候器械一具御取入れ成し下され度存じ奉り候。尤、別紙の趣を以て当時(現在)長崎(長崎)に罷り在り候蘭人へ御注文に相成り候得ば、間違筋之無く、且差急候得ば、八ヶ月より十ヶ月の間には持ち渡し申すべく候。価は運賃を外に仕り、凡銀錢三千枚計我国の金にして凡千五百両計に御座候。

此^{ぐらい}価金位^{ぐらい}の事は右器械^{ぐらい}を以て紡ぎ候^{ぐらい}総を、譬へば琉球へ遣はし、綿^{しま}（綿織物）に織^{おり}調^{ととのえ}させ、大坂へ差^さ登^{しのぼせ}候御利潤^{もちわたり}の分を以てにても速^{すみやか}に相補^{おぎなわ}れ申すべく候。左候て、右器械持渡候^{もちわたり}上は、交易方より其場処々々にて実綿直買下し仕り、糸に紡ぎ候^{もちわたり}上、御国用分^{ととのい}の外、夫々^{それぞれ}機場^{のほせ}へ仕り登^{ひとかど}候はゞ、一廉^{ひき}の御経済御国華に相成り、追々器械相整候^{ととのい}上は、日本中の綿も御国へ引候様、相成り申すべく候。右器械にては紡方に付き、人工を省き候ことは勿論^{くり}、繰^う候手数^う打候手数^う全く除け候に付き、綿の繰賃・打賃も全く相省け、^{かたがた}旁^{かたがた}以て（どの点からみても）御迷惑筋に相成り候儀は決て御座無し。是等并器械取扱^{おそれながら}の儀は、乍恐^{うけ}、私御請^{うけ}申し上げ奉るべく候。当時（現在）、大坂辺にても右器械の趣を伝聞仕り、涎を流し候者多く之有り候得共、總て商人の儀に候得ば、器械学に通じ候者も之無く、未だ果敢々々敷、買入れ候者之無く候得共、五、六年の内には相開け申すべし。是非、其内に此御方（薩摩藩・島津侯）より大御経済御座有^{たく}り度存じ奉り候以上。（追伸）紡器壹具但、見本通りの綿を以て、見本通の糸を一日に百斤づゝ紡ぐ仕掛^{うちなおし}の者（物）、ぼかし道具（綿を打ちほぐし柔らかくふっくらさせる綿打直道具）、^{わく}簀（糸巻道具）に掛くる道具、其外右に（機械紡績に）相拘り候道具、蒸気機関總べて相具。右器械取仕立并取扱^{そなう}の事を詳に記したる書籍^{そえる}相添⁽⁹⁵⁾

これは、機械紡績導入（生産・技術）の建白書であるが、その冒頭は「木綿布は貴賤共日用欠くべからざる者に御座候処、当時（現在）絹布高料に相成り、且諸国共綿布の用度、前に倍々仕り、従て、価益沸騰、付ては、産出も亦倍々相殖候得共、未だ出す所用ふる所に足らざる趣に御座候」と流通の問題、^{マーケティング・リサーチ}市場調査から始まる。石河は、輸出の影響による生糸高騰→絹織物高騰→絹織物の代替として綿布の高価格化→綿布の原料である綿糸の高価格化、との市況分析から、綿布生産が倍增する綿布消費に追いつかない根本原因は、「一人紡ぐ所の糸、一日四十匁に過ぎず、織る所の布、一日二端（反）余に相及び、大約八人の紡ぐ所、僅に一人の織る所に給し候算にて、紡織平均仕らず候」と、綿布の原料である綿糸（紡績工程）の生産が綿布生

産（織布工程）に追い付かないことにあとと認識する。つまり、石河は、「当時（現在）総弥高料に相成り、上方辺百姓も耕作を止め、男女共糸稼仕り候様相成り候」（福沢『唐人往来』が「絹の出来ぬ国なれば綿を作り、綿の出来ぬ土地なれば油種子を作り」とする状況である）と述べるがごとく、国内では現在、〈綿糸飢餓〉の様相を呈する市況になっていると認識するのである。これは、160年前、1600年代から1700年代にかけて、イギリス東インド会社がアジア交易でインドから輸入するキャラコ〈インド産綿織物〉のイギリス国内での爆発的な人気〈キャラコブーム〉を契機にしたイギリスの綿布国産化の胎動・拡大は、飛び杼の発明などで綿織物生産力を倍増させたが、綿糸生産は従来の手動繰糸のままであったので、綿糸供給量が綿織物量に追いつかず大幅に不足して（「紡績平均仕らず」である）、〈綿糸飢餓〉現象となったことの系統発生が160年後の極東アジアで個体発生したものともいえる。イギリスではこの〈綿糸飢餓〉が紡績工程の機械化、ジェニー紡績機（多軸紡績機）・水力紡績機・ミュール紡績機・スロックスル紡績機（水力紡績機改良型）など紡績機械発明・工夫への志向を誘導するものとなり、さらにこれが歴史上初の産業革命（1700年代中頃～1800年代中頃）の中軸となって、ワット式蒸気機関動力のミュール紡績機械工場を経営する紡績資本を中心とする、歴史上初の資本制社会・資本主義体制（商品経済・市場経済体制）確立・機械綿糸輸出へと進展していったように、幕末の〈綿糸飢餓〉は機械紡績導入（蒸気機関・ミュール紡績機及びスロックスル紡績機などの輸入）を誘導し維新後明治20年代（1890年代）の紡績資本（戦前日本資本主義の中核産業）確立（日本資本主義確立）へ、さらに機械綿糸輸出へ、またさらに紡績資本輸出へ、と進展していく展望を示していた。

また同時に、洋学者石河は、「凡地球の出す所の産物にては綿最大なる者（物）と申し候も右の器械相開け候てよりの事に候」というように、半世紀も前に完遂されているイギリス産業革命以降、世界に先駆けて紡績資本（産業）を中心とする資本主義体制を確立したイギリスが世界最強の勢力となっていること、イギリスの経済的威力の基盤は、実は「織々たる一縷絲」を扱

う軽工業、紡績産業であること、そのイギリス紡績資本は「(紡績産業の)産出の莫大なることは^{アメリカ}亜米利加にて^{イギリス}英吉利の紡織局へ綿仕送を以て渡世仕り候者、二百万戸之有り候一事を以て察せられ候哉」というように、〈黒船ショック〉で日本を震撼・畏怖せしめたあの巨大なアメリカをもその原料綿花供給地に位置付けて(体系化して)いることも、深く認識していた(本稿次号で述べるように翌年元治元年の石河の薩摩藩留学生派遣案では、五代才助の英仏両国留学案とは違い、留学先をイギリス一国に絞ったのは当然であり、イギリスにおいて、紡織機械注文・イギリス人技師雇用招聘契約をおこなうことは、留学生団派遣の主目的のひとつでもあった)。石河にとって、後の会社制度導入(薩州商社取建)の場合と同様、即刻の機械紡績導入はどの点からしても必然的であった。

紡織工程での機械導入(機械工場取建)では、織布工程よりもまずは紡績工程において優先するという石河の建白書での主張の根拠は、先にみた、桐生領惣代の大老・老中への駕籠訴事件の例が如実に表している〈綿糸飢餓〉がもたらした〈綿糸飢餓〉の状況を背景にしている。それで石河は、綿糸が生産する先から高価格で売り切れる〈綿糸飢餓〉の市況にあって、国内で他に先駆けて薩摩藩が紡績機械(ミュール紡績機・スロックスル紡績機)を導入(輸入)して、機械綿糸生産販売することを建白するわけである。国内ではいまだ糸繰車で紡ぐ伝統的手紡績が支配的であるが、それでさえ、〈綿糸飢餓〉にあっては、綿糸は高価に販売されている。こうした状況において、もし薩摩藩が紡績機械を導入して綿糸生産をおこない、手紡績綿糸の場合とは隔絶した綿糸(機械綿糸)の大量生産をおこなえばどうなるか。手紡績綿糸が支配的な段階にあっては、大量生産された機械綿糸の市場価格は、一物一価の法則によって、手紡績綿糸価格と同価となる。つまり1単位あたりコストが大量生産によって著しく低下していながら(規模の利益を実現していながら)機械綿糸の価格は、さらに手紡績綿糸価格と同等に高価に販売されるのである(超過利潤的)。これは、薩摩藩に膨大な利潤、「大御経済」(超過利潤的獲得)をもたらす。ただし、超過利潤概念では、新生産方法が社会的

に一般化していない（普及していない）期間（旧生産方法が支配的である期間）のみ可能であり、超過利潤は、新生産方法が社会的に普及した段階で消滅する。封建社会末期に生きる石河はもちろん超過利潤概念は知らなかったが、その近似の内容を実感・経験として十分理解し得ていた。石河は建白書を「当時（現在）、大坂辺にても右器械の趣を伝聞仕り、涎を流し候者多く之有り候得共、總て商人の儀に候得ば、器械学に通じ候者も之無く、未だ果敢々々敷、買入候者之無く候得共、五、六年の内には相開け申すべし。是非、其内に此御方より大御経済御座有り度存じ奉り候」と結んでいる。石河は、超過利潤の獲得の期間、機械紡績が普及するまでの期間を5・6年間と予測している（まさにこれより5・6年経過して〈明治初期〉機械紡績は普及し始めるというのがその後の事實的展開となったが、石河の大枠な予想通り、維新後、機械紡績は日本資本主義確立の指標となるべく国内普及を超え、明治20年代には機械紡績業はイギリスと競合できる程の輸出産業にまで成長していくことになる）。

いずれにしても超過利潤の獲得にとって肝要なのは、旧生産方法が支配的な期間に他に先駆けて新生産方法を導入することであった。石河のこの超過利潤的獲得の姿勢は機械紡績のような生産過程だけのことなく、薩州産物会所さらには薩州商社のような流通過程に関しても同様であった。生産過程と流通過程の改革を総合化することによって両改革は実現可能であるしまた改革の相乗効果が生じるわけである。実際、石河は「右紡織の器械、御交易の御利潤を以て追々御交易方へ御取入に相成り候様、仰せ付けられ」と将来的には機械紡績所運営を交易方がおこなうとしている。後述するように同年文久3年9月に薩州産物会所交易実施の建白をおこなっている。薩州産物会所交易の革新的試みは交易方にて取り組まれているのであるから、機械紡績所は、将来的には全国各要地での薩州産物会所開設による全国的流通ネットワークに組み込むこと（薩州産物会所の全国的流通ネットワークによって、より有利に原綿を綿作地帯〈和州など〉から購入し、生産した機械綿糸は全国の機織地帯〈和州は機織地帯でもある〉に有利に販売したり薩摩藩支配下

の琉球・奄美諸島などの機織に供給し、より有利に買上げた綿織物は大坂市場などで販売する）を前提にしている。さらにこのことは後の薩州商社が堺紡績所運営をおこなうとする構想の原基となっている。したがって、従来にない革新的な産物会所（薩州産物会所）の開設も会社制度の導入（薩州商社取建）も、他に先駆けておこなうことが肝要なのであった。このような生産過程・流通過程の総合的な革新的試みは、シュムペーターの提唱した「新結合 *neue Kombination*」の概念（シュムペーター『経済発展の理論』上、塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳、岩波文庫、1977年、182～185頁、参照／新財貨〈この場合は機械綿糸〉発掘、新生産方法〈この場合は機械紡績生産〉、新商業的取扱方法〈この場合は薩州産物会所交易方式や薩州商社のような会社制度〉、新組織実現〈この場合は薩州産物会所開設や薩州商社取建〉など）に比喻できる程の様相を呈していく。しかし、くなぜ薩摩藩は今、超過利潤的なものの獲得を必要とするのか？〉、くなぜ今、超過利潤的なものの獲得は薩摩藩によらなければならないのか？〉。石河は以下のように理解している。超過利潤的な獲得は、薩摩藩一藩の利害を目的としたものではなく、内外の未曾有の危機的状況にあって、日本の開国に基づく近代化は必至でありしかも緊急に取り組むべき課題である。しかし幕府にそれを十全に取り組む力量・組織性・人材が失われている以上、現在において、幕府に次ぐ国内勢力の薩摩藩、その力量・組織性（家老小松帯刀のような優れたオルガナイザーが藩組織全体を統括していた）・人材（当時の薩摩藩は蘭学者石河確太郎や英学者本間郡兵衛のような先進的な洋学的知識・技術を持つ人材を様々な他藩領から多数招聘してある種の異能集団を形成していた）の点において唯一比肩できる薩摩藩が取り組むしかない。しかしまた、財政逼迫下にある薩摩藩一藩だけで近代化を導入するというのは、たとえば海外留学生派遣ひとつとってもまことに容易ではない⁽⁹⁶⁾。それらの莫大な費用は、通常の利潤獲得ではとても賄い切れるものではない。超過利潤的獲得を指向する最終目的は、日本近代化へと繋げるべく、極めて短期間にかつ極めて効率よく、薩摩藩近代化の費用を確保することにあり、また薩摩藩がこのことを指向して

いく過程で国内の他の諸勢力（日本全体）も薩摩藩に牽引されるように近代化を指向していくように誘導することにある。

以上のごとく、石河は、経済・技術の新しき試みについては、薩摩藩が他に先駆ける必要性があると理解している。このことは五代才助の経済・技術改革構想についての場合も同様であった⁽⁹⁷⁾。こうした石河や五代の改革志向の理念など、尊攘派には理解のまったくの外にあり、天誅を下すべき「貪欲無知の私の奸計」に過ぎない。さらに、石河らは、5年後の慶応3年の「薩州商社発端」において、「夫我が^{それ} 神国たるは……幾千年来、力を他に藉^からず欠を外に補はず、特立（独立）して神威^{かがや}を耀^{しか}せしなり。然るに近来民用年を追て乏しく、価も亦従て沸騰し、庶民殆困迫、或は其業を廢するに至る。其由て来る所^{たず}を原ぬるに……洋国貿易に由るなり。……実に当今の形勢にては、我が日本の膏血、漸く洋国に吸われ、遂に枯倒（枯涸）するより外これ^{ある}有まじく、是吾輩の 皇国の為に、深く憂ふる所なり。然れども是洋人奸猾（悪賢さ）の為す所に非ず。我未だ事に習れず（習わず）、処置の宜しきを得ざるに由るなり。又従来 国許の洋国貿易を非とするにあらず（民衆の生活困窮や物価高騰に関して薩摩藩が従来おこなってきた洋国貿易に対して非難することはまったく見当違いである）。彼（西洋人）亦日本須用（須要）の品^{もたら}を齎^{もたら}し来ること少からず。我亦彼に貿易して、彼より利を収めざれば、真の富国経済と謂ふべからず。……今、世態（世界の有様）の変遷に従はず、其処置を為し、其法を立てず、怙然^{ちやうぜん}として（危機感なく依然として）従来の如くなれば、我が民用を我が手より融通広済することを得ず。我が皇国真の富国経済の立たざるのみならず、終^{つい}に我が膏血を彼に吸ひ尽くされ、生民を苦しむるに至らん。……今、彼（西洋）の公班衛^{コンベニー}は、小をして大ならしめ、弱をして強ならしめ、事簡（瑣）にして業大なるものにて、実に無二の良法（方法）なり。法を取るに我彼に拘らず、彼が悪しき^{にく}を惡みて、其法の良きを棄てず、即ち法を取るの宜しきなり。因て今、吾、公班衛^{コンベニー}の法に原づき、公に稟して、其館を泉州堺に建て、薩州商社と称す。夫れ 皇国を利するの事に至りては、特我が薩の専任^{ひとりに}たるに非ず。然れども亦これを他視す

ることを得ず。其法の立たん事を冀^{いむが}ふこと、年久し。然れども未だこれを立つる者あらず。而して事勢日に愈々迫る。因て今、意を決して、我が薩より其始を開く」⁽⁹⁸⁾とする、外国貿易を前提とした公班衛取建（会社制度導入）宣言を、「外夷と交易せしめ候段、全諸役人の貪欲無恥^{わたくし}の私の奸計にして、上（天子）は十余年以来日夜、宸襟悩ませられ、断然、仰せ出され候攘夷の聖衷を蔑し、下は諸品払底物価高直に相成り、人民次第に困窮に相迫りしをも顧みず、内は神州の国力を疲弊せしめ、外は豺狼に等しき夷賊の術中に陥り、神州有限の品を以て、夷賊無厭の欲に充んとする。其罪惡天地容さず、神人共に怒り……」のような尊攘派の世界観に対する明確なアンチ・テーゼとして表明していくのである。外国貿易が「神国」「神州」の国内経済を圧迫しているというナショナリズムに基づく現状認識は、石河らも尊攘派も共通であるが、〈外国貿易と真っ向から取り組み切れる方法を確認しない限り「我が 皇国真の富国経済」は確立しない〉とする石河らの開国主義と〈救国のためには、国内に圧迫をもたらす外国貿易は廃絶するのみである〉とする尊攘派の鎖国主義の対立構造は際立っている（この対立の構造は現在でも本質的には変らない）。そうして、〈恐怖の時代〉にあって、尊攘派から発せられる〈恐怖〉によって、確実に石河ら洋学者たちは論理的に鍛えられ、「実に無二の良法」である会社制度の導入へと導かれていくのである。

石河らに会社制度導入実施へと最終的に踏み込ませた要因は、日本側の大幅な貿易赤字への転化が惹起した甚大な危機感である。「薩州商社発端」「薩州商社条書」が表明された慶応3年には、日本側の全国の輸入総額は、輸出総額の約1.8倍、2倍近く（横浜では約1.5倍）までなっている（本稿巻末掲載図表参照）。貿易開始直後の安政6年（1859）は日本側の全国の輸出総額は輸入総額の約1.5倍（横浜では約2.7倍）の出超、貿易黒字であったが、9年後の慶応3年の日本側の全国の輸出総額と輸入総額が、安政6年に比して、前者が約13.6倍（横浜では約24.3倍）、後者が約35.9倍（横浜では約99.4倍）となり（本稿巻末掲載図表参照）、国内物価上昇率を度外視しても、貿易全体が文字通り桁違いに拡大している上での日本側の2倍近い入超・貿易赤字

なのである。貿易開始からの10年間に於いて、外国貿易が安定化・本格化し拡大するに従って（外国側が対日貿易に本格的に取り組むに従って）、次第に日本側の出超と入超の差は縮まっていき、慶応3年には遂に大幅な入超・貿易赤字に転化したのである。こうした深刻化する貿易赤字問題を背景に、石河らは、く日本が旧態依然の商業方法のまま、本格化する外国貿易に臨んでは、とても外国側（西洋側）にはかなわない。しからば、外国（西洋）と対等に貿易をおこなうようになるためにはどうするか。外国（西洋）で最適な方法として普及している会社制度を日本も早急に採用して貿易をする他はないと決意する。「薩州商社発端」での「今、彼（西洋）の公班衛^{コンペニー}は、小をして大ならしめ、弱をして強ならしめ、事簡にして業大なるものにて、実に無二の良法なり。法を取るに我彼に拘らず、彼が悪しき^{にく}を悪みて、其法の良きを棄てず、即ち法を取るの宜しきなり。因て今、吾、公班衛^{コンペニー}の法に原^{もと}づき、公に稟して、其館を泉州堺に建て、薩州商社と称す」との薩州商社取建宣言にはそのことがよく反映されている。

また同時に、先述したように、石河の機械紡績所取建建白の背景には、機械紡績に関する深い認識があった。石河が後世、「本邦紡績業の開祖」と称される所以であった。建白書で石河が「西洋にては紡織縫共器械を以て仕り候儀に之有り。今、縫は扱置き、紡織の器械相開候てより大小人工を省き候こと、十五座の機、僅に一人の嬰童監して足れりと申す説を以て察せられ、又産出の莫大なることは^{アメリカ}にて^{イギリス}の紡織局へ綿仕送を以て渡世仕り候者、二百万戸之有り候一事を以て察せられ候哉。凡地球の出す所の産物にては綿最大なる者（物）と申し候も右の器械相開け候てよりの事に候」と述べているように、当時の世界の指導権はイギリスが掌握しており（あの巨大なアメリカさえイギリス紡績産業への原綿〈紡績の原料綿花〉供給地に位置づけられている）、イギリスの基幹産業は機械紡績産業であること、従って当時の世界を牽引する最大の産業は機械紡績業であること、その波動はヨーロッパを覆いさらにすでにアジアにまで及んでいることを石河がかなりの精度で認識していたのである。したがって、石河は、綿花は熱帯性或いは

亜熱帯性植物であるからイギリスでは産出不可能であり、イギリスは原綿を主にインドやアメリカ南部から輸入するしかないことなど、イギリス紡績産業における原綿確保の重要性もよく理解していた。さらに石河は、この時期、アメリカは南北戦争 American Civil War (1861文久1～1865慶応1) にあって、戦争(内戦)によってアメリカ南部からの原綿輸出は激減し、イギリス紡績産業では綿製品生産が滞っているという情報も把握していた。石河は、アメリカ南北戦争が終結すれば好機は消える、今直ちに日本産原綿をイギリスへ輸出すべきであると判断する。既述したように、石河は、超過利潤的観点を常に持ち合わせていた。まさにアメリカ南北戦争はこれより3年後の慶応元年に終結することになり、超過利潤的好機の有効期限は刻々と迫っている。

石河は、次の通り(全文)、アメリカ南北戦争の真つ最中、文久3年11月付で伊地知社之丞宛に国内綿のイギリス輸出を建白する。これは先にみた機械紡績所取建建白書とほぼ同時であることは大いに注目すべきである。

凡^{およそ}交易は畢竟異邦取組に^{これ}之無く候ては、十分の御經濟に相成り申さず。左候て、右取組も長崎に於ては未だ十分と申す場に至り申す間敷^{まじ}。たとへば洋人今何品買入、直段宜しと申せば、此方より十分売込申さざる内に諸方より騒ぎ立て、内国直段沸騰、或は官より差留られ候等の類之有り。何卒別段の御仕向を以て別段の御処置御座有り度儀と念願奉り候。他国(他藩)にては、相叶^{かな}難き儀に候得共、御国(薩摩藩)にては、如何様にも御処置の道御座有べく候哉。有無相通じ不均平を均しくするは交易の由て起る所以にて、人に先立ち、早く機密に其不均平に乘じ候へば、又無望の行貨も出来申すべき哉。たとへば、只今英人切に綿を望み候。其故を原ぬるに英国には、世界に希なる紡織の大局之有り。其用ふる所の綿多くは米国より仕送り来候処、近年米国の戦争(南北戦争)にて綿仕送り、全く相運^{はた}ばず、英国儲と相困り候故に候。尤、英国にて紡織局(イギリス紡績産業)若干の人夫(労働者)を官(イギリス政府)より空しく養ひ居り候事、新聞紙にも相記し之有り候通りにて、誠に不平均の折柄(アメリカ南北戦

争が惹起した、イギリス紡績産業における原綿の需要量と供給量の極端なアンバランス状態）に候。日本は諸物優饒の国に候得ば、年々綿四、五十万本位洋（イギリスなど洋国）へ相渡し候共、国用は決て差支申さず、物価は多くは人気による者（もの）に候へば、只多く有る所に就て密^{ひそか}に取ること肝要に候。たとへば、一昨年大和より尾州へ綿を引き候事、十万本余に相及び候得共、大和国用に相障^{さわり}候趣之無く、大坂積登も例年に相替^{かわ}らざる趣に御座候。其他米油等も同様に之有る哉に存じ奉り候。私本業（機械紡績技術関係）有難く御取用成し下され候上、他国（日本国内の諸州）交易の掛（交易方掛）も仰せ付けられ冥加至極存じ奉り候。就ては不行届^{たんせき}の段旦夕恐入り罷り在り奉り候。精々尽力仕り、基本相立て、遂に右大御交易大御経済に相及び候はゞ、則私本業益^{ますます}広く相行われ、本懐に相叶、有難き仕合に存じ奉り候。是亦、序^{ついで}で乍ら、妄に申し上げ奉り候⁽⁹⁹⁾。

石河には、「凡交易は畢竟異邦取組に之無く候ては、十分の御経済に相成り申さず」とあるように、交易が外国貿易に拡大していくことは経済原理の必然であり、後述するように、また外国貿易を前提とした世界経済の場で通用しない経済は「真の経済」ではないという認識がすでに薩州産物会所交易構想段階においてあった。外国貿易を自明の原理とする石河にとって、長崎における外国貿易商に対する取り組み方などは、はなはだ不十分なものであった。特に外国からの需要の高い産物（商品）の場合、まだ十分に有利に輸出できるはずなのに、日本側でいたずらに騒ぎ立て、その産物の買い集め競争が起こり、その産物の国内価格が沸騰することで、輸出に支障を来したり、幕府がその産物の輸出を差し止めたりしている状況を石河は指摘する。また、石河の「日本は諸物優饒の国に候得ば、年々綿四、五十万本位洋へ相渡し候共、国用は決て差支申さず、物価は多くは人気による者に候へば、只多く有る所に就て密に取ること肝要に候」という認識は、先にみた福沢『唐人往来』が述べた、く「諸色高直」の現象は、「諸人難済」ではなく、外国貿易があたかも特別需要のような現象を引き起こした結果、「米も魚類も高直となり、米も作る百姓も、魚を捕る漁者も、大工も、左官も、金廻りよく、一

國中柄直りたる由」を意味する〉とする見解と共通の基盤に立っていることは、注目できる。

それで石河は、外国からの需要が高い産物については、薩摩藩は「別段の御仕向を以て別段の御処置」をすることが必要であるとする。「別段の御仕向」「別段の御処置」とは何か。「人に先立ち、早く機密に其不平均に乗じ」る「御仕向」「御処置」である。「人に先立ち、早く機密に其不平均に乗じ候へば、又無望の行貨も出来申すべき哉」「物価は多くは人気による者（もの）に候へば、只多く有る所に就て密に取ること（豊富な産地にて密かに買い集めること）肝要に候」こそ超過利潤的観点である。これは、先にみた、「五、六年の内には（機械紡績は）相開け申すべし。是非、其内に此御方（薩摩藩・島津侯）より大経済御座有り度、存じ奉り候」との機械紡績導入の建白と同じ観点である。機械紡績導入の場合も薩摩藩が「人に先立ち、早く機密に其不平均（この場合紡績生産力と織物生産力のアンバランス状態）に乗じ」る「御仕向」「御処置」に他ならない。薩摩藩が他に先駆けて「早く機密に其不平均に乗じ」て機械紡績導入をおこなってこそ、ある種の超過利潤的な「無望の行貨」の獲得が可能なのである。そうして石河は、この「人に先立ち、早く機密に其不平均に乗じ」る「御仕向」「御処置」は、先述したように、それをおこなうだけの力量・組織性・人材が貧弱・希薄な他藩では不可能であるが、それらが十分に備わっている薩摩藩ならば可能であるとしている。

こうした認識に基づき、「洋人今何品買入」との現在における外国からの需要の高い産物、注目すべき輸出品として、石河がとりあげているのが、国内産綿であり、輸出先は、アメリカ南北戦争勃発によって原綿の需要と供給が極端な「不平均」に陥っているイギリスであった。先の機械紡績所取建建白書でもみたように、石河には、「英国には、世界に希なる紡織の大局之有り。其用ふる所の綿多くは米国より仕送り来候処」というイギリス紡績産業が現在、世界経済の中軸になっていることを深く認識している。その上で、石河は、「新聞紙」（外国新聞）などから⁽¹⁰⁰⁾、「（南北戦争勃発によって、ア

メリカからイギリスへの原綿輸出が) 全く相運ばず、英国礮と相困り候故に候。尤、英国にて紡織局若干の人夫を官より空しく養ひ居り候事」との情報を得、「只今英人切に綿を望み候」と、イギリスへの原綿輸出こそが現在の急務との判断に至っている。しかもイギリスへの原綿輸出は、超過利潤的観点から、他に先駆けて「早く機密に其不平均に乗じ」て実施しなければならないのである。

先述したように、この時期、石河は「他国交易の掛」(諸色見聞役惣掛など交易方掛)に就き(その他蔵方目付・銃兼水車方掛・集成館掛・織屋掛など兼任)薩州産物会所開設に基づく交易の実施をも建白している。当然、石河は、将来的には、外国貿易も薩州産物会所交易の全国的流通ネットワークに組み入れて実施されるべきものとして構想している(最終的には薩州商社による外国貿易実施の構想に展開していく)。石河の構想では、「人に先立ち、早く機密に其不平均に乗じ」「只多く有る所において密に取ること」との超過利潤的観点を十全に発揮して外国貿易をおこなうことを可能とするためには、「人に先立ち、早く機密に其不平均に乗じ」「只多く有る所において密に取ること」を含めて、最大限有利な売買をおこなうべく、それ自体、超過利潤的観点から構想された新型(改良型)会所である薩州産物会所(本来国内交易用ではあるが)が綿輸出など外国貿易に関係していくのは当然であった。

国内綿花の先進的生産地帯(「多く有る所」)にして先進的機織地帯の第一は、和州(大和国/現奈良県)である。石河が、国内第一の豊富な国産物・特産物(商品)の所在に応じて、藩領地の壁を超えて全国各地に薩州産物会所を開設する構想の実施を、大和薩州産物会所開設・大和交易の実施として、まず和州から始めたのは、石河の「本業」である機械紡績導入の関連から、機械綿糸生産用原綿購入先と機織への機械綿糸販売先を最大限有利に確保するためであり、当初石河は機械紡績所も和州に想定していた程であった(薩州商社取建構想へと移行するとともに機械紡績所建造場所は、和州に隣接する泉州の堺戎嶋薩州商社本館〈本社〉敷地内に移行していく)⁽¹⁰¹⁾。しかも石河は和州出身である。「一昨年大和より尾州へ綿を引き候事、十万本余に相

及び候得共、大和国用に相障候趣之無く、大坂積登も例年に相替らざる趣に御座候」と和州の綿状況・市況について、石河が熟知しているのは当然であった。以上のことから、石河がイギリスへの原綿輸出を建白するのは、必然的であった。注意すべきは、「其他米油等も同様に之有る哉に存じ奉り候」とあるように、米・油などの原綿以外の産物も、原綿同様に「人に先立ち、早く機密に其不公平に乗じ」「只多く有る所において密に取ること」との超過利潤的観点を發揮して輸出することを建白していることである。長崎丸砲撃事件や加徳丸焼討事件は、海外輸出用の和州産綿や油などを泉州堺で集荷し、大坂立売堀の百間町薩州蔵屋敷・浜崎太平次支店薩摩屋を経由して、兵庫から長崎に廻漕する流通ルートが存在を明らかにした。これは和州近辺で、輸出用に綿を中心に「其他米油等」など広範に国産物を集荷し長崎に廻漕するという石河の建白内容と一致している。イギリス向けの原綿を中心にした国産物輸出実施を示す直接的な史料が希薄なのは、まずは、「神州有限の品を以て、夷賊無厭の欲に充んとする。其罪惡天地容さず、神人共に怒り」とする尊攘派の攻撃を躲するため、薩摩藩は外国貿易について表面に出さないようにしていたことにある（先にみたように木場伝内は「綿商法に就き注意」を警告していた）。先述したように、難波南御堂門前の屠腹・梟首捨札のことは、大坂では大変な評判となった。「(水井・山本は)全く自分等中国浪士と称し、右の所業兩人へ引受け、^{いさぎよ}潔能く相果て候趣也。右両士誠に 皇国の御為、主君の為に身命を果す、正義忠勇皆感賞す」⁽¹⁰²⁾（本当はく憂鬱なる党派）での水井・山本の死は「潔能く相果て候趣」ではなかったことについては本稿注(78)参照）とする当時の支配的評価は、これも先述したように、大坂町人のものも含めて、圧倒的にく長州鼯鼠＝薩州バッシングの風潮は高まり、さらには「残念さん」（本稿注(79)参照）のようなある種の民衆信仰的現象まで惹起した。薩摩藩は外国貿易実施に関して極力表面化させずに沈黙する他なかった。まして石河提唱のこの輸出計画自体が「人に先立ち、早く機密に」という超過利潤的観点からの機密性が要求されるものであったからである。このような状況では、薩摩藩側の輸出実施内容に関する詳細な直接的

史料は残りにくいものとなるのは当然ではあった。先にも述べたように、長崎丸砲撃事件と加徳丸焼討事件さらには屠腹・梟首捨札騒動が、浜崎太平次大坂支店薩摩屋（及び石河らの百間町薩州蔵屋敷）が実務担当する薩摩藩の輸出実施の事実を明らかにしただけではなく、この事実のさらなる奥には国内綿（繰綿）を中心にした国産物海外輸出実施を提示した石河立案が存在したことをも示唆することになったのである。大谷仲之進梟首捨札で「去冬（文久3年冬）泉州堺より長崎輸送として莫太綿・油其外諸品買込積下し候趣、相聞き候に付」と表明できたように、長州系尊攘派の執拗な探索網は、「泉州堺にて風聞は、薩州より交易の品買集候は、右の趣に相聞候。綿五十万斤〔壹斤目方二百目也〕、油十六万樽、木綿（綿織物）五十万端（反）」⁽¹⁰³⁾ぐらいの情報は探っていた。堺に集荷されたという「綿五十万斤〔壹斤目方二百目也〕、油十六万樽、木綿五十万端」は石河建白書での「年々綿四、五十万本位洋（イギリスなど洋国）へ相渡し候共、国用は決て差支申さず……其他米油等も同様に之有る哉」と見事に照応している。石河が和州経営・大和薩州産物会所交易の重要拠点としていた泉州堺（後に薩州商社本館・堺紡績所が置かれる）の存在も隠しようもなく露になっている。

ここまでくると、上述した文久3年11月における石河の機械紡績所取建建白と国内綿輸出実施建白に先行する同年9月付で石河が伊地知壮之丞宛に提出した薩州産物会所交易を積極的に実施すべきとする建白についても言及せざるを得ない。特に生産・技術過程に関する機械紡績所取建建白とこの流通過程に関する薩州産物会所交易実施建白とは、生産と流通の一对を成しているし（流通の建白が生産の建白に先行していることは〈流通が生産を包摂する〉という石河の経営思想をよく反映している）、この薩州産物会所交易実施建白は、機械紡績所取建建白と国内綿輸出実施建白の持つ精確な意味を示すだけではなく、5年後の薩州商社取建構想への展望をも示している、〈恐怖の時代〉文久3年はまさしく〈商社の時代〉へのプレリュードでもあったことをよりよく表している。この文久3年9月付伊地知壮之丞宛石河確太郎文書の全文は次の通りである。

富国強兵は治国の要務に候。方今の如きは勢已に相迫り富国に強兵を兼、
 弥強兵に富国を并せ兩ながら並べ行ふべき秋と存じ奉り候。衣食の二は
 生民の欠く可からざる所、富国の基本にて此二物足らざるときは人心何と
 なく世話々々敷（忙忙しく）相迫り、従て余物優饒なるも価共に貴く相成
 り、都鄙共に相困り國中自から淋しく相成り候事、世の常に候。今、衣の
 一は已に御手附けさせられ、不日（まもなく）其事相行はれ申すべく候得
 共、食に於ては未だ御十分の御処置も之無き哉に恐れ乍ら、竊に存じ奉り
 候。又、差当り現金を以て買入れに相成り候事、長久安固の道に御座有る
 間敷き哉。且、価も甚卑きことを得ず候。凡産物各国互に有無あるは世
 界の常、交易の由て起る所以にて、此国に有る所の者を取り、彼の無き所
 の国に遣りて、彼の有る所の者に易々これを我国に輸りて始めて物優に価
 卑く相成り申すべく候。我日本に於ては米は奥州・羽州に最も多くして
 綿・木綿之無く、綿木綿は和州・河州及び其近国に最も多く候。今、和
 州・河州等の綿木綿を奥羽の間に遣し、彼の米大豆等を御国（薩摩藩）へ
 輸り、余る所は琉球島々に下し、大坂に上せ候得ば、卑き者（物）も取て
 貴く売り、其価を以て又卑き者（物）を買ひ、以て我不足を満つる儀に之
 有り、且、事治定の上は上方筋中国筋等に事（変事）なる時に及び候ても
 食道は絶え申さず、富国強兵の一端、長久安固の道に御座有るべき哉に存
 じ奉り候。此節大和・大坂に於て産物御会所召し建てられ候上は右等の儀
 盛に相開け申さず候では、其甲斐も御座無く、殊に他国の産物を以て他国
 に交易し、其利を我に収むること首めよりの御趣意に之有り、又、綿・木
 綿等御取入の道は已に相開け候得共、未だ捌先之無く、幸に奥羽は綿・木
 綿之無く、其上大和・河内の綿・木綿は専ら奥羽に於て相向け候品位にて
 三方便利融通に之有り、旁々以て差当り右一事に御手附けさせられ度存じ
 奉り候。日本内々の事にては兄弟相取るが如くにて、究竟大交易に至り申
 さず候では、眞の經濟とは申され間敷く候得共、先内を治め基を為して外
 に及ぼすこと、事の順に之有り、姑く弟の物も兄に預り置く事 皇国の御
 為時勢の然らしむる所と存じ奉り候。奥羽の米に付ては、是迄趣法（取引

方法) 立て致し候者(事) も之有り候得共、何分御国の産物を動かさざれば得ざることに候得ば、兎角行はれ難き由承り、又、趣法、我(当方)に立ちて彼(先方)に立たざる哉とも存じられ候。第一先づ、彼に趣法相立ち申さずにては事行はれ難く、且危く候。此度の儀は交易の緒端已に相解け之有り候得ば、殊に行はれ安かるべく候。幸に私、羽州に知人(本間郡兵衛)之有るべく也。富豪(酒田の巨大廻船問屋本間家)の者にて是迄余所ながら右試談も仕り候処、相行はれ申すべき哉に承り候。尚、篤と示談仕り候得ば、御請申し上げるべく存じ奉り候。併、未だ弥いよいよの示談に及ばざる儀に候得ば、事の成否計り難く候得共、思召おほしめし在らせられ候得ば、示談仕り度存じ奉り候。先達仙台買米の儀、大略申し上げ奉り、尚、此度も聞合候儀も之有り、弥相行はれ申すべく候得共、何分船の風儀航海も宜しからず、且彼是かれこれ手数に及び候儀も之有るべし。先、此涯きわ、羽州の方、御手附けさせられ度存じ奉り候。右等、私より申し上げ奉り候事、固より分にあらず、位も出候儀に候得共、大和大坂産物御会所の縁故を以て、此段内々申し上げ奉り候以上⁽¹⁰⁴⁾。

ここで石河は、リカード流比較生産費説の世界貿易理論(自由貿易論)を背景にして、「和州・河州」の特産物「綿・木綿」、東北「奥羽」(奥州・羽州)の特産物「米」、「御国」(薩摩藩)の三者間における薩州産物会所交易のシミュレーションをおこない、薩州産物会所交易の有効性を説明している⁽¹⁰⁵⁾。ただし、石河は、実際に、和州では大和薩州産物会所開設・大和交易の実施に取り組んでいるし、羽州では盟友本間郡兵衛と協力して出羽薩州産物会所ともいべき薩州産物会所開設と北国交易実施にも取り組んでいる⁽¹⁰⁶⁾ので単なる机上のシミュレーションではない(石河は東北の仙台産米買入れにもすでに着手している)。石河は、この交易シミュレーションにおいて、薩州産物会所交易に参加した者はすべてそれぞれの参加度合に応じていずれも利益を獲得できる「三方便利融通」(近江商人商法の「三方よし」にも通底するものがある)を強調しているが、重要なのは薩摩藩だけが特定の特産物を一切所持することなく薩州産物会所交易の組織者として各特産物

の販売委託を請け各特産物に流通の効率のよい方向を与えることで利益（ある種のコミッション）を得ていることである。つまり三者の内で薩摩藩だけが無から有を得ているのであるが、これは薩州産物会所交易が、薩摩藩財政に依存せず、薩摩藩財政から独立した自立せるシステムであることを意味している（この薩摩藩財政からの独立した自立せるシステムを飛躍させ最高度に完成した形態が会社制度・薩州商社であった）。石河は、「私本業」は機械紡績業など洋式生産技術であるとしているが、単なる洋学流技術者ではなく、常に〈無から有を生じさせる〉ことを可能とするような流通的技術・方法を模索していて、生産技術のことはむしろ絶えず流通の内に包摂して理解しているのである。先の機械紡績所取建建白書も、市場調査のことから始めたように、機械紡績所取建建白の前にこの薩州産物会所交易実施建白をおこなったことは、先述したごとく、〈流通が生産を包摂する〉という石河の理念がよく反映されているのである。従来の「本邦紡績業の開祖」としての石河正龍像がかなり精確性を欠いていたのは、石河にとって生産技術を包摂すべき肝心の流通のことがまったく欠如したものであったからである。

今回本稿が、この石河建白書において、特に注意したいのは、「日本内々の事にては兄弟相取るが如くにて、究竟大交易に至り申さず候では、真の経済とは申され間敷く候」との主張が、5年後慶応3年の「薩州商社発端」での〈「洋国貿易」（外国貿易・世界貿易）において通用しなければ「真の富国経済」とはいえない〉という主張の源流となっていることである。「真の経済」には「真の富国経済」が対応しており、「大交易」とは「洋国貿易」（外国貿易・世界貿易）を意味していることがわかる（そもそも薩州産物会所交易シミュレーションは比較生産費説・世界貿易理論を下地にして展開されていた）。石河は、文久3年段階ですでに、いかに合理的効果的な薩州産物会所交易でもそれが有効なのは「日本内々の事」国内交易に限るという、薩州産物会所交易がまだ「真の経済」に至っていない（過渡的なものに過ぎない）限界を自ら深く認識していたのである。これは、逆にいえば、石河は、この段階で、「真の富国経済」の確立が問われる「洋国貿易」（外国貿易・世

界貿易)において、外国商業と十分に対応できる(世界水準に耐えうる)、薩州産物会所方式を超える新たな商業システムを志向していたのである。後に、石河のこの志向は、元治2年・慶応元年(1865)に五代才助・松木弘安が、イギリスに留学生を引率して密航し、そこで会社制度と遭遇して非常な衝撃を受け、慶応2年(1866)に帰国して会社制度導入促進の活動を展開するのと交差して、薩州商社取建構想として結実することになるのである。文久年間(1861~1864)で構想された薩州産物会所自体が会社制度に限りなく接近できる要因を内包するシステムであったのである。「貪欲無恥の私の奸計」とばかりに砲撃・焼討の恐怖・天誅を下した薩賊綿船にはこうした事情が集約され秘められていたことなど、尊攘派にはまったく想像することもできなかった。また、長崎丸砲撃事件・加徳丸焼討事件を惹起した綿輸出は、石河にとって、「大交易(外国貿易)」に、実際、具体的に関わる端緒となつたのであり、その延長上には、5年後の外国貿易を前提にした薩州商社取建構想への展開が望めるのである。

元治元年は、薩州商社関連のことが〈恐怖の時代〉と交差する事件がもうひとつ起こっている。冷泉為恭暗殺事件である。^{れいぜいためちか}冷泉為恭(1823文政6~1864元治1)は、復古大和絵洋画家であるが、幕府京都所司代の小浜藩主酒井忠義^{ただあき}と接近したことで、長州藩士大楽源太郎が長州系尊攘派から誤解を受け、暗殺された。冷泉暗殺から3ヶ月後に佐久間象山を暗殺する河上彦斎は、維新後、大村益次郎暗殺計画者の嫌疑を受け奇兵隊を脱走し逃亡する大楽を秘匿することになる。大楽と河上は同臭味を帯びた〈恐怖の時代〉を象徴する存在であった。しかしながら大楽は、河上らの象山暗殺に対しては「通憤胸間に満ち」と憤激したはずの勝安芳には「よさそうな男だったよ。……話せるやつらしかった。長州人には珍しい男さ」⁽¹⁰⁷⁾となかなかの評価であった(広瀬淡窓に学んだ大楽は河上と通ずるような英知があった)。暗殺された冷泉為恭を堺にて最後まで大楽ら尊攘派の襲撃から秘匿保護していたのが、堺商人の大和屋徳兵衛こと辻本徳次である。辻本は、慶応2年(1866)から慶応3年(1867)にかけて堺戎嶋^{えびすじま}に開設された薩摩藩蔵屋敷の初代御屋敷名

代となる。堺のような天領（幕府直轄地）では大坂同様、諸藩は土地・屋敷を直接所有することができないので、地元有力町人などを御屋敷名代として立て、御屋敷名代の名義で土地・屋敷を借りる形式をとらなければならない。しかし辻本が、戎嶋薩州蔵屋敷の御屋敷名代になったことは、他の御屋敷名代の場合とはまったく違った意味を持った。戎嶋薩州蔵屋敷の御屋敷名代は、同時に薩州商社取建構想へ賛同・参加する堺商人の代表を意味したからである。現在のところ、辻本の詳細な経歴は明確になっていないが、逸木盛照『冷泉為恭の生涯』では、辻本について、次のように記している。

大徳（大和屋徳兵衛の通称）は、肥料米問屋で本名辻本徳次、大和屋と号し、当時髯ハンで通っていた人である。大徳は随分多趣味であって、茶事、能楽、狂言、書画を好み、夏は紺紵（^{ママ}紋紵は薄い絹織物）の蚊帳を用いた程のすき者（風流人）であった⁽¹⁰⁸⁾。

辻本の、茶事・能楽・狂言・書画と「随分多趣味」な「すき者（風流人）」振りは、千利休以来の自治都市堺の町衆・会合衆の系譜をよく表しているが、戎嶋薩州蔵屋敷の初代御屋敷名代を勤めたことは、冷泉為恭を尊攘派の襲撃から秘匿・保護したことからも、辻本がただの「すき者（風流人）」ではないことを示している。大和屋徳兵衛が、外来の新システムである会社制度の導入や薩州商社の意義について共鳴できる内面を持した市井の小知識層であったことは明らかである。「物のはじまりや、なんでも堺」⁽¹⁰⁹⁾と謡われるように、鋭い進取の姿勢は、堺商人の真骨頂であり、堺の地は、外来の新システム・会社制度導入、薩州商社取建・堺紡績所建造を受け入れる地として、実に最適な空間であった。このような堺商人と会社制度導入・薩州商社取建の緊密な関係性を、辻本以上によりよく体现しているのは、堺商人・唐物問屋（貿易商）田中屋久兵衛こと青木秀平（1820文政3～1883明治16）⁽¹¹⁰⁾である。薩州商社の存在を確実に証明する重要史料となるのが、「薩州商社建家場所」絵図（現在2種類確認）⁽¹¹¹⁾である。この絵図は戎嶋薩州蔵屋敷＝薩州商社本館〈本社〉の絵図面であり、そこには「薩州商社建家場所」と明記されている（現堺市戎島町一丁辺りで、明治3年に薩摩藩営堺紡績所〈鹿

児島紡績所に次ぐ機械紡績所〉が建造された場所である。この絵図面は、戎嶋薩州蔵屋敷＝薩州商社本館〈本社〉＝堺紡績所敷地であったこと〈この文字通りの三身一体はまさしく三位一体をも意味した〉を如実に証明している。この絵図によると、「薩州商社建家場所」（戎嶋薩州蔵屋敷）の大部分は、辻本（絵図には「薩州御屋敷名代 大和屋徳兵衛」「大和屋徳兵衛役地」「大和屋徳兵衛新地拝借地」と記されている）と青木（絵図には「青木久兵衛建家地」「青木久兵衛拝借地」「青木久兵衛新地拝借地」と記されている）の名義の拝借地（「薩州商社建家場所」の他の部分と薩州商社本館の付属地と思われる土地は山本茂兵衛と酢屋良助の名義の拝借地・役地となっている。山本・酢屋はいずれも綿関係の堺商人と推測できる）によって構成されている（「薩州商社建家場所」絵図については次回以降の本稿で改めて詳細に取りあげる）。辻本と青木が、石河らの薩州商社（及び堺紡績所）取建構想に賛同・支持した堺商人の基幹を成していたことは間違いない。青木は、明治元年（1868）10月に戎嶋薩州蔵屋敷（同年7月以降薩州商社取建構想は途絶え「薩州商社建家場所」には予定通り堺紡績所が建造される）の御屋敷名代（おそらく辻本に続く2代目名代）となる⁽¹¹²⁾。青木は、堺紡績所の薩摩藩営時代・官営時代、一貫して紡績所の責任者石河確太郎を助け、紡績所の建造と運営に尽力した。青木は、幕末以来の石河の流通（薩州産物会所及び薩州商社）と生産（機械紡績所・堺紡績所）の総合的経済・技術改革構想に終始一貫、協賛・支持・協力してきた堺商人なのである⁽¹¹³⁾。殊に石河らの薩州商社取建構想は、進取先鋭の唐物問屋（貿易商）である堺商人青木を大いに刺激・啓発したことは明らかである。薩州商社こそは、^{コンベニー}会社制度という外来の新システムに基づく外国貿易組織でもあるのである。「我亦彼（西洋）に貿易して、彼より利を収めざれば、真の富国経済と謂ふべからず。…今、彼の^{コンベニー}公班衛は、小をして大ならしめ、弱をして強ならしめ、事簡・瑣にして業大なるものにて、実に無二の良法なり。法（方法）を取るに我彼に拘らず、彼が^あ悪しきを^{にく}悪みて、其法の良きを棄てず、即ち法を取るの宜しきなり。困て今、吾、公班衛の法に^{コンベニー}原づき、公に^{もと}稟して、其館を泉州堺に建て、

薩州商社と称す」との文言を、鎖国の遙か以前から古来海外貿易の蓄積を持つ堺商人の系譜に連なる青木は、大いなる感動をもって受容したはずなのである。以上の青木の経歴は、戎嶋薩州蔵屋敷（薩州商社本館）の初代名代辻本も単なる「すき者（風流人）」でないことをも示唆している。

また、戦前編纂の『堺市史』では、「幕末に際して浪士横行、殊に貿易商人たる久兵衛（田中屋久兵衛）を忌むこと甚だしく、屢々其邸を襲ひ、首級を獲んとし、或は放火の貼紙をして威嚇した。久兵衛四隣の迷惑を察し、貿易を廃する旨を告げ、更に（車之町山之内から）市之町三丁に移り、茶園を拓き、単に製茶のみを輸出した〔堀井久吉氏談話〕⁽¹¹⁴⁾と青木が、幕末に尊攘派から「忌むこと甚だしく、襲撃・天誅の的になっていたエピソードを記している。青木は大谷仲之進のように梟首捨札される資格は十分あったのである。しかし、青木は表面上は「貿易を廃する」ように見せ掛けたが、本当は「我亦彼（西洋）に貿易して、彼より利を収めざれば、真の富国経済と謂ふべからず」とむしろますます外国貿易を志向したことは、青木が薩州商社取建構想に積極的に参加したことが如実に示しているのである。このエピソードの幕末の時期とは、辻本が匿った冷泉為恭が大楽ら長州系尊攘派によって暗殺された頃、文久・元治期〈恐怖の時代〉と重なっている。長崎丸砲撃事件や加徳丸焼討事件によって明らかになったように、この時期、堺は、特に長崎行海外輸出用の和州産綿を中心とした特産物を集荷する薩摩藩の流通拠点になっていて、慶応期には、兵庫港に比肩できるべく、本格的に戎嶋（堺港に臨海している）に薩州蔵屋敷も開設されるのであるが、「長府（長州）探索掛り一組三人宛四組、兵庫・堺・京攝の間に潜伏、種々探索候処」（本稿注73参照）というように、大楽のような長州系尊攘派が要注意地域として常に探索・監視する対象であった。長州系尊攘派にとって、堺は、「人民次第に困窮に相迫りしも顧みず、内は神州の国力を疲弊せしめ、外は豺狼に等しき夷賊の術中に陥り、神州有限の品を以て、夷賊無厭の欲に充んとする」薩賊奸商及びそれに賛同し「交易するもの共」が蠢く国賊の巢窟であったのである。文久年間以来の堺は、〈恐怖の時代〉と〈商社の時代〉^{コンベン}が重なっ

て集約され密度濃く投影された空間であったといえる。

今回、本稿は、文久3年を中心に述べたので、翌、文久4年・元治元年からとりあげた事象は、文久3年に関連したものに限った。それ以外にももちろん、文久4年・元治元年には非常に重要な事象がいくつか起こっている。その内で、特に重要なのは元治元年に薩摩藩に提出された「五代才助上申書」と「石河碓太郎上申書」に即して薩摩藩がイギリスへの留学生派遣とイギリスからの機械紡績導入の実施に向けて具体的に動き始めたことであり、本稿でもそのことは少し言及したが、このことを含めて、文久4年・元治元年の重要事象については、次回の本稿にて盛り込み述べていくことにする。

(つづく)

注

- (1) 富田正文編者代表『福沢諭吉選集』第10巻、岩波書店、1981年、158～164頁。()内とルビは長谷川。一部量語の表記を換えた。以下、同選集からの引用について同じ。「文久年間から明治五、六年までの十三、四年の間と云ふものは、夜分外出したことがない。……唯著書翻訳にのみ屈託して歳月を送つて居りました」という〈恐怖の時代〉の引籠もりの歳月に、福沢諭吉(文久元年に結婚)は、「唯著書翻訳」だけではなく、長男一太郎(文久3年生)、次男捨次郎(慶応元年生)、長女里(慶応4年生)、次女房(明治3年生)、三女俊(明治6年生)と堰を切ったように次々と子も生している。ただし、本稿本文でも述べるように、福沢はこの〈恐怖の時代〉にあつてただ引籠もっていただけでは決していない。
- (2) 江戸で幕政改革(文久改革)をおこない鹿児島帰途に向かう薩摩藩国父島津久光の行列が、神奈川生麦村で商人リチャードソンらイギリス人4人と遭遇し、行列を無礼に乱したとして護衛の奈良原喜左衛門・海江田信義(有村俊斎)がこれを殺傷(リチャードソン死亡、2名負傷)した。奈良原・海江田は、尊攘派・討幕派の薩摩藩下級武家層の精忠組(西郷隆盛・大久保利通も加盟)に属していた。この時期薩摩藩内部は、藩主・国父及び上級武家層の公武合体派と下級武家層の尊攘派・討幕派(反洋学の色が濃い)が入り組み重なり、複雑な構成となっている。生麦事件は、尊攘派・討幕派が引き起こしたものともいえる。薩摩藩政治部門は主に尊攘派・討幕派が担当し最終的には、公武合体派から藩権指導を奪取し掌握することになるのであるが、反洋学の色が濃い尊攘派・討幕派が担当する政治部門が、松木弘安・五代才助・石河碓太郎・本間郡兵衛らによる洋学導入・開国を前提にした経済・技術改革部門に対して、拒否反応・嫌悪を内包しながらも圧殺する行為に及ぶことがなかった(これが長

州藩の場合と大いに異なる点である)のは、経済・技術改革部門が身に帯びていた〈洋学導入・開国を前提にした経済・改革は尊攘派・討幕派が神として崇める先君故斉彬公の御意思を継承したものである〉という護摩符がきわめて有効であったこと、政治部門(御軍役掛など)と経済・技術改革部門(御勝手方掛など)の指導権はいずれも小松帯刀(石河から薫陶を受けた蘭学徒でもある)という優れた若き家老が掌握しており、小松が両部門が相互に干渉し合わぬよう活動できるように、しかも両部門が肝心なところでしっかり連携できるように統轄したことに依ることが大であった。国父島津久光からの上意討の命によって不条理な精忠組の内紛となった寺田屋事件(上意討の命を受けたのは後に生麦事件を引き起こす奈良原・海江田ら)を除けば、幕末期薩摩藩での流血に至る内紛はほとんど発生していない(この点も長州藩の場合と大きく違う)。ただし、開国策を実施する幕府を含めて、「開国主義なんて大嘘の皮、何が開国論なのか、存じ掛けもない話だ」「表面には開国を装ふて居るも……自分も攘夷が為たくて堪らないのだ」と幕末期の開国論(中津藩の開国論も当然入る)全般に対して深い懐疑を持っていた福沢諭吉の観点からすると、薩摩藩の開国派も〈開国主義なんて大嘘の皮で表面は開国を装っているが本当は自分も攘夷が為たくて堪らない〉部類であるということになり、奈良原・海江田らの攘夷の暴走を引き出しかつそれを是認し庇う背景には薩摩藩全体を覆う強固な攘夷の基盤があることを指摘するはずである。

- (3) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、157～158頁。
- (4) 同上、103頁。
- (5) 同上、162～163頁。「武張る」典型として福沢は、茶坊主の描写を格別に詳しく述べているが、福沢は、佐久間象山暗殺の主犯、熊本藩尊攘派の河上彦斎を想起したのかもしれない。「大名に貰った縮緬の羽織を着てチョコチョコ歩く」「長い脇差を挟し坊主頭を振り立て、居る奴」という描写は、身長150cm程の小柄ながら居合(福沢も居合をよくする)の名手、元茶坊主で「人斬り彦斎」の異名を持つ河上をいかにも彷彿させる。
- (6) 末松謙澄『修訂 防長回天史』上巻、復刻版柏書房、1967年、569頁。句読点を補い、漢字の一部を現在のものに換えた。()内は長谷川。以下同書からの引用について同じ。
- (7) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、140～141頁。手塚律蔵は、高島秋帆に砲術を、シーボルトに洋学を学んだ。東条英庵は、緒方洪庵適塾門下である。
- (8) 『海舟日記Ⅰ』、勝部貞長編『勝海舟全集』18、勁草書房、1972年、189頁。()内とルビは長谷川。以下、同全集からの引用について同じ。佐久間象山といえは、安政大獄の刑死後に尊攘派のキリスト的存在になりつつある吉田松陰(高杉晋作・木戸孝允ら松下村塾門下生はさながらペテロら十二使徒)の師でもあったはずである。その象山(さながらバプテスマのヨハネ)までも沸騰した尊攘熱は天誅を下す。本稿で引用した象山斬奸状は、当時、大坂に滞在していた勝安芳が日記の上欄に書き写したものである。象山と血縁関係でもあった勝は、象山暗殺に衝撃を受けて同日記の元治元年7月12日の項で次のように記している。「昨夕、三条木屋町にて、浪士、佐久間修

理を暗殺す。あゝ、先生（佐久間象山）は蓋し世の英雄、その説正大、高明、能く世人の及ぶ所にあらず。この後、吾、また誰にか談ぜむ。国家の為、痛憤胸間に満ち、策略皆画餅」（同頁）。象山の横死によって、「国家の為」の「策略」が「皆画餅」になったとまで慨嘆している。象山暗殺の4ヶ月前、勝は京都で象山を訪問した時のことを「佐久間象山先生を訪う。時勢、且、海外の形勢を談ず。先生、卓識、感服すべきの論なし（成す）」（168頁）とも日記（元治元年4月20日の項）に感激して録している。蘭学塾を主宰する開国論者の勝自身も、〈恐怖の時代〉の幕開け、文久3年3月にさっそく尊攘派の襲撃の洗礼を受けていた。象山暗殺の1年前、同じ京都である。勝は、『氷川清話』の「人きり以蔵のこと」で次のように回顧している。「文久三年の三月に家茂公〔十四代将軍〕がご上洛（長州藩尊攘派及び尊攘派公卿が導いた〈恐怖の時代〉の象徴的事象のひとつ）なさるについて、そのころ京都は実に物騒で、いやしくも多少議論のある人はことごとくここへ集まっていたのだから、将軍もなかなか嚴重に警戒しておられた。このときおれも船でもって上京したけれど、宿屋がどこもかしこも詰まっているので、しかたなしにその夜は市中を歩いていたら、ちょうど寺町通りで三人の壮士がいきなりおれの前に現れて、ものをいわず切りつけた。驚いておれは後へ避けたところが、おれの側にいた土州（土佐）の岡田以蔵がにわかに長刀を引き抜いて、一人の壮士を真つ二つに斬った。『弱虫どもが、何をするか』と一喝したので、後の二人はその勢いに辟易して、どこともなく逃げていった。おれもやっとのことで虎の口をのがれたが、なにぶん岡田の早業には感心したよ。後日、おれは岡田に向って、『君は人を殺すことをたしな^{ふるまい}んではいけない。先日のような^{ふるまい}な挙動は改めたがよろう』と忠告したら、『先生、それでもあのとき私がいなかったら、先生の首は既に飛んでしまていましょう』といったが、これにはおれも一言もなかったよ』（『氷川清話』、勝部真長編『勝海舟全集』14、勁草書房、1974年、17頁）。象山を暗殺したのが「人斬り彦斎」なら、勝を尊攘派の凶刃から守ったのは自身も尊攘派（土佐勤王党）の「人斬り以蔵」の異名を持つ岡田以蔵、いずれも「人を殺すことをたしな」む者で、まさに福沢が「兎に角に癸亥（文久3年）の前後と云ふものは、世の中は唯無闇に武張るばかり。……当時少しく世間に向くやうな人間は悉く長大小を横たへる」をよく象徴している。なお河上彦斎（1834天保5～1871明治4）が学んだ熊本藩士林松園（1797寛政9～1870明治3）は和漢学のみならず蘭学・天文学など洋学にも精通していた。

- (9)、(10) 『福翁自伝』、前掲『福沢諭吉選集』第10巻、158～161頁。
- (11) 熊本藩儒学者・肥後実学党領袖にして越前藩顧問（越前藩主松平慶永の重要顧問）の横井小楠は、洋学にも造詣が深く開明的であり、安政5年（1858）に開明君主・越前藩主松平慶永（春嶽）に招聘され越前藩を指導した。横井は、慶応3年（1867）11月3日付で松平慶永に大政奉還に対応した新政の在り方についての建言を提出し、その中で、「外国の交易、商法（商業方法）の学有りて世界産物の有無をしらべ物価の尊下を明にし広く万国に通商し、更に又商社を結び互に影響を為す。……さて内地に於て商社を建て、兵庫港なれば五畿内・四国・南海道の大名は申に及ばず、商人・百姓たり共望に因ては其社に入れ、同心一致いたし相共に船を仕立乗り出し交易すべ

し」(山崎正薫編『横井小楠遺稿』、日新書院、1942年、95頁／漢字の一部を現在のものに換え一部を読下しにした。())内とゴシックは長谷川)と明確に商社取建(会社制度導入)の必然性を述べている。半年前の慶応3年6月付で表明された「薩州商社発端」「薩州商社条書」との関わりからも大変注目すべきであり、また、そもそも、横井の越前藩指導中の慶応2年(1866)頃、渡欧中の五代才助が薩摩藩へ送った「建言十八箇条」(比義商社取建構想を中心としたもの／本稿注46参照)での「蚕卵を仏国に送るため越前と結社すべき事」に基づき、越前藩と薩摩藩の共同商社取建(比義商社取建の一環として)の動きがあった程(鹿兒島県編『鹿兒島県史』第3巻／原本刊行1941年)、近藤出版社／第2次復刊)、1974年、226～227頁、宮里源之丞・沢田延音編『海上王浜崎太平次翁伝』、浜崎太平次翁顕彰会、1934年、101～102頁、参照)、横井及び越前藩の商社に対する関心は大きく存在していた。これらの詳述は、次回以降の本稿でおこなう。勝安芳は維新後『氷川清話』で横井について、「おれは、今まで天下で恐ろしいものを二人みた。それは横井小楠と西郷南洲(隆盛)だ。横井は、西洋のことも別にたくさん知らず、おれが教えてやったくらいだが、その思想の高調子なことは、おれなどは、とてもはしごを掛けても、およばぬと思ったことがしばしばあったよ。おれはひそかに思ったのさ。横井は、自分で仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用いる人が世の中にあったら、それこそ由々しい大事だと思ったのさ」(前掲『勝海舟全集』14、35頁)と西郷隆盛(勝を近親憎悪のごとく嫌悪する福沢諭吉も勝も西郷に対する高い評価は共通している)と並べて最高評価を与えている。『勝安芳日記』文久3年16日の項の上欄には、熊本藩士から送られた文久2年12月19日横井小楠襲撃事件(士道忘却事件ともなる)についての熊本藩の横井に対する罪科案が、次のようにわざわざ書き写されている。「横井平四郎(小楠)罪案右は、傍に犯禁候については、達し置きに及び候趣もこれあり候につき、諸事謹慎を加え(小楠は20年以上も前の天保11年<1840>に酒失の罪で熊本藩から謹慎処分を受けた)、私の宴会等相憚り申すべき所、去年(文久2年)十二月十九日の夜、都筑四郎、吉田平之助へ申し談じ、江戸町家に於て、酒宴相催し候席へ、狼藉者共、抜刀にて罷り越し候を見受け候わば、俱に力を合せ、相当の所分もこれあるべき処、四郎平之助(らの)、成行きをも顧みず、その場立ち去り、未練の次第、士道忘却致し、御国辱にも係り、重畳不埒の至りにつき、屹度仰せつけらる筋もこれあり候え共、御容儀を以て下し置かれ候 御知行召上げられ、士席召放さる旨 十二月十六日申しつけらる」(前掲『勝海舟全集』18、128頁)。「狼藉者」とは佐久間象山暗殺者河上彦斎と同類の熊本藩尊攘派堤又左衛門ら3人で、象山の場合同様、小楠をその開国論ゆえに暗殺を企てた。文久3年の〈恐怖の時代〉の埧塙となっている京都に松平慶永に随行する直前の小楠は、襲撃時に両刀なく江戸越前藩邸へと逃れ越前藩士らとともに再び現場に急ぎ立ち戻ったのであるが、「その場立ち去り、未練の次第、士道忘却致し、御国辱にも係り、重畳不埒の至りにつき」(武張った〈恐怖の時代〉をよく表した文言である)と熊本藩から士籍剥奪・知行地召放ちの処分を受け(士道忘却事件)、越前藩顧問も辞した。横井小楠襲撃事件は、元治元年の佐久間象山暗殺の予兆となり(横井自身も明治3年に暗殺される)、文久年間の〈恐怖の時代〉を象徴するものと

なっている。文久4年・元治元年、勝と謹慎中の小楠の交流が頻繁になる。「肥後横井小楠先生、蒙罪、知行召し放さるを聞く」（文久4年1月25日の項／同上、147頁）、「内の牧（熊本阿蘇）に宿す。……（日記上欄に）横井先生へ龍馬子（坂本）を遣る」（同年19日の項／同上、154～155頁）、「肥後藩、庄村惣右衛門来る。横井先生の口上あり、且聞く、当（2月）二十三日、熊城へ京師より早便来れりと。これ長崎御所置につき、彼もし異存を挟まば、軍勢を出すべきとの事なるべしと。その他、阿州、筑前、福島等、十家、同令を承れりと云う説あり」（同年2月27日の項／同上、156頁）、「庄村生来る。横井先生の伝言あり」（同年3月朔日の項／同上、158頁）、「渡海、熊本着、肥後侯より使者あり。……龍馬を横井先生方へ遣わす。（日記上欄に）横井先生の親族三人入門、同行す」（同年4月6日の項／同上、164頁）。メッセンジャー・ボーイとして勝（後述するように会社制度導入問題に関係する）と横井の間を頻繁に往復していた坂本は、後世、〈日本で初めて会社を作ったのは坂本龍馬〉という坂本龍馬伝説（坂本と会社制度の関係については別稿で述べたい）の流布を惹起しやすい環境にあった。

- (12) 『福翁自伝』、前掲『福沢諭吉選集』第10巻、143頁。
- (13) 同上、157頁。
- (14) 同上、184～187頁。
- (15) 同上、183頁。
- (16) 同上、200頁。明治政府は新方策の三大スローガン、文明開化（西洋諸制度・西洋文明導入）・四民平等（封建的身分制度廃止）・富国強兵（殖産興業に基づく近代的軍事力創設）を掲げたが、明治政府の開化政策は、福沢らの洋学に基づく啓蒙主義の成果を吸収し体制内化しよとしたことは確かである。福沢が『西航記』で先駆的に紹介した会社制度（商社）の導入について、明治政府は、早くも慶応4年（1868）閏4月の商法司設置から緒に就く。商法司は商法会所を開設し、商法会所は「今般商法会所取建相成り候に就ては、諸問屋株の向きは勿論、総て売買手広にさせられ度候条、心得べき事」「売値段取極、仲間定法と唱候類、取調の上、御聞届相成るべく候得共、職業出精、定法より下直に売買致し候儀は勝手為るべき事」「諸株仲間、取調の上、人数増減勝手たるべく事」（加藤尚文編集代表『日本経営史料体系』第2巻、三一書房、1990年、50頁／一部読下しにして句読点を補った。ルビは長谷川）との、江戸期に支配的であった株仲間（町奉行管轄下の公的性格を有する）による商業制限（仲間談合による価格設定や仲間だけの営業許可など）を撤廃して商業自由を保障する「商法大意」（しかしこれは単純な株仲間解散令ではなく、むしろ既存の株仲間を積極的に用いて会社制度を導入する方策へと展開するものである）を同年5月に布令した。しかし、「商法大意」は商業自由に基づく会社制度の導入の布石となったが、まだ明確な会社制度導入には至っていない。この点、同年7月に堺県は、「物産を繁殖せしめ交通を遠大にするは、国家を殷富ならしむる所以の基礎なり。然るに従来商売孤立し、各自小利を営み、協心戮力して大利を謀るの理、今以て曉り得ず。故に、互市（外国貿易）の利、只彼（西洋）に在りて、常に其欺弄を受くるもの尠ならず候間、今般商業を盛大ならしめん為め、堺戎嶋山本町に於て商社を建設し一般入社せしめ、

商業為し取扱条、各尽力洪業（鴻業）の基を興すべく、商業取引上に於ては其現品を引当とし資金拝借差許し候条望みのものは、願出るべし」（堺市役所編『堺市史』第6巻資料編第3、堺市役所、1929年、625頁-627頁に挿入／片仮名文を平仮名文に換え、ルビを振り一部を讀下しにした。（ ）内とゴシックは長谷川）との「管内布達」を出して、会社制度（商社）導入を先駆的に試みている。この堺県の先駆性は、薩州商社取建構想に関連しているものと推測できる。堺県指導の戎嶋山本町の商社建設場所は、薩州商社本館（堺薩州蔵屋敷・堺紡績所敷地）場所である堺戎嶋北島町・南島町に隣接している。また「管内布達」の「商業取引上に於ては其現品を引当とし資金拝借差許し候条」は「薩州商社条書」の「（薩州商社入社）の株金代として其国の産物差出候儀、時宜次第勝手為るべき事」（長谷川洋史「薩州商社発端・薩州商社条書」の二つの版（大槻版と本間版）について—薩州商社発端条書起草百三十周年に際して—、東亜大学『研究論叢』第22巻第1号、1997年12月、37頁／同論文についての詳細は本稿注91参照）と通底しているし、薩州商社についての現在確認できる最後の消息は、「此節泉州堺に於て、公班衛の御屋敷召し開かれ、^{はじめ}首として紡機召し建てられ、拙劣の私（石河）へ御委任仰せ付けられ、私に於ては機械の事は宿志、本業の一事、実に以て鄙芸の榮華、有難^{しあかせ}仕合に存じ奉り候。……堺御屋敷の御本旨たる質遷の公班衛を併せて富強の一事にも相成り候得ば、私の宿願、是より外之無く有難^{しあかせ}仕合に存じ奉り候」（絹川太一『本邦綿糸紡績史』第1巻、日本綿業倶楽部、1937年、151～152頁／漢字の一部を現在のもの換え、句読点を補いルビを振り、一部讀下しに直した。（ ）内とゴシックは長谷川。以下、同書からの引用について同じ）との同年7月付の薩摩藩宛石河確太郎文書なのである。この石河文書には、堺戎嶋薩州蔵屋敷＝薩州商社本館＝堺紡績所敷地の三身一体（まさしく三位一体ともいえる）が実によく表わされているのであるが、この薩州商社最後の消息となる石河文書と戎嶋山本町商社建設の堺県「管内布達」がともに慶応4年7月に出されていることはきわめて注目できる。おそらくは、局地的な薩摩藩指導の薩州商社取建の試みは、明治新政府による全国的な会社制度導入政策に発展吸収されたものと理解できるのである。そうして、堺戎嶋薩州蔵屋敷には、明治3年（1870）開業の薩摩藩営堺紡績所のみ残ることになるのである。

- (17) 「独立とは、自分にて自分の身を支配し、他に依りすがる心なきを云ふ。^{みず}自から物事の理非を弁別して、処置を誤ることなき者は、他人の知恵に依らざる独立なり。自から心身を勞して、私立の活計を為す者は、他人の財に依らざる独立なり」（『学問のすゝめ』、富田正文編者代表『福沢諭吉選集』第3巻、岩波書店、1980年、71頁）と述べているように、福沢にとって、「独立」と「私立」はほぼ同義である。福沢は次のようにも述べている。「我輩（福沢）先づ私立の地位を占め……^{たかし}今我より私立の実例を示し、人間の事業は独り政府の任にあらず、学者は学者にて私に事を行ふ可し。以上論ずる所を概すれば、今の世の学者、此国の独立を助け成さんとするに当て、政府の範囲に入り、官に在て事を為すと、其範囲を脱して私立するとの利害得失を述べ、本論（『学問のすゝめ』）は私立に左袒したるものなり」（同上、82～83頁）。「独立」は福沢の思想の中核を成しているのであるから、「私立」は福沢の思想にとって是非

とも「左袒」すべきものであった。「他人の財」の一部を徴収して成り立っているその「政府」に依存する「官途」に対して、「私立」を「左袒」するのは、福沢の「不羈独立」思想からして当然であった。さらに福沢は次のようにも述べる。「……云く、私立せんと欲する人物あるも、官途を離れば他に活計の道なしと。(福沢の) 答云く、此言は士君子の云ふ可きに非ず。既に自から学者と唱て天下の事を患る者、豈無芸の人物あらんや、芸を以て口を糊するは難きに非ず。且、官に在て公務を司るも、私に居て業を営むも、其難易、異なるの理なし。若し官の事務易くして、其利益、私の営業よりも多きことあらば、則ち其利益は、働の実に過ぎたるものと云ふ可し。実に過ぐるの利を貪るは、君子の為さざる所なり。無芸無能、僥倖に由て官途に就き、浸に給料を貪て奢侈の資と為し、戯に天下の事を談ずる者は、我輩の友に非ず」(同上、84～85頁)。福沢は、国家・政府を神として崇めその「知恵」と「財」に依存する、福沢が嫌悪する「町人根性」(アジア的奴隷根性)は、「私立」を志向しながらも「官途を離れば他に活計の道なし」と戦々恐々とする知識層でも同じであるとしているのである。「無芸無能、僥倖に由て官途に就き、浸に給料を貪て奢侈の資と為し、戯に天下の事を談ずる者」という諷刺も、「芸を以て口を糊するは難きに非ず」という個人へのエールも、現在でも見事に有効である。

- (18) 同上、62頁。
- (19) 同上、69頁。支配的秩序は、被支配側の在り方を屈折した形で模倣することで自己を形成していくが、同時に、一度支配的秩序が形成されると、被支配側は、支配の在り方を模倣していく。「苛き政府」「暴政府」「暴政」「暴君暴吏」の在り方を今度は「民」側が模倣するのである。つまり、〈苛き政府の上に苛き民あり〉ともいえるのである。
- (20)、(21) 同上、70～76頁。『学問のすゝめ』での「一身独立して一国独立する事」との表明は、いかにも国民国家(近代国家)形成期の謂である。現在では、「一身独立」が「一国」(国民国家)を超えた地平での共同性に収斂していくことが世界史的課題となっている。
- (22) 前掲『福沢論吉選集』第10巻、202～203頁。
- (23) 同上、12～13頁。
- (24) 同上、149頁。福沢論吉が、薩英戦争や松木弘安・五代才助の捕捉と横浜連行について読んだという「横浜の新聞紙」とは、「英字横浜新聞」である。「英字横浜新聞」に掲載されたイギリス艦隊旗艦ユーリアラス号勤務の青年士官の記事(1863年8月19日〈文久3年7月6日〉付)に次の箇所がある(原文は英語)。「但し薩摩の『サー、ジョージ、グレー(青鷹丸)』に乗り組たる士官の内、兩人(松木と五代)を生捕りたり。其中一人は『カシワ』柏(松木)と号する医者にして、相応に英語に通ずる者なるか、先日日本使節(文久遣欧使節団)に従て欧羅巴に至り、当今は薩摩に在り船長の役(船奉行)を勤めたるもの、又一人は『オタニ』小谷(五代)と称して、薩摩蒸気船第一等の船長(船奉行添役)なり。此兩人は決して我に敵することなく、其船を奪はれたる後は我艦に乗り移りたり。是れ蓋し上陸して戦はんよりは、寧ろ英国提督(イギリス東洋艦隊司令長官 A.L. キューパー)の手に属するを欲するなり。扱此

兩人は本月廿四日(旧暦7月11日)の夜半過に、此兩人を神奈川に上陸せしめたり」
 (公爵島津家編纂所編『薩藩海軍史』(原本1928~1929年刊行)中巻、復刻版・『明治百年史叢書』第72巻、原書房、1968年、536~537頁/漢字の一部を現在のものに換えた。ルビと()内は長谷川。以下、『薩藩海軍史』からの引用について同じ)。
 この記事を福沢が読めばなるほど、『『カシワ』柏』とは松木のことだとすぐわかる。
 またこの記事では、「兩人を生捕りたり」とあるものの、「此兩人は決して我に敵することなく、其船を奪はれたる後は我艦に乗り移りたり。是れ蓋し上陸して戦はんよりは、寧ろ英国提督の手に属するを欲するなり」と、松木・五代が強制連行されたというよりは松木・五代の方から積極的にイギリス艦隊側に乗り込んだ印象を惹起する表現となっている。この表現を読んだ時の福沢に「松木に五代と云ふものは、捕虜でもなければ御客でもない、何しろ英の艦に乗り込んで横浜に來たに違ひない」と思わせたり、松木・五代が「醜夷(イギリス人)に随心いたし候様の疑惑」を薩摩藩から受ける要因のひとつをうかがわせるものとなっている。文久3年7月2日、鹿児島湾重富岬に待機していた薩摩藩蒸気船天祐丸(イギリス製蒸気船イングランド号)・白鳳丸(アメリカ製蒸気船コンテスト号)・青鷹丸(アメリカ或いはドイツ製蒸気船サー・ジョージ・グレイ号)を指揮していた船奉行松木弘安と船奉行添役五代才助(青鷹丸に松木、天祐丸に五代が座乗していたが、捕捉時に五代も青鷹丸にいた)は、薩英戦争勃発直前にイギリス艦隊に不当に捕捉された。その後のイギリス艦隊による鹿児島砲撃の精確さ(集成館はじめ鹿児島市内の1割が焼失した。薩摩藩側戦死者7名・負傷者52名)は、イギリス艦内にいる松木・五代からの情報・指示によるものではないかと薩摩藩から疑われた。特に五代は、イギリス商人トマス・グラバーと親交も深く、前年文久2年1月にはグラバーとともに上海に密航し、蒸気船を購入している(五代は万延元年<1860>には上海密航し蒸気船天祐丸を購入し、蒸気船青鷹丸も五代が上海への密航で購入した可能性がある)。五代は、薩英戦争を何とか回避させるべく、開戦直前まで東奔西走している。五代の養子五代龍作による『五代友厚傳』(非売品、訂正再版、1934年)では次のように記している。「此の時(イギリス艦隊が鹿児島に向かった時)君(五代才助)は長崎に在りしが、英艦の鹿児島に向ひたりと聞き、深く憂慮する所あり、一日**松本良順に告げて**曰く、『余の足下に面するは恐らく今日限りならむ』と。**松本訝りて其の理由を質すや**、君は決然襟を正して答ふらく、『生麦事件の爲め英国激怒し、直接武力を用ゐて事を解決せむとし、將に艦隊を率ゐて鹿児島に至らんとす。途次必ずや石炭積込みの爲め当地(長崎)に寄港すべし。若し果して彼等寄港せば、余は僭越の責を一身に負ひ、潔く屠腹して罪を君公に謝さんとす。其の之を為さずして徒らに傍觀せば、彼我互に砲火を交換し、市街は一夜にして焼土と化すべきは、火を觀るよりも瞭かなり』と。松本は其の事の余りに重大なるに驚き、啞然として復た言ふ所を知らざりしと聞く。然るに英艦隊は君の予想を裏切り、長崎に寄港せずして鹿児島に直航せり。君之を耳にして大に驚き、堀孝之を俱し、馬に鞭ちて急ぎ帰国せるも、藩論既に開戦と決し、又た如何とすることも能はず」(20~21頁/漢字の一部現在のものに換えた。()内とゴシックは長谷

川。以下同書からの引用について同じ)。五代は、独断専行の責任をとって屠腹する覚悟で、薩英交戦を避けるべく、鹿児島に向かうイギリス艦隊に生麦事件賠償金の内の1万ポンドを支払い横浜帰港を促すため長崎で待ち受けていたが、イギリス艦隊は長崎に寄港せず鹿児島に直航したので、今度は慌てて鹿児島に長崎通詞堀孝之を伴い急行したが時すでに失したのである。堀孝之は、日米和親条約の和解をした幕臣・開成所教授堀達之助の子息で、後に五代がイギリスへ薩摩藩留学生を引率して渡英する際も通訳として五代に随行する(またこの記述での五代と蘭方医松本良順が深い交流を持っていること示すエピソードは注目できる)。しかし、それでも、五代(及び松木)が鹿児島湾でイギリス艦隊と対峙している交戦勃発直前の状況においても、まだイギリス艦隊と和平交渉を放棄せず試みようとしていたことをうかがわせる風説が起こっていた。鹿児島県新史料編さん所編『鹿児島県史 忠義公史料』(原本『忠義公史料』は維新後に元鹿児島藩士市来四郎によって編纂されたもので東京大学史料編纂所が所蔵)第2巻(鹿児島県、1974年)に収録された薩摩藩側の薩英戦争報告書では次のように記されている。「松木・五代は……大砲打掛候に付(薩英交戦となり)、混々と縄掛個(牢)へ禁固いたし候由、風説に兩人異舟(イギリス艦隊)と往復して、生麦一条(生麦事件問題)つくのひ(償い)銀等彼是の儀申入候処、却て醜夷(イギリス人)に随心いたし候様の疑惑を受け……」(575頁/片仮名文を平仮名文に直した。())内は長谷川。以下『鹿児島県史料 忠義公史料』からの引用について同じ)。
〈松木・五代がイギリス艦隊によって捕捉されたのは、蒸気船を指揮している兩人がイギリス艦隊と往復して、(薩摩藩には無断に独断で)生麦事件の賠償金支払申入れをおこなっている内にイギリス人の命令に従うようになったから〉という風説である。特に、賠償金支払によって何としても薩英交戦を回避させるとする五代のそれまでの執拗な行動からすると、「醜夷に随心いたし候様の疑惑」を受ける程、この風説は一定の背景があるのである。もちろん松木・五代が、イギリスのスパイとなってイギリス艦隊に鹿児島砲撃のポイントを教唆したという疑惑はまったくの妄説である(実際、後にこの売国的疑惑は完全に晴れて、逃亡・潜伏中の松木・五代は帰藩を許されるのである)。しかし、先の「英字横浜新聞」の「此兩人は決して我に敵することなく、其船を奪はれたる後は我艦に乗り移りたり。是れ蓋し上陸して戦はんよりは、寧ろ英国提督の手に属するを欲するなり」を照応すると、松木・五代は、捕捉された機を用いて、果敢にイギリス艦隊に乗り込み積極的に司令長官キューパー直々に賠償金支払交渉と交戦中止を訴えた可能性がある(本稿注29参照)。当事者の松木自身は、捕捉時の状況について次のように回想している。「(文久3年)七月二日早天、英艦、我汽船に向ひ来たり。我船三隻(青鷹丸・天祐丸・白鳳丸)に彼船各一艘は舷を接し、水夫、我船中に速に去るべしと云ふ。余(松木)と五代とは、一船(青鷹丸)内に在り。之に答て云ふ、『未だ敵たるにあらず(未だ開戦になっていない)。何ぞ我船を奪はしむべきや。決して去ること能はず』と。彼云ふ、『好し。然れども、他の諸人を留む可らず』と。尚ほ、之を拒みて、士官を残し、桜島の前に至れる頃、他の士官も留む可らずと迫らるるが故に、士官も皆上陸せよと号令す。他の二船(天祐丸・白鳳丸)の乗組者は重富前にて皆去らしめられ、残る者なし。英艦、我三船を率ひ、桜島

の近き洋面に來れるを陸（薩摩藩軍側）より見て大に怒り、凡そ午前十二時、発砲を始む。彼れ、余及五代を英艦に移し、悉く我艦に放火せり。砲戦、三時計にして、陸より発砲を止む。英艦の砲撃は一時も長かりしならん。砲火の為に市街人家より火起り、盛に焼くるを望めり。琉船二、三隻碇泊せるものあり。英艦より小艇を出して、之に放火、焼失せり。薄暮、指揮艦（ユーリアラス号）より『宗則等來るべし』と云ふを以て、小艇にて指揮艦に來れば、双刀を奪ひ『アドミラル』（キューパー提督）及公使（代理公使ジョン・ニール）に謁して聞けば、艦長（ジョスリング大佐）次官其他数名、彈丸にて倒れたり（ジョスリング大佐ら戦死）と」（『寺島宗則自叙年譜』、寺島宗則研究会編『寺島宗則関係資料集』下巻、示人社、1987年、45頁／片仮名文を平仮名文に換え漢字と仮名遣の一部を現在のものに換え 句読点・『』を補った。

（ ）内は長谷川。以下同書からの引用について同じ）。松木の回想によれば、松木・五代の開戦直前の、イギリス艦隊による巧み・不当な捕捉が薩英開戦の契機となり、松木・五代指揮の青鷹丸・天祐丸・白鳳丸もすべてイギリス艦隊に放火されることになったのである。いずれにしても、松木と五代は、薩英交戦ぎりぎりまで、臨戦態勢にある鹿児島湾においてもまだ薩英戦争回避への執念は捨てないでいたことは確かである（この松木・五代の執念は、後の薩英交渉では逆に高く評価され、以後、薩英和親を前提とした藩政改革に松木・五代は重要な指導力を発揮していくことになる。五代の比義商社取建構想や松木のCOMPANY導入構想という一連の会社制度導入構想もこれを起点としていることは大いに注目すべきである）。その執拗な尽力振りは、79年後、日米開戦回避のため、開戦ぎりぎりまで日米交渉を持続した親英米派の尽力振りの雛型になっている。薩英戦争の結果は、イギリス艦隊側の損害が艦船大破1隻・中破2隻・戦死者12名・負傷者51名（戦後1名死）、薩摩藩側の損害が戦死者5名・負傷者14名と、人的損害はむしろイギリス艦隊の方が甚大であったが、集成館・鋳銭局や家屋約500戸が艦砲射撃によって焼失し、薩摩藩要路は、近代西洋の威力（イギリス艦隊7隻ばかりが72万石以上の大藩薩摩藩を大混乱に陥れた）を身をもって体験、即時攘夷の不可能を思い知らされた。薩摩藩は、イギリス艦隊退去直後に早くも薩英講和談判に乗り出すのである。

(25) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、151～154頁。

(26) 前掲『寺島宗則関係資料集』、45～46頁。該当する箇所は、次の通りである（ゴシックは長谷川）。「(文久3年)七月十一日、横浜に至れば、旧知たる米人『ウエンリード』來艦するに會す。其周旋を以て、夜に至り小艇にて河峯（川崎）駅の河流の下より上陸し、此駅に一泊し、次日江戸に入れり。英艦に在る時、清水卯三郎も亦在り。余等（松木と五代）一時潜伏し、鹿城（鹿児島）の状を知て帰るに如かずと決し、清水の郷里に至る可しと約せり。江戸に於て清水と會し、其の親族なる熊谷駅の一村、四方寺村に住する吉田六三郎に見へ、暫時身を托せんことを乞ひ、数日の後、其一族なる下奈良村吉田市右衛門の別室に寓す可しとの好意を得て此に転寓す。五代才助は同居一月余りにして、江戸の松本良順に乞ひ、其家從と稱して長崎に至れり（ただし、『福翁自伝』『五代友厚傳』での記述の通り五代の関東での潜伏生活は約半年間で翌年正月に長崎に赴いというのが正確である）。宗則は此年、尚下奈良村に在り。○十

月二十六日、妻阿茂登、白金に在て（阿茂登の実家医者曹宅）女子を生む、千嘉と名づく。明治八年九月十日死す。満十二なり。……元治元年（文久4年）甲子正月、江戸に來り、川本幸民、中原猶介等に會し、方今隠伏の情を陳べ、再び四方寺村に歸る。吉田市右衛門の家に在りて閑散なすことなし。読書に倦むときは其主人或は其男（子息）市十郎と囲棋悶を遣る。○七月、肥後七左衛門の報に云ふ、『藩命あり。帰藩すべし』と。同月二十六日、江戸白金曾の家に歸る。翌日、金杉の一楼、松本屋にて薩藩家老岩下佐治（次）右衛門に會す。今の名は岩下方平にして元老院議官なり。初は未だ公然帰藩の状なきを以て、藩人を訪はず、藩人も亦來らず。然れども爾後漸く往來せり。右の岩下及留守居新納加等、数々來訪れり。又福沢諭吉、箕作秋坪に訪はる。二年前共に欧行し、帰朝後未だ一面せざるの旧友に逢ふ、其歎、想ふべし。冬、白金なる曾の家を橋本某に売却し、高輪藩邸の官舎に転ず。或時藩邸の留守居新納加なる者、余を見んと云ふ。至り面すれば、新納云ふ、『長岑（長崎）に於て命ずべき藩用あり急に下寄すべし』と。十二月八日、無僕にて輕轎（輕籠）に駕し江戸を發し、東海道より大阪に至り、船にて小倉に上り、翌年（元治2）正月四日、長崎に着し、五代才助を見、其の藩用を問へば、薩の生徒英國に至らんとす、五代も共に同行すべしとなり。然れども之れが為に、一船を雇はんと欲して、其船未だ長崎に來らず。一旅亭に寓して之を待てり。『吉田市右衛門の家に在りて閑散なすことなし。読書に倦むときは其主人或は其男市十郎と囲棋悶を遣る』は、松木が薩摩藩との関係が最悪なものではないことを知り始める時期であることだけではなく、いかなる不安・緊張の〈恐怖の時代〉にあっても笑ったり寛いだりの日常性（娘千嘉を江戸白金の妻の実家、医師曹宅で生てさえている）もあるという至極当然なことをよく表している。これは福沢の場合でもまったく同様である。注目すべきは元治2年正月に長崎で再会した時の五代は、2ヵ月半後にイギリスへ密航する薩摩藩留學生派遣（松木・五代が引率）用の船舶調達に従事していたことである（これについては本稿次号で詳述する）。また、五代龍作前掲『五代友厚傳』では五代才助側からの逃亡・潜伏について次のように記している。「當時薩藩は幕府の命に反して英艦と交戦したる為め、其の藩士たる君等（五代と松木）は甚だしく幕府の忌憚に触れ、加ふるに汽船三隻を失ひ、剩さへ敵艦の捕虜となれるを以て、土道より言ふも阿容々々と藩邸に入ることを得ず、而已ならず、英艦に抑留中、彼等に対して我が国情を告げ、之と結托して助命せられたりと伝ふる者あり、為に幕吏の探索頗る急にして、藩論も亦硬化す。由つて君等は松本良順が、芝新銭座に於て家塾を開き、子弟を教授しつゝあるを耳にし、一夜密かに松本の塾を訪ひ、告ぐるに実を以てせり。折柄松本は塾生に対して講義中なりしが、直ちに之を中止して君等を居室に延ぎ、君等が世を忍ぶ身の上なるを聞きて大に同情し、伴ふて麴町の某鰻屋に至りて会飲し、兩人の隠れ場所に就きて種々談合す。江戸市中は固より危険なり、誰か彼かと物色して遂に吉田六左衛門（正確には吉田市右衛門）を得たり。六左衛門（市右衛門）は武州幡羅郡熊谷在奈良村の豪族にして、夙に国事を憂ひて東西に奔走し、志士の間に知らる。而して清水卯之助は吉田の親戚なり。松本も依頼せり、清水も依頼せり。六左衛門（市右衛門）之を諾して自家の近傍に一家を借受け、之を君等兩人の隠れ家とす。六左衛門（市右衛門）も亦た後年贈位の恩命

に浴せる一人なり。翌元治元年正月、君は藩論稍々緩和せるを探知し、先づ長崎に赴かせんとせしも、寺島は時期猶ほ早しとして之に同ぜず。**依つて君は松本良順の僕川路要蔵と称し**、六左衛門（市右衛門）の養子二郎を伴ひ、東海道を經て長崎に到り、酒井三蔵の家に潜む。一日同藩士（薩摩藩士）川村純義は、従者四名を伴ひて至り、君に面会を求む。君は藩の誤解と嫌疑とを受くる身なり、刀を帶びて之に面接することは藩主に対して憚りあり。殊には何等隔意なきことを示さざるべからず、即ち丸腰の儘川村等と会見す。彼問ひ、君答へ、質問応答数刻に及むで君は諄々世界の大勢を説き、且つ藩の施設に関し、十箇条の意見を示す。『藩の俊才を選抜して之を欧米に留学せしむべきこと』は実に其の内の一箇条なり。川村深く君の卓見に感動し、釈然として曰く『君の意見と誠忠とは、具に之を君公に言上すべし、今後は憚ることなく市中を闊歩して可なり』と。同藩士野村宗七（盛秀）も亦数々訪ね来たり、君の衷情と高見とを聞きて感慨措く能はず、帰へりて之を藩の有力者に告げ、詳に君の冤罪を訴ふ。茲に至り君の誠忠能く藩主を動かし、元治元年四月に至り冤始めて晴る」（29～31頁／ゴシックは長谷川）。『五代友厚傳』では、松本良順の存在が非常に大きく記されている。しかし、イギリス艦隊を出た直後、江戸の松本をまず訪ねそこで今後の逃亡・潜伏方針を決めたというのは考え難い。これは「寺島宗則自叙年譜」「福翁自伝」の記述の方が事実であろう。『五代友厚傳』での上の松本良順についての記述は、松木・五代について清水の深刻な相談を受け最適な方策を与えた蘭方医川本幸民を混合したと思われる。また薩英戦争勃発の頃、新銭座に住居し洋学を教えていた福沢諭吉のことも混合されたかもしれない（『五代友厚傳』での「伴ふて麹町の某鰻屋に至りて会飲し」は『福翁自伝』での福沢が松木と再会した時の「其時私は新銭座に居りましたが、マア久振りで飲食を共にして」を想起させる）。しかし、「寺島宗則自叙年譜」での「五代才助は……江戸の松本良順に乞ひ、其家従と称して長崎に至れり」は、『五代友厚傳』での「君（五代才助）は松本良順の僕川路要蔵と称し……長崎に到り」と重なるだけではなく、『五代友厚傳』では薩英戦争前後の重要な場面で複数回、松本良順が登場する（本稿注②④②⑦参照）ことから、松木・五代の逃亡・潜伏支援に関して松本良順が深く関与していたことは確かである。また注目すべきは、長崎潜伏中の五代に面会した薩摩藩士川村純義（幕府長崎伝習所で航海術を学ぶ）・野村宗七（盛秀）らに、五代が「諄々世界の大勢を説き、且つ藩の施設に関し、十箇条の意見を示す。『藩の俊才を選抜して之を欧米に留学せしむべきこと』は実に其の内の一箇条なり」と説いたという、『五代友厚傳』が記したエピソードである。「十箇条の意見」とは五代が薩摩藩に提出することになる薩摩藩の早急な近代化を建白した「五代才助上申書」の草案を示している。上申書には英仏への留学生派遣建白が重要項目として盛り込まれている。このエピソードは、28歳の五代が先の見えない不安・恐怖の逃亡・潜伏生活にあって、自らが内面的に何とか生き続けられるための糧でもあるかのように、上申書草稿を心血注いで練り続けていたことを示唆している。明治初期を代表する実業家となる五代友厚には、意外とまとまった長文がない。「五代才助上申書」は、五代生涯最大の長文となった。また野村宗七は、後に、五代の比義商社取建構想の一環としての、越前藩と薩摩藩の共同商社取建（本稿注⑪参照）とパリ

万国博覧会への薩摩藩出品に積極的に関与して、五代の改革構想への傾倒振りを発揮することになる。このことの詳述も次回以降おこなう。

- (27) 五代龍作前掲『五代友厚傳』では、次のように記している。「開戦と共に君（五代才助）は甲板に上り、彼我の戦況を視察するに、敵の旗艦は多く空弾を放ち、実弾は五発中僅に一発位に過ぎず。蓋し彼の目的は破壊に非らずして威力を示すにあるもの、如し。然かも彼の実弾（椎実弾）は我の球弾と異り、破壊力の大なると命中率の正確なることは到底我の及ぶ所にあらず。殊に我より発射せる砲丸は多く皆前面海中に墜ちて敵の甲板に達するもの尠し。此の実況を目撃せる君は、幾度か切齒し、**後日松本良順に語りて曰く**、『余は我が砲丸が敵艦に命中し、甲板に立てる余を破碎せんことを冀^{こいねが}ひたり』と」（27頁）。これによると、五代才助は、イギリス艦隊側からの正確なる砲撃による鹿児島炎上を眼前に切齒扼腕して観ていた。このエピソードでのイギリス側のアーム・ストロング砲と薩摩藩側の砲の性能格差のことは、五代が、日本と西洋の格差を強く再認識したこと（近代西洋からの技術・制度導入の早急な必要性を再認識したこと）の最適象徴を表している。このエピソードがリアリティーに裏付けられたものであることは、五代が逃亡・潜伏中に起草し、薩摩藩に提出した「五代才助上申書」での「（藩主島津忠義公は）地球上の時変を御待ち遊ばされ、是非一度は英国都府（ロンドン）へ其^{そのたび}度の御遣恨（薩英戦争による鹿児島炎上）、御復讐遊ばれずば、何分（以下数語脱字）べからず。譬へ御一代にて御鬱積、御晴遊ばされず候節は、御子御孫迄も屹^{きつ}と御遺言仰せ置かれ候様、念願存じ奉り候」（前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第2巻、940頁）がよく示している。藩随一の親英派と思われた五代の、松本弘安の「最上の君主（天子）を理解し奉り、其命、摂中の大商に令し、大商諸侯相合して所謂コムパニーとなり、全国中一致せば、此時こそ大雪辱の時を得たりといふべし」との謂よりも、遥かに直截的且激烈に、尊攘派も顔負けの、イギリスに対する執拗な復讐心と怨恨に満ちたこの文言が表すものは、福沢諭吉らを驚愕・恐怖せしめた村田蔵六の変貌の場合同様、「（藩内攘夷派のことを按配して）攘夷の仮面を冠つて居たのか」という面と「本当に攘夷主義になつたのか」という面が分けられぬ程、その両面が混合せざるをえない（程度の差はあれこのことは福沢らも免れることはできない）、〈恐怖の時代〉の様相なのである。また上のエピソードで注目すべきは、五代と蘭方医松本良順が深く関係していたことを示唆していることである。『五代友厚傳』での他の記述（本稿注24参照）からもわかるように、長崎養生所でオランダ医師ボンベの指導を受けながら西洋医術の実践をおこなっていた松本と長崎で藩命に従事してた五代は、この長崎時代に親交を深めたのである。松本良順は、戊辰戦争に際しては、幕軍側にあって救命活動をおこなったので、官軍側に捕られる（その後釈放されたが）経緯を持つことになる。
- (28) 前掲『薩藩海軍史』中巻は次のように記している。「薩英戦争の終るや、薩藩に於ける頑固者流の迷夢（即時攘夷の迷夢）は一般に覚醒されたり。世界最新砲の威力の洗礼を受け、我が砲台の砲力は、射程距離十町内外を適度とするに、彼れは五千碼即ち四十町の遠距離より砲弾を送り、以て我が兵士を喫驚せしめたり。就中甲鉄白壁船（旗艦ユーライアラス）の偉大にして、兵器並に技術の進歩せる等を実戦に徴して感

覚し、彼れの長を採るの緊要なるに想到せしめたり。然れども敵艦の再襲には備ふる所なかるべからず、其の軍備補充には焦慮する内にも、藩公（島津忠義）並に重臣は戦の非なるを察し、和睦の必要なるを看取せり。会々支藩なる佐土原藩主島津忠寛は戦後宗藩のことを憂慮し、家老樺山久^{ひさのぶ}舒（舍人）、用人能勢直陳を鹿児島に遣はし、時局の為に幹旋せしむる所あり。依りて藩庁にては兩人に二公（島津忠義と島津忠寛）の命を伝へ英人と応接の事を委嘱す」（624頁）

- (29) 同上『薩藩海軍史』中巻では、横浜における薩英講和談判での薩英応答の状況を記した「亥（文久3年）拾月五日松平修理太夫（島津忠義）殿御家来英人応接覚書」を掲載している。この覚書によれば、薩摩藩側重野安禪らは、イギリス側ニール代理公使らに対して、「我政府にても平穩に諸事談判致すべくとの事に之有り候得ば……懇親に右賞金のこと談判致すべく候。然れども、此方より申し入れ候事、二ヶ条^{これ}之有り候。一ヶ条は軍艦を買入れ度候間、周旋頼み入り^{たく}度候。素より^{ヨーロッパ}欧羅巴諸州に於ても、軍艦売買禁止のこと承知いたし居り候得共、強て頼み入り候。此方にても国命を表し、我政府に於ても両国懇親^{かど}の廉、相立て候様に相成り、素より鹿児島戦争（薩英戦争）のことも、是にて両国和親いたし候印にも相成り申すべく候。又（もう1ヶ条は）貴国軍艦に乗組ませ連れられ趣候士官兩人〔松木・五代を云ふ〕、此方へ引渡し呉候様いたし度候」（650頁）というように、2ヶ条（軍艦購入周旋と松木弘安・五代才助引渡）の講和条件を示している。しかし、この段階ですでに、薩摩藩にとっての「松木弘安・五代才助引渡」は、松木・五代の処罰のためではなく、薩英講和・和親に必要な不可欠な存在として松木・五代を確保することを意味していた。これに対してイギリス側は、「御国の者御兩人引渡方の儀仰せ聞かせられ候得共、右御兩人（松木・五代）は最早、船中には居り申さず候事は定て^{しか}聡と御承知の事と存知候。右御兩人船中に居り申さずことは、委細『アドミラル』（キューパー提督）御承知に候得ば、同人より明白に申し上げ候」（652頁）と事実通り答えている。以下、松木・五代についての薩英間の質疑応答は次のように息詰るように展開されている（652～655頁）。英：「蒸気船を質に取り候節、乗組の人々何れも武器を携へ上陸致され候処、右兩人決して上陸いたし候儀相好み申さず故、船中へ留め置き呉れ候様申し聞かせられる旨、翌日其船の将（将官）より承り申し候」「右は全く兩人の望み任せ、横浜に連れ越し候にて、船中にてても丁寧に取り扱ひ連れ越し申し候。当港（横浜港）著し後直に兩人の求によりて上陸致させ申し候。右に付、当方にて留め置き申さざることは明白に候へば、如何して引渡候儀出来申すべき哉」。薩：「右兩人御当地へ、屹と上陸いたし候哉」。英：「上陸致させ候儀、相違之無く候」。薩：「軍艦を以て箱館へ相廻し、又は英国へ送られ候様子、承知致し候」。英：「何故、右様、致すべき哉」。薩：「右兩人、神奈川へ上陸いたし候哉、横浜へ上陸いたし候哉」。英：「右は日本小舟へ乗り本船を離れ候節、『アドミラル』に暇乞^{ゆぐえ}いたし候後、右兩人の行衛心得申さず候」。薩：「何様の小舟に候哉」。英：「『アドミラル』、右舟見分致さず候故、相分り申さず候。元来、右兩人の望に任せ連れ越し候事故、決して当方にて引連れ候儀は之無く候間、其後の所、何様御尋ね之有り候とも、更に相心得申さず候」。薩：「何日に兩人上陸いたし候哉」。英：「軍艦着いたし候日（7月11日）に之有り候」「右兩人の事、前条の通り之有り

候。且軍艦売の儀出来兼候」。イギリス側は、松木・五代を補足したが横浜行は松木・五代の希望であり強制連行では決してないことを強調している。キューパー提督が、横浜上陸などその後の松木・五代の行動の自由を承認していることからしてもこれは事実である。松木・五代がイギリス艦隊にあって直接イギリス側に何らかの形で薩英和親を働きかけていたのは間違いないであろう。薩摩藩が松木・五代は実は箱館かイギリス本国に護送されたのではないかと疑ったり、松木・五代の横浜上陸日や使った小舟のことまで尋ねていること、そもそも薩摩藩側が講和条件2ヶ条のひとつにあえて松木・五代引渡を要求したこと自体が、この時期いかに薩摩藩が松木・五代を必要としていたかを如実に表している。薩摩藩講和条件2ヶ条のもうひとつ、軍艦購入周旋については、「(軍艦購入周旋のことは)素より鹿児島戦争(薩英戦争)のことも、是にて両国和親いたし候印にも相成り申すべく候」(軍艦購入を薩英和親の印・象徴にしたい)とする薩摩藩側の表明に対してイギリス側は「(イギリス政府が直接国外に)軍艦を売掛候事、決して之無く候。尤、政府にても不用の軍艦之有り候得ば、政府の許しを経て国内の者へ売下げ候事も之有り候」(652頁)「各国と御取引相成り候条約の通り(政府による軍艦国外売却の禁止)、御取引相成り、一体平穩に相成り候上は、軍艦御入用に候得ば、其旨、政府へ申し遣し、二十艘にても御世話仕るべく候」(655頁)と快諾している。松木・五代も薩英和親の印・象徴的存在になっている。ここに薩英和親は成立した。

- (30) 清水卯三郎の洋学の師は、松木弘安・福沢諭吉の洋学上の盟友、箕作秋坪の養父蘭学者箕作阮甫であり、松木・五代のことをむしろ薩摩藩に届けるべきであると積極的な松木・五代救援策を清水に勧めたのは松木の洋学の師である川本幸民であり、松木・五代を保護したのは蘭方医松本良順であった。特に川本幸民は、三田藩(現兵庫県三田市)医・幕臣・幕府開成所教授であるが、弘化2年(1845)に薩摩藩に招聘されて以来、薩摩藩と強い繋がりがある。さらにいえば、川本幸民と松本良順と福沢諭吉・箕作秋平共通の師緒方洪庵は、すべて蘭方医坪井信道門下であり、坪井信道と箕作阮甫は宇田川玄真(榛斎/宇田川玄随に学び玄随死後、宇田川家を継ぐ)門下であった。また、松木が「川本幸民、中原猶介等に(江戸で)会し、方今隠状の情を陳べ」と述べているように(本稿注26参照)、松木の洋学友中原猶介は薩摩藩士でありながら逃亡潜伏中の松木を何らかの形で支援していたのは明らかである。若き日のまだ辮髪の魯迅(22歳)が西洋医学を志し、福沢諭吉(68歳)が没した翌年、1902年(明治35)に仙台医学専門学校(現東北大学医学部)に留学するまでの経緯を、魯迅は『呐喊』自序(清朝打倒となった辛亥革命から12年を経た1922年〈大正11〉)で次のように述べている。「(父の病死を契機に漢方医学を見限った魯迅は洋学校K学堂へ入りそこで)以前の(漢方)医者の理屈や処方、今知ったこととくらべてみて、次第に私は、漢法(漢方)医は結局意識的あるいは無意識的な騙りに過ぎない、というこをさとするようになったのである。……さらにまた、翻訳された歴史書によって、日本の維新が大半、西洋医学に端を発しているという事実をも知るようになったのである。……これらの幼稚な知識のお陰で、のちに私の学籍は、日本のある田舎町の医学専門学校(仙台医学専門学校)に置かれるようになった」(竹内好訳『魯迅選集』第1巻、

岩波書店、8頁／ルビ・ゴシック・（ ）内は長谷川、以下同じ）。魯迅が鋭く洞察しているように、明治維新が、特に蘭方医学のような西洋医学に端を発した洋学ネットワークに依るところは非常に大きい（ただし同時に明治維新のもうひとつの原動力は洋学の対極にある尊攘思想のようなアジア的復古思想であった）。魯迅の日本留学の目的は医学ばかりではなく、旧態依然たる清朝専制抑圧支配打破への密やかな志しの指標としての明治維新・近代日本を見極めることもあった。漢方を見限って西洋学を志向した方向への軌跡は、福沢諭吉の場合とほぼ同じである。漢学を見限った福沢が西洋医学から「不羈独立」「不羈自由」の啓蒙思想へと転じていったように、魯迅の場合も、仙台医学専門学校で体験した有名な幻灯事件（ロシア側の中国人スパイが日本軍に処刑されるところを「薄ぼんやりしている」表情の中国民衆が「お祭りさわぎ」として見物している日露戦争時のスライドを観て魯迅は大きな衝撃を受ける）を契機に「愚弱な国民は、たとい体格がどんなに健全で、どんな長生きしようとも、せいぜい無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけではないか。病氣したり死んだりする人間がたとい多かろうと、そんなことは不幸とまではいえないのだ。されば、われわれの最初になすべき任務は、彼らの精神を改造するにある」（9頁）と医学から文学へと転じていく。魯迅の中国民衆への絶望は、福沢の「先祖代々、独立の気を吸はざる町人根性、武士には^{くし}窘められ、裁判所には叱られ、一人扶持取る足輕に逢ても、御旦那様と崇めし魂は、腹の底まで腐れ付き、一朝一夕に洗ふ可らず」との日本民衆への絶望と、アジア性として通底するものがあり、「されば、われわれの最初になすべき任務は、彼らの精神を改造するにある（啓蒙思想）」との魯迅の決意は、「其気風とは、所謂スピリットなるもので、俄にこれを動す可らず。近日に至り、政府（明治新政府）の外形は大に改りたれども、その専制抑圧の気風は、今尚存せり。人民も稍^{やや}權利を得るに似たれども、其卑屈不信の気風は、依然として旧に異ならず」「こゝに又無形の一物あり、この物たるや、目見る可らず耳聞く可らず、売買す可らず、売買す可らず貸借す可らず、普く国人の間に位して其作用甚だ強く、この物あらざれば、彼の学校以下の諸件も実の用を為さず、真にこれを文明の精神と云ふ可き至大至重のものなり」との認識に基づき、「腹の底まで腐れ付」いた無気力な「町人根性」（アジア的奴隸精神）を真の「文明の精神」「人民独立の気風」に「精神を改造するにある」との福沢の決意と通底している。しかし、福沢より半世紀も後の世代の魯迅が、福沢の啓蒙思想と通底する地点から分岐していくのは、魯迅の中国民衆への絶望のベクトルが魯迅自身の内面への絶望のベクトル、逃れようのない自己の存在の「寂寞」「寂寥」に転じていくこと、近代西洋精神史が経てきた近代的自我のこと、つまり啓蒙主義やいっさいの表面的な政治思想をはぎ取った赤裸々な真の文学へと再度転じていくことにおいてである。『呐喊』自序では、医学から文学に転じ帰国した魯迅が「彼らの精神を改造する」べく実際の文学活動に投じたものの次々と挫折した果ての自分について、次のように述べている。「この寂寞は、さらに一日一日成長していつて、大きな毒蛇のように、私の魂にまつわって離れなかった。……ただ自分自身の寂寞だけは、除かないわけにはいかなかった。それはあまりに私にとってあまりに苦痛であったから（魯迅は実際に死の近くまでいつている）。そこで、私は、種々の

方法によって、自分の魂を麻醉させ、自分を国民の中に沈め、自分を古代に返らせようとした」(10頁)。もはや国民は「彼らの精神を改造するにある」とする単なる啓蒙の対象ではなく、同時に「英雄」でもなんでもない麻醉して「薄ぼんやりしている」魂の自分がその中に没していく奥深い懐になっている。この段階を経て魯迅は、近代的自我を基底に再度文学活動と社会変革へと向かうことになる。西洋医学への接近に端を発した、福沢から魯迅へと〈アジア的なもの〉に対峙していく軌跡は現在まで続いている。

- (31) 前掲『薩藩海軍史』中巻では、「市来四郎自叙伝」を典拠にして、「元治元年五月、小松帯刀、五代の境遇に同情し、私かに市来四郎に命じ、長崎にて金数百両を与へんとす。蓋し上海に渡行せしめんが為めなり。然るに五代、之を辞して受けず。尚ほ「ガラバ」の家に寓す。此時未だ復帰を許されず」(866頁)と記している。小松は、すでに潜伏中の「五代才助上申書」草稿の内容を認識しているものと推測できる(「五代才助上申書」は、逃亡中帰藩前に、事実上すでに薩摩藩に提出された可能性もある)。つまり、五代への上海渡航の勧めは、上海亡命ではなく、「五代才助上申書」での建白項目の主要なひとつである上海交易(長谷川洋史「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について—石河確太郎と近江商人—」(3)) (福岡経済大学経済研究会『福岡経大論集』第39巻第1号、2010年参照)実施準備のためのものと推測できるのである。五代としては、上海渡航よりもまずは正式な帰藩に基づく「五代才助上申書」の承認化を優先したのと考えられる。
- (32) 同上『薩藩海軍史』中巻では、薩摩藩のイギリス艦隊来襲を予想した鹿児島湾防衛に関して次のように記している。「同月(文久3年6月)五日、国老小松清廉(帯刀)、及び側役中山中左衛門、大久保一蔵等、其他当局の吏員、沖小島砲台を巡視し、演習射撃をなさしめ、桜島各砲台をも同じく巡視せり。而して本日の巡視は水雷敷設の議あるに依り、洋学者石川(石河)確太郎、其他集成館局員一同出張せり」(414頁)。石河とともに出張した集成館局員一同の内には、集成館掛宇宿彦右衛門もいたことは確かである。日本における水雷開発については、石河確太郎や宇宿彦右衛門が先駆をなしている。電気水雷については、石河の専門分野のひとつであり、文久元年(1861)6月に、石河は、当時藩命で長崎での電気水雷術練習を終えたばかりの小松帯刀とともに(小松は石河の洋式兵学の門弟ともいえる)、鹿児島磯ノ浜で、藩主島津忠義に、電気水雷実験を披露したことがあり、石河は実験成功を記念して、「奉賀 小松平佐君電気水雷(小松平佐君の電気水雷を謹んで祝う) 橘光龍(石河正龍)」として、小松に「造化神巧人奪来 乾坤洪力一絲媒 不容醜虜窺灣口 齊粉(塗粉)鐵船奪怒雷」との詩を作り贈っている(「小松帯刀日記」<『鹿児島県史料集』22>、鹿児島県立図書館内鹿児島県史料刊行会、1981年、76頁/()内は長谷川)。薩英戦争に際して、宇宿彦右衛門は石河と協力して鹿児島湾で、日本初の実戦での水雷敷設を実施することになり、石河の「容さざる醜虜(外人)は金錦湾(鹿児島湾)を窺い、その醜虜の鉄船を怒りの電気水雷は塗粉(粉々)にして奪う」と小松に贈った思いは現実のものとなったが、イギリス艦隊には、航路の関係で水雷は的中せず、日本初の実戦での水雷戦果とはならなかった。また、市来四郎(長崎丸砲撃事件につき下関を訪れ

長州藩側に抗議・談判したり、長崎グラバー邸に潜伏中の五代才助を訪ね小松帯刀からの上海渡航の勧めを伝えた）編集の前掲『忠義公史料』では薩英戦争直後の各砲台整備・修築について、「斯くの如く（各砲台整備・修築を）令せられ、即日神瀬築造方吏員数名に命ぜられたり。……又修築方法は、石川確太郎〔正龍〕及び折田要蔵〔年秀〕なる者特命を蒙れり」（前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第2巻、550頁）と記している。石河確太郎と同年の折田要蔵は、蘭学を箕作阮甫に学び砲術・築造を専門とし、専門分野は石河と重なるものが多く、「〔薩摩藩は〕紡績所（鹿児島紡績所）の建設は、松岡十太夫を総裁に任命し、作事奉行折田要蔵をして監理せしめ、工場建築は『シルリングフォールド』（英国人技師）を之れに担当せり」（前掲『薩藩海軍史』中巻、976頁）とあるように、石河がその建造の端緒を開いた日本初の機械紡績所である薩摩藩鹿児島紡績所（慶応2年〈1866〉11月开工・慶応3年5月竣工）建造の監督・取締を作事奉行として担当している。折田は、維新後暫くして下野、鉄砲商など経て、奇遇なことに石河の祖先楠正季の兄正成を祭った神戸湊川神社の宮司となり生涯を終えた。

(33) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、154～155頁。

(34) 前掲『薩藩海軍史』中巻の「西瓜売りの決死隊英艦に向ふ」によると、未遂に終わった〈西瓜売り決死隊〉計画とは、次のようになる。7月28日（開戦1週間前）、薩摩藩側の賠償金支払・殺傷犯引渡の陸上談判要求（上陸するキューパー提督・ニール代理公使らを捕虜にして談判を有利にするためとする説あり）をイギリス艦隊側が拒否し、翌29日のイギリス側艦上交渉を要求した直後、生麦事件を引き起こした奈良原喜左衛門・海江田信義はイギリス艦隊への捨て身の斬込決死隊計画を發議すると、「一説に依れば、久光公は此計画には甚だ不同意なりしも、大久保（一蔵）其他勇士の切望に依り、特に其の請願（斬込決死隊実施の請願）を容れ之れを許可せられたりと、其説果たして真なるや否やを知らず〔市來四郎講演〕。兩人（奈良原・海江田）は大に感激し武門の面目、之れに過ぎずと為し、乃ち退いて召集の令を發せしに、勇猛憤激先を争ふて之に応じ決死の士、八十余人〔實際は九十六人に及べりと云ふ説あり員数精確ならず〕を得たり」（480頁）となった。その斬込決死隊計画とは当初は「以上（奈良原・海江田率いる80余人）孰れも驍悍決死の勇者にして、豪氣勃勃殆んど人意の表に出づ。是に於て、部署を定め、兵士は短被に袴を穿ち、各副刀一個を佩ぎ、身を商売に擬し、八隻の小艇に各々七、八名乃至十余名分乘し、其一隻は答書（談判交渉用書類）を持して、旗艦『ユライアラス』に乗り入り、他は皆菓果を与ふと称して、各々自余の六艦に上る事となせり。而して砲台より機を見て一発の号砲を放たば、各部の兵士は一齊に満艦の敵兵を乱撃すべし。殊に旗艦に於ては、答書を艦長に交付し、先づ云々の談判を開き、号砲一声の下に、使節初め提督等を斃す事に定め、且つ号砲は実弾を發射するに決したり」（482頁）というものであった。つまり、この計画の中心標的は、旗艦ユライアラス号のキューパー提督・ニール代理公使らイギリス艦隊中枢を壊滅することにあった。しかし、当初の計画は、国父島津久光の命令で次のように変更された。「既にして奈良原・海江田は、計画の次第を久光公に具申せしに、公曰く、『計画頗る良し、然れども号砲に実弾を用ひるは不可なり、若し実弾

を放たば、恐くは彼の船体を毀損せん、寡人（自分）願くは船体を傷つけず奪取せんことを欲す、故に空砲を放ちて合図となすべし」と。奈良原、海江田は君命を畏みて、破天荒の快挙を断行すべく引退せり」（同頁）。計画は、イギリス艦隊の無傷の乗っ取り・捕獲を重視するものに変更された。かくして、6月29日、ユーライアラス号での談判交渉役を装った者（提督・代理公使斬殺使命も帯びる）を含めたく西瓜売り決死隊は小艇に分乗して出撃したが、異変を察したイギリス艦隊側の警戒が厳重で隙がなく（予想に反してイギリス艦隊は危ない西瓜売りを断り上艦させなかった）、判交渉役を装った者たちがユーライアラス号将官室でニール代理公使と時間稼ぎで交渉をおこない計画実行合図の号砲（空砲）を待ったが、「密かに号砲の響くを待ちしが、遂に発動の一声を聞くに至らず。時しも房村猪之次なる者、旗を振り小舟をかして来艦し、『一先づ引上げよ』との君命を伝えしかば……此決死隊は皆城下に帰還したり」（484頁）と久光・忠義からの中止命令によって、計画実行は未遂に終わった（この艦隊乗っ取り計画は、今度はイギリス艦隊側が、開戦直前、松木弘安・五代才助の指揮する3隻の蒸気船団を、無血でまんまと奪取することで見事に仕返されている）。しかし、五代龍作前掲『五代友厚傳』では次のように記している。「此の日（文久3年6月28日、開戦1週間前）英艦により我（薩摩藩）に対し、魚、卵、及び野菜等の供給方を求む。依つて藩庁は茲に一策を案出し、先づ彼等（イギリス艦隊）が求むる所の品及び西瓜等を小舟に積み、商人及び船頭に変装したる勇悍の士を之に乗り込ませ、彼の油断に乘じ、突然起つて艦内に斬込ませ、之を合図に各砲台より砲門を開き、一斉射撃を以て（斬込隊もろとも）英艦隊を葬り去らんとせり。茲に於て決死の勇士九十八人を（鶴丸城の）二の丸に招集し、久光、忠義出で、彼等（斬込隊）に面し、深く其の忠勇を賞して離杯を与ふ。諸士感奮、勇躍小舟に搭じて難に向ふ。併かも英艦の警戒頗る厳重にして近寄ること能はず。遂ひに此の奇策を施すに術なくして止みぬ」（23～24頁）。ここでは決死隊の目的が艦隊の乗っ取り・捕獲ではなく、決死隊丸ごとの艦隊殲滅になっている。砲台からの号砲が斬込みの合図ではなく、斬込みが砲台からの一斉射撃の合図に変わっているのである。こちらの方が文字通り必死の決死隊である。したがって、『五代友厚傳』での「久光、忠義出で、彼等に面し、深く其の忠勇を賞して離杯を与ふ。諸士感奮、勇躍小舟に搭じて難に向ふ」との決死隊出撃時の描写は、「小舟」を中古の戦闘機・艦艇など各種近代兵器に置き換えれば、太平洋戦争末期の特別攻撃出撃時の風景を喚起させるものがある。もともとわずか40人・50人位のく西瓜売り決死隊の斬込みで、乗組員総数約1,500名・7隻のイギリス艦隊を乗っ取り・捕獲できるわけがないので、実際に斬込みを実行していたら、く西瓜売りの決死隊はほぼ全員玉砕していたであろう。く西瓜売りの決死隊には『五代友厚傳』での解釈に拡大していく要因が内包されていた。国父久光ら薩摩藩要路からの制約がなければ、発案者奈良原・海江田自身のく西瓜売りの決死隊の究極のイメージは「彼の油断に乘じ、突然起つて艦内に斬込ませ、之を合図に各砲台より砲門を開き、一斉射撃を以て英艦隊を（斬込隊もろとも）葬り去らんとせり」にあったことは確実である。一発の合図の号砲が起らなかったで、薩英戦争は、長期の破滅の深みに嵌まり込んでいくこともなく、短期間で終結・講和さらには薩英和親に転じる

ことができたともいえる。薩英戦争など幕末期の攘夷について未遂で終わったことを、80年後の対英米攘夷戦争では、ことごとく徹底して実行し、長期の破滅の深みに嵌まり込んでいったものともいえるのである。

- (35) 前掲『福沢諭吉選集』第10巻、130頁。
- (36) 長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(3)」参照。
- (37) 前掲『薩藩海軍史』中巻では、「時に鹿児島商人魚住源蔵、一行(薩英講和談判役一行)に従ひ、事に給す。安政中、魚住・蒲生等、宗藩(薩摩藩)に乞ひ、佐土原藩の用達とせるものなり」(634頁)と記してある。
- (38) 長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(3)」参照。
- (39) 前掲『薩藩海軍史』中巻では、「(いったん長崎に上陸した樺山舎人・重野安経ら薩英講和談判役一行は横浜への航行用船調達のため)長崎奉行に乞ひて官船を借る。奉行、船を借し技手水夫を借さず。更に議して薩商浜崎太平次(9代浜崎太平次)が主管某に命じて窃に汽船を購ふ。^{プロシア}李漏西人の所有に係る価拾四万両を以て購ひ得、之に搭じ、(文久3年)八月朔を以て出航を決す。其間、英商『ガラバ』が別荘に遊び、又中原猶介が寓を訪ふ。猶介も亦薩人、藩命を受け、是に来て器械場を監督せり。特に器械場を設け、外人を雇傭して銃器及船具を製造す」(634頁)。9代浜崎太平次が仲介して購入したという外国製汽船によって薩英講和談判役一行が横浜渡航をしたかどうかの確証はないが、この記述は、薩英講和談判役一行派遣に関して浜崎太平次家(9代浜崎太平次)が関わっていたことを示唆している。またこの記述では松本弘安の洋学友中原猶介と五代才助と深交のある英商グラバーのことが出てくる。中原は翌年正月にまだ正式な帰藩許可が下りていない松木と江戸で会った際、この時の長崎での薩英講和談判役一行の様子を松木に語ったに違いない。また中原がこの時期、長崎で外国人を雇って「銃器及船具」を製造する「器械場」の建造・運営に従事していたという記述は大変注目できるが、これについては、薩摩藩長崎機械工場のことも含めてまだ明確になっていない。長崎を活動の拠点のひとつにしている9代太平次が中原猶介やグラバーと交流があることは、極めて自然なことであるし注目すべきことでもある。
- (40) 『福翁自伝』、前掲『福沢諭吉選集』第10巻、270頁。
- (41) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳、岩波文庫・改訂版、1989年)の見事さは、「資本主義の精神」について深く突き詰めただけではなく、「資本主義の精神」の反対概念として、ヴェーバーが提示した「伝統主義」についても深く突き詰めたことにある。ヴェーバーは、「伝統主義」について次のように述べる。『『倫理』の衣服をまとい、規範の拘束に服する特定の生活のスタイル、そうした意味での資本主義の『精神』が、何をさておき遭遇しなければならなかった闘争の敵は、ほかならぬ伝統主義とも名づくべき感覚と行動の様式であった。……近代の企業家が『自分の部下の』労働者たちから可能なかぎり最大限度の労働を獲得する、すなわち労働の集約度を高めるために通常利用する、技術的方法の一つに出来高賃銀[Akkordlohn]がある。たとえば、農業では収穫時が通常、労働の集約度を最大限度に高めることのもっとも必要となる場合とされている。収穫をできるだけ早く終らせるか否かによって、しばしば利潤が莫大となったり損失が生じた

りするからで、天候の不順な場合はとくにそうだ。したがってほとんど例外なく出来高賃銀制が採用されている。しかも、収益が増加し経営集約度が高くなってくると、収穫を早く終わらせる企業家の関心も概して増大するから、彼らは当然に繰り返し、手あたりしだい労働者に対して出来高賃銀の率を高くし短期間に得られる報酬を桁はずれに多くすることで、労働の増大に関心をもたせようと試みたものだ。しかしその場合、特殊な困難が生じた。すなわち、出来高賃銀率を引き上げる結果として期待したように一定期間内の労働が増大せず、それどころか、むしろ減少するという場合が目立って多かったのだ。というのは、出来高賃銀率の引き上げに対して、労働者たちが一日の仕事を増加させずに、むしろ減少させるという反応を示したからであった。たとえば、従来一モルゲン〔エイカー〕の刈り入れにつき一マルクの報酬では日々二・五モルゲンを刈り入れて、一日につき二・五マルクの報酬を得ていた労働者が、出来高賃銀率が一モルゲンにつき二五ブフェニヒ引き上げられたのに応じて、報酬の引き上げによって期待されたように、たとえば三モルゲンを刈り入れて三・五マルクの報酬を手に入れることをしないで——そうした場合も、もちろんあったろうが——一日にわずか二モルゲンを刈り入れるに止まり、従来と同じく一日二・五マルクの報酬を得ることで、(カトリシズムの言葉を使えば)『足れり』とした。報酬の多いことよりも、労働の少ないことの方が彼を動かす刺激であったのだ。彼が考慮にいたしたのは、できるだけ多く労働すれば一日にどれだけの報酬を得られるか、ではなくて、これまでと同じだけの報酬——二・五マルクを得て**伝統的な必要を充たす**には、どれだけの労働をしなければならないか、ということであった。まさしくこれは、『**伝統主義**』とよばれるべき生活態度の一例だ。人は『生まれながらに』にできるだけ多くの貨幣を得ようと願うものではなくて、むしろ簡素に生活する、つまり、習慣としてきた生活をつづけ、それに必要なものを手に入れることだけを願うにすぎない。近代資本主義が、人間労働の集約度を高めることによってその『生産性』を引き上げるという仕事を始めたとき、カトリシズム到る所でこのうへもなく頑強に妨害しつづけたのは、資本主義以前の経済労働のこうした基調であった」(63～65頁／ゴシックと()内は長谷川)。ヴェーバーによれば、資本主義とは「何はさておき」、「伝統主義」という最大・最強の「障害」を排除することで創出される社会制度ともいえるのである。ここでヴェーバーは、「伝統主義」について端的に「足れり」と表現している。「足れり」とは、〈自己の生命が維持されるに足る必要以上の残余は、不足な状態にある憐れむべき隣人(同胞である兄弟姉妹 brothers and sisters)に分け与えよ〉(経済的にいえば、たとえば利子を否定する)というカトリシズムの表現である。この表現を用いて、ヴェーバーは、上の「足れり」以上を求めない労働者をはじめ、自給自足(「足れり」)経済や近代以前の〈人類の歴史と共に古くからある商業〉や「足れり」以上を求めない経営(現在でのNPO非営利組織などもこれに含まれる)、など「足れり」以上を求めない経済・経営概念を「伝統主義」としたのである。ヴェーバーによれば、「足れり」以上を求めない「伝統主義」の対極にあるのが、〈無限に足りない〉「呪われた黄金の飢餓」(81頁)である「資本主義の精神」なのである。資本主義の創出にとって、「伝統主義」が最大の障害にして「闘争の敵」となるというのは、「人は『生まれながらに』でき

るだけ多くの貨幣を得ようと願うものではなくて、むしろ簡素に生活する、つまり、習慣としてきた生活をつづけ、それに必要なものを手に入れることだけを願うにすぎない」とヴェーバーが実に適確に見事に表現しているように、「伝統主義」は人間本来の自然な生活を基盤にしているからである。「伝統主義」という人間生活に根付いた自然性（無理がない）の分厚い層が社会の中核になっているのを打破し、〈無限に足りない〉とする反自然性（無理をしなければならない）を帯びた資本主義が社会の中核に換わるためには、相当難しい「闘争」が必要となるわけである。〈如何にして自然に根付いた「伝統主義」を打破するのか？〉。ヴェーバーは、この最大の難敵と「闘争」するためには、皮相的な物的関係（経済関係）のもので対抗してもとても歯が立たないので、内面の「持続的な動機」（202頁）に基づく「現世にうちかかっていく強大な力」（同頁）つまり強固な宗教性（信心）をもって対抗していくしかないとする。古典としての『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の偉大さは、歴史上最大に物的関係が濃厚となる（逆にいえば歴史上最大に宗教性が希薄となる）資本主義は、実は、プロテスタンティズムが組織化・大衆化される以前の、カルヴァン思想・理念に凝縮されたプロテスタンティズム（個人の内にある思想・理念と組織化された思想・理念の違いを描いたことも『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の大きな功績である）のような時代的に最大に濃厚な観念（精神）・宗教性の強力な作用が関与して創出されるという壮大な逆説の抽象ドラマを描いたことにある。その上でヴェーバーは、「資本主義の精神」が最大の歴史的意義を持つのは、「伝統主義」が支配する秩序体系での「伝統主義」の中核的精神（観念）を打破し、自己を中心的精神（観念）にとって換えるまでであるとする。「資本主義の精神」が中核となる新支配秩序体系においては、すべてが「資本主義の精神」にとって換わる必要がないしそれは不可能なことである。「伝統主義」の根強い自然性をすべて排除できるものではないのである。ヴェーバーが「とにかく勝利をとげた資本主義（一度確立した資本主義）は、機械の基礎の上に立って以来、この支柱（『資本主義の精神』の基礎となった宗教性の濃い『禁欲主義』）をもう必要としない」（365頁）と述べているように、一度確立した資本主義においては、中心部の「資本主義の精神」の周辺には「伝統主義」の経営者や労働者が広範に存続してもかまわなく、「資本主義の精神」そのものも、「禁欲主義」の宗教色が相当薄まってもよいのである（資本主義社会確立後も社会内部には非資本主義的なものが広範に存続することになる）。いずれにしても、「私は金銭の事を至極大切にするが……むかしの士族書生の気風として、利を貪るは君子の事に非ずなんと云ふことが脳に染込んで、商売は愧しいやうな心持がして」とする福沢諭吉の姿勢は、「瘠我慢の説」と繋がりえていても、ヴェーバーのいう「資本主義の精神」の闘争対象となる、「足れり」の範囲内でのみ「金銭の事を至極大切にする」「伝統主義」の典型でしかないのである。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』における「伝統主義」と「資本主義の精神」の関係についての詳述は、別稿を作成しておきたい。

- (42) 中原猶介（1832 天保3～1868 明治1）は、江戸に遊学し、漢学を安井息軒、蘭学を杉田成卿に学ぶ（石河確太郎・本間郡兵衛も杉田成卿門下）。中原は、洋式軍事技術・

洋式兵制や砲台改築を担当し、石河碓太郎の担当分野と重なるものがある。また石河が同じ杉田成卿門下であることから、中原と石河の親密な関係が推測できる。松木弘安は、自分と同年の洋学友中原猶介に強い親近感を持っていた。中原は、戊辰戦争で海軍参謀として従軍し、越後長岡でまだ37歳で戦病死する。

- (43) 前掲『寺島宗則関係資料集』下巻、266～267頁。
- (44) 慶応3年頃には商社（会社）company（英）・compagnie（蘭）の片仮名表記「コンペニー」がかなり普及して使用される。石河碓太郎も慶応3年頃には「コンペニー」の漢字表記「公班衛」を用いている（これはcompany・compagnieを漢字表記した、現在認められる唯一の事例である）。原本「薩州商社発端」では「公班衛」に「コンペニー」のルビを記している（長谷川洋史前掲『「薩州商社発端・薩州商社条書」の二つの版（大概版と本間版）について」参照）文久2年の福沢『西航記』の商社紹介では片仮名表記はなかった。松木弘安が現地イギリスで直に聞いたcompanyを「コムパニー」と表記したことは、company・compagnieの片仮名表記の先駆ともいえる。
- (45) 詳細は、長谷川洋史「寺島宗則（松木弘安）の『コムパニー』概念について—解放思想としての会社制度—」、日本経済思想史研究会『日本思想史研究』第4号、2004年、参照。
- (46) 五代龍作前掲『五代友厚傳』、56頁。「18箇条建言」の箇条は、本稿本文であげた以外にも、「白耳義国和親条約の事」、「^{ベルギー}同国（ベルギー）商社建営の事」、「商社合力にあらざれば鴻業立て固き事」、「諸大名同志合力の商社を開くべき事」、「皇国の全力を以て尽さざれば鴻業立て固き事」、「木綿紡織機関を商社を以て開くべき事」など、商社（会社制度）に関するものが中心となっている。「18箇条建言」の主旨は、薩摩藩とベルギーの和親を前提にした商社取建の早急な実施を建白したものであり、五代自らも「18箇条建言」起草前後、慶応元年8月26日（西暦1865年10月15日）付でベルギー・ブリュッセルにてベルギー政府役人立会いで、薩摩藩島津家とモンブラン伯爵の合同出資会社、比義商社（暫定的通称）の取建仮契約に調印している。
- (47)、(48) 詳細は、長谷川洋史前掲「寺島宗則（松木弘安）の『コムパニー』概念について」参照。
- (49) 外国貿易の日本側の輸出入額の推移を日本全国総額でみていくと（本稿巻末掲載図表参照）、貿易開始当初の安政6年（1859）では、輸出額891,416ドルに対して輸入額603,161ドルと輸出超過（日本側貿易黒字）であり、以後日本側輸出超過は慶応2年（1866）まで続くが、文久年間では特に文久3年（1863）の輸出額12,208,228ドルに対して輸入額6,199,101ドル（輸出額が輸入額の約2倍）は、輸出超過が際立っている。しかし、慶応3年（1867）では輸出額は12,123,675ドルに対して輸入額21,673,319ドル（輸入額は輸出額の約1.8倍と2倍近い）と約9,550,000ドルの大幅な輸入超過（貿易赤字）逆転している。注目すべきは、慶応3年の輸出入総額が、安政6年の輸出入総額の約22.6倍にも拡大していることである（外国貿易開始後約10年間で貿易規模全体が約22.6倍にも拡大しているのである。横浜では約44.8倍、長崎では約9.8倍、箱館では約8.6倍に拡大している）。これには、もちろん慶応2年に幕府がイギリス・アメリカ・フランス・オランダと調印した改税約書（江戸協約）によって、関

税率減・貿易制限撤廃が進み、より自由貿易が促進されたことの影響は大きい（逆にいえば外国貿易開始当初からの日本側貿易黒字は、関税率・貿易制限によって保護されていたことを原因とする部分もかなり大きかったことを意味する）。しかし、あわせて、慶応2年以後の日本側の大幅な貿易赤字への転落の大きな原因に、近代西洋と日本の商業の在り方の相違があることも明らかになった。貿易規模拡大に応じて西洋側が本格的に貿易と取り組み、当時の日本には欠如していた会社制度に基づく貿易・商業方法の成果が露見し始めたのである。慶応3年6月の薩摩藩主導の薩州商社取建宣言（「薩州商社発端」）も幕府指導の兵庫商社取建実施（両者はほぼ同時であった）も、この膨大な貿易赤字に対する大きな危機感を背景にした会社制度導入の試みの表明といえるのである（詳論は次回以降の本稿でおこなう）。

- (50) イギリスへ薩摩藩留学生を引率した五代才助が西洋の現地でおこなった二大仕事は、ベルギーと薩摩藩の和親を前提とした、薩摩藩島津家と実業家ベルギー人モンブラン伯爵（フランス革命時の亡命フランス貴族の末裔で、フランス国籍も持つ二重国籍者とも考えられる）の共同出資による国際的会社、比義商社^{ベルギー}の取建仮契約（慶応元年〈1865〉8月26日ブリュッセルに於て）と機械紡績所取建（慶応3年〈1867〉5月に日本初機械紡績所として鹿児島紡績所竣工）の実施に踏み込んだことである（紡織機械購入と紡績所建造のためのイギリス人技師を薩摩藩に招聘する契約などおこなう）。こうした外資を導入する会社（五代ら薩摩藩側関係者はこれを「比義商社^{ベルギー}」と仮称・通称した。仮契約書ではまだ正式会社名はなく、「商社」と漠然としられているのみである）は、五代が薩英戦争以前、文久年間（1861～1864）から志向していた上海交易構想が、会社制度と遭遇することによって、次元を超えて発展したものであり、機械紡績所取建は、石河碓太郎が文久3年11月（五代がまだ逃亡・潜伏中の頃）に上申した機械紡績所取建建白（日本初の機械紡績所取建建白）に即して、元治元年（1864）5月頃の「五代才助上申書」以降、五代が石河と協議し石河の指導下を実施したものである。この五代が西洋の現場から提示した、会社制度導入と機械紡績導入という流通と生産での二つの新しき試みについて、薩摩藩要路は諸手を挙げて歓迎した。慶応2年（1866）4月10日付大久保一蔵（利通）宛伊地知壮之丞書翰（前掲『忠義公史料』。鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 忠義公史料』第4巻、鹿児島県、1976年）では次のように記されていた。「別紙商社（比義商社^{ベルギー}）器械（機械紡績所）取建方も、旁聴候後は、利益も備べく候得共、中々、三、四年内にやり付申す間敷、其間の雑用莫大の事。愉快は此上無き事に候得共、現実運の処、些込み入り申し候」（105頁／ゴシックは長谷川）。伊地知壮之丞（貞馨／1826文政9～1887明治20）は、御勝手方掛に大きな指導力を持つ家老小松帯刀の用人格として、石河や五代の経済・技術改革構想に対する小松の支援を実現するべく活動していた。〈比義商社と機械紡績所の取建については、その実施についてはいささか込み入ったこともあるが、愉快この上ない〉との伊地知の歓喜には、新しき試みへのオプチミズムが溢れている。伊地知のオプチミズムは、この1年半後には大政奉還→王政復古の号令（幕府滅亡）→明治維新（新政権誕生）と目まぐるしく政治情勢は展開していき、時代が大変化してしまうことなどはある種の予感を持つことはできても精確に読み取ること

などできるわけがなく、くこの新しき試みは、当面利益はすぐ出はこないで費用も莫大だが、3、4年後には必ず大きな利益をもたらすことは間違いない」と樂觀・安心している。3、4年後は、明治2年・3年、藩体制そのものが消滅する薩藩置県直前になっているのである。このことは、伊地知個人だけではなく、薩摩藩要路全般の状況であったことは、ロンドンから発した慶応2年5月6日付町田久成宛五代才助書翰（日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第4巻、東洋経済新報社、1974年）で五代が「比義商社^{ベルギー}一条相起、要路の面々も御同慶至極也」（69頁／ルビは長谷川）と、新しき試みに対する薩摩藩要路の歓迎振りを自信をもって表明していることから察せられる。

- (51) 薩摩藩へ提出した慶応4年（1868）7月付石河確太郎文書では、「此節泉州界に於て公班衛^{コンペニー}の御屋敷召し開かれ、首として紡機召し建てられ、拙劣の私（石河確太郎）へ御委任仰せ付けられ、私に於ては機械の事は宿志本業中の一事、実に以て鄙芸の榮華、有り難き仕合と存じ奉り候」（本稿注16参照）と述べている。ここには堺戎嶋の薩州蔵屋敷は、「公班衛の御屋敷」つまり薩州商社本館であると同時に機械紡績所（堺紡績所）建造敷地であることが石河自身によって如実に述べられている。この慶応4年7月付石河文書を最後に薩州商社の消息は途絶える（機械紡績所・堺紡績所の方はこの屋敷を敷地に建造され明治3年〈1870〉に開業する）。慶応4年7月には、堺県から「今般商業を盛大ならしめん為め、**堺戎嶋山本町に於て商社を建設し**、一般入社せしめ、商業為し取扱候条、格尽力洪業（鴻業）の基を興すべく……」（本稿注16参照）との管内布達が出されている。この堺県での山本町商社建設は、樹立早々の新政府（慶応4年3月に新政府綱領である五箇条誓文が発表）にあつては、その後の会社制度導入政策の先鞭を付ける先駆的なものとなっている。戎嶋山本町は、薩州商社本館（薩州蔵屋敷・堺紡績所敷地）の開設された戎嶋北島町・南島町に隣接している。こうした堺県の会社制度導入政策の先駆性は、薩州商社取建構想からの影響を受けたものと理解できる。逆にいえば、薩州商社取建構想は、堺県の会社制度導入政策の内に吸収されて消滅したと理解できるのである。慶応4年7月に薩州商社の消息が立消えると同時に山本町商社建設布達が出されたことはこれらのことを実によく示唆している。中央集権国家・近代国家が成立した以上、封建的地方分権（藩体制）段階の薩摩藩指導の薩州商社取建構想は、新政府の政策の内に解体・吸収される他なかったのである。かくして、薩州商社本館（薩州蔵屋敷）敷地には堺紡績所だけが残った。薩州商社の終焉と新政府の会社制度導入政策の関係についての詳述は、別稿にておこないたい。
- (52) 長谷川洋史「薩州商社取建構想の先行段階としての薩州産物会所取建に基づく大和交易構想について(1)―薩摩藩交易方掛石河確太郎の経営思想を中心として―」、東亜大学『経営学部紀要』第5号、1996年、参照。
- (53) 宇宿彦右衛門は、安政4年（1857）に、藩主島津斉彬の命で、松木弘安・川本幸民とともに日本初の銀板写真（ゲダレオタイプ）撮影をおこない（被写体は斉彬）、またこの頃、やはり斉彬の命で、松木弘安らとともに鶴丸城内で電信機の実用実験をしている。宇宿は、この他にも蒸気船製造・反射炉製造・砲台築造や地雷・電気水雷開発

と、広く洋式技術分野に従事している。その内、砲台築造と電気水雷開発は、石河確太郎の担当した洋式軍事分野と重なる。特に電気水雷については、石河の専門分野のひとつであり、文久元年（1861）6月に、石河は、小松帯刀とともに、鹿児島磯ノ浜で、藩主島津忠義に、電気水雷実験を披露したことがある（本稿注32参照）。これより3年後、宇宿は、文久3年（1863）7月の薩英戦争に際して、石河と協力して鹿児島湾で日本初の実戦での水雷敷設を実施することになる（イギリス艦隊に的中することはなかったが）。

- (54) 前掲『薩藩海軍史』中巻、752～753頁。同書では、兵庫出港から馬関海峡での砲撃を受けての沈没までの経緯を次のように記している。「長崎丸は同月（文久3年12月）廿二日、荏子（荏胡麻）油、唐の土（鉛白）、光明（鉛丹）及び繰綿〔芸州御手洗に積載したるものならんか〕等を積載し兵庫を出港す。且つ船体（長崎丸船体）の修理期にあるを以て長崎に向ひ、廿四日夕刻、馬関海峡に入り、嘗て約束したる如く、薩船の信号として灯火を檣上に掲げて進航し、田の浦に近づきし頃、前田、壇の浦砲台より三、四発の空放（砲）を発したるが、如何なる相図（合図）ならんかと訝りつゝ、進んで砲台前に至り田の浦沖に碇泊したるは午後八時過なりき。然るに長州砲台より突然砲撃を開始し、猛烈に我が船に集弾せしかば、船中の驚愕譬ふるに物なく、兼ねて協約し置きたる信灯の掲げあるに拘はらず、砲火益々盛なりければ、已むを得ず田の浦に退きたり。〔少時仮泊したるが如し〕猶ほ船中に火災起りしを以て一里計東走して、部崎の東方青浜沖に碇泊せし時は〔大原（林左衛門）船長は此際気鐘室より火を失し自火なりと称す〕火焰猛威を逞し、百方消防に尽力すと雖も其効なく、遂に焼尽して沈没し、士官以下合計廿八名溺死するに至れり」（725～726頁）。本稿本文でも述べるように、長崎丸積載の繰花の一部は途中芸州藩領御手洗島で積載したが、その他繰綿の一部と油・顔料などは堺で集積して兵庫で積載したものと理解できる。またこれによると、長崎丸・薩摩藩側としては、外国船と区別するため「嘗て約束したる如く、薩船の信号として灯火を檣上に掲げて進航し」というように長州藩と事前に取り決めた手順に従って航行していたことになっていて、外国船と見間違え砲撃したという長州藩側の言分は甚だ納得のいくものではないということになる。なお、勝安芳『海軍史』（勝部真長編『勝海舟全集』13〈『海軍史Ⅱ』〉、勁草書房、1974年、344～345頁）によれば、幕府所有の「長崎丸」と冠する洋式船は3隻あった。以下、勝『海軍史』を基に、3隻の長崎丸の命運をまとめてみる。3隻は、いずれも、文久3年（1863）年に輸入したイギリス製蒸気輸送船であり、「長崎丸一番」（鉄製・蒸気外輪・94t・60馬力・建造年1857年・購入価格66,000ドル・原名「ウイクトリア」）、「長崎丸二番」（鉄製・スクナー型・蒸気内車〈スクリュエ装備〉・341t・120馬力・建造年1862年・購入価格100,000ドル・原名「ジョンリー」）、そうして下関で長州藩砲撃の標的となった「長崎丸」（木製〈船腹に鉄板張付〉・蒸気外輪・138t・60馬力・建造年1846年・購入価格48,000ドル・原名「シアルツアルリスフオルプ」）である。長崎丸は、本稿でみたように、文久3年12月24日、馬関海峡で砲撃され沈没し（購入早々沈没したことになる）、長崎丸一番は、翌年、元治元年（1864）12月2日に八丈島沖で沈没し、長崎丸二番は、江戸開城後に脱走した榎本艦隊に合流し、

戊辰戦争の最中、明治元年（1868）10月7日、奥羽越列藩同盟の強硬派庄内藩の援助のため酒田沖に来たが、庄内藩が新政府に降伏した後であり、同年10月23日、酒田沖の飛鳥付近で座礁・沈没した（酒田市史編纂委員会編『酒田市史年表 改訂版』、酒田市、1988年、291頁、参照／薩州商社酒田支社を開設するべく故郷酒田に赴いた本間郡兵衛は、薩摩藩方探索の容疑で酒田の隣、鶴岡に幽閉され、酒田沖の長崎丸二番沈没の3、4ヶ月前、慶応4年7月（慶応4年9月8日に明治に改元）、同所にて横死する。享年47歳。毒殺されたともいわれるが、薩州商社取建構想に殉死したともいえる。庄内藩降伏直前のことである。薩摩藩西郷隆盛らの配慮によって、本間の故国庄内藩の処罰が極めて穏便なもので済んだ原因のひとつに本間の殉死があるであろう。またさらにいえば、庄内藩降伏直後、同年10月、新政府軍参謀として、酒田入りして、軍政官と民政局を置いたのは、長崎丸砲撃事件について、貴重な証明をすることになる、船越洋之助であった（同上、209～291頁）。3隻の長崎丸は、幕末・維新の動乱の渦の内にすべて沈没したことになる。長崎丸砲撃事件の犠牲者の遺体は、門司側の田野浦（現北九州市門司区田野浦）の真楽寺に埋葬され、大正10年（1921）には、五十九年忌として、薩摩出身の有志らが発起し、公爵島津忠重家・公爵島津忠承家の賛助によって、遺骸を高輝山（高野山大師教会田野浦支部、現在、高野山真言宗大蔵院）に改葬したうえで、同寺境内に、「士官（宇宿彦右衛門ら）」9名・「機関者」2名・「大工」1名・「火炊」4名・「賄夫差引（賄夫差配）」1名・「役人奥州産」1名・「賄夫」7名・「役人」1名、計26名の名前を刻んだ「長崎丸殉難者招魂碑」（題表は事件当時30歳の薩摩藩士、侯爵松方正義による）を建立している。大正10年12月24日付の碑文は、貴族院議員・文学博士小牧昌業の撰による。小牧は事件当時は、21歳の薩摩藩士で造士館教員・漢学者でもあった。小牧の撰文には「文久三年十二月。先是。薩藩借幕府汽船長崎丸。供航海之用。将往長崎修治機械。二十二日發兵庫」（前掲『薩藩海軍史』中巻、781頁）とあり、兵庫から長崎に向う長崎丸の目的は修理のためであるとしているが、綿積載・綿海外輸出のことは一切記されていない。また同撰文では「時長藩與外国構釁。故誤認為外船來襲也」（同頁）とあり、長崎丸砲撃事件は当時外国船攘夷戦をおこなっていた長州藩が長崎丸來航を外国船襲来と誤認したものと当時の長州藩政府側の言い訳を踏襲していて、薩賊憎悪に基づく確信犯的側面については一切記されていない。同撰文では正確に「船員六十八人。宇宿行誼等二十八人殉職」としているが、碑に銘記された殉難者は26名であるのは、2名は事件後死亡したか名前が判明しなかったものと思われる。小牧は、招魂碑建立から1年後、大正11年に80歳で没している（松方正義はさらにそれから3年後の大正13年に90歳で没している）。現在、大蔵院境内に招魂碑は変らぬ姿で建ち、同院室内には長崎丸船体の破片一部が保存されている（教示いただいた大蔵院大江亮昭氏に謝意を表する）。

- (55) 文久3年の5月10日から8月18日に至るわずか4ヶ月ばかりの間に薩長関係は目まぐるしく転変していく。5月10日に単独攘夷を決行すべく長州藩は、下関海峡で外国船を砲撃する（下関外国船砲撃事件）。その約2ヶ月後の7月2日には薩摩藩が鹿児島湾（錦江湾）でイギリス艦隊と交戦する（薩英戦争）。この時点で外様の二大西

南雄藩である薩長が共に攘夷を決行して足並みが揃ったかのような外観がある。しかし、下関外国船砲撃事件と薩英戦争は、薩長の深い分裂・対立の契機となった。長州藩は下関での外国船砲撃以後、6月にはアメリカ・フランスによる報復攻撃を受け一時下関の砲台をフランスに占領されるものの、攘夷決行の弾みは止まらず、更に一藩の攘夷決行を、孝明天皇（1831 天保2～1866 慶応2）を戴き一国を挙げての大攘夷戦争に拡大すべく、京都朝廷に対する影響力を強めて（長州藩を中心とする尊攘派勢力は、三条実美（^{さねとみ}1837 天保8～1891 明治24）ら尊攘派公卿を通して、幕府への攘夷督促、攘夷祈願行幸、など一国挙げての攘夷大戦争決行に至る道筋を、孝明天皇に指唆するようになっていた）、8月13日には、攘夷祈願・親征軍議のための孝明天皇大和行幸を実施せしめ、挙国大攘夷戦争決行日を8月27日（或いは28日）に設定するまでに至る。一方、薩摩藩は、イギリス艦隊砲撃でほとんどの砲台が破壊され鹿児島約1割が焼き尽くされるという、薩英戦争による被害の甚大さに大きな衝撃を受ける。薩英戦争によって西洋の実力、彼我の実力の著しい格差（西南雄藩薩摩藩72万石以上がわずか7隻のイギリス艦隊によって翻弄された）を目の当たりにした薩摩藩は、即時攘夷など不可能なばかりか、亡国につながるものであることを、早急に西洋世界のレベルに追いつくべく近代西洋の技術・知識・システムを吸収しない限り攘夷も何もあったものではないことを、藩を挙げて認識したのである。薩英戦争後、薩摩藩はイギリスと講和談判をおこない、積極的にイギリスに接近するべく方向転換した（逃亡中の親英派の五代才助・松木弘安は帰藩を許された）。薩英戦争を契機に、薩摩藩は、イギリスが担う西洋の最先端の技術・知識・システムの早急の吸収を実施することになったのである。洋学者石河確太郎や洋学派五代・松木らが全面に出て活躍できる段階に入ったのである。元治2年・慶応元年（1865）に、石河と五代の共同立案に基づき実行されたイギリスへの留学生の派遣は、西洋知識の早急な吸収を目的とするものであり、留学生を引率して渡欧した五代は、会社制度を導入すべく比義商社取建の仮契約をおこない、機械紡績導入のため、石河の指導に基づき、イギリス人技師招聘と紡織機械購入の契約をおこない、同じく留学生を引率した松木弘安は、ロンドンにて薩英独自外交を担当することを通して、会社制度の合本 joint-stock の概念を政治権力の集中（近代的中央集権国家）にまで広げ、会社組織の概念を国会にまで広げるという独特な会社制度理解（松木はこれを「コムパニー」と称した）を持った。慶応2年（1866）、五代・松木は帰国後、商社（会社）取建促進運動を展開し、これは、同年の馬関商社（薩長共同出資）取建構想や薩越共同出資商社取建構想を導き、さらには慶応3年（1867）の石河らの薩州産物会所交易構想を薩州商社取建構想へと飛躍させていく大きな動力となった。このような薩摩藩の西洋へ急速に接近する方向と長州藩の挙国大攘夷戦争に向かう方向とは、対極的に乖離していく。即時攘夷は不可能であるどころか亡国へと至るものであることを認識した薩摩藩にとって、長州藩の孝明天皇を戴く挙国大攘夷戦争の決行計画は何としてでも阻止すべきものとなった。しかしとても即時攘夷中止の説得を受け入れる相手ではないことは、反幕・尊王に関して親近関係にあった薩摩藩がよく知っている。しかも決行日8月27日（或いは28日）は刻々と迫っている。事は緊急を要した。薩摩藩にとってみれば、8月18日がタイム

リミットであった。もっとも、朝廷に対する影響力を巡ってすでに薩長の対立は潜在的にあって、薩摩藩は、文久3年5月の尊攘派公卿姉小路公知^{あねがこうじ きんとも}(1839天保10～1863文久3)襲撃事件(負傷した姉小路は直後に死亡。襲撃犯は不明だが、襲撃直前に姉小路は勝芳安の開国論に傾いたため尊攘激派から憎まれたともいわれるが、朝廷をめぐる薩長軋轢説もある)の関連の嫌疑(薩摩藩士田中新兵衛の刀剣が襲撃現場に残され、その後田中は取調中に自殺)を受けたことを契機に、乾門警備を解任、九門内出入禁止となり、朝廷周辺は長州藩尊攘派で固められ、結果的に薩摩藩は朝廷周辺から退かされた薩摩藩は、事前に、三条実美ら急進派と対立する漸進派の中川宮朝彦親王(1824文政7～1891明治24)を通して、長州藩勢力・尊攘派公卿らからの強引なやり方・指喉に恐怖すら抱いていた孝明天皇の了解を得、さらに佐幕の雄である京都所司代・会津藩と密かに連合して、この日にクーデターを執行し、長州勢力及び三条実美ら長州派の尊攘派公卿を一挙に朝廷側近から排除したのである(8月18日政変)。寝耳に水のクーデターを受けた側、長州藩は、「薩賊会奸」として、薩摩藩・会津藩への報復と内包していた討幕路線を明確化したが、とりわけ、長州尊攘派が尊攘派弾圧の牙城として蛇蝎のように見なしていた京都所司代・「会奸」会津藩と手を結んだ「薩賊」薩摩藩に対してはある種の近親憎悪が加わり、長州藩勢力は、深くこれを呪詛した。この深い呪詛の下に、一連の綿積載の薩摩藩貿易船への攻撃、長崎丸砲撃事件や加徳丸焼討事件が起こった。しかし、8月18日政変によって、薩摩藩は、公武合体(天皇のもとに幕府を含めた諸藩連合政権の形成を目指す非討幕論で、特に国父島津久光ら上級武家層によるもの)を表明したかに見えたが、その後、密かに討幕を指向する西郷隆盛ら下級武家層が事実上藩政実権を掌握した。一方、長州藩もその後、四国(英・米・仏・蘭、ただし英国船は下関砲台から攘夷砲撃を受けていない)連合艦隊下関砲撃事件などで、薩摩藩同様に、即時攘夷が不可能なこと、即時攘夷を中止・凍結して近代西洋からの早急に技術・知識・システムを導入する必要性を認識した。薩長に、即時攘夷中止・凍結(来たるべく攘夷備えて近代西洋の技術・知識の導入する)・討幕という共通項ができて、薩長両指導者は、慶応2年(1866)に、討幕秘密協定である薩長連合(同盟)を結ぶことになるのである。まさに弁証法のごとく、二大雄藩薩長の分裂は、一段高いレベルで統一(止揚)され、ここに討幕は必然的となった。そうして討幕の後、薩長が指導する新政府(明治政府)は、凍結された攘夷を実施するどころか(凍結されていた攘夷は75年後に、彼らの子供・孫の世代が、「鬼畜米英」に対する太平洋戦争として執行し、維新後以来80年にわたる近代日本は一旦解体することになる)、当初の福沢諭吉の「今度の明治政府は古風一天張りの攘夷政府」との深い不信を大きく裏切って、文明開化を高々とスローガンに掲げ、幕府以上に、開国(洋化)政策を推し進め、近代西洋からの技術・知識・システムの移植・導入を積極的におこなうのである。

(56) 前掲『薩藩海軍史』中巻、753～759頁。ゴシックは長谷川。

(57) 『防長回天史』では、「藩(長州藩)政府は、大に善後の策(長崎丸砲撃事件の善後策)を講じ、薩藩の詰問を待ちて之を謝せんか、或は我より、先づ過誤の事由を陳べて、之を謝せんか、議、未だ決せざるに、長府侯(長州藩支藩長府藩主毛利元周)、

書を公（長州藩主毛利敬親）に上りて、怨を薩藩に結ぶの得策ならざるを説き、進みて、之れを謝すべきを論ず」（前掲『修訂 防長回天史』上巻、567頁）として、長府藩主毛利元周が宗藩に進言した長大な意見書を載せている。その意見書での長州藩側の薩摩藩への言い訳は、「今度、砲撃の訳合は、『諸藩の異国形船、浦触之無き節は、遠沖へ繋ぎ、船使節を以て、申し断て候処、此度の儀は、右様の儀も之無く、薄暮より何国へ帆去候哉、帆影相見へず、異人乗風両擣嘘の姦策も計り難く、既に、当（文久3年）五月二十六日、^{フランス}仏良斯より、赤間関へ来襲、其軍艦も旗章相立てず、乗り入れ候に付、尚、砲台の見込も仏夷軍艦と決定仕り居り候処、案の如く、暗夜に乗り更初前、^{こう}潜に砲台近く、乗り来り候様子にて、火輪激浪の響之有り候間、^{さて}偕は、日中山陰に乗り入れ候は彼が姦策にて、夜中潜行の手段と相心得、台場より砲発仕り候の処、間も無く、異船、遙に乗り戻り候様子にて、右船中より火燃出候間、惣軍、大に競ひ、小船押し立て、尚繋ぎ止め候心得にて、乗り掛かり候得共、折柄、風勢穏やかならず、波濤高く候間、右異船迄乗り込み兼候内、満船火と相成り、焼亡仕り候処、追々未明にも相成り、小船押し立て、バツテイラにて、逃げ去り候者も之有り、^{こうしや}候者討ち取るべしと相達し候処、豈図らんや、貴国（薩摩藩）の船に之有り候趣、一統、仰天仕り候得共、貴国の船、如何成る訳合にて、右等の作舞（振舞）仕り候哉」（568頁）と苦しくも手の込んだものであった。「諸藩の異国形船、浦触之無き節は、遠沖へ繋ぎ、船使節を以て、申し断て候処、此度の儀は、右様の儀も之無く」は「嘗て約束したる如く、薩船の信号として灯火を檣上に掲げて進航し」という薩摩藩側の立場（本稿注54参照）と食い違うが、長州藩政府側としては現地での実際の状況が、「豈図らんや、貴国（薩摩藩）の船に之有り候趣、一統、仰天仕り候得共」とは正反対の確信犯的暴走であったとしても、海峡での長崎丸の動きが半年前の狡猾なフランス軍艦の下関来襲の場合と類似していたことと海峡通過以前に諸藩の洋式船舶が届出なく海峡を通過する場合の冲合からの船使節による連絡を長崎丸がしなかったことが重なったための不幸な誤射事故）とでもして押し通すしかなかった。

- (58) 文久3年12月18日に長州藩政府は、和蘭新聞紙翻訳を添付して「此度、長崎より新聞紙到来、和蘭国軍艦数艘、来二月〔皇国正月〕、御国海へ差し向け候趣、洋夷の情実、測り難く候得共、別紙通り、相聞き候に付、其期に臨み、不覚之有り候ては、御国の恥辱のみならず、神州御武威の汚れとも相成る事に付、銘々覚悟致し置き、醜夷を一戦の下に挫き候様、之有り度事に候。追て、御軍律をも揭示仰せ付けられ候条、謹で、守られるべき、其旨候事」（前掲『修訂 防長回天史』上巻、568頁）との防戦予備令を公布していた。
- (59) 前掲『修訂 防長回天史』上巻、568頁。8月18日政変後、長州藩政府は、「長藩既に、堺町門変（8月18日政変）の蹉躓ありと雖ども、（在京の）朝紳（公卿）と毛利氏との関係は尚絶えず」（同頁）とあるように、政変後の京都での交渉を企て、在京の公卿たち、正親町三条（嵯峨）実愛と連絡をとったり勤修寺経理に接近しようとしたり、また、藩主世子毛利元徳や家老井原主計を陳情のため上京させようとした（世子上京は未遂、井原の入京は京都側から不許可）。
- (60) 前掲『薩藩海軍史』中巻、760～761頁。長崎丸砲撃事件発生1週間前の12月18日

に布告されたオランダ軍艦への防戦予備令（本稿注58参照）による臨戦体勢と下関現地の尊攘派の憎悪すべき薩摩藩による売国の綿積載船であるとのかなりの確信が絶妙なタイミングで重なり、「前後の考慮もなく唯々一時激しくやつた」ということが起った。

- (61) 9代浜崎太平次（政太郎）についての直接的史料ははなはだ乏しいが、宮里源之丞・沢田延音編述『海上王浜崎太平次伝』（浜崎太平次翁顕彰会、1934年）では、次のように、9代浜崎太平次を直接・間接知る古老の証言をいくつか収録している。「政親方（9代太平次）はジャンボ（疱瘡）の痕が顔面にあつたが、元来、色白く、長顔で、丈はスナナリとして実に立派な男でした。親方と謂ふ親方は此（この）人のことであらうと深く私達は感激して常に敬意を表して居た。非常に良い人で、年こそ若か、つたれ、其の力と言ふものに至つては先代、太平次（8代太平次）さんの子としては申分のなかつた旦那であつたが、惜しいことに夭死（てうし）でした。彼の政親方がモソツト長く生きて居られたら、余（浜崎家の屋号「山木」）はあゝ迄で早く倒るゝようなこと（浜崎家は10代太平次の代、明治10年代に破産した）はなかつたらうと後で一般の人達は政親方の早世を痛惜して悲しました〔昭和六年六月、指宿湊、永田満吉（八十六歳）の直話〕」（80頁／句点を補った。（ ）内とルビは長谷川、以下引用について同じ）、「政さんは……実に立派な旦那で体も顔も上品な性で、何処と言つて申分のない温和重厚な人物で、死なるゝ時の年なんぞ二十一だつたと云ふことでしたが、何う見ても二十三、四に見えて老成の風で、服装と言つても特に飾らるゝではなし、なかなか確手（しつかり）した人でした。彼（かれ）の人がもう少し存命で居られたら倒産するやうなことは無かつたらうにツと世間の人々は政さんの夭折を愛惜しないものはなかつた〔昭和六年五月、指宿、浜崎喜右衛門（八十二歳）の直話〕」（同頁）、「政太郎さんが当長崎に佐賀方面よりお出での時は船乃至駕（ないしかこ）と謂ふ具合で、毎時随行員（いづも）として若者が二、三名背後（あと）に供して居た中に一人は刀持ちが附ひて居ました。政さんの男つ振り（もと）は良し、身長は高く……其れに背割紋附羽織袴、白足袋、麻裏（麻裏草履）、帯刀は固よりでしたが、此の市内（長崎）を歩かれるにしても往復共に駕（か）を用ひて居らつしやいました。先代のように政さんも偉いお方（ごう）でゐましたが、彼のお方が早く死なゝいで長く存命でゐましたなら余（あんな）も彼（かれ）にはならなかつたのにツと父（ちち）が言つて居りました〔昭和六年七月五日、長崎市西浜町八三、中村ツタ子（七十四歳）の直話〕」（81頁）、「政さんは若年だつたが、父親に劣らぬ宜い頭の持主でありましたが、惜しいことには頓死（とんし）されました。彼の若旦那（わがと）が長く生きて居られたら彼（かれ）に余（あんな）は意外に早く倒れはしなかつたらうものにツ……と旧余（ふるあんな）の船員だつた私の伯父、永田七郎が昔話として聞かしたことがありました〔昭和六年七月三十一日、指宿港（湊）、福山七太郎（六十三歳）の談〕」（81～82頁）。9代太平次は、8代太平次の継承者として、容貌風姿を含めて最適の存在であり、関係者は、その夭折を痛惜しその夭折が浜崎家倒産の遠因であるとまで評価している。『海上王浜崎太平次伝』では、「氏（9代太平次）は年弱冠（なれ）なるも其の家業に至つては、雄志勃勃として遠大なる志望を抱いて居た許りでなく、之を実際化して亡父の偉業を少しも辱めず、余（あんな）の新総帥（しんそうし）は吾なりと自信を強く固め牢として泰然自若、ゆるがぬこと巖（いわ）の如く、氏の一切を挙げて其念頭を常に支配してゐたのは唯一の家業、その

中に於て最も重きを措^おひて居た事業は海外貿易であつた」(87頁)と9代太平次に最上の賛辞を贈っているが、これは伝記にありがちな美化というよりは、9代太平次の実像をよりよく反映したものと理解できる。特に、9代太平次が最も重きを置いていた事業が「海外貿易」であったことは、石河確太郎や五代才助の交易構想との関係から大変注目できる。

- (62) 前掲『薩藩海軍史』中巻では「亥(文久3年)十二月晦日」付(長崎丸砲撃事件発生1週間後)で小倉在勤土持平八(後の加徳丸焼討事件についても精力的に現地調査し報告している)が藩へ提出した長崎丸砲撃事件現地報告書に「長崎製鉄所(幕末では造船所のことを「製鉄所」と称した)蒸汽船乗組の内、助命致し候者共、左の通りに御座候」(736頁)と生存者40人の名前をあげている中に「役人濱崎太^{ママ}平治」(738頁)とある。役人としての9代浜崎太平次の姿は、「政太郎さんが当長崎に佐賀方面よりお出での時は船^{ないし}乃^{かご}至駕と謂ふ具合で、毎時^{いつも}随行員として若者が二、三名^{あと}背後に供して居た中に一人は刀持ちが附ひて居ました。……其れに背割紋羽織袴、白足袋、麻裏、帯刀^{もと}は固よりでした」からよく想像できる。9代太平次が長崎丸砲撃事件からはほぼ1年後の慶応元年12月21日に21歳で夭折してしまった原因のひとつに長崎丸遭難の際に年内立春の候とはいえ大寒後の冬の海で受けた何らかの障害があったかもしれない。
- (63) 前掲『海上王浜崎太平次伝』では8代浜崎太平次の終焉を次のように記している。「是れより曩^{さき}き英主、斉彬公の薨去後五年、翁(8代太平次)は要務を運び上阪し、彼地の支舗(薩摩屋)に居る中に偶然、病を發して茲に横臥する身となつた。当時、大阪在住の支配人、肥後孫左衛門は固より……指宿湊に於ける翁の一門並に大余の雇人一同の驚愕は一方ならず、名医良薬を翁の病床に寄せて昼夜、間断なく皆、看護に勤めた。翁の斯の痛ましき報の大内山(禁中)に達した時、畏くも孝明天皇には侍医を翁の病床に差遣になりて診断せしめ給ふた」(69頁)。ここでは、8代太平次と禁中の関係は興味深いものがあるが、8代太平次亡き後の大坂支店(薩摩屋)支配人肥後孫左衛門の浜崎家家業における一層の存在感が暗示されている。
- (64) 同上、89～90頁。
- (65) 絹川太一前掲『本邦綿糸紡績史』第1巻、171頁。
- (66) 詳細は、長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(3)」参照。
- (67) 前掲『海上王浜崎太平次伝』によると「(浜崎弥兵衛は)本宅を指宿郷十二町港(湊)字稻荷山なる稻荷神社畔の一角に宏大なる家を構へ、また鹿児島島馬場にも居宅を設けて居た。彼は総本家の総帥格として陰に陽に九世(甥である9代太平次)と十世(子息である10代太平次)を補佐し其の身は東奔西走する為め寧日とてなく、兄太平次(8代太平次)の没後は精神肉体両方面に亘りて一方ならぬ苦勞を重ねたことに違ひない」(92～93頁)とある。同書では「(浜崎弥兵衛は)慶応二年丙寅(1866)八月二十日、長崎に於て病没した。享年五十一……遺骸は彼地(長崎)に密葬し墓石は今尚孤影蒼然とし……」(92頁)とあることから、肥後孫左衛門の管轄本拠地が大坂であるのに対して、浜崎弥兵衛の管轄本拠地は長崎であったことが推測できる。9代

太平次が21歳で慶応元年に夭折すると浜崎弥兵衛の子息太兵衛が17歳で10代太平次を継承し、そのわずか数ヶ月後に弥兵衛は病没することになり、以後、経験乏しく若年の10代太平次は9代太平次程に力量を発揮することなく、浜崎家家業は実質的に肥後孫左衛門が掌握することになる。

- (68) 詳細は、長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(3)」参照。
- (69) 薩芸交易についての詳細な史料としては、前掲『忠義公史料』にも次のように掲載されている。「薩州藩と御手洗〔広島県豊田郡豊町〕との間に於て、(交易の)条約の件は旧芸州藩士族船越壽左衛門(洋之助)なる人の専ら担当する処にして……(薩芸交易の「起因及終始年月」については)文久三亥年(8月18日以前)長州下ノ関に於て、薩州御用聞町人柿本彦左衛門・鬼塚惣助なるものと、芸州御用聞町人桑原儀三郎なるもの、代人と出会、物産交換の件を協議せし歟。……依て翌年(元治元年)四月中旬より、使者市来庄右衛門〔正右衛門、四郎〕なる人御手洗町へ来着。芸州よりも吟味役村上仲之助其他小鷹狩助之丞・船越壽左衛門等の数名出会、而して該人員は残らず広島へ渡航し、同五月より御手洗港に於て諸品の受渡しを始め、明治三年春に至り止む」(前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第2巻、951～952頁)。薩芸交易についての約定は、8月18日政変の直前、下関で結ばれていることは非常に注目できる。また、『忠義公史料』に収録されている、薩芸交易について報告した文久3年7月16日(薩英戦争終息2週間後)付大久保一藏宛伊地知壮之丞書翰に、当時の薩芸交易担当者の一人であった、同書編集者市来四郎は、「広島交易方」という大変注目すべき表現の注を記している(鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、鹿児島県、1976年、60頁)。薩芸交易以前、薩摩藩と長州藩は、両藩の有力商人が担当する薩長交易の試みに着手していた。その発端は、安政4年(1857)の小浜藩士・山崎闇斎学派(朱子学・垂加神道・尊王論)勤王家梅田雲浜(1815文化12～1859安政6/源次郎、安政6年、安政の大獄で捕縛され病死)の、長州藩国産物を大坂を中心とした上方で販売する、上方交易実施の建白にあった。梅田は、交流のあった長州藩士浦輶負^{浦島正三}を介して長州藩物産方用掛坪井九衛門の支持を受け、一時長州藩物産用掛に就き、この建白をこおなったのである(前掲『修訂 防長回天史』上巻、142頁参照)。この梅田の上方交易構想の一環であると推測できるのが、薩長交易の実施である。安政5年(1858)に、梅田の意見に基き薩長交易建白が長州藩に提出され、翌安政6年には長州藩側は勸農方、薩摩藩側は下関に交易役所を設けている(下関市教育委員会編『白石家文書』、下関市教育委員会、1968年、462頁、の白石廉作「薩長御産物方御交易御張込意見書」の解説参照)。薩長交易を介した薩摩藩国産物も上方市場で販売する目的が推測できる。この薩長交易案に当初から積極的であったのは下関の有力廻船問屋白石家(正一郎・廉作兄弟)であった。白石正一郎(1812文化9～1880明治13)・廉作(1828文政11～1863文久3)兄弟は、特に鹿児島商人波江野休右衛門などと頻繁に交流した。しかし、薩長交易の試みは本格化する前に、文久3年の8月18日政変によって、慶応2年正月の薩長連合成立まで約4年間途絶える。薩長連合成立によって、西廻航路の要地下関が再び薩長交易の有力地として浮

上する機会が到来する。同年5月、ヨーロッパ・イギリスから帰国した薩摩藩士五代才助が、比義商社^{ベルギー}取建構想（本稿注50参照）の一環として、下関に馬関商社（正式名称ではなく本稿が仮称したもの）を取建てる構想を長州藩側に提示し、薩摩藩側は藩士五代と商人波江野休右衛門、長州藩側は藩士高杉晋作と商人白石正一郎（高杉が創設建白した奇兵隊の最大の出資支援者にして奇兵隊士）の組合せによってそれぞれのレベルで取建の交渉をおこなった。高杉は、文久2年（1862）、滞在中の上海で五代が自分の世界交易構想を吐露した相手であり（長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(3)」参照）、五代にとって長州藩における最大の理解のある存在である。白石正一郎（奇兵隊士でもある弟廉作は文久3年、8月18日政変の直後、10月の生野の変で戦死）と波江野休右衛門は10年近くの交流がある。親交の深い藩士と有力商人の組合せによる交渉は進捗したが、取建実現直前、高杉の病状悪化による脱落もあり、長州藩側の事情によって取建は中絶した。さらに本研究が重視するのは、薩長交易を包含する上述の上方交易構想のさらなる源流についてである。その源流は、梅田が上方交易構想を長州藩に建白する2年前、安政2年（1855）の長州藩士・浦輒負家臣秋良敦之助（1811文化8～1890明治23）と梅田の交流にあった。秋良は、当時、西洋列強に対する海防の観点から、西洋船にヒントを得て「人車船」を発明したが、その建造費の捻出に苦慮し、交流のあった梅田に相談し、梅田は自分の後妻千代の父、村島内蔵進に人車船建造支援を懇請した。村島内蔵進は、市井の勤王家でもあったが和州繰綿問屋の重鎮の村島家の血縁であったからである。内蔵之進の説得を受け、共鳴した村島家は人車船建造支援をおこなうこととなり、安政4年（1857）に人車船一隻が建造できた。村島家と長州藩の間では、く建造できた人車船を用いて長州藩国産物及び五島・沓岐・対馬国産物を上方に輸送し、その国産物を原価で村島家が引き取り販売し、その益金の一部を人車船航海費と数10隻の人車船建造費に充当するとの約束を成したが、その後、安政5年、安政の大獄が勃発し、幕府の嫌疑を恐れた長州藩は、人車船建造を中止し（以上前掲『修訂 防長回天史』上巻、219頁参照）、中核となる梅田も逮捕され横死する。海防用の人車船は、平時に上方交易海上輸送用に用い、さらにその交易益金を用いて人車船増産をおこなうというように、人車船建造構想と上方交易構想は表裏一体となっていたのである。注目すべきは、梅田の勤王思想に共鳴し、人車船建造を支援し上方交易を担おうとした和州繰綿問屋重鎮、村島家である。村島家は、約10年後の元治元年（1864）に今度は薩摩藩・石河確太郎の指導する大和薩州産物会所に「大株」として参加することになる（長谷川洋史「大和薩州産物会所取建の時期と場所について―曾我村と高田村の場合を中心に―」、東亜大学『研究論叢』第21巻第2号、1997年3月参照）。村島家の薩州産物会所交易構想への積極的参加の下地はすでに長州藩の上方交易構想において醸されていたのである。また村島家にとって、機械紡績導入を試みる当代随一の技術者としての石河確太郎は、人車船の発明者秋良敦之助を彷彿とさせるものがあつたに違いない。いずれにしても村島家は単なる商人ではなく、石河の経済・技術改革構想の思想に深く共鳴できる市井の小知識層の相貌も持つ存在なのである。以上のことは、梅田雲浜の上方交易構想、石河確太郎の薩州産物会所交易構想、薩長交易、薩

芸交易、比義商社、馬関商社、白石家、村島家、が錯綜しているので、改めて稿を作成して詳細に論じてまとめることとする。

- (70) 前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、213～214頁。不幸にも殺害された大谷仲之進は加徳丸に上乘していたのであるが、「上乘」及び「上乘人」について、日本経済史研究所編『日本経済史辞典』上巻（日本評論社、1940年）では次のように説明している。「徳川時代、貨物を輸送する際に貨物の監督一切を引受けて同船することを上乘と云ひ、その当事者自身のことを上乘人と云つた。即ち上乘人は荷物の監督方にして、通常各船積荷主中より一名又は数名の代表者を選び、此者を船積船舶に積荷と共に便乗せしむるものである。上乘人は目的港に到る迄、積荷の監督・処分・其他一切の事項に関し、船頭と協議し、投荷（時に遭遇し船安全のため積荷を海中に放棄すること）の場合に至つても船頭は上乘人と相談の上順序を決定した」（101頁／漢字の一部を現在ものに換えた。ルビと（ ）内は長谷川）。もし荷主代表が9代浜崎太平次だとすれば、大谷仲之進は9代太平次の代理兼才領船頭として上乘していたことになる。
- (71) 前掲『薩藩海軍史』中巻では、長崎丸砲撃事件については、「第十五章 馬関海峡に於ける長崎丸砲撃事件」（719～784頁）として一章の紙幅を割いて、史料を多く盛り込み詳述しているのに対して、加徳丸焼討事件については、同章での長崎丸砲撃事件についての記述の終わり近くに忽然付け足すように、「同年（文久4年）二月十二日（実際は文久4年1月12日）、薩商（実際は薩摩川内久見崎出身の才領船頭）大谷仲之進、綿花菜油を船載し、堺より来たりて周防別府浦に泊す。奇兵隊士永井（正確には水井）誠一郎、高橋利兵衛、其交易品たるを知り之れを焼き、仲之進を斬る。山本（水井も）は二月廿六日大阪御室（難波南御堂）前に、高橋は三月十一日宝積日和山に於て自殺す」（779頁）と数行だけ、しかも正確性が整わぬ形で記されているのみである。また、前掲『海上王浜崎太平次伝』では、次のような、薩摩藩と浜崎太平次の関係の側面を表すエピソードを載せている。「次に指宿町狩集の染川休次郎氏〔昭和七年十一月十八日、五十九歳〕の談を紹介する。『私の父彦左衛門は明治四十五年に八十歳で死亡しましたが其の生前に語つて居た話の中にこんな一条もありました。帆柱の根元をうがつて船底を二重張りにして居た余（「山本」浜崎）の船は其処に唐物を隠匿して居たが、其れが後に至つて遂に暴露した然うで余の船が三島（奄美大島・喜界島・徳之島）、琉球方面より帰来して山川港の埠頭にさしか、つてから其処に約三日間ばかりウロウロして居た。其の後入港した旨を番所に届けると藩吏が船内の貨物検査する。此の際、船長は気を利かして密かに彼等に贈賄をしてゐた。そこで藩吏側も、表面は厳格を極めて居たが、時に臨んで寛厳よろしく行つて居たとかで、藩吏次第に依て検査の厳しいような場合は其の以前に港外へ密輸入品は悉く投棄して危難より免れて居た』」（96～97頁）。このエピソードは、薩摩藩と浜崎太平次が商業・交易（特に密貿易）に関した深い繋がりがあひながら、常に両者は繋がっているわけではないことをよく表している。浜崎太平次側が薩摩藩にも秘密裏に独自に密貿易をおこなう場合もあり、その場合には薩摩藩側は違法行為を摘発する官憲として臨み、浜崎太平次側は何とか欺き逃れようとする犯罪者の立場となり、両者はある種の敵対

関係にさえる。綿海外輸出についても、密貿易の場合程ではないにしても、石河確太郎ら百間町屋敷の一部薩摩藩関係者を例外として、薩摩藩統制から外れた所で浜崎太平次側が独自に活動している可能性は大にあるのである。

(72) 前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、213～215頁。

(73) 同上、207頁（史料名「長州人、浜崎が綿積船を焼く」）。『忠義公史料』収録の「薩商大谷仲之進梟首及び捨札」には加徳丸焼討事件についての他の風聞のひとつが次のように記されている。「長州兵卒組内の商人某、病氣治療申立、三月上旬（元治元年）上京、或問屋へ注文出し即日帰帆、其者の密話に云、去亥（文久3年）九月己未、**長府探索掛一組三人宛四組、兵庫・堺・京攝の間に潜伏、種々探索候処**、薩州より堺表にて綿・油・木綿夥數買込、（直接堺からあるいは兵庫から）長崎へ積送候荷物、薩藩大谷仲之進と申者棟梁にて、其下役四十人計り周旋、**無程出帆の趣、長府へ申達し候に付、其手配にて待居候処、案の如く其船長州別府浦に泊り候故**、改役人（実際は現地尊攘派）罷越、異船と見掛候間（長崎丸砲撃事件と混同）国柄荷物等改の上、通行を許すべしと、乗込候処、日本人計りにて、先づ重立ち候船頭を番所へ小船にて召連帰り（このような事実はない）、言次^{いいつぎ}に大谷仲之進をも同様^{むかいむれ}に及糾問候処、外夷交易の為長崎へ積下し候旨、逐一白状候に付、**兼て探索方より内達の書取と符号いたし候に付**、大谷并船頭共首を刎（実際は大谷だけ斬首）、其筋蒸気船（実際は和船の加徳丸であり蒸気船長崎丸と混同）釜元へ火薬を仕込置候故、一時計を経て焼出し、人々防候得共、綿・油等に火移り、消留難く、遂に船は焼沈、乗組六十八人の内廿八人死亡、残四十人計り（乗員68人の内死亡28人・生存40人は長崎丸砲撃事件のこと）上陸致し候よし」（前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、233頁／ゴシックは長谷川）。この「長州兵卒」（奇兵隊などの民兵であろう）の「商人某」によるという「密話」は、長崎丸砲撃事件と加徳丸焼討事件が混合された風説の典型であるが、長州藩尊攘派の「探索掛」についての件については、本稿本文でみた船越洋之助の証言からしても信憑性が高い。長州藩尊攘派の執拗な探索は精度が高かったものと理解できる。和州産綿取引を中心とした石河確太郎ら百間町屋敷や浜崎太平次大坂支店薩摩屋の活動区が泉州堺・和州・摂津大坂・兵庫であったことを尊攘派がかなりの精度で察知していたのである。「薩州より堺表にて綿・油・木綿夥數買込、長崎へ積送候荷物」とあるように、薩州産物会所交易関係から薩摩藩の泉州・和州・摂州を中心とした産物集荷活動がすでに一度度始まっていたことを長崎丸砲撃事件・加徳丸焼討事件は逆証明したことになるのである。また「無程出帆の趣、長府へ申達し候に付、其手配にて待居候処、案の如く其船長州別府浦に泊り候故」との尊攘派探索の正確さについての証言は、長崎丸砲撃事件と加徳丸焼討事件が混同されているが、いずれにしても長崎丸砲撃に際しても長崎丸の動向をかなり正確に探索していたことを示している。尊攘派が天誅の大きな対象のひとつとしたのが「外夷交易」、外国貿易である。先取的堺商人の古くからの海外進出の貿易都市である堺は「薩賊」の流通重要拠点として、尊攘派探索掛が監視するのは当然であった。また、『勝安芳日記』の文久4年正月28日の項に、「又聞く、薩州の日本製廻船を下の関にて焼討せし風聞あり」（前掲『海舟日記』I、148頁）と記してある。これは長崎丸砲撃事件と加徳

丸焼討事件が混合された風聞（このタイプの風聞はよくあった）である。「下の関にて」は、文久3年12月24日に起った長崎丸砲撃事件の部分であり、「薩州の日本製廻船を……焼討ちせし」は続いて起った加徳丸焼討事件の部分である。これは、長州藩による二つの薩摩藩が関係した艦船襲撃事件が、混乱した風聞となる程、迅速に連続して起ったことを示している。『勝安芳日記』の当該記述が文久4年正月28日の項であることから考えても、加徳丸焼討事件は、大久保一蔵宛土持平八探索届書での報告通り、文久4年1月12日頃に起ったものと理解できる。そうであるならば、加徳丸焼討事件は、長崎丸砲撃事件発生からわずか20日程経過して起きたことになる（「薩州の日本製廻船を下の関にて焼討ちせし風聞あり」という風説が勝の耳に届く速度〈加徳丸焼討事件発生から半月程経過〉は決して遅くはない。勝の情報収集力の高さを示している）。また、『勝安芳日記』では前述の文久4年正月28日の記述から3ヶ月後の元治元年4月26日の項に「兵部殿、内海御一見。長崎丸御乗組み。天保山より西之宮、神戸、兵庫、松尾崎、由良、友ヶ島、堺辺。此日、由良近傍」（同上、169頁）とあるが、これは長崎丸一番か長崎丸二番のことである（本稿注54参照）。

- (74) 前掲『修訂 防長回天史』上巻、588頁。ゴシックは長谷川。同書では本稿本文で引用した養蚕奨励令に関する箇所続けて次のように記している。「其後（養蚕奨励令布告後）、薩商大谷仲之進、綿花・菜油等を船載し、堺より来りて、周防国別府浦に碇泊す。上関義勇隊の水井精一・山本誠一郎、^{これ}之を聞きて、其船に至り、之を詰問し、長崎に輪し交易の用に供せんとするの實を得て、直に貨物を焼棄し、仲之進を殺し、其首を携へ中国浪人其某々と称して、大坂に走り、之を御堂前に梟し、罪状を榜掲し、薩摩先侯（島津斉彬公の）尊攘の大義に背くものと為し、二人亦直に自盡す〔二月二十六日〕。幾ばくも無く、高橋利兵衛〔熊毛郡上島田村農義勇隊の士〕亦共謀の旨を自首して、三月十一日、屠腹す」（同頁）。ここでは上関義勇隊の水井精一・山本誠一郎が加徳丸焼討・大谷仲之進殺害の実行犯としているが、実際は実行犯については不明な点が多い（高橋利兵衛が実行犯の一人であるかどうか不明である）。なお「義勇隊五十人。右、佐々木龍之助・秋良敦之助総督、上関、差し置かれる」（同上書、567頁）とあるように同時期、梅田雲浜や大和薩州産物会所交易構想での和州側有力町人層の中心的存在となる村島家と深く関係した人車船発明者秋良敦之助（本稿注69参照）が義勇隊総督に就いている。また戦前に刊行された『鹿兒島県史』では加徳丸焼討事件について次のように記している。「元治元年正月、周防別府浦で長州藩義勇隊士水井精一・山本朝正等は浜崎太平次所有船を焼き、船の上乗大谷仲之進を殺した。同船は堺三津から莫大な綿・油等を積んで長崎に向つたもので、即ち、水井等は之を以て輸出品を運ぶものとし、攘夷の立場より此の襲撃を敢行したのである。当時、薩藩は盛んに船舶・武器の輸入を図つてゐたが、外船購入料として生糸五百捆を横浜に廻す事を老中に伺出て許され、三月頃より、之が追々廻着した。且つ横浜の商人は薩藩に運上を納めて保護を受け、多量の生糸を輸出したともいふ。かくて、長崎及び横浜に於ける薩藩の貿易は、輸出入共に次第に増加したのである」（前掲『鹿兒島県史』第3巻、241～242頁／漢字の一部を現在のものに換えた）と記している。これによると、焼討された船は浜崎太平次所有船であり、当時薩摩藩は、綿（長崎から）

と同時に生糸（横浜から）も大量に海外輸出していたことになる。

- (75) 当時大和薩州産物会所開設に取り組んでいた石河確太郎は、長崎丸砲撃事件発生の一ヶ月前、文久3年11月付伊地知社之丞宛文書の中で、「上納実綿（薩摩藩が大和薩州産物会所を通して和州側人民に貸付けた綿作用肥料代金を実綿の薩摩藩への上納で返済させるという案）は大坂御屋敷（百間町薩州蔵屋敷）へ積廻し候上、船便次第御国（薩摩藩）へ積下し……相成り申すべき事。（実綿輸送については）大和御会所（開設予定の大和薩州産物会所）より二里の処に川船場（国分）之有り。是より八里計り大和川を下り、大坂木津川口へ入り、御屋敷（百間町屋敷）の御門前迄着船（百間町屋敷は木津川沿岸に開設されている）にて運送の便利^{よろしく}御座候」と今後実施すべき大和薩州産物会所交易の綿を中心とした和州国産物の運送ルートについて述べ、また、実綿を綿繰りして取り除いた実（種子）の方は、絞って「まこ粕」として肥料用油に加工するという徹底した経済合理性を披露している。（詳細は長谷川洋史前掲「薩州商社取建構想の先行段階としての薩州産物会所取建に基づく大和交易構想について（1）」参照）。
- (76) 脇田修・中川すがね編『幕末維新大阪町人記録』、清文堂史料叢書第70巻、1994年、9～10頁。一部漢字と仮名遣を現在のものに換え、句読点を補った。ルビと（ ）内は長谷川。以下同書からの引用について同じ。大坂町人平野屋（難波）武兵衛（号華井）の備忘録「諸事用向日加榮^{ひしかえ}」の元治元年2月26日の項に、「今朝難波御堂門前に珍事之有り。北の御門の外、馬つなぎ内に左の如し（次に現場の簡単な写生図）、灰と塩と合し桶に入れ、合羽に包み、是迄持参の事と存じられ候。南久太郎行当り御台所の御門前石段に、若侍兩人切腹にて死に居り候。見物おびたゞし」と記され、捨札両面の文と水井精一・山本誠一郎の辞世3首が筆写されている。『忠義公史料』に収録の「薩商大谷仲之進泉首及び捨札」にも捨札両面の文が載せられている（前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、232頁）。これは、「諸事用向日加榮」での筆写とほぼ同じ文だが、「水井」が「永井」と誤記されている。本稿引用の捨札文は、『忠義公史料』の方も参考にして調整したものである。
- (77) 井上勝生『幕末維新政治史の研究』（塙書房、1994年）では、水井精一が加徳丸焼討事件から約1ヶ月後に兄水井与作に宛てた書翰の「実は先月（一月）十二日、当隊（上関義勇隊）中の士五・六輩申合……其夜別府港にて船を焼捨、且上乘の者、彼藩（薩摩藩）小船頭、大谷仲之進と申す者を斬首仕り、密に即夜室津（現山口県熊毛郡上関町字室津）迄持帰り、総管佐々木氏〔亀之助〕へ報告仕り候故、私今壺人と佐々木氏より密に起し来り、右の趣を申し、且右の首級をば空敷打捨置き候も残念の事に付、大坂へ持出泉首仕り候ハ、彼国（薩摩藩）へも尚諸国へも右の次第明分に相知り申すべき哉、就ては私外に右暴発の人の内、山本誠一郎と申す者兩人、大坂を〔へ〕罷り下り候、事々愉快に相運び候様に申され候に付、私儀許諾仕り候て、十三日夜より、右兩人大坂へ登り、十九日彼地着岸仕り……」（209頁／仮名遣を現在のものに換え文の一部を読下しにした。ルビと〔 〕内は長谷川。以下同書からの引用について同じ）の箇所を挙げ、義勇隊隊士水井精一は焼討・殺害に加わってなく、山本誠一郎が焼討・殺害をおこなった5・6人の義勇隊隊士ら「暴発の人」の内の一人としてい

る。さらに同書では、「事々愉快に相運び候様に申され候に付」ともあるように、水井・山本は当初、義勇隊総管佐々木からいわれて「首級を梟首するために（割腹の予定はない）上坂する」（同頁）としている。なお『防長回天史』では「当時（文久3年末頃）諸隊の概況を觀るに三田尻に奇兵隊あり遊撃隊あり、小郡に集義隊あり、大島郡に義勇隊あり、山口・小郡間に八幡隊あり、其他各地に郷勇の隊伍を為せるもの、亦少からず。奉勅始末を閩藩に公示するの日に於て、公（毛利敬親）、又諸隊長を召して、親諭書を示し、諸隊兵員並に駐屯の地を定め、隊中規則を頒つ。蓋し、諸隊の士卒、意気頗る昂り、動もすれば、急激の挙に出んとし、来島（又兵衛）・赤根（武人）以下、世子（毛利元徳）^{はつてい}（京都への出立）の遅延を憤り、井原（主計）の上京を以て、迂なりと為し（毛利元徳と井原主計の陳情上京計画については本稿注⁵⁹参照）、往々藩政府に迫て、危言を試むる者あり。故を以て、政府（長州藩政府）、之れを戒飭せしなり〔隊中規則は、要するに、志気・芸術（武術と技術）を考へ、且つ農商等をして、妄りに家を空くせしめず。以て、編入を厳にし、編入は総督より、政府の認可を受けしめ、私闘其他妄挙動暴動を厳禁するに在り。但し、（文久3年12月）十一日発する所の文書中、誤脱ありて、二十一日に至り、訂正・更改す。今、之れに従ふ〕。（親諭書）当今、皇国多難に付、志気正敷者、処々に奮発致し、外患を攘ひ、皇運御挽回等、相謀る。折柄、国中に於て、有志の者、正気少からず団結、要地に屯致し候に付、隊中規矩嚴密に相立て、国力衰弱に至らず、国政益興起致し、宿志の通り、天朝への忠節、相達し候様致度事に候。之に依り、諸隊に於て、此度、申し付け候条、堅く相守り、抽に忠勤は、本懐為すべく候也。（兵員及駐屯所の定め）遊撃隊 五百人 右、来島又兵衛管轄、三田尻、差し置かれる。奇兵隊 三百人右、瀧弥太郎・赤根武人総督、赤間関、差し置かれる。八幡隊 百人 右、堀真五郎・駒井政五郎総督、山口、差し置かれる。集義隊 五十人 右、桜井慎平総督、小郡、差し置かれる。義勇隊 五十人 右、佐々木亀之助・秋良敦之助総督、上関、差し置かれる。右の通り、諸隊人数定め、仰せ付けられ候事」（前掲『修訂 防長回天史』上巻、566～567頁／〔 〕内は末松謙澄による原注。ゴシックは長谷川）と記されている。長州藩政府は、領内要地に各諸隊を配置して臨戦体勢を敷きながらうまく進捗しない8月18日政変善後策を配慮して、各諸隊に「折柄、国中に於て、有志の者、正気少からず団結、要地に屯致し候に付、隊中規矩嚴密に相立て」と各諸隊の「有志の者」に対して「規矩嚴密」による「私闘其他妄挙動暴動を厳禁」を促す「親諭書」を發布してから、わずか2週間後に下関の奇兵隊による長崎丸砲撃事件、1ヶ月後に上関の義勇隊による加徳丸焼討事件という、薩摩藩綿積船に対する現場攘夷派による「妄挙動暴動」「爆発」が立て続けに起ったわけである。また、加徳丸焼討事件にかかわった佐々木亀之助の他、もう一人の義勇隊総監（総管）に「人車船」を発明し梅田雲浜と和州村島家と深く関係した秋良敦之助（本稿注⁶⁹参照）が就いているのは注目できる。

- (78) 井上勝生前掲『幕末維新政治史の研究』、一坂太郎『長州奇兵隊』（中央公論新書、2002年）では、水井精一・山本誠一郎は政治的策謀のため、在京の久坂玄瑞系の長州藩尊攘派から自決を強制させられたものとしている。『幕末維新政治史の研究』では、

本稿注(7)でみた「事々愉快に相運び候様に申され候に付」と自決する予定など微塵もなく唯臬首・捨札掲示を挙行するために大坂へ着いた水井・山本の状況が一変する模様を、同じ水井と作宛水井精一書翰の次の箇所をあげて述べている。「[元治元年2月] 廿三日夜、時山直八・杉山松介・野村和作、京師より……[水井・山本滞在のところへ] 罷り下り……私共[水井・山本] へ死を進め候様子にて、若し兩人遅疑仕り候は、彼三人(時山・杉山・野村)より撃ち[討ち] 候様に相見へ、私共兩人とても死るならば人の手に掛り候ては恥ずかしく候付、何卒兩人を搏[縛] し候て薩第[薩摩藩邸] へ相渡し呉候様申し候処、左程の心底ならば薩第よりは関白殿下[近衛忠熙] へ成り共出で候て薩の罪状を暴白し、其上にて死候は、此の上無き忠節と一決仕り候」(209~210頁)。これによると、水井・山本は、8月18日政変後、久坂玄瑞(吉田松陰門下の俊英)が政務役として指導する在京の長州藩尊攘派の時山・杉山・野村から「薩の罪状を暴白」する臬首・捨札の効果をあげるため自決演出を強制される(拒否すれば殺害される)ことになったのであり、水井・山本はどうせ死を強制されるなら薩賊であるはずの敵薩摩藩邸に差し出される方がましであるとまで思い詰める。続けて同書では、同水井書翰での「左候へ共、私共上ノ関にて総管[佐々木亀之助] と誓候言葉も御座候故、一先彼地(上関)へ下り、又々登り申すべしと相断り候へ共、右三人の者共[時山・杉山・野村]、京師において決定仕り候事ゆへ、左様には成らざる様申すに付、伏水[伏見] より兩人脱走仕り候て、室津[上関義勇隊の所在地・上関室津] へ帰り」(210頁)をあげて、こうした在京尊攘派の冷酷なやり方に堪え兼ねた水井・山本は伏見から室津へ脱走する状況になったことを述べ、さらに続けて同書では、同水井書翰での「京師より野村和作・品川弥二郎、兩人跡を追懸け室津へ来り、佐々木へ右脱走の次第、且彼地(京都)所置の訳を談じ申し……右野村・品川兩人山口へ出、政府[長州藩政府] 論談仕り、前条の通り[水井・山本自決による臬首・捨札の演出] 薩国罪状暴白に相決し申し候に付、此度又々[大坂へ] 罷り登り申し候」(同頁)をあげて、野村・品川が京都から室津まで水井・山本を執拗に追跡し、結局長州藩政府の決定もあって、水井・山本はこの死の演出を引き受けるべく大坂に再び登るに至る状況を述べている。最後に同書では、同水井書翰での「前段爆発[加徳丸焼討・大谷仲之進殺害]の時は、私[水井精一] 与り申さず候へ共、登阪仕り候故、京師の者よりは私共一同と存じ居り候間、最早遅れざる義理に相成り候間、死に趣き申し候。定て御恕は之有るべく候へ共、此度を免じ候ては、死を恐れ候様に後々笑はれ候も至極残念に御座候故、切齒堪へられず候間、何卒々々御許容成し遣はされ候様願奉り候」(同頁)をあげて、不本意・理不尽な組織的強制とく死を恐れる臆病者と笑われるとの武家としての個人的悔しさにあって、「切齒堪へられず候」との残念無念さで自決にいたる水井・山本の悲劇を抉り出している。これらのことからすると、〈山本誠一郎は焼討・殺害の「爆発」現場に立ち会ったかもしれないが真の実行犯ではないのではないか?〉とさえ疑いたくなってくるし、「捨札」も水井・山本自身によるものではないとしか思えない。水井・山本の強制演出された残酷な死によって、皮肉なことに彼らは「古今未曾有の大忠臣」として長州藩の残念無念の象徴として、「残念さん」の先駆けとして民衆の信仰対象となったのだが(本稿

注(79参照)、この「残念さん」の残念無念の底の底には水井・山本個人の、「切歯堪へられず」との本当の残念無念と怨念が隠されていたことになる。これは〈恐怖の時代〉の底の底をもよく表しているといえる。

- (79) 井上勝生同上『幕末維新政治史の研究』では、「残念さん」(残念無念のまま自殺した長州藩士)信仰について次のように非常に興味深く述べているので長く引用したい。「この長州藩諸隊士〔水井精一・山本誠一郎〕の大坂東御堂〔東本願寺難波南御堂〕切腹事件が世に知られるには、翌一八六五(慶応1)年の『残念さん』が大きく預かっている。かつて、大坂の商家の『扇谷真助日記』によって、六五年の『残念さん』信仰が紹介されていたが、同日記の五月二四日の条には、『東御堂、昨年長藩切腹致され候所え、折々参詣致す人御座候、右御人の千日の墓えも参詣致す人も御座候』と記されており、東御堂で切腹した長州藩諸隊士が大坂町人の信仰の対象となったことが知られたのである。同日記は、また同種の信仰が、前後して起った事を記していた。一八六四年七月、禁門の変で敗走した長州藩の下級武士、山本文之助は、尼崎藩に捕らえられて自害し、翌六五年ごろから大坂町人らの爆発的な信仰を集める。この墓へ願を掛けると『何病にても口惜しく(残念に)申……何程の大病にても一心に御願申候得ば全快致し候』という俗信が流布し、それは『大坂町々より大方参拝致さざる人無く御座候、尼の渡大混雑なり』(同日記)と大坂町人の大群集を参詣に動員したのである。切腹した長州藩士は、通称『残念さん』と呼ばれ、この『死者』が神聖視され、現世利益の色彩の濃い民衆の流行神となった。この尼崎の『残念さん』は、五月十七日限りで禁止されるが、これに継続するのが、前述した五月下旬の長州藩諸隊士の切腹現場、大坂東御堂と千日の墓への参詣、そして禁門の変直後に取り壊された長州藩大坂蔵屋敷跡の木への参詣である。『江戸堀の長州屋敷え浜屋敷と申所の柳の木え人々参詣致し候、皆々参詣致す人、柳の葉を皆々持帰り候、此柳をせんじ候へば、何病にても直り候と申なり、仕舞木は坊主〔丸坊主〕に相成、皆柳をのこざりにて切、又けづり候、是は元長州屋敷内の稲荷様御移り成られるためと申すなり』(同日記)と記されているように、旧長州藩大坂屋敷の稲荷が柳に乗り移ったと信じられ〔無念柳〕、尼崎『残念さん』と同様の流行神になったのであり、昼は『食物店』、夜は『夜店』が出る賑わいを見せる。大坂町奉行は、同月二九日に、三郷〔南組・北組・天満組の大坂三区〕町中へ参詣禁止の触を廻した。……大坂の東御堂切腹事件は、このように翌一八六五(慶応1)年、『残念さん』信仰へ展開してゆくが、実は、事件当時の六四年においても、大坂町民が敏速に反応しているのが分かるのである。『甲子雑録』に載せられた事件翌日の大坂発書状は、『何分拙子の見に行候時は、大群集、大雨にて、聊も見事出来申さず、実に以、切腹の人は古今未曾有の大忠臣と存じ奉り候』と報じ、在京の長州藩遊撃隊士は『京撰数万人、声を上げ感涙』したと藩地へ知らせた。長州藩が発信したと推定される書状も『殊に上関綿船一条、御堂前にて兩人切腹、大坂町人数万人見聞、感涙仕らざるものは之無く、申合せ神に祭ると申す由に御座候』と述べている。切腹した諸隊士を『申合せ(共同して)神に祭る』という民衆の動向が伏流となり、共感が持続して翌年『残念さん』信仰の流行神へ展開したと考えて誤りないであろう。……かくて、大坂東御堂の長州藩諸隊士切腹事件は、反外

国交易のスローガン……の故に、民衆の共感を獲得する基本的条件を所持しているのである」(202～205頁／一部、仮名表記を換え、記号『 』を加えた)

- (80) 前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、199頁。史料名は「綿商法に就き注意」となっている。
- (81) 長谷川洋史前掲「大和薩州産物会所取建の時期と場所について」、参照。
- (82) 前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、215頁。
- (83) 岡部福蔵『桐生地方史』(非売品)、桐生倶楽部、1928年、385頁。漢字の一部を現在のものに換えた。ルビと()内は長谷川。以下同書からの引用について同じ。
- (84) 同上、421～422頁。句読点を補い、漢字の一部を現在のものに換えた。ゴシックは長谷川。
- (85)、(86) 同上、425～426頁。同書では、「四郎兵衛、儀右衛門二人は、(駕籠訴実行に)無論死を決せしは明らかなり、然るに、掃部頭(井伊直弼)の四郎兵衛に対する恩典は、実に血あり涙ある処置と謂ふべく、是れ全く、四郎兵衛の至誠が大老を感動せしめし(た)に外ならず」(426頁)と記している。この桜田門外における駕籠訴に対する井伊直弼の温情的処置は大層有名になったことは明らかで、これよりわずか約4ヵ月後の安政6年(1860)3月3日、同じく桜田門外でのまたもやの駕籠訴を偽装した水戸藩・薩摩藩の尊攘派脱藩浪士による襲撃、桜田門外の変で井伊は暗殺されることになる。その井伊大老斬奸趣意書の副書には次のように記されていた。「追々、大老掃部頭所業を洞察致し候に、將軍御幼少の御砌に乘じ、自己の權威を振はん為、公論正議を忌憚り候て、天朝・公辺(幕府)の御為筋を深く存じ込み候御方々、御親藩を始め、公卿衆・大小名・御旗本に限らず讒誣致し、或ひは退隱、或ひは禁錮等仰せ付られ候様、取り計らひ候儀……豈天下の巨賊にあらずや。……斯る暴横の国賊其の儘指し置き候はゞ、ますます公辺の御政体を乱り、夷狄の大害を成し儀、眼前にて、実に天下の安危存亡に拘り候事故、痛憤黙止し難く……今般天誅に代り候心得にて斬戮せしめ候。……何卒此の上、聖明の勅意(天皇の意志)に御基き、公辺の御政事正道に御復し、尊王攘夷、正誼明道、天下万民をして富嶽の安に処せしめ給はん事を希ふのみ」(『水戸藩史料』上編坤、徳川家蔵版1915年、復刻版・吉川弘文館1970年、816～817頁／漢字と仮名遣の一部を現在のものに換え一部読下しに直し、句読点・中黒を補った。()内とルビは長谷川)。これは、「亥年の建白事件」の際の奥平壱岐糾弾の建白書、「殊に壹岐殿御役の後、偏頗私論の義を以て執政其他正義の御方は御退役に御取計……御養君を擁し奉り、御一人、権を専にし……自儘の御振舞も之有り……依て此儘御在役之有り候ては、何程の姦計相巧ぜられ候も計るべからず……御家の御安危にも相拘り候義と存じ奉り候処……徒に傍觀仕り居り候に忍びなく、切齒痛憤の余り……死罪顧みず……言上仕り候……」(本稿(2)参照)とよく似ている。また、同斬奸別紙存意書には、「近時に至りては、夷狄、狡謀・黠略の者、多く出て、万国へ通信貿易し、遂に小を併せ弱を制し、次第に境界広大に相成り候勢に乘じ、^{しほば}屢、神州をも覬覦するに至る」(同上、818頁)とあるが、これは、大谷仲之進泉首・捨札での「(外国貿易によって)豺狼に等しき夷賊の術中に陥り、神州有限の品を以て、夷賊無厭の欲に充てんとする」の原基となっているとともに、「薩州商社発端」

(本稿注91参照)が「其(物価高騰・民衆困迫)由て来る所を原ぬるに……洋国貿易に由るなり。……貿易の権……彼に帰し、彼常に其権柄を握りて、我を制し、未だ曾て我より彼を制するの勢あらず。……是洋人奸猾の為す所に非ず。我未だ事に習れず(習はず)、処置の宜きを得ざるに由るなり」と痛烈に批判するものの原基でもある。

- (87) 安政6年(1859)4月7日付北山安世(佐久間象山の甥)宛吉田松陰書翰では、「さりながら天下の大勢は……実に神州の陸沈(滅亡)憂ふべきの至りなり。幕府遂に人なし。瑣屑(させつ)の事は可なりと弁じも致すべけれども、宇宙を達観して大略を展ぶるの人なし。外夷(がいぎ)控馭(こうぎょ)(来航する外国勢力を巧みに抑えること)最も其の宜しきを失ひ著々人(外国人)に制せられること計り、癸丑(嘉永6年<1853>、アメリカ・ペリー艦隊来航の年)・甲寅(安政元年<1854>、米・英・蘭・露との和親条約調印の年)より已に六、七年に及べども今に航海(海外渡航)の事なし。華盛頓(ワシントン)がどこにあるやら、竜動(ロンドン)が如何なる処やら、画(え)そらごとにて何の控馭(こうぎょ)を能くなさんや。然れども幕府の吏、皆肉食(ひふ)の鄙夫(ひふ)と纨绔(富裕階層)の子弟のみなれば……徳川存立する内は遂に墨(アメリカ)・魯(ロシア)・暗(イギリス)に制せらるること、どれ程に立ち行くべくも計り難し、実に長太息(ちやうたいそく)なり。幸に上に 明天子あり。深く爰に 叡慮(えいりょ)を悩ませられたれども縉紳(しんしん)(貴族・公家)、衣魚(いぎょ)(実世界のことが疎い)の陋習は幕府より更に甚だしく、但だ外夷(がいぎ)を近づけては神国の汚れと申す計りにて、上古の雄図遠略等は少しも思召し出されず、事の成らぬも固より其の所なり。列藩の諸侯に至りては征夷(征夷大將軍・徳川將軍)の鼻息を仰ぐ迄にて何の建前もなし。征夷、外夷に降参すれば其の後に従ひて降参する外に手段なし。独立不羈(たてふしり)三千年来の大日本、一朝、人の羈縛(かりはく)を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁(ナポレオン)を起してフレーヘッド(蘭語 vrijheid、自由)を唱へねば腹悶(はらもん)医し難し。昨年以来微力相應に粉骨碎身すれども一も裨益なし。徒らに岸獄(萩野山獄)に坐するを得るのみ。此の余(松陰)の処置、妄言すれば則ち族せられんなれども、今の幕府も諸侯も最早醉人(さか)なれば扶持の術なし。
- 草莽崛起の人を望む外頼みなし。**されど本藩の恩と天朝の徳とは如何にしても忘るるに方なし。草莽崛起の力を以て近くは本藩を維持し、遠くは天朝の中興を補佐し奉れば、匹夫の諒に負くが如くなれど、神州に大功ある人と云ふべし(奈良本辰也編『吉田松陰集』、筑摩書房『日本の思想』19、1969年、394~395頁/句点を補った。ルビと()内とゴシックは長谷川、以下同書からの引用について同じ)。この時、松陰は、ペリー艦隊に乗り込むアメリカ密航の企て失敗によって行動を奪われ萩野山獄に幽閉(北山安世の叔父洋学者佐久間象山も門弟の松陰にアメリカ密航を教唆した容疑で連座し蟄居処分となる)、しかも老中間部詮勝要撃計画や大原重徳要駕策(公卿大原重徳を使い京都で参勤交代途中の藩主毛利敬親に勤王の大儀を説くとするもの)などのことで木戸孝允・高杉晋作ら松下村塾門下生からも敬遠され孤立するという深い閉塞状況の中にあった。松陰のこの孤立と閉塞は、「那波列翁(ナポレオン)を起してフレーヘッドを唱へねば腹悶(はらもん)医し難し」(松陰と自由独立・独立不羈(たてふしり)の関係の詳細は本稿(2)参照)と発露するしかない深い絶望でもあった。「実に神州の陸沈(滅亡)憂ふべきの至りなり」という「天下の大勢」を眼前にしながらも孤立無援のまったく無力な幽閉の我身だけではなく、松陰は、すべての既成勢力に絶望し、既成勢力の特権の拘束からあ

う限り解放されている「草莽」による「崛起」に希望を見るしかなかった。松陰は、幕府の人材と世界観の欠如はいうまでもないが幕府以下なのが諸侯（諸藩）であるとする。とりわけ天皇の藩屏にして、尊攘派が天皇に次いで崇める公卿（貴族）層への「縉紳、衣魚の陋習は幕府より更に甚だしく、但だ外夷を近づけては神国の汚れと申す計りにて、上古の雄図遠略等は少しも思召し出されず、事の成らぬも固より其の所なり」との松陰の見限り方（これは大の夷人嫌いの孝明天皇にまで射程に入り、教条的な尊攘派からすれば大変な不敬にあたる）は、死後尊攘派の教祖に祭り上げられる松陰（松陰自身の思想と松陰を教祖と祭り上げる尊攘派組織が喧伝する松陰主義とがいに別物であるかは水井精一・山本誠一郎屠腹の経緯〈本稿注78参照〉がよく示している）だけに凄まじいものがある。「但だ外夷を近づけては神国の汚れと申す計りにて」と〈尊攘小児病〉を痛打し、鎖国主義に縛られることなく自ら積極的に海外渡航（密航）を志向できる松陰の思想は、尊攘派とは質的に大きく一線を画するものである。「然らば則ち航海通市（開国・海外貿易）は固より雄略の資にして祖宗の遺法なり、鎖国は固より苟偷（一時凌ぎ・因循姑息）の計にて末世の弊政なり」（安政5年〈1858〉4月「対策一道」／同上、138頁）との反鎖国論者・開国論者の松陰が、修好通商条約締結に反対したのは、〈欧米列強が圧倒的武力優位を背景に、その原理が違ふ日本国に対して自らの原理を強制する不仁・無礼〉が絶対に許されることではないとしたからである。本来、松陰の専門は兵学という科学的客観性に基づく技術系分野であり、松陰は洋学者・開国論者佐久間象山門下でもあった。ペリー艦隊来航の時すでに松陰は、たとえペリー艦隊再来航の際に交戦しても「来春（ペリー艦隊再来航時）必ず大敗は目前に見え候へども」（嘉永6年9月19日付玉木文之進宛吉田松陰書翰。同上、366頁）というように、神風・神国思想を振り回すことなく、客観的科学的に判断していた。この「必ず大敗」の原因として、松陰は「彼れ（西洋諸国）は各国実験を経たる事実、吾れ（日本国）は太平以来一、二の名家座上の空言、此の二つを以て比較致し候へば其の黒白判然に御座候（こうした認識・理解は「空言」虚学を脱して実学を提唱する福沢諭吉のそれとまったく同じである）」（同上、367頁）と西洋学の優位を客観的科学的に認めざるをえなかったのである。松陰が佐久間象山門下として深く洋学に接近しながらも、同時に、「癸丑・甲寅、墨・魯の変（アメリカ・ペリー艦隊とロシア使節ブチャーチンの来航）、皇国の大体を屈して陋夷の小醜に従ふに至る者は何ぞや」（吉田松陰『講孟箚記』上、近藤啓吾訳注、講談社学術文庫、1979年、30頁／（ ）内とルビは長谷川。以下、『講孟箚記』からの引用について同じ）「今や東墨・西欧駭々来り逼る。官皆枉げて其の意に適従す。……蝦夷のクシュンコタン（樺太の久春古丹）既に魯人（ロシア人）の城堡を築く。松前の箱館、伊豆の下田、已に墨人（アメリカ人）の互市場（貿易場）となる。……然らば則ち神州の其の汚を受けざる者幾許ぞ」（同上、136頁）と、「但だ外夷を近づけては神国の汚れと申す計りにて」と松陰自身が痛烈に批判したはずの〈攘夷小児病〉にまで拡大していく「皇国の大体」とするアジア的な尊王観に深くとらわれているというのは、石河確太郎の場合と通底するものがある。洋学者石河も、「法（方法）を取る（採用する）に我彼（西洋側・日本側）に拘らず、彼（西洋側）が悪きを惡て其法の良きを棄てず、

即ち法を取るの宜しき期なり」(「薩州商社発端」)との客観的科学的姿勢に基づき、「彼れ(西洋側)は衆力を一に合せ不貲の財(額を数えきれない程の財=巨額な財)を積で動止機を失はず妙変し、我れ(日本側)は各力格別に、僅少の財を懐にし進退機に遅れて狼狽す。即ち商権自ら彼れに帰し、物品の時価(相場)も、彼れより出づる所以なり」(同上)と、西洋の日本に対する貿易上の商業方法の圧倒的優位を明確に認識していた。西洋の「衆力を一に合せ不貲の財を積で」とは、分散していて価値を生まない社会的遊休資金「僅少の財」を「一に合せ」て(合本 joint-stock 化して)、資本 capital (価値の自己増殖体)を形成することつまり会社制度(石河はこれを「薩州商社発端」「薩州商社条書」では「コンベニー・公班衛」と表現した)を意味し、石河も、「古は日本の商道の如く商人各々分々に売買せしが、常に利を失て得る事少く、因て彼道に^{かの}革め^{あた}此道に^{この}換へ^{コンベニー}百万すれども皆意の如くならず。終に、公班衛と云ふ法(方法)を立て、利を得ること始めて大なり」(同上)と、西洋が「彼道に革め此道に換へ百万すれども」=「実験を経たる実事」に立脚した試行錯誤を踏まえて「公班衛」という最高の商業方法に到達していることを高く評価している。石河も、旧態依然たる「各力各別に、僅少の財を懐にし」「商人各々分々に売買せし」の状態にある「日本の商道」と西洋の「公班衛」を比較するとどちらが優位であるかは「黑白判然」としているとし、このままでは外国貿易では「日本の商道」が「必ず大敗」することを確認している。そうして石河は、客観的科学的姿勢の洋学者でありながら同時に、楠木正成(天皇の最高の理想的忠臣として偶像化される)の弟楠木正季(「七生報国く七度生まれ変わって天皇・国家に忠誠を尽す」のことを兄正成に伝えたとする伝承は特に太平洋戦争末期、青年達の特別攻撃や戦後、作家三島由紀夫の割腹死などに大きな影を落とした)の22代目嫡流(正季の末裔石井家く石河確太郎の元の姓は石井であり石井蜜太郎・石井蜜庵と名乗っていた時期があった)は和州郡高市郡石川村の剣池の孝元天皇陵(伝)の傍に墓陵守の如く在った)であることを生涯の誇りとしてこたわり続け、そのこたわりは、西洋からの会社制度導入の宣言書である「薩州商社発端」冒頭を「夫我が^{それ}神国たるは、天経地緯正位に居り、寒熱風雨適度を得、山高く川深く、地壤肥沃にして、五穀豊饒金銀銅鉄より玩飾に至る迄、凡人生に用たるもの一として豊優ならざるはなし。……即ち^か神国たる所以なり。然ればこそ幾千年来、力を籍らず、欠を外に補はず、特立(独立)して神威を輝せしなり」と祝詞のような文言から始めたことによく反映されている。在来の復古的なアジア的諸観念(ナショナリズムへと展開する)に深くとらわれていながら同時に近代西洋の先進的な経済・技術の在り方に深く傾倒していくという一見すると二律背反的な姿勢は、幕末期の知識層の普遍的な姿勢(通俗的にはく和魂洋才)ともいわれる)であったといえる(またこれは維新後の文明開化・富国強兵・四民平等(福沢諭吉の理念でもある)をスローガンに掲げる近代日本の基本的姿勢であり、太平洋戦争敗北ではなほだ不完全ではあるが総括される)。松陰は、近代西洋の先進的な経済・技術の在り方が象徴する現実的合理的の対応方法を「扱て又小事とは雖も器械は兵勢に関係在る事最も重きものなるに、邸吏の議論は西洋の事は分釐も用ひず、船は和船、銃は和銃、陣法は和陣法とのみ一図に凝り固まり、洋説をば一切入れず」(前掲嘉永6年9月19日付玉木宛松陰書翰、

前掲『吉田松陰集』、366頁)というように「小事」とし、「今(嘉永6年以来安政2年頃)、神州を興隆し四夷を撻伐する(神州日本に対して一方的に開国を強要する外国勢力を征伐する)のは仁道なり。之を礙ぐる者は不仁なり。……仁を志する者豈寥々ならんや。此の志を一身より子子孫孫に伝へば、其の遺沢、十年、百年、千年、万年と愈々益々繁昌すべし。今、天下の勢、無事にして多難を伏し、至安にして至危を伏す。伏する者は必ず発す、自然の勢なり。一旦多難至急の発泄するに(散り広がる)至りては、潰敗復た収むべからず。此の時に當りて一人より三軍、一身より子孫に伝へたる所(仁道)が大用をなし、神州興隆・四夷撻伐の功必ず成るべし。……自ら神州の陸沈、四夷の跋扈を坐視する者は、其の罪、逆賊より百等も重きなり」(吉田松陰『講孟竝記』下、近藤啓吾訳注、講談社学術文庫、1980年、145～146頁／ゴシックは長谷川)というように、仁に収斂される倫理性を「大用(大事)」とする。儒学思想の本質である内的な仁(正しき人間性)を実際に外的関係において礼や義として、「坐視する」ことなく発露することこそが孟子・性善説の忠実な徒であらんとする松陰にとって至上命令(これを発露できぬことは「不仁」であるとする)の「大用(大事)」であり(仁の不実行＝「不仁」とはしない、『論語』・孔子思想での本来もっとゆったりとした仁の概念とはかなり相違するものがあるが)、それ以外は外的関係においていかに「最も重きもの」であっても「小事」であった。これは、近代西洋の体制とは異質な「神州」の特殊性と「独立不羈」をまったく無視して自己の「開国の論理」を武力を背景に一方的に強要する「四夷」の「不仁」に対して、現実的対応(「小事」)では「必ず大敗は目前に見え候へども」、「坐視する(不仁)」ことなく「四夷撻伐」を敢然と遂行できる倫理性を「大用(大事)」とする価値観である。こうした松陰の価値観は、福沢諭吉や石河確太郎の場合より遥かに際立っている。石河確太郎が取り組んだ近代西洋の機械紡績業のことも、福沢諭吉が紹介し石河が実現化しようとした会社制度(薩州商社)のことも、福沢が提唱した文明開化・富国強兵のことも、松陰の価値観からすれば、皆「小事」である。石河も福沢も、機械紡績業・会社制度導入など近代西洋の先進的な経済・技術に基づく現実的合理的対応を「小事」とはみなしていない(「小事」とみなしてはこうした経済・技術上の新しき試みと真っ正面から取り組み遂行することはできない)。しかし、松陰の「小事」と「大用(大事)」の価値観は、福沢の「国の文明は形を以て評す可らず。学校と云ひ、陸軍と云ひ海軍と云ふも、皆是れ文明の形のみ。この形を作るは難きに非ず、唯錢を以て買ふ可しと雖ども、こゝに又無形の物あり、この物たるや、目見る可らず耳聞く可らず、売買す可らず貸借す可らず、普く国人の間に位して其作用甚だ強く、この物あらざれば、彼の学校以下の諸件も実の用を為さず、真にこれを文明の精神と云ふ可きものなり。蓋し其物とは何ぞや。云く、人民独立の気力、即是なり。……畢竟、人民に独立の気力あらざれば、彼の文明の形も遂に無用の長物に属する」(『学問のすゝめ』／これについての詳述は本稿(1)参照)とする理解と通底するものがある。「学校」「陸軍」「海軍」(そうして会社制度も)など福沢の場合の「文明の形」(経済・技術の範疇)は松陰の場合の「小事」(「器械」「兵勢」「船」「銃」「陣法」など経済・技術の範疇)に対応し、福沢の場合の「文明の精神」「独立の気力」(国民の「自由独立の気風」「スピ

リット」の範疇)は松陰の場合の「大用(大事)」「神州」における「仁道」の遂行)に対応しているし、現実的な「大敗」は必然とわかっているが、「不仁」(不義・無礼)をなす巨大な相手に「仁」を敢然と遂行し貫くべしとする松陰の主張する「仁道」は、福沢の場合の「瘠我慢の説」と通底するものがあるのである。さらにいえば、松陰のいう「独立不羈三千年來の大日本」^{ナポレオン}「那波列翁を起してフレーヘッド(自由)を唱へねば腹悶医し難し」は、福沢のいう「不羈独立」「自由独立」や石河らが「薩州商社発端」でいう「幾千年來、力を籍らず、欠を外に補はず、特立(独立)して神威を輝せしなり……実に当今の形勢にては、我が日本の膏血、漸く洋国に吸はれ、遂に枯倒する外これ有るまじく、是れ我輩の皇国の為に深く憂ふる所なり」に連なっていくものである。

- (88) 富田正文編者代表『福沢諭吉選集』第1巻、岩波書店、1980年、78～81頁。ゴシックは長谷川。文献につき教示いただいた、福沢諭吉協会松崎欣一氏に謝意を表する。
- (89) 福沢諭吉『学問のすゝめ』、前掲『福沢諭吉選集』第3巻、105～106頁。同書では福沢は、次のように述べている。「斯の如く世を患て身^{うらや}を苦しめ或は命を落とすのを、西洋の語にてマルチドムと云ふ。失ふ所のものは唯一人^{いちにん}の身なれども、其巧能は、千万人を殺し千万両を費したる内乱^{いんらん}の師よりも遙に優れり。古来日本にて、討死せし者も多く、切腹せし者も多し。何れも忠臣義士^{いっし}とて評判は高しと雖ども、其身を棄たる由縁を尋るに、多くは両主政権を争ふの師に關係する者歟。又は主人の敵討等に由て花々しく一命を抛たる者のみ。其形は美に似たれども、其実は世に益することなし。己が主人のためと云ひ、己が主人に申訳なしとて、唯一命をさへ棄ればよきものと思ふは、不文不明の世の常なれども、今、文明の大義を以てこれを論ずれば、是等の人^{ひと}は未だ命のすてどころを知らざる者と云ふ可し。……余輩の聞く所にて、人民の権義を主張し、正理を唱て政府に迫り、其命を棄て、終をよくし、世界中に対して恥ることなかる可き者は、古来唯一名佐倉宗五郎あるのみ。但し宗五郎の伝は、俗間に伝はる草紙の類のみにて、未だ其詳なる正史を得ず。若し得ることあらば、他日これを記して其功德を表し、以て世人の亀鑑に供す可し」(同頁)。〈「忠臣義士」の艱難辛苦の敵討ちは、「瘠我慢の説」に通じるものがありながら、「文明の大義」の契機となっていないので、「自由独立」へと展開しうるものになっていない〉とする福沢の論理については、本稿(1)(2)で既述した。
- (90) 前掲『福沢諭吉選集』第1巻、70～71頁。同書の編者注は「『文久年間のこと、覚ふ』とあるのは、福沢の記憶ちがいで、その執筆年月は、慶応元年閏五月であった」(71頁)としている。福沢諭吉や神田孝平にとって、「律義一遍、堅気の正直者」たる「此婆」は、新知識・洋学的知識でもって、その無知蒙昧を啓蒙すべき対象に過ぎないが、知識レベルではなく、生活レベルの深層において日本民衆の特質(秘密)を探ろうと明治22年(1890)に來日したラフカディオ・ハーン(小泉八雲/1850嘉永3～1904明治37)の視野は、福沢らの啓蒙主義の死角に及んでいる。ハーンは、次のように述べている。「わたくし^{わたし}の家で長年使っていた下男があったが、この男のことを、わたくしは平素から、しごく快活な、後生楽な男とばかり思っていた。物を言いかけると、この男は、いつでもえへらえへら笑っている。仕事をしていれば、しじゅう楽し

そうだし、浮世の苦勞など、爪の垢ほどもないような顔をしている。ところが、ある日のこと、この男が自分ひとりでいると思っているところを、わたくしはそっと覗いて見て、まるでこの男の気のゆるんだ顔をしているのに驚いたことがある。いままでこちらが知っていた顔とは、まるで打って変った顔つきなのだ。心の痛みと腹立ちのこわい顔があらわれて、年が二十も老けて見えた。わたくしは、エヘンと咳払いをして、自分のいることを知らせてやった。すると、たちまちその顔が和らいで、まるで若返りの奇蹟にあったように、ぱっと明るくなったのである。これなどは、じつに、ふだんから自分というものを殺しつけている自制心の奇蹟である」(ラフカディオ・ハーン『心—日本の内面生活の暗示と影響—』、平井呈一訳・改版、岩波文庫、1977年、53頁)。「いつでもえへらえへら笑っている」下男の「しごく快活な、後生楽な男」「仕事をしていれば、しじゅう楽しそうだし、浮世の苦勞など、爪の垢ほどもないような顔をしている」ような外観は、「諸色高直」の愚痴を「喋々しゃべり続けに喧し」い「律義一遍、堅気の正直者」の賄い老婆のそれと同じものがある。また、これは、舅奥平老岐(中金操一・正衡)の「適薩俗記」を生涯信玄袋の底に潜めていた光、中金武彦少年がふだんは穏やかであったであろう祖母光^{みつ}の、老岐と奥平家の「無念を子孫に伝えたい」とする時の一瞬表われる「顔つきと声の悔しさ」(本稿②参照)と重なるものがある。福沢や神田の視野はその外観の所で止まっているが、賄い老婆のその深奥のところを「そっと覗いて見」ると、「いままでこちらが知っていた顔とは、まるで打って変った顔つき」「年が二十も老けて見え」る「心の痛みと腹立ちのこわい顔」が密かに在り、「自分のいることを知らせてやる」と「たちまちその顔が和らいで、まるで若返りの奇蹟にあったように、ぱっと明るく」元に戻ることも、下男の場合と同じなのである。「これなどは、じつに、ふだんから自分というものを殺しつけている自制心の奇蹟である」というのは、日本的なるものへ傾倒する余りのハーンの最良の最良倒しの見当外れの評価の側面もあるが、福沢の思想ならば、これを「自制心の奇蹟」などとはとんでもないこと、「腹の底まで腐れ付」いた「町人根性」あるいはアジア的奴隷根性、「目上の人に逢へば一言半句の理屈を述ること能はず、立てと云へば立ち、舞へと云へば舞ひ、其柔順なること家の飼たる瘦犬の如し。実に無気無力の鉄面皮」(『学問のすゝめ』)に過ぎぬものと切り捨ててしまうべきものであり、「ふだんから自分を殺しつけている自制心」の深奥に内在する思想的意味など一顧だにしない死角を露呈させられるものである。「心の痛みと腹立ちのこわい顔」としての下男や賄い老婆や光、つまり「心の痛みと腹立ちのこわい顔」「顔つきと声の悔しさ」としての民衆を表面的な「弁舌方便」や「一筆を振り廻はして」啓蒙することは不可能なのである。

- (91) 長谷川洋史前掲『『薩州商社発端・薩州商社条書』の二つの版(大槻版と本間版)について』、36頁。本稿で用いた「薩州商社発端」「薩州商社条書」は、本間郡兵衛が慶応3年(1867)8月に故郷酒田に宣伝用に持参した「薩州商社発端」「薩州商社条書」の原文(本間版/本間利美家所蔵本間新四郎家文書に収録)と慶応3年6月付で表明された直後の「薩州商社発端」「薩州商社条書」を大槻文彦が京都で筆写したものの(大槻版/大槻文彦『慶応卯辰実記』に筆写収録されたもので、『慶応卯辰実記』

原本は仙台県立図書館が所蔵しその写本は東京大学史料編纂所が所蔵している）を折衷して研究用に調整したもの（長谷川同上論文に付録として全文掲載。また長谷川洋史「『薩州紡績役所公班衛定則』の解析(1)―『薩州商社条書』との照応―」、第一経済大学経済研究会『第一経大論集』第34巻第2号、2005年9月にも全文掲載）である。今回本稿での引用に際して、一部表記を改訂した。本間新四郎家（酒田本間家の分家）は、本間郡兵衛の兄礼蔵の家系であり（現当主は本間利美氏）、郡兵衛亡き後、郡兵衛及び郡兵衛関係の文書は本間新四郎家文書の内に保管され現在に至っている。本間新四郎家文書は、マイクロフィルム化されている（雄松堂書店、「山形県 本間新四郎家文書（酒田湊）」（マイクロフォーム 近世の廻漕史料）。「薩州商社発端」「薩州商社条書」（本間版）や「薩州商社名籍」など本間新四郎家文書内の主要なものは、酒田市史編纂委員会編『酒田市史 史料編第四集海運篇』下（酒田市、吉川弘文館、1969年）に活字化され掲載されている。また長谷川同上論文では、市来四郎編『忠義公史料』（鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 忠義公史料』第5巻、1978年、853頁）に収録されている匿名の「泉州堺薩州商社演舌之覚」について、それが同書では「明治元年戊辰八月」と付記されていることに基づいて、「この慶応四年明治元年八月の史料は……この演説者が誰で、いかなる層を対象に、いかなる場所で、なされたものなのかは定かではないが」（長谷川同上論文、32頁）と述べた。しかし、その後本研究は、新史料の奥平沓岐「適薩俗記」を入手し、「泉州堺薩州商社演舌之覚」の草稿が「適薩俗記」の慶応3年7月25日の項に記されていてことを発見し、同上論文の当該記述を大幅に訂正しなければならないことに至った。「適薩俗記」の内容から、同年7月に、沓岐は、大坂百間町薩州屋敷で石河確太郎らの薩州商社取建構想と起草直後の「薩州商社発端」「薩州商社条書」と遭遇し、薩州商社取建構想に、主に薩州商社についての外部交渉・広報宣伝活動の面で参加することになり、「泉州堺薩州商社演舌之覚」草稿は、沓岐が広報宣伝活動の一環として、「薩州商社発端」「薩州商社条書」を広報宣伝用に要約短縮したものであったことがわかった。「泉州堺薩州商社演舌之覚」は慶応4年明治元年8月ではなく慶応3年7月頃のものであったのである。だが、この訂正について精確な内容に基づき述べるべく準備をして積年を経た。今回本稿起稿の大きな動機のひとつは、ここにある。この訂正についての詳述は、次回以降の本稿でおこなうこととする。

- (92) 明治新政府の外国事務局・大阪通商司の官吏加藤祐一（五代友厚のプレーン・トラスト）が執筆した会社制度についての啓蒙冊子、『交易心得草後篇』（明治3年〈1870〉刊／東京経済大学図書館所蔵三橋文庫）では、合本 joint・stock の概念について、「此商社の法をむづかしき事の様におもふべからず。ちかく是をたとへていはゞ神社仏閣の建立寄進と同じ道理也。同志のものといふは則信心の輩にて分限に応じ身元金を出すは寄進帳の勸化につく也。或は百疋貳百疋より百両千両の奉納金を出すともおのおの身分相應の寄進につく事なれば格別に骨の折る、事もなくてさて大社高堂忽ち成就するなり。社長は世話人、社中は講中也。神仏は信心厚ければ冥々に福德を授かり、商社は商業を励めば現在に利益を得る也。仏説に他力といふも則商社同様の趣意にて多人数の力を合せて事をなさんには大かたの事の成らざる事あるべからず。則神社仏

- 閣も寄進したる人々の家居よりは百倍の大社高堂を造り出す也。商社もそのごとく多人数、力あはする時はいかなる大なる商業にても自在にせらるゝ也」(菅野和太郎『日本会社企業発生史の研究』、岩波書店、1931年、49～50頁／漢字の一部を現在のものに換え句読点を補った)と、会社制度(商社)を民衆にとって馴染み深い神社仏閣に、合本・共同出資を各自信心に応じての神社仏閣建立への寄進に、それぞれ譬えて巧みに説いている。その啓蒙的文体は、「薩州商社発端」のそれをさらに拡大したのになっていて、「神仏は信心厚ければ(寄進額が多ければ)冥々に福德を授かり、商社は商業を励めば現在に利益(出資額に応じた配当)を得る也」までに至ると逆に会社制度の本質のことが希薄化してしまっている(詳細は長谷川洋史「幕末・明治前期における会社制度概念受容の特質について」(1)、東亜大学『研究論叢』第19巻・第2号、1995年3月、参照)。
- (93) 長谷川洋史「薩州商社取建構想の先行段階としての薩州産物会所取建に基づく大和交易構想について(1)―薩摩藩交易方掛石河確太郎の経営思想を中心に―」、東亜大学『経営学部紀要』第5号、1996年8月、参照。石河確太郎は、本稿本文でも述べるように、文久3年11月1日付の機械紡績所取建建白書(生産の革新について)に先行して、同年9月付で薩摩藩に提出した建白書において、薩州産物会所交易のシミュレーション(流通の改革について)をおこなっている(長谷川洋史同上論文(2)〈東亜大学『経営学部紀要』第6号、1997年2月、参照〉。このことは、流通過程が生産過程を包摂するような(薩州産物会所〈当初は本拠地を大和郡山に予定〉の交易ネットワークによる機械紡績所〈大和郡山に建造予定〉の運営構想は、後に薩州商社〈堺に本館〉による機械紡績所〈薩州商社堺本館内に建造した堺紡績所〉の運営構想に飛躍していく)、石河の経済・技術改革構想の特徴をよく反映しているといえる。
- (94) 絹川太一前掲『本邦綿糸紡績史』第1巻、198頁。
- (95) 「石河確太郎正龍を主たる差出人とする諸書付並びに古文」、大阪大学附属図書館所蔵(以下「石河確太郎関係文書」と略記)。絹川太一同上『本邦綿糸紡績史』第1巻、146～148頁。文の一部は読下しに直し、漢字と仮名遣の一部を現在のものに換え、句読点を補った。以下、「石河確太郎関係文書」からの引用について同じ。「石河確太郎関係文書」は、絹川が『本邦綿糸紡績史』を執筆する際に収集した、石河確太郎に関する一次史料に近似するもので、長く日本紡績協会(前身は日本綿業倶楽部)が保存・所蔵していた。また、「石河確太郎関係文書」の主要な文書は、芳即正「石河確太郎文書」(『尚古集成館紀要』第8号、尚古集成館、1996年3月)が翻刻している(ただし機械紡績所取建建白書など『本邦綿糸紡績史』第1巻に翻刻・掲載されている分は省略している)。
- (96) たとえば、薩摩藩士本田弥右衛門(1829文政12～1909明治42^{ちかお}親雄。維新後は枢密顧問官・男爵)は、慶応3年(1867)8月10日付大久保一藏(利通)宛書翰で「先年来御案内の通り、折々の冗費少なからず、外国云々の引き続き、府庫(薩摩藩金庫)全く空虚、非常の預儲(預貯金)は勿論、今日の御用途も日々と窮迫、出入の計算を失せられ候様に窺ひ奉り候(に)付ては、心あらん人に限り焦心慨歎いたし候」(前掲『薩藩海軍史』中巻、854頁)と薩摩藩財政の窮迫振りを本田自ら「慨歎」し

ている。こうした財政窮迫状態は、もちろん、慶応3年に始まったことではない。特に嘉永6年(1853)のアメリカ・ペリー艦隊来航(黒船ショック)を契機として引き起こされた対外・対内危機に対応するべく薩摩藩が支出してきた巨額な経費の累積による「先年」来の、「府庫全く空虚、非常の預儲は勿論、今日の御用途も日々と窮迫」という慢性的財政窮迫状況なのである。しかも対外・対内危機は、薩摩藩を次第に討幕路線に傾斜させていくので、そのための経費も一層巨額化していかざるをえない(250年以上も続いた幕府を打倒するというのはそれだけで莫大な経費がかかるのである)。しかし、同時にこの薩摩藩の慢性的財政窮迫状況が、本稿本文でも述べるように、薩摩藩財政からの支出に依存しない、薩摩藩財政から独立した自立せる経済体、短期間で効率よく利潤獲得が可能となる(超過利潤の獲得が可能となる)経済体一石河碓太郎の場合だと薩州産物会所さらに薩州商社及び機械紡績所、五代才助の場合だと上海交易さらに比義商社及び機械精糖所一の創設を中心とする薩摩藩の経済・技術改革構想を惹起することになったのである。

- (97) 五代才助が取り組んだ上海交易構想・比義商社取建構想についての詳細は、長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(3)」参照。上海交易開始と機械製糖業導入・諸機械輸入・海外留学生派遣・軍艦大小砲輸入など、薩摩藩が現在早急に着手すべき「枢要なる件々」を建白した「五代才助上申書」の序文では、「今般、前の浜(金鐘湾・鹿兒島湾)に於て、英国と砲戦及ばせられ、夥しき夥御損失も御座有るべき哉と存じ奉り候得共、三州(薩摩国・日向国・大隅国)士民の蒙昧を瞬時(に開発)するは天幸にして千金に易へ難く、誰か憤発、富国強兵の功業を積み、(鹿兒島砲撃・炎上に対する)復讐の慷慨仕らざるべき哉。是よりして天下、一般に時勢対ず、攘夷拒絶の成らざるを理會仕り、天下の形勢、開国に帰するの時期近きに御座有るべし。左候へば、諸侯競て富国の手業勉強仕るべく候。先ずる時は、人を制するの理、諸侯の手術伸ばさざる内、富国御充実成させず候ては、容易に其功積み難く御座候間、此機会を失せられず、急ぎに左の枢要なる件々、御取開き之有り候様に存じ奉り候」(前掲『鹿兒島県史料 忠義公史料』第2巻、931頁)と述べられている。ここでも五代は、薩英戦争を通して、「三州士民の蒙昧を瞬時(に開発)するは天幸にして千金に易へ難く」としながらも同時に「復讐の慷慨仕らざるべき哉」とする、イギリスに対する複雑な指向性を表明しているが(本稿注97参照)、「先ずる時は、人を制するの理……此機会を失せられず」との姿勢でもって、開国と近代西洋的知識・技術の導入を前提にした「枢要なる件々」の実施にあたるべしとするのは、石河の場合と同様、五代の経済・技術改革構想全体を貫く超過利潤的観点をよく表している。
- (98) 長谷川洋史前掲『薩州商社発端・薩州商社条書』の二つの版(大槻版と本間版)について、35～37頁。
- (99) 前掲「石河碓太郎文書」。絹川太一前掲『本邦綿糸紡績史』第1巻、211～212頁。
- (100) たとえば、石河碓太郎は、伊地知壮之丞(貞馨)・松岡十太夫(政人)・税所竹兵衛・黒田嘉右衛門(清綱)に、上海の物価情報紙、「上海新報」1867年1月・2月の7枚を提出している(島津忠承・島津久光子孫)家「玉里文書」〈鹿兒島大学付属図書館

所蔵)。鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 玉里島津家史料』5、鹿児島県、1996年、76～90頁)。

- (101) 前掲「石河確太郎文書」。芳即正前掲「石河確太郎文書」、22頁。慶応2年(1866)1月付吉村才之丞宛石河確太郎書翰で石河は、「器械の装構(機械紡績所)は大坂の近地は宜しからず、左海(堺)は水道御座無く御座候。南都(奈良)は事甚だ成し易しく運送も便利成る可し、又、紡局(機械紡績所)・銀札(薩州産物会所からの銀札発行)の企も出来申すべく候」と述べている。文久年間(1861～1864)の薩州産物会所交易構想段階において、石河は、生産(機械紡績所)と流通(薩州産物会所)の拠点を南都・大和郡山(和州北方)や大和高田(和州南方)など和州(大和国)に想定していて、特に和州における銀札発行は重要な課題であった(詳細は、長谷川洋史「薩州商社取建構想の先行段階としての薩州産物会所取建に基づく大和交易構想について(3)―薩摩藩交易方掛石河確太郎の経営思想を中心に―」、東亜大学『経営学部紀要』第7号、1997年9月、参照)。
- (102)、(103) 前掲『鹿児島県史料 忠義公史料』第3巻、233～234頁。
- (104) 前掲「石河確太郎関係文書」。芳前掲「石河確太郎文書」、8頁。ゴシックは長谷川。
- (105) 詳細は、長谷川洋史「薩州商社取建構想の先行段階としての薩州産物会所取建に基づく大和交易構想について(2)―薩摩藩交易方掛石河確太郎の経営思想を中心に―」、東亜大学『経営学部紀要』第6号、1997年2月、参照。
- (106) 詳細は、長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(3)」参照。
- (107) 『氷川清話』、前掲『勝海舟全集』14、47頁。ここで勝安芳は、「大楽源太郎は、よさそうな男だったよ。あまりたびたび会ったことはなかったが、話せるやつらしかった。長州人には珍しい男さ」といっているが、大楽と「あまりたびたび会ったことはなかった」ことは勝の幸運であったかもしれない。大楽源太郎(1832天保3～1871明治4)が師事した豊後日田の広瀬淡窓(1782天明2～1856安政3)は儒学者ではあるが、主宰した咸宜園の「咸宜(みなことごとく良し)」が表明しているがごとく、その門人に高野長英・村田蔵六ら蘭学者もいて、各自個性重視の基本姿勢が非常に柔軟であった。このことは、河上彦斎が師事した国学者林桜園(1797寛政9～1870明治3)と通底するものがある。英知を備えた恐怖の暗殺者、大楽と河上はいずれも、維新直後明治4年(1871)に、武張った時代(恐怖の時代)の遺物、時代錯誤者として、前者は文明開化を掲げる新政府の追跡の果てに暗殺され、前者を匿った後者は新政府によって斬首処刑された。
- (108) 逸木盛照『冷泉為恭の生涯』、便利堂、1956年、42～45頁。()内は長谷川。
- (109) 山本梅史作詞・佐藤吉五郎作曲『堺音頭』。堺出身の俳人で堺市役所に勤め市会書記長も務めた山本梅史(1886明治19～1938昭和13)は、数世紀にわたり堺湊・自治都市堺・堺商人に累積されたきた進取の姿勢を皮膚感覚でよく理解していた。『堺音頭』の「物のはじまりや なんでも堺 三味も小唄もみな堺」の一節を、本稿のテーマに即して振るとすると、〈物の始まりや 何でも堺 商社(会社制度・薩州商社)も機械紡績(堺紡績所)もみな堺〉となる。堺戎嶋は会社制度と機械紡績業という近

代日本資本主義の二大要素の原基点となった。

- (110) 青木秀平についての詳細は、長谷川洋史前掲『『薩州紡績役所公班衛定則』^{コンベンニ}の解析(1)』、長谷川洋史「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(1)―石河確太郎と近江商人―」(福岡経済大学経済研究会『福岡経大論集』第36巻第3・4号第37巻1号合併号、2007年9月)参照。
- (111) 2種類の薩州商社建家絵図の内、ひとつは、絹川太一前掲『本邦綿絲紡績史』第1巻の150-151頁に写真掲載されている。この絵図は、絵図中に「慶應三年卯八月十九日出願繪圖」と付記されていて、慶應3年8月19日という薩州商社実在の年月日の左証となっている。絹川はこの絵図写真に「奉行(堺奉行)の検視を得た堺紡績敷地」とのキャプションを付している。しかし、絵図中に明記されている「薩州商社建家場所」との墨字は絹川の眼にはまったく映っていない。それ程に当時(昭和12年頃)、薩州商社の存在そのものについての研究認識がまったく空白になっていたのである(現在の一般的研究認識もそれ程変わっていない)。この絵図は堺紡績敷地(その意味合いもあったかもしれないが)というよりは薩州商社についての出願絵図であった可能性が高い。この出願絵図についての詳細は、長谷川洋史前掲『『薩州紡績役所公班衛定則』^{コンベンニ}の解析(1)』参照。もう一種は、絵図の現物であり、前掲本間新四郎家文書(本間利美家所蔵)の内に収められている。この絵図の方は、先の絵図と基本的に同じ構図であるが、先の絵図よりもかなり詳細な書き込みが施されていること、絵図中には「慶應三年卯八月十九日出願繪圖」のような付記がないことが大きく異なる。薩州商社建家絵図は、「薩州商社発端」「薩州商社条書」の場合と同様、複数のバージョンが作成されていたことは大いに注目できる。さらに、本間郡兵衛が「薩州商社発端」「薩州商社条書」「薩州商社名籍」とともに薩州商社建家絵図も酒田に持ち込んだ事実も大いに注目できる。薩州商社建家絵図の本間版ともいえるこの現物絵図の詳細な分析は、まだ本研究がおこなっていない重要課題のひとつとなっている。
- (112) 堺市役所編『堺市史』第7巻別編、堺市役所、1930年、494-495頁参照。
- (113) 青木秀平と石河確太郎の薩州産物会所・薩州商社・堺紡績所を巡る関係についての詳細は、長谷川洋史前掲『『薩州紡績役所公班衛定則』^{コンベンニ}の解析(1)』、長谷川洋史前掲「薩州産物会所交易構想と近江商人商法の関係について(1)」参照。
- (114) 前掲『堺市史』第7巻別編、495頁参照。

9代 浜崎太平次



(宮里源之丞・沢田延音編述『海上王浜崎太平次伝』より)

1859年（安政6）～1867年（慶応3年）各港貿易価額（単位ドル）

年度		横 浜	長 崎	箱 館	全 国
1859	輸 出	400,000	404,555	86,861	891,416
	輸 入	150,000	440,328	12,833	603,161
	合 計	550,000	844,883	99,694	1,494,577
1860	輸 出	3,954,299	600,000	159,489	4,713,788
	輸 入	945,714	700,000	13,157	1,658,871
	合 計	4,900,013	1,300,000	172,646	6,372,659
1861	輸 出	2,682,952	1,000,317	103,383	3,786,652
	輸 入	1,494,315	830,261	40,040	2,364,616
	合 計	4,177,267	1,830,578	143,423	6,151,268
1862	輸 出	6,305,128	1,440,000	173,068	7,918,196
	輸 入	3,074,231	1,129,000	11,537	4,214,768
	合 計	9,379,359	2,569,000	184,605	12,132,964
1863	輸 出	10,554,022	1,388,071	266,135	12,208,228
	輸 入	3,701,084	2,467,885	30,132	6,199,101
	合 計	14,255,106	3,855,956	296,267	18,407,329
1864	輸 出	8,997,484	1,159,892	414,847	10,572,223
	輸 入	5,553,594	2,410,397	138,297	8,102,288
	合 計	14,551,078	3,570,289	553,144	18,674,511
1865	輸 出	17,467,728	560,788	461,815	18,490,331
	輸 入	13,153,024	1,857,271	133,976	15,144,271
	合 計	30,620,752	2,418,059	595,791	33,634,602
1866	輸 出	14,100,000	1,995,229	521,335	16,616,564
	輸 入	11,735,000	4,005,036	30,913	15,770,949
	合 計	25,835,000	6,000,265	552,248	32,387,513
1867	輸 出	9,708,907	1,775,907	638,861	12,123,675
	輸 入	14,908,785	6,545,976	218,558	21,673,319
	合 計	24,617,692	8,321,883	857,419	33,796,994

（出典：『横浜市史』第2巻、横浜市、1959年、548頁）

関係年表

文久2年(1862)

1月 薩摩藩士五代才助、長崎にて船奉行添役に就き、英商トマス・グラバーと上海密航、蒸気船購入(2月に鹿児島回着)。鹿児島商人波江野休右衛門、下関の廻船問屋白石正一郎家を訪問(慶応2年<1866>に五代才助が比義商社取建構想の一環として企画する薩長共同出資商社<馬関商社>取建構想は、薩摩藩側五代・波江野と長州藩側高杉晋作・波江野で取り組まれることになる)。老中安藤信正、公武合体の和宮降嫁問題で、水戸浪士らに坂下門外で襲撃され負傷(坂下門外の変)。長州藩士久坂玄瑞(松下村塾門下)、草莽崛起論(吉田松陰提唱)を土佐藩尊攘派・土佐勤王党党首武市瑞山に訴える。

2月 和宮・将軍家茂婚姻。長州藩士伊藤俊輔(博文/維新後、初代総理大臣・公爵)・山尾庸三(維新後、工部卿・子爵)、国学者塙次郎(父は塙保己一)を孝明天皇廃帝を企てるものと誤解し暗殺したとされる。

3月 白石正一郎・廉作兄弟と波江野休右衛門、下関にて上洛途上の島津久光を出迎える。土佐勤王党郷士の吉村寅太郎・坂本龍馬、脱藩(吉村は長州藩へ亡命し尊攘運動に奔走、坂本は江戸へ亡命し勝安芳門下生となり攘夷論から開国論に転向)。

4月 土佐勤王党郷士那須信吾・安岡嘉助(作家安岡章太郎の血縁)・大石団蔵、党首武市の命を受け、土佐藩仕置役吉田東洋(開国・公武合体派)を暗殺し脱藩・逃亡[薩摩藩へ亡命した大石は高見弥一と改名して石河確太郎に師事し洋学学生となり、長州藩へ亡命した那須と安岡は翌年天誅組の変に参加する]。薩摩藩国父島津久光、藩兵1,000名率い入京。奈良原喜左衛門・海江田信義(有村俊斎)・大山綱良ら、島津久光上意により、同じ尊攘派(精忠組)の、攘夷拳兵・佐幕派九条尚忠(関白)暗殺を企てる有馬新七ら6名を伏見寺田屋で討つ(寺田屋事件)。幕府文久遣欧使節団に随行した福沢諭吉(松木弘安・箕作秋坪も随行)、ロンドンから中津藩要路島津祐太郎宛書翰で洋学導入に基づく藩政改革・富国強兵策実施の急務を訴える。五代才助、上海への茶輸出実施の建白(上海交易構想の萌芽)とその経費予算について薩摩藩に提出。

5月 朝廷、薩摩藩国父島津久光の建議(幕政改革案)を承認、勅使大原重徳江戸派遣(島津久光随伴)を決定(島津久光による文久改革への影響大)。幕府上海調査団(五代才助は偽装し上海交易・蒸気船購入準備のため参加、長州藩士高杉晋作も参加)、千歳丸にて上海到着(五代と高杉、現地で親交を深める。五代、世界交易構想について高杉に告白)。幕府使節竹内保徳(文久遣欧使節団)、英国間にロンドン覚書に調印(江戸・大坂の開市と兵庫・新潟の開港5年延期)。

6月 「公武一和(公武合体策)」「航海遠略策(開国論)」を建言した長州藩中老格長井雅楽、朝廷から「航海遠略策」中に朝廷誹謗の言葉ありとのことから、藩より謹慎命令。九条尚忠、関白・内覧辞職。近衛忠熙(九条尚忠と対立し落飾謹慎)、復飾し関白・内覧に就く。

7月 長州藩国是、開国・公武合体から尊攘(討幕も辞せず)へ転換決定。京都で九条尚忠家臣島田左近、薩摩藩士田中新兵衛ら尊攘激派に暗殺、三条河原に梟首(天誅騒動の発端)。

8月 島津久光行列、江戸からの帰途中、神奈川生麦村で英人一行と遭遇、警護の奈良原喜左衛門・海江田信義、英商人ら殺傷（生麦事件）。緒方洪庵、將軍侍医・西洋医学所頭取として、江戸に出府。九条尚忠、落飾・重慎処分（閏8月）。

9月 白石正一郎、大坂滞在中の波江野休右衛門から京都の天誅騒動についての書状を受ける。仙台藩士大槻文彦（16歳）、幕府開成所に入り英学・数学など修学。九条尚忠、出家。幕臣榎本武揚（軍艦建造・兵制・国際法規・機械学化学等修学のため）と蕃書調所（洋書調所）の津田真道（算作阮甫・佐久間象山門下、自然法・万国公法・統計学等修学のため）・西周（万国公法・国法・経済・統計学等修学のため）ら、幕府の命でオランダ留学（幕府初の留学生）のため長崎出航（榎本は慶応3年帰国、津田・西は慶応元年帰国し維新後は明六社に加盟）。

10月 朝廷、幕府へ攘夷督促勅書を渡す、勅使三条実美・姉小路公知（尊攘派公卿）を派遣（尊攘派の教唆による）。

11月 幕府、攘夷勅旨遵奉を決定。

12月 福沢諭吉随員の文久遣欧使節団帰国〔帰国直後、福沢は商社（会社制度）紹介を含む『西航記』を執筆。福沢は奥平沱岐・島津祐太郎ら中津藩要路に提出したと推測される洋学導入に基づく藩政改革・富国強兵建白書に『西航記』を添付したもの考えられる。自筆本『西航記』は写本が出回る〕。小松帯刀、家老・御側詰に就く（御勝手方掛・御軍役掛・琉球掛・唐物取締掛・琉球産物方掛・御製薬方掛・造士館演武館掛・御改革御内用掛・蒸気船掛・佐土原掛に任ずる）。石河碓太郎、和州南方（高市郡曾我村）・北方（大和郡山）に大和薩州産物会所を開設して北方を中心とする方策書と大坂百間町・西国町での蔵屋敷（百間町屋敷／立売堀薩州下屋敷に隣接）用の土地・家屋確保報告書を薩摩藩に提出。熊本藩士・肥後実学党領袖・越前藩顧問横井小楠（開国論者）、堤又左衛門ら熊本藩尊攘派から襲撃され逃れる（士道忘却事件）。高杉晋作・伊藤俊輔・志道聞多（井上馨／維新後、外務卿・侯爵）・山尾庸三ら品川英国公使館を焼討。

文久3年（1863）

1月 大坂で尊攘論者・儒者池内大学、土佐藩士岡田以蔵ら尊攘激派により裏切者として暗殺、難波橋上に梟首される（天誅騒動加熱）。將軍後見職一橋慶喜、上洛。水島六兵衛ら中津藩下士、中津にて藩政改革・江戸詰家老奥平沱岐糾弾の集会・会議を催す（亥年建白事件の端緒）。

2月 石河碓太郎、大坂百間町蔵屋敷開設資金として近江商人（五個荘商人）の藤井忠兵衛と近江屋（藤井）彦次郎（石河碓太郎の協力者と推測）からの借入金千五百両の出納報告書を御勝手方掛家老小松帯刀に提出。平田鉄胤（国学者平田篤胤養子で維新後、神祇事務局判事・内国事務局判事・大学大博士）塾門下の三輪元綱（神官子息で維新後、外務権大丞・神官）・角田忠行（神官子息で維新後、皇学所監察・学制取調御用掛・熱田神宮大宮司）ら尊攘派、京都等持院の足利將軍3代の木像の首を三条大橋詰に梟首。長井雅楽、藩めで切腹。薩摩藩、竹下清右衛門・税所篤を長崎に派遣し、蒸気船コンテスト号（白鳳丸）購入（3月に鹿児島到着）。

3月 14代將軍徳川家茂、朝廷からの攘夷督促に応じ上洛（將軍上洛は3代家光以来229年振り）。將軍上洛に随伴した勝安芳、尊攘派に襲撃されるが岡田以蔵の護衛により回

避。孝明天皇、将軍家茂・一橋慶喜を伴い加茂神社に攘夷祈願の行幸（尊攘派の教唆による）。孝明天皇、一橋慶喜を伴い岩清水社へ攘夷祈願の行幸（尊攘派の教唆による）。京都で、天誅騒動など尊攘激派の活動を鎮圧すべく京都守護職松平容保管轄下に治安維持武装集団新撰組結成。奥平壱岐擁立の伊達儀（義）三郎（前宇和島藩主伊達宗城三男、9歳）、中津藩主奥平昌服の養子に。水島六兵衛ら中津藩下士15名、中津にて藩政改革・奥平壱岐糾弾の建白書を藩大身（非役家老）奥平図書に提出、中津藩庁大騒動（亥年建白事件）。上海で薩摩藩購入の蒸気船サー・ジョルジ・グレイ号（青鷹丸／五代才助が上海密航で購入したものか？）、鹿児島に回着。

4月 将軍家茂、孝明天皇に攘夷決行期日を本年5月10日と約束。中津藩主奥平昌服、江戸から京都警衛のため（朔平御門警衛）上京（奥平壱岐も随行）。中津藩目付服部五郎兵衛ら、入京し藩主に水島六兵衛らの建白書を奉呈。奥平図書、建白事件につき、入京、藩主に謁し、藩諸士に藩事情を陳べる（退職を諭された奥平壱岐、江戸に帰される）。石河碓太郎、御勝手掛（小松帯刀指導）管轄下の諸色方見聞役惣掛（交易方掛）に任ずる（他に蔵方目付・銃兼水車方掛・集成館掛・織屋掛）。福沢諭吉、開国派儒学者大槻磐溪（大槻文彦の父）へ、文久遣欧使節団随行の際の土産、竜動図・ナポレオン一世写真・万里長城瓦片・ピラミッド瓦片を贈る。

5月 幕府老中格小笠原長行（唐津藩主名代）、独断で生麦事件賠償金10ポンド（対幕府請求分）を英国に支払う。長州藩のみ攘夷決行日5月10日を遵守し、馬関海峡通過の米商船を砲撃、以後、仏軍艦・蘭軍艦を砲撃（下関外国船砲撃事件）。長州藩士井上聞多（馨）・伊藤俊輔（博文）・野村弥吉（井上勝／維新後、鉄道庁長官・子爵）・山尾庸三・遠藤謹助（維新後、造幣局長）、英国留学のため密出国（井上聞多・伊藤は翌年元治年6月、帰国）、村田蔵六（大村益次郎）、この密航・留学資金調達のために尽力。姉小路公知、何者かに襲撃され負傷・死亡、薩摩藩士田中新兵衛が襲撃犯の嫌疑を受け自殺し薩摩藩は乾門警衛解任・6月11日まで禁裏出入禁止（姉小路襲撃には薩長軋轢説あり）。奥平壱岐、壱岐派島津祐太郎の勧告もあり江戸詰家老職解任・禄高削減を受け、水島六兵衛ら15名は禄高削減・勤役罷免（亥年建白事件決着）。江戸藩邸の伊達儀三郎（後に中津藩最後の藩主奥平昌邁）、幕府から養子許可受け、中津に向け江戸立出。小笠原長行、雇用した英国蒸気船に千余名率兵し大坂上陸、尊攘派勢力制圧のため入京を図るが朝命に背くとして解職・謹慎。鶴丸城南泉院郭内に故島津斉彬を祭神（照國大明神）とする照國神社創建。

6月 米軍艦、下関砲台を報復攻撃。高杉晋作ら下関白石邸にて奇兵隊創設（国民皆兵制の先駆）、白石正一郎・廉作入隊。江戸にて緒方洪庵急死（54歳）、通夜の際、福沢諭吉、村田蔵六の攘夷主義への変貌に驚く。洋学者・幕臣箕作阮甫（箕作秋坪の養父）、病没（65歳）。長崎養生所で蘭医師ボンベの指導下医療活動に従事していた蘭方医松本良順、長崎から江戸に帰る（緒方洪庵没後、西洋医学所取頭を継ぐ）。英国艦隊来襲に備え、小松帯刀・大久保一蔵ら桜島砲台・沖小島砲台を巡視し演習射撃実施、石河碓太郎及び集成館局員ら鹿児島湾水雷敷設のため調査出張（日本初の実戦水雷敷設は集成館掛宇宿彦右衛門が指導）。上坂中の浜崎家中興の祖8代浜崎太平次（島津斉彬・石河碓太郎との機械綿糸を巡る伝説を成す）、病を得て（孝明天皇は太平次病床に侍医差し遣わしたとの伝あり）、大坂立売堀支店薩摩屋（支配人肥後孫左衛門／この年、元浜崎太平次店員で肥後孫左衛門

の同僚であった川崎正蔵、大坂に商店開く)にて没(50歳)、長男政太郎(19歳)が9代浜崎太平次を継承。生麦事件につき薩摩藩と直接交渉するべく7隻の英国艦隊(キューパー提督・ニール代理公使)、鹿児島湾(錦江湾)着(28日)。英国艦隊への西瓜売り決死隊(奈良原喜左衛門・海江田信義立案)、決行直前で中止。

7月 鹿児島湾で英国艦隊による松木弘安・五代才助捕捉を契機に薩英戦争勃発(2日～4日)、松木・五代指揮の青鷹丸・天祐丸・白鳳丸焼失。英国艦隊(水雷の中せず)にて横浜にきた松木・五代、清水卯三郎の助けで、幕府と薩摩藩の追及を逃れ埼玉の清水類縁吉田市右衛門宅別室で潜伏生活。薩英戦争により即時攘夷の不可能を認識した薩摩藩、薩英講和談判のため支藩佐原藩家老樺山舎人・儒官能勢直陳(本藩から史学者重野安繹・藩士高橋猪太郎)を派遣、鹿児島商人魚住源蔵(佐原藩御用達、百間町屋敷御用聞となり後に「薩州商社名籍」に名を記す)も随行。石河碓太郎・折田要蔵に神瀬砲台及び桜島崎崎砲台修築につき特命下る。尊攘派、京都で佐幕派公卿家来・商人・神官を襲撃し殺傷。

8月 大坂各所に、貿易(唐物)商人に天誅を加えよとの張紙とそれに対して許しをこう商人の張紙。攘夷祈願・親征軍議のための孝明天皇大和行幸の詔、攘夷戦争決行日を8月27日(あるいは28日)と定める(尊攘派の教唆による)。尊攘派天誅組(吉村寅太郎・那須信吾・安田嘉助ら参加)、尊攘派公卿中山忠光(明治天皇の叔父)を擁し、挙国攘夷戦争の先駆けとして、大和国五条に挙兵(天誅組の変)。薩摩藩・会津藩の公武合体派、中川宮(朝彦親王)らを通し孝明天皇の了解を得てクーデター決行、長州藩勢力及び三条実美ら尊攘派7公卿は京都から長州へ撤退(七卿落)、朝廷実権は公武合体派が掌握(8月18日政変/薩長対立激化)。横井小楠、土道忘却事件のため越前藩顧問を辞す。

9月 石河碓太郎、交易シミュレーションを用いて薩州産物会所交易実施の必要性を説く文書(本間郡兵衛を通した羽州酒田・本間家及び庄内藩との北国交易交渉実施について報告)を薩摩藩に提出。鷲家口の戦で、吉村寅太郎(27歳)・那須信吾(35歳)戦死、安岡嘉助捕縛。土佐藩、武市瑞山ら土佐勤王党を投獄。薩摩藩、横浜で英国(代理公使ニール)と薩英戦争講和談判開始(重野安繹担当、岩下方平・樺山舎人・能勢直陳ら補佐)。

10月 薩摩藩、生麦事件賠償金支払・犯人捜査を承諾し、軍艦購入周旋と松木弘安・五代才助引渡を条件に英国と講和成立(5日/英国側は松木・五代はすでに横浜上陸したと返答、薩英急接近)。劣勢を挽回すべく長州藩尊攘激派ら、公卿沢宣嘉(七卿の一人)を擁し但馬国生野に挙兵するが失敗(生野の変)、参加した白石廉作自決(36歳)。

11月 石河碓太郎、機械紡績所取建の必要性を説いた建白書を薩摩藩に提出(日本初の機械紡績所建造建白)。石河碓太郎、国内綿の英国輸出建白を伊地知壮之丞宛に提出。長州藩家老井原主計、藩命で奉勅始末(嘉永6年のアメリカ・ペリー艦隊来航以来、一貫して勅命遵奉のため奔走してきた長州藩の行動の正当性と無実の罪を訴えたもの)上奏のため大坂にいくが、再三入京を拒否される。勝安芳、熊本藩の「横井平四郎(小楠)罪案(土道忘却事件処分書)」を読む。

12月 長州藩、来年正月に想定されるオランダ軍艦来襲を警告する防戦予備令を領内布告(18日)。薩摩藩が幕府から借用の蒸気輸送船長崎丸(9代浜崎太平次、役人として上乘)、綿(繰綿)・油・顔料等(堺・大坂で買い集めた)積載し、長崎に向け兵庫出港(22

日／途中芸州御手洗島でさらに綿等積入）。長崎丸、長崎への途上、馬関海峡で下関砲台から奇兵隊の砲撃を受け炎上沈没、宇宿彦右衛門（44歳）ら死者28名、9代浜崎太平次ら生存者40名（24日）。長州藩、薩摩藩に長崎丸砲撃事件について照会書を送る（28日）。防州別府の廻船加徳丸（船頭松右衛門／浜崎太平次雇船か）、綿（堺・大坂で買い集めた）積載し、長崎に向け兵庫出港（28日）。薩摩藩士市来四郎・土持平八（小倉在勤）、下関にて長崎丸砲撃事件について長州藩側に抗議・詰問（長州藩側は外国船と全く過誤し砲撃したものと弁明）。横井小楠、土道忘却事件につき、熊本藩から土籍剥奪・知行地召上げの処分を受ける。

文久4年・元治元年（1864／2月20日に元治に改元）

1月 長州藩、長崎丸砲撃事件善後策と朝廷・幕府への事件顛末報告のため木梨平之進を大坂に派遣（島津久光は薩摩藩士の憤激を抑える）さらに桂譲助を薩摩藩に派遣し長崎丸砲撃事件について謝罪（元日～7日）。薩摩藩、長崎丸砲撃事件につき、奈良原喜左衛門らを長州藩に派遣。大坂留守居役（大坂薩州蔵屋敷差配）本場伝内、大久保一蔵に、長崎丸砲撃事件を契機に綿商法について注意。潜伏中の五代才助、松本良順の従僕を装い長崎へ出立（長崎で薩摩藩士川村純義・野村盛秀らに海外留学生派遣などを主張する「五代才助上申書」草案を述べる）。潜伏中の松木弘安、洋学の師蘭方医川本幸民と洋学友の薩摩藩士中原猶介に江戸で会い現況を伝える。加徳丸、長州藩領周防国熊毛郡別府浦で尊攘派によって焼討、才領船頭大谷仲之（薩摩川内久見崎出身、浜崎太平次配下か）が殺害（12日）。長州藩、薩摩藩の綿買占・綿海外輸出による綿価騰貴に備えた養蚕奨励令を領内布告（13日）。勝安芳に長崎丸砲撃事件と加徳丸焼討事件が混合した風聞伝わる（28日）。

2月 （20日に元治に改元） 勝安芳塾へ薩摩藩士数人入門。土持平八、大久保一蔵に加徳丸焼討事件の現地調査を報告（12日）。勝安芳塾へ薩摩藩士13人入門。安岡嘉助（29歳）、京都六角獄で処刑。勝安芳、熊本訪問、坂本龍馬を横井小楠へ遣る。上関警備の長州藩義勇隊隊士水井精一（25歳）・山本誠一郎（32歳）、大谷仲之進の首級を大坂難波南御堂門前に、薩摩藩の外国貿易を呪詛する捨札とともに梟し、割腹（26日／「残念さん」信仰の先駆けとなる）。勝安芳、来訪した長州藩士3人に幕府の意図と国内形勢を説く。

3月 勝安芳、入塾を請う長州藩士2人から三田尻の状況を聞く。島津久光・一橋慶喜らによる参与会議、瓦解し、公武合体派連合政権ならず（以後次第に、薩摩藩の政治指導権は久光ら公武合体派上級武家層から大久保利通・西郷隆盛ら討幕派下級武家層に移行）。藤田小四郎（尊王論・水戸学の泰斗藤田東湖の四男）ら水戸藩尊攘激派・天狗党、筑波山に挙兵。

4月 勝安芳、小松帯刀と面会。中原猶介、勝安芳を訪問し、英書借り受け、小松帯刀からの伝言を渡す。勝安芳、坂本龍馬を横井小楠へ遣る。小楠の親族3人、勝安芳塾へ入門。勝安芳、佐久間象山（幕府海陸備向掛手付雇）を訪問、象山から国内・海外時勢を聞く。

5月 長崎グラバー邸潜伏中の五代才助、小松帯刀から市来四郎を介して数百両付帯の上海渡航を勧告されるが、これを拒否。五代才助、正式に帰藩を許され（長崎に留まり藩命に従事）、この前後に、藩に上海交易や英仏両国留学生派遣の実施を建白する「五代才助上申書」を提出。石河確太郎、伊地知壮之丞へ、藩内の和州での銀札発行論を時期尚

早と批判し、和州南北双方（北方大和郡山を中心）による大和薩州産物会所運営の方策を再確認する文書提出。堺商人大和屋（辻本）徳兵衛（後に堺戎嶋薩州蔵屋敷＝薩州商社本館の屋敷名代となる）が秘匿・保護していた復古大和派画家冷泉為恭（^{ためらか}42歳）、幕府内通者と疑われ、長州藩士大楽源太郎ら尊攘激派に暗殺。横浜鎖港談判使節池田長発（^{ながおき}）らパリでパリ約定調印、開国容認し横浜鎖港交渉断念。勝安芳（軍艦奉行）の建言により、神戸に海軍操練所開設。

6月 前藩主島津斉彬から安政4年（1857）に内命を受けた石河確太郎を中心に、薩摩藩初の洋学校開成所開設（石河の盟友、英学者本間郡兵衛は開成所英学訓導師として薩摩藩に招聘）[高見弥一（大石団蔵）は、開成所に入学、英国への留学生候補の筆頭として、開成所蘭学教授石河の推薦を受け、翌年、五代才助・松木弘安に率いられ英国留学（密航）をおこなう]。新撰組、京都三条の旅館池田屋に集まる尊攘派を襲撃、勢力挽回を謀る宮部鼎蔵（45歳）・吉田稔麿（24歳）ら尊攘派幹部7名殺害（池田屋事件）。本間郡兵衛の同族で本家筋の本間耕曹、庄内藩100石士分に取り立てられる。

7月 佐久間象山（54歳）、京都で熊本藩尊攘激派河上彦斎らに暗殺。一藩あげて勢力挽回をめざす長州藩、京都御所（皇居）付近で、薩摩藩・会津藩・幕府と交戦し敗走（禁門の変）。幕府、長州藩追討の勅命を受け西国21藩に出兵を命ずる（第一次長州征討）。松木弘安、肥後七左衛門から帰藩の藩命を受け江戸白金の曾宅に住み（10月～12月頃薩摩藩高輪藩邸官舎に移転）、家老岩下方平と会談、福沢諭吉・箕作秋坪と再会。

8月 英・米・仏・蘭連合艦隊、下関を報復砲撃、砲台を破壊（四国連合艦隊下関砲撃事件）。長州藩、四国連合艦隊に対し賠償金を払い下関海峡安全通過を保証する講和条約締結。

10月 石河確太郎、英国への留学生派遣実施を建白する「石河確太郎上申書」（開成所諸生高見弥一を留学生候補推薦筆頭にあげる）を、藩に提出。福沢諭吉、幕臣（幕府外国方翻訳局）に召抱えられる。

11月 長州藩、幕府への恭順の意を表し、禁門の変の責任者福原越後ら三家老を自刃させる（長州藩政、尊攘派いわゆる正義党から佐幕派いわゆる俗論党へ）。筑波山に挙兵した水戸藩尊攘派天狗党、武田耕雲斎を総裁に京都の徳川慶喜と朝廷への歎願のため西上。勝安芳、禁門の変の責で軍艦奉行を罷免、謹慎を命ぜられる（海軍操練所は慶応元年〈1865〉3月に廃止）。

12月 松木弘安、藩命で長崎へ出立。長州藩尊攘派高杉晋作ら、長府功山寺に挙兵（抑圧されていた正義党の巻き返し、維新回天始まる）。天狗党、越前藩に降伏。長崎丸一番、八丈島沖で破船。

※長谷川洋史「石河確太郎年譜(1)－薩州商社研究の観点から－」（東亜大学『研究論叢』第26号第1号、2001年12月）を基に作成した。